大正元年十月八日印刷納本 毎月一回二十三日印刷納本
明治三十三年十二月二十五日第三種郵便物認可

十月十五日増刊

女學世界

嫌はるゝ人と好かるゝ人



第十二巻第十四號

博文館發行



優良の上にも優良なるを期す

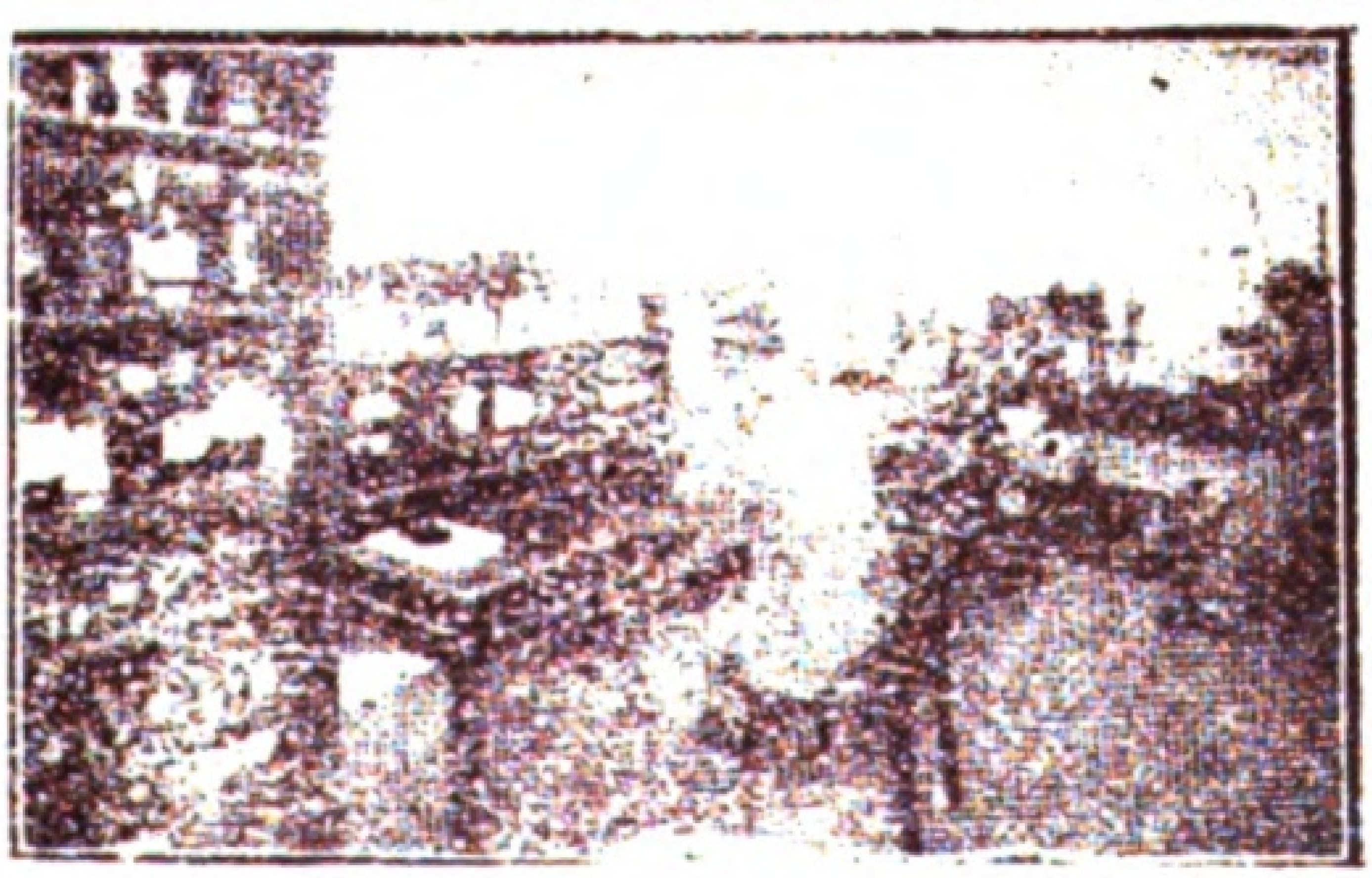
▼最新の學理と多年の經驗
▼愛用者に忠實を主義とす

レート化粧料本舗　平尾賛平　敬白

化粧品の優良品といひますと、直ぐにレート化粧料といはれますのが、現下の状態です、レート化粧料が、斯様に皆様から信用され、愛用されますのは、申すまでもなく皆様が化粧に對して、進んだ智識をお持になつて、化粧と申すものは、完全な化粧品を用ひなくては、ほんとうの化粧が出來ないとお悟りになりました結果、レート化粧料が、品質に、効用に、香氣に、他の同種の品には見ることの出來ない特色のありますのを御認めになつての事で、誠に知己として感激に堪へませんと同時に、皆様の御信任に背くやうな事があつてはならぬ、濟まぬ事であると自覺しまして、製品の優良なるが上にも優良なることを主眼として、何處までも最新の學理を應用し、多年の經驗に徴しまして、研究に研究を重ね、只管改善進歩を致させます爲めに、製造場を新築して、中に化學試驗室を設け、製造主任は製造監督の高尾工學士と、絶えず試驗を致しました末、完全である、有効であるといふ斷案の付きました上で、貯藏室にある精良の原料を、最新の機械によつて處理しましたのが、ダイヤモンド歯磨、乳白化粧水レート、クレームレート、レートヴエリー、レート白粉（煉、水、粉）の各種となりまして、仕上室に於て、數百の女工が精根を籠めて包裝しますのを、製品貯藏庫に入れ、注文に應じて、人馬車に滿載して本店に運び、本店から各方面に仕向ける組織になつて、製品の完全と共に、皆様の御便利を圖る外に餘念はありません　即ち私の主義と致しまして、愛用者に對して、何處までも忠實であること、レート化粧料に對して、皆様が優良であることをお認め下されば下さる程、それ以上に優良な品を供給することを方針にして、完全の上にも完全を期しつゝ、製造場の設備を擴め、生産を多くし、力を増して、皆様の需要に不足のないやう、化粧料の効用に缺點のないやうと念じて居るのでありますから、何卒、此の上とも御愛用下さいまして、レート化粧料の聲價が上にも發展するとゝもに、完全な無缺なものになりますやう、御指導御引立を願ふ次第であります。



レート化粧料製造部



試驗室ノ一部

或る奥様の御話に

「お買ひものならば、三越へ注文するに限ります、御手紙一本で東京の最新流行品がすぐ小包郵便で參ります」

東京の流行は愚か、日本の流行の源泉と云はるゝ我が三越の呉服太物を始め各種販賣品を網羅したる寫眞版入『御注文の栞』は御一報次第御屆け申上げます。

東京駿河町

三越呉服店

（振替口座東京二〇〇番）

嫌はれる人好かれる人目次



第二回新學期開講

目下入會の最好機――各種の大特典あり

「女子の學校生活には種々の危險と弊害との伴ふを免れず何人も進歩せる通信敎授によりて安全なる女子獨習機關の出現を望みつゝありしが、本會今新に本邦女子敎育界の泰斗下田歌子女史指導の下に、最新最良なる女學講義錄を發行し、以て此希望を完ふせしめんとす。小學校卒業を以て女子の甘んずべき時代は去れり。乞ふ速に來りて本會の門に學べ」

大日本實修女學會

東京駿河臺

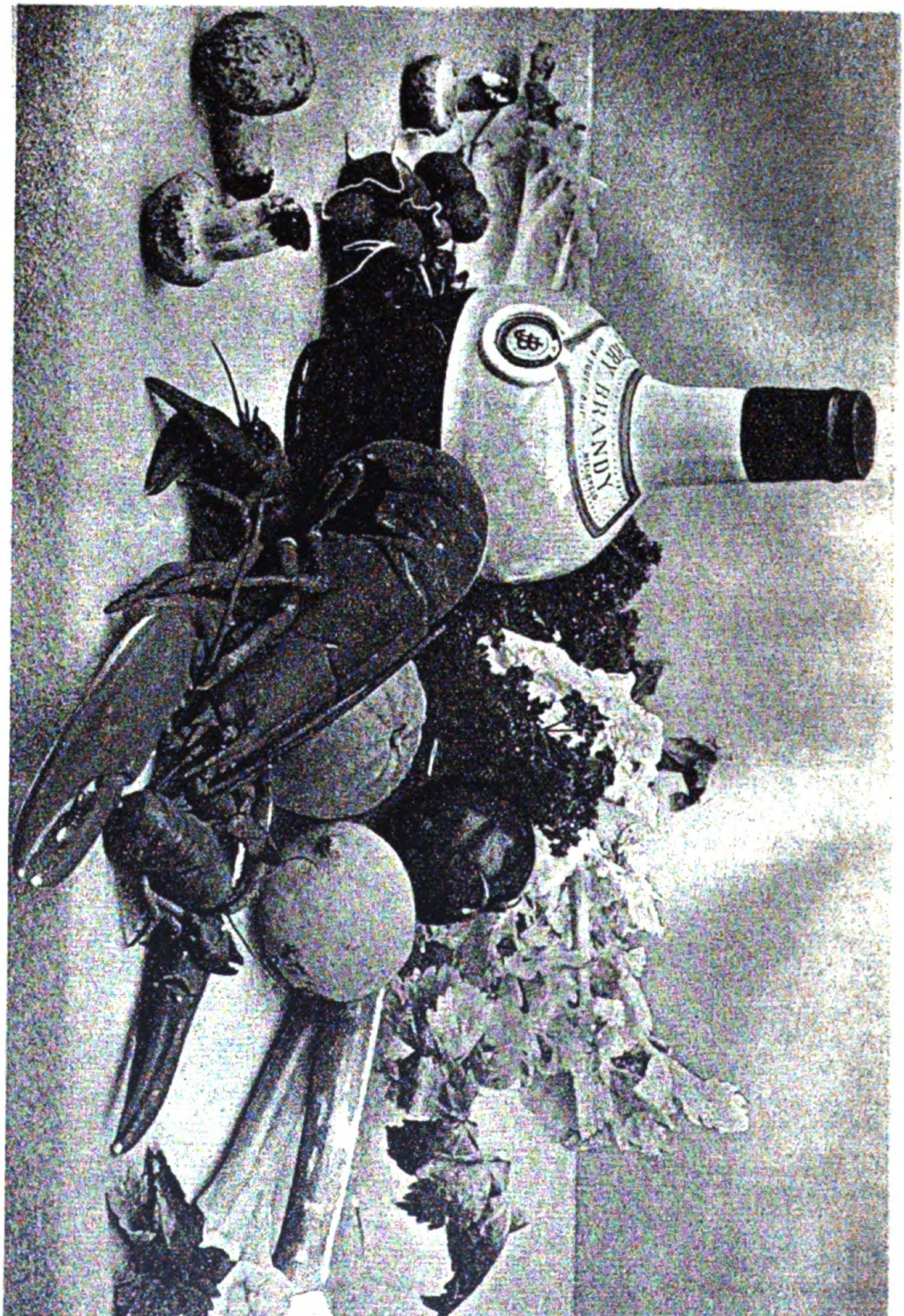
電話本局 三〇〇二番 三〇〇四番 三七〇七番

見本つき 規則書 無料進呈



諒闇中女子の心得べき事柄

「に就て、本會々長下田歌子女史は、本會機關雜誌女子の友に於いて毎號懇切明到に講述せらる。眞に是れ一般女子の三誦すべき目下の緊要文字なり。尙ほ女子の友は婦人の必讀の評論史傳家政等の記事を滿載せる雜誌にして本會々員に限り每號無料贈呈するものとす。」



田中製版所三色版

手本執筆者 御歌所寄人 大口鯛二先生



大日本習字速進會

かりそめのそゞろがき

にも、その人格をあらはして、ゆかしくなつかしい思を起させるものは美しい手蹟でございます。女の寳は樣々あるでございませうが、わけても大切な寳は、美しい容貌と美しい心とそれから美しい手蹟との三つでございませう。

大口鯛二先生は現代女文學の泰斗と仰がれるお方でございます。その御書きなされたお手本を、最新式にして最正式との世評ある大日本習字速進會の新式習字法で學ぶのですものこれこそ眞實に鬼に金棒、どんなお方でも見る〱能筆とおなり遊ばすに違ひはありませぬ。皆樣方の一生の幸福の爲に、兎に角見本付規則書を取寄せて御覽あそばせ。そして他の習字法とお比べなさいませ。

東京市神田區駿河臺鈴木町

見本つき規則書申込次第進呈●此際入會者は大特典あり

女(甲の一)

太陽臨時增刊―第二十版

明治聖天子

（口繪要目）

●明治天皇御尊影（東條鉦太郎謹寫）三色版●舊日本と新日本●明治天皇最近御軍裝御尊影●明治天皇御少壯時御尊影●御和裝の皇太后陛下御影●今上天皇陛下御衣冠の御尊影●御和裝の皇后陛下御影●御馬上の皇儲迪宮殿下御英姿●御馬上の淳宮殿下御英姿附光宮宣仁親王殿下●明治四十年特別大演習觀兵式●明治四十年特別大演習御統監●明治四十一年特別大演習御統監●明治四十二年特別大演習御統監●明治四十三年特別大演習御野立場御齋●明治四十三年特別大演習觀兵式●明治四十四年特別大演習御統監●明治四十四年特別大演習觀兵式●明治初年東京御入城光景附鐵道開通式御臨幸當時●憲法發布の御儀典●伊勢大廟御參拜●京都御所御內庭●其他十數葉を謹載し凡て卅四頁全部精撰の光澤紙刷

（記事要目）

◎歷史上の地位（三上文學博士）**明治天皇御一代御聖德記**（木村禎之助、菜老侍從、高辻子爵、高島子爵、加藤男爵、牧野男爵、有地男爵、土方伯爵、石黑男爵、伊東子爵、渡邊伯爵、栗原宮內書記官謹話）◎國民慟哭記（記者）◎明治天皇御年譜（記者）◎勅皇帝陛下（村田峰次郎）◎皇室の御繁榮（記者）**赫赫中興業**◎立憲政治創建の御偉業◎帝國海軍の大雄◎產業の發達と其徑路◎明治教育發達小史◎明治學術小史◎明治美術小史◎明治文學略史◎明治國劇（記者）**帝國領土膨脹志**◎韓國併合顚末◎滿洲發展の一斑◎樺太回復始末◎臺灣統治志（記者）◎明治年間本邦發展の統計圖表（伊東祐穀）◎明治天皇と世界の大勢（觀作）**聖德無窮**◎先帝の御儉德（加藤男爵）◎追憶し奉る數々（股野內大臣秘書官）◎先帝崩御に際し德（細川男爵）◎世界無二の名君（三島文學博士）◎先帝崩御に際して余の感想（久米文學博士）◎先帝陛下に對する追憶（花房子爵）◎御自制力の御强かりし先帝陛下（末松子爵）◎古今稀有の名天子（池山男爵）◎先帝の御勸學獎勵（和田仁川觀測所長）◎古今未曾有の聖天子（松方侯爵）◎明治天皇の御洪業（大隈伯爵）◎大元帥としての先帝陛下（寺內伯爵）◎法典編纂の御偉業（清浦子爵）◎遷都の御英斷（板垣伯爵）◎至仁至德の先帝陛下（佐藤[illegible]）◎宮廷の[illegible]（柳原伯爵）◎[illegible]しのぶ[illegible]谷李雄）◎先帝の御趣味の三領袖（記者）◎明治功臣傳（記者）◎崇敬徵言（[illegible]文博士）◎八尺のなき（諸大家）◎明治時代中央官制に大變更送略史（記者）◎明治年間東京變遷志（村田峰次郎）◎明治天皇の外國公使に謁を賜ひし始（石井研堂）◎明治天皇行幸概記（村田峰次郎）◎御大葬記事其他

口繪三色版二色版各一葉光澤紙
寫眞版三十二頁
本文四百六十四頁

正價六十錢
郵稅六錢

東京市日本橋本町　博文館　振替東京二四〇番

東京產婆看護講習會編纂（總ふりかな附）

產婆試驗及第秘訣

八月一日發行

ポケット形總クロース金文字入正價金七十錢

本書は最近數年間東京府を始め各府縣及本會に於て施行せし產婆試驗問題答案を悉く蒐集し願書書式其他を掲載し產婆受驗者無二の參考書なり

東京市四谷區內藤町一番地

東京 產婆看護 講習會

第十五回自宅獨習生募集!!!

產婆科 看護科 講義錄

產婆科六ケ月卒業 看護科四ケ月卒業

本講義錄は斯道の博士學士ドクトル諸氏によりて講述せられたる簡易にて何人にも解し易き（かな附）の現代唯一の模範講義錄なり、今や本會卒業生にして內務省產婆及看護婦開業試驗に合格せし者千人に達す時は入會の好機、希望の諸姉よ期を逸する勿れ

會長陸軍二等軍醫正ドクトル 正六位勳四等 渡邊鼎

規則郵劵三錢

東京市四谷區內藤町一番地

東京 產婆看護 講習會



嶄新ふけ取香水 レゾール

年を獨逸國に研學せし藥劑師岡中綱彦氏の創製にかゝる

秋の拔毛をとめ

髮のくせを直す

唯一の新香水なり

亦瓶の新考案の橫口にて御使用に頗る便利なり

●有名吳服店化粧品部藥舖洋物店にあり

定價小瓶五十五錢大瓶九十錢

發賣元 東京本町三丁目

博 博愛堂

電本局二八六●四四八四番

振替口座東京八一一三番

女（甲の三）


最上醤油
元祖
開業貳百六拾八年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番 振替口座五〇二一一番



松風　日高島助畫

以下九種の書は百年後でも三重縣桑名矢田磧弘報館で發賣す

萬物 製法秘術寶典

代價郵税共廿二錢 郵便切手又は振替貯金なれば廿四錢

目錄 輕便電氣燈●輕便晴雨計●輕便電話機●煙火●擂玉●齒磨石鹼●洗粉●白粉●香水●紙石鹼●のみ取粉●萬年草紙●ミツキ法●朱肉●空氣枕●萬年手帳●墨●朱墨●鼠取藥●無刀彫刻術●酢●豆腐●甘露水●果實酒●屠蘇酒●燒酎●葡萄酒●魚煎餅●罐詰●ラムネ●リモナーデー●ジンジヤエル●蜜柑水●甘酒●味噌●醬油●水彩繪具等の製法其外大發明器械いらず**早取寫眞術** 器械不用**早印刷法**等が百餘種記載してある

が皆あり合せの道具で出來る樣にしてある、殊に早取寫眞術は名の如く器械を用ひず僅かの藥品を以て器械にて寫せし者と少しも異ならぬやうに人物風景其他如何なる者にても大小の差別なく何枚にても鮮明に寫し得る愉快なる寫眞法である、藥品の無き地方は弊店より送る、又器械にて寫せし通りに寫らねば何時にても**返金**す、又早印刷法は道具を使はず繪でも文字でも大小の論なく即座に數百枚印刷する事が出來るから名刺ハガキ書畫廣告其他如何なる者にても安價で奇麗に印刷する事が出來る、一つ覺えても優に五十錢以上の價値がある。

奇々妙々 手品種あかし

郵税共廿二錢郵券代用又は振替は廿四錢

本書を讀んで酒席又は多人數集會の折り手品をして見せたならば拍手大喝采疑ひなし、目錄鬼火の妖術●口中より火焔を吐く術●不思議な水の魔術●月世界の術●針を呑む法●皿廻しの術●かるた逆立術●錢貨をふやす術●水上に文字を書く術●三尺の棒を丸呑みにする法●豆腐の上にて獨樂を廻す術●籠に水を入れる術●火を喰ふ大奇術●熱湯中に手を入れる術●空の帽子より色々物品を出す法●水上の木製船を自由に動かす術●黑いんきを金魚にする法●紙製の蝶を自然に飛ばす術●黑水を清水にする法●水を燃す法●清水を牛乳にする法●銅貨を水に溶す術●ステツキを帽子の中に隱す術●水中又は机上にて鷄卵を踊らせる法 附錄 **驚神的大魔術** 其他尚面白き手品が澤山記載してあるが皆子供にも出來るやうにしてある。

學理應用 世界奇術大全

一週間に思ふ儘に白色となる法●人間百歲迄生きる法●人の生死を前知する法●必ず子を姙む法●必ず子供の出來ぬ法●胎内の兒の男女を知る法●他人の年齡を當る法●顏を櫻色にする法●日に燒けぬ法●髮の毛を多くする法●毛を生ずる法●書き損ひの文字を拔く法●物覺惡き人を忘れさせぬ法●習字速成法●**催眠術**●訣がるた八々に必ずまけぬ法●百日百夜眠らずとも氣の衰へぬ法●老人でも白髮とならぬ法●其外斯の如き奇法を百餘種集めたる書物は 廿三錢(郵券代用廿五錢)

破天荒の快書 破格の大安賣 最新大奇術

郵税共二十三錢郵便切手は二十五錢

目錄天に文字を顯す術●白晝を闇黑にする術●夢に天國に運ぶ術●百鬼夜行術●風を吹す術●吹き居る風を止る術●妖光幻術●水の流を止める術●天空に怪人の姿を顯す術●人を空中に眠す術●十字架殺人術●忍術●仙術●**切支丹バテレン**の妖術●モルモット術●金鐵自由吸集の妖術●繩拔の妖術●火渡の奇術●武道竹折術 **隱身術** 人の力を取り我身を重くし上げられぬ術●七八歲の小兒を重くして上げられぬ術●棒に掌をつけ押しても取れぬ術●片手にて數人の力を防ぐ法●讀心術●三人にて持ち居る椅子を指二本にて取る術●不動金縛の妖術●二本の指にて大人を自由に揚げる奇術●數人にて一人を倒せぬ術其他奇術妖術山の如しそして何人も實行し得る獨習書なれば早く求めて朋人を**驚**かすも亦愉快ならん、奇術師天一も跣足で逃げ出す術ばかり。

禮法及婚姻法

日本の禮法は最大洩らさず婚姻部には媒酌●見合●結納の受渡●婚姻の前支度●嫁の荷物を送る事●三三九度盃の仕方●嫁と舅姑と親子盃の仕方●寢室に入る時の心得●フトンの敷方●其他婚姻に關する事柄は最大洩らさず附錄には婚姻出產死亡屆其他澤山。郵税共廿三錢

無上の快樂

本書の內容は玆に揭載せざるも男女共に本書を讀んで初めて愉快なる事が出來る者と思へばよい。定價郵税共廿四錢

一讀千笑 滑稽頓智笑話

面白くてアゴのはづれぬ用心して讀み給へ本書を讀んで居れば退屈する時がない 郵税共廿二錢

道具不要輕便 食パン和洋菓子製造書

有り合せの道具で米より費用少くして美味で一度に廿日分も拵へて置ける食パンや洋菓子が手輕に製造出來る樣にしてある書物は郵税共廿四錢

大好評 機械不要輕便 早取寫眞インキ

特別上製大瓶 郵税共十五錢

此インキのみにて他に器械藥品を用ひずして人物風景其如何なる者でも自由に寫す事が出來る萬一寫らぬ時は返金す(說明書を添す)

振替口座(東京一六九二八番 大阪一四五一七番) 三重縣桑名矢田磧 弘報館

(乙の二)

太陽 第十八巻第十四號 十月號 大好評八版

御大葬記念號

三色版一枚
二色版一枚
寫眞版廿四頁
本文三百十二頁
正價四十五錢
郵税四錢

奉額用大附録＝●森嚴なる青山葬場殿全景……（本誌四倍大光澤紙寫眞版）

口繪及挿畫—○哀の極（結城素明謹寫）＝原色版○二重橋畔の篝火（二色版）○御大葬鹵簿＝當夜撮影の寫眞十六種を特選し、坐ながら眞光景を拜觀するの思あらしむ○桃山御葬列＝十四種を特選して謹載す最も鮮明にして莊嚴○靈柩列車道沿御着の光景○櫻田門外の弔砲禮○御大葬御道筋＝口繪及挿畫數十種○列國特派大使記念撮影○各種奉送團體（數十種）○各國捧献の花環○其他刷込無數

振替口座東京二四〇

博文館

東京日本橋本町三丁目

女(乙の三)

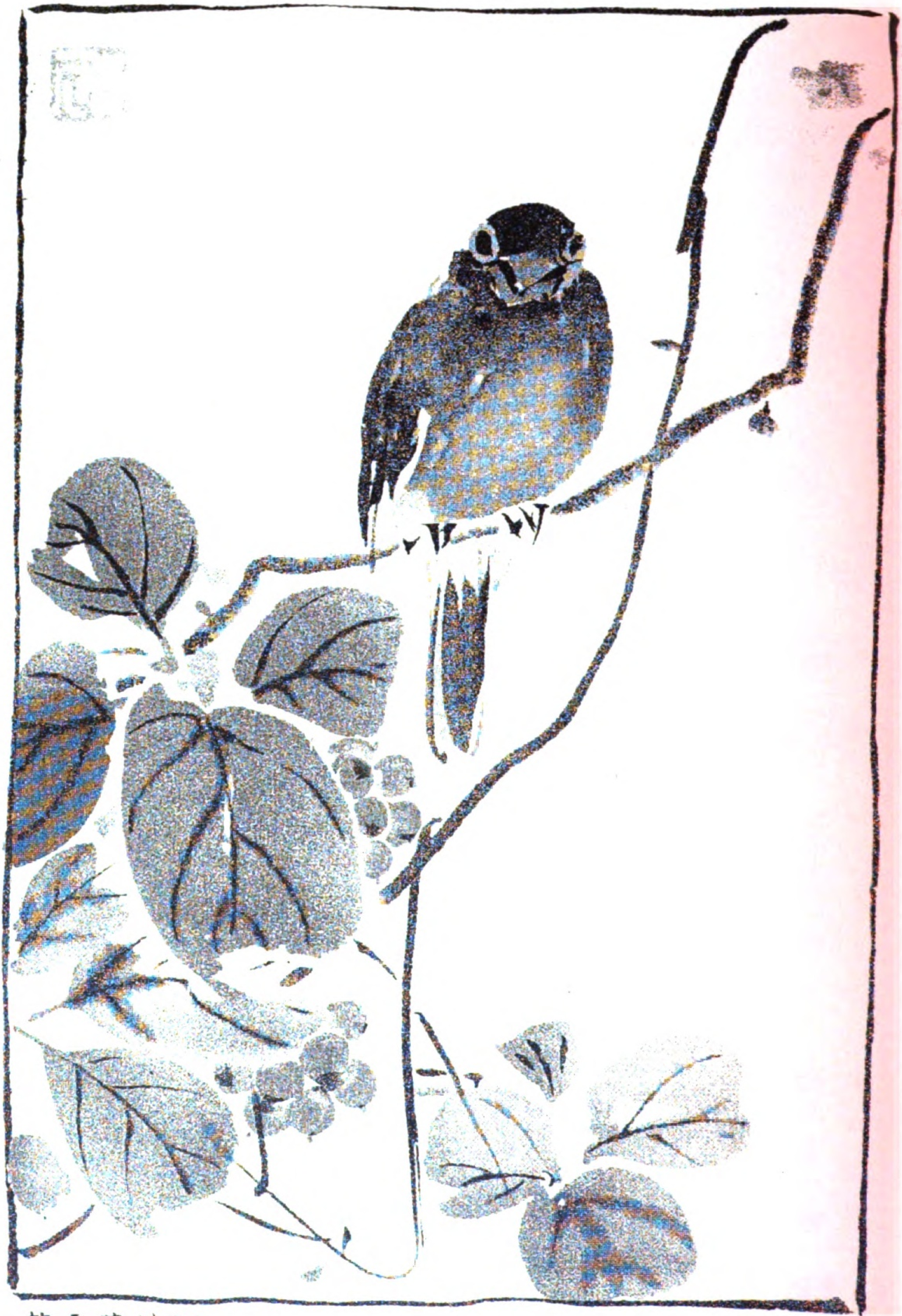
宮内省御用達

ヒゲタ醤油

千葉縣銚子港　田中玄蕃釀造



花はその色香ありて
人の目を樂ましむるも
日毎にかはる御食膳の御風味こそ
花よりも尚ほ樂しみあれ
されど各異なる御嗜好もあれど
要するに調味の奈何によるべし
御調味には**万上印味醂**を御使になれば
一しほの風味を増しどなたにも
譽ていたゞく御料理ができます



河崎蘭香筆

第一巻第七號　十月號——大好評再版

淑女畫報

四六倍判口繪光澤紙寫眞版四十頁石版三色版數頁本文百頁

正價廿五錢　郵稅二錢

六冊壹圓五十錢　十二冊二圓六拾錢　外稅要

◀畫　報▶

（表紙）明眸……………………太田三郎畫

（口繪）端居……（彩色石版畫）……鏑木清方畫

歌麿筆美人……（原色版）……

（寫　眞　版）

◎御大葬畫報……（五頁）……◎乃木大將夫人……●伏見若宮妃經子殿下●伯爵奥平昌國氏夫人愷子●伯爵寺島誠一郎氏夫人きやう子●陸軍武官安田徐次郎氏令孃靜子●松本市左衛門氏令孃●同城半衛門氏令孃●陸軍軍醫總監菊地常三郎令息武彥氏令夫人壽賀子●子爵岩倉具光氏夫人花子●文學博士野村龍太郎氏令孃美惠子、壽惠子●酒井伯爵令孃秋子、菊子●帝劇技藝員鈴木德子、同小林延子、同東日出子、同木村重子、同小春子●藤[illegible]作氏令孃藤枝子、●坂東宣雄氏令孃登美子

◀讀　物▶

明治天皇御大葬儀……………………

日本婦人の精華（乃木大將夫人の雄々しき最後）

實効ある化粧料……………東京美容院長　北原十三男

生理上より新しき女を評す……………ドクトル　杉山源作

噂と事實の距離……………………佐藤紅綠

肉的な大阪婦人……………………岩野清

戀川春町と新しき女……………阪井久良岐

奥樣の藝者觀……………………玉露

當世十人女の輪廓……………………天南昇

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番　博文館

中學世界 第十五卷第十四號 增刊

忠烈乃木大將

▲大將肖像（原色版） 中澤弘光謹寫

十月十日發行

本文三百四頁
口繪三色版壹枚
石版壹枚
光澤紙寫眞版十二頁

本號に限り●正價三十錢
郵税二錢五厘

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

女（丙の二）

婦人世界秋季増刊

新家庭

十月十日發行　七巻十二號　定價一冊　拾五錢　郵税一錢五厘　増刊とも半年一圓五錢

△御飯を炊き損じた新妻時代……鳩山春子

◎我が最愛の良人に願ひたき事……

◎新世帯を持つた當時の失敗談……

◎紋服も買へなかつた私の新家庭時代…川瀬ふみ子

◎新皇后陛下の御坤徳…記者謹識

◎新家庭はとかく苦勞の多いもの…嘉悦孝子

◎姑の見た我が家の嫁と嫁の見た姑……

◎小收入の家庭にて實行せる貯金の仕方…

△新妻に與ふる書……下田歌子

東京京橋南紺屋町　實業之日本社　賣捌全國各地書店

女(丙の三)

欺されたー」と思って近頃新聞雑誌等で大評判の▲専賣

▲特許**エンゼル香油**を是非一度御試し遊せ専賣特許エンゼル香油は現在の毛髪を漆の如く光艶を出すのみでなく毛根の最大肥料となる新發見の高等香油にて一度御用ひあれば終生お忘れ遊ばす事の出來ない本品獨特の奇効がお分りになります

又くせ毛の方はB號エンゼル香油御使用あれば如何なる天性の縮れ毛と雖自然に矯正する不思議の特許品です正價其他の詳細は返信料添へ東京本郷東片町十五番地エンゼル商會へ申込あれば説明書を送呈致します一流の呉服店又は著名の小間物店化粧品店には大抵販賣し尚本品は

て居られ升さ大阪にては目下同名異品が現はれ紛らはしう有ますから御求の節は必ず東京製の専賣特許エンゼル香油と御指定を願升



美人となる

▼佛國ノルド會社美顔術師の發明による

このホーカー液を使うて御覧なさい

白味劑美顔料

白粉に優る

ホーカー液



本品特効

▼色を白くすること
▼きめを細かくすること
▼ニキビ、ソバカス、アセボ等に特効
▼白味液にして紳士にも婦人にも向く必要品

定價
特瓶八十錢
小瓶廿五錢
送料八錢

御買上の際は必ず●上記の商標と堀越●二八堂の名義に御留意願度候

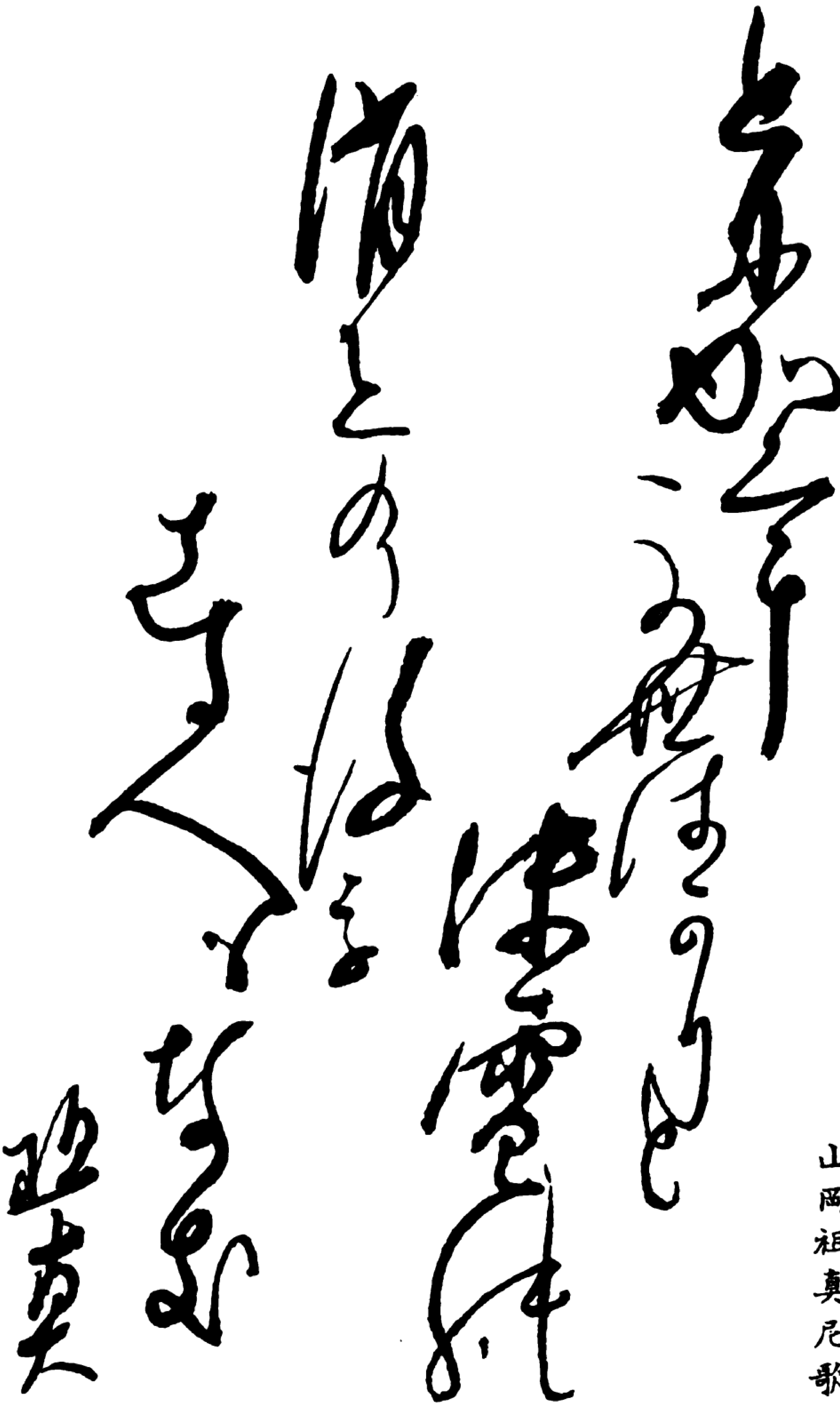
有名なる和洋小間物店に販賣す品切の時は直接御注文を乞ふ此際特に送費無料
東京日本橋區馬喰町四丁目

堀越二八堂

女學世界愛讀者は特に
一割引
切取

女(丙の四)





山岡祖真尼歌

少女文話

少女世界 第七卷第十四號 增刊

十月五日發行

秋は讀書に適し、思考にふさはしく、兼れてまた文を綴るに好い時であります。この時、少女の作文の栞として出た『少女文話』が、どんなに有益で趣味に富んでゐるでせう！秋を好み、詩を愛し、文才を望む少女は、この增刊を一讀せねばなりません。表裝の美と內容の豐富とは本誌の誇りとする所、試みに左の大要を御覽下さい。

●びなんかづら（表紙）……山村耕花 ●秋の塔（三色版）……赤城岳夫
●をとづれ（凸版）……●湖畔の月●學校寫眞●誌友の面影●在米の日本少女（寫眞版）

讀みもの

▼新しい文章……記者
▼少女對話 をばさんごっこ……巖谷小波
▼おくりもの……橘萩枝
▼文章講話……思想の發表―口語體と文語體―實用文と美文―散文と韻文―起筆と結尾―思想と辭句―潔と明晰―變化と誇張―特色と缺點―浮薄な文章―特色のない題材―悲哀な文章―讀點のこと―句
▼少女の文章……▼書簡文心得……▼抒情文作法……
▼敍事文作法……▼紀行文作法……▼擬人法……
▼たとへばの用法……
▼力ある文章……小野吉勝 ▼新少女雜感……沼田笠峰
▼蟲なく里より……ゆり枝 ▼秋の歌……萬代恒志
▼少女對話 なまけ驢……井田秀明 ▼投書文章……

菊判紙數百廿八頁
口繪三色版石版
寫眞版等數葉挿入

正價十錢
郵稅壹錢

東京日本橋本町 博文館 振替東京二四〇番

女（丁の一）

女(丁の四)

無我



篠原澄江子

コスモス



上圖左、梅田美代子　右、加藤波子　下圖右、竹内八重子　左、湯澤靜江子

蔦紅葉



上圖、佐藤和子（本郷）

中圖、中村いよ子（神田）

下圖、伊藤千代子（本郷）



松風の藤の實吹くや夕つく日　春二。

佐藤やす子　同　その子。左上、原とよ子　伊坂やえ子　原愛子。

久方振りに開場せる舞臺を一眸の下に收む

演藝倶樂部

▽第一卷第七號

▽十月一日發行

▽四六倍判二百八頁 正價卅錢 郵税三錢

●炬燵……右田年英筆 □極彩色木版口繪□

●市川左團次の『光秀』…… □コロタイプ版□

●四代目中村歌右衛門の『五右衛門』 □原色版□

●故團藏の『五右衛門』…… □寫眞版□

○帝劇○新富○市村○蓬萊○宮戸○三崎○眞砂○東京大阪俳優及び太夫の家庭……

▷脚本◁

曙光（春汀畫）……小島孤舟

救ひの井戸（三郎畫）生田葵

喜劇 留守宅（非ア畫）田口掬汀

△二種の態度……桝本清

△松居松葉樣……小山内薫

△梨園評話 書抜の書抜……杉贋阿彌

△所謂芝居改革案 牛黑法師

□新劇新人……瀨戸圓太郎

□生れた日に死んだ榮次郎……小出緑水

□地方の俳優と興行師 柳生

□能樂と芝居との間……阪元雪鳥

□滿韓行脚……大阪 竹本伊達太夫

□長唄研究……中内蝶二

□琵琶界の兩耆宿……迎月子

□活動寫眞見聞草……吉山旭光

□餘計口……一白生

□假聲と落語家……松田竹の島人

□演藝文學……

□九月興行便覽……

△二世團十郎の事 關根默庵

△七代目竹本綱太夫 大阪 馬脚生

△御停止開けの三座 岡村柿紅

△落語 なめる……春風亭柳枝

東京本町 博文館

第七高等學校
造士館教授 文學士 鴻巢盛廣先生著

口譯落窪物語

全一冊洋裝
菊判上製美本
紙數三百卅餘頁
口繪彩色刷四枚
正價 金八十五錢
郵稅八錢

落窪物語は落ち窪んだむさ苦しい部屋に押し籠められて種々の困難に遭遇してゐた中納言の姬君が左近少將に知られて漸々立身し遂々太政大臣の北の方になるといふ波瀾ある生涯を寫したもので平安朝小說中の傑作である。描寫の精致、筆路の暢達してゐることは他に其類を見ない。殊に滑稽趣味に富んでゐる點は此物語の大なる特色である。かくの如き名篇も讀み難いので現代人には殆顧みられないのを慨いて現代口語を以て譯出したのが卽ち此口譯落窪物語である。原書の味ひを出來る丈其儘傳へる爲めに一々語を逐うて譯して猥に省略してはない。これ一は古文硏究者に對して直ちに註釋書たらんことを期したからである。本書は又家庭に於ける善良な讀物たるを欲したので譯者は又此點にも周到な注意を拂つてゐる。

東京 博文館 本町

尾上柴舟先生閲　藤森花影先生述

好評再版

新刊 徒然草詳解

國語受驗の好參考書 好評嘖々として湧くが如し、帝國文學本書を評して曰く

徒然草が日本文學に於ける一異彩であることは云ふまでもなく、從つて古來その註解書にも乏しくないのは尤もなことであるが今ここに本書がその註解として現はれたのに就いては、必ず別に新味がない筈はあるまい、と卷を開けば果せるかな中々面白い企がしてある。まづ「一」例へば「閑寂」「四季の感想」「無常」「男女の情交」と云つた風に一段毎に題を附してある。次に「二」一段毎に上欄にその大意を口語で述べたことである、それから「三」原文の傍に解釋をほどこし。又別に評釋として各段末に說いてある。これらの方法は極めて適當な便利な思ひ付きで。讀者そのままに一時に大意と詳解とを合せ得る便宜がある。加之、卷頭には、本書の解題、作者の略傳、作者の評論などが公平な綜合的な見解の下に記されているのも親切な行き方と云はなければならぬ。實に國文學を學ぶ者にとつて。この上至便な詳解にあるまい。

正價五拾錢　郵稅六錢　紙數四百頁

發行所　東京市小石川區同心町　良心堂書店　振替東京二三三四四番

女(戊の三)

文藝倶樂部 第十八卷第十四號 增刊

講談落語 夢揃ひ

十月十五日發行

菊判本文紙數三百二十頁

口繪・極彩色錦繪及艶麗美人寫眞版

十數葉插入

正價二十五錢郵稅二錢五厘

『浮生如夢』など、言つて、夢程果敢ないものはないとしてありますが、また考へて見ると夢程面白いものはありますまい、平生思ひもせぬ突飛な事を、夢に見て、覺めて獨り微笑を湛える例は隨分あります、本誌增刊の夢揃ひには、正夢もあれば逆夢もありませうが、獏に食はせる樣な惡い夢はありません、伏て御愛讀を祈ります。

口演者氏名

大黑 三遊亭圓右
塚原卜傳 一龍齋貞山
貸本屋の夢 入船亭扇橋
幡隨院長兵衞 神田伯山
夢の遺言 三遊亭圓喬
小紫 猫遊軒伯知
天一坊 神田松鯉
犬伏の次郎吉 錦城齋典山

夢富限 五明樓玉輔
昇天の龍 小金井蘆洲
占八百屋 柳家小さん
信長の夢 早川貞水
乞食の夢 朝寢坊むらく
吉備大臣 邑井貞吉
茗荷屋 柳亭燕枝

●夢物語…………口演者一同

東京本町 博文館

女(戊の四)

秋日和



右上、鈴木きい子。右下、太田いく子、中央、藤田雪江子。左上、川合常子　岩野時子　今野花子
左中、伊藤千代子。左下、三好文子。

舞扇



上、紳商早昇榮氏令孃政惠子　下、鈴木令孃の仕舞

菊がさね



白菊の月夜黄菊の朝日かな無著自庵。　河野小とき子（神戸）　北村文子（横須賀）

ヴィクトリヤ女王記念像



秋晴れの日に照りはゆるマーブルの潔よき色
天に鑠かへすエンゼルの裳英國女皇の坤徳は千秋に仰がれぬべし

堀内新泉君著

常識讀本 現代女大學

和装菊判装幀優美

花嫁の巻

紙數二百八十頁
正價五十五錢
郵税八錢

◎他人の家庭に入り新時代の花嫁として成功せんと欲する滿天下の處女は先づ本書を讀め…◎新時代の良妻を娶り内顧の憂ひを一掃し揮身業務の人と爲り一大奮闘を試みんと欲する滿天下の青年は先づ本書を讀め！ ◎我が最愛の娘をして他人の家庭に賞讃すべき花嫁として大成功せしめんと欲する滿天下の父母は先づ本書を讀め！ ◎我が子に良妻を娶り一家子孫の大繁榮を期せんと欲する滿天下の舅姑は先づ本書を讀め！ ◎既に他人の家庭に入りて人の妻となり未だ家風に通せず家事に馴れず日夜徒らに煩悶せる滿天下の花嫁は特に直ちに本書を讀め！

東京本町 **博文館** 振替口座東京二四〇番

くれなゐ

貧弱な自己の創作を活字としたいため所謂地方文士なる者數名共同して出來あがつた雜誌と同視して頂いては困ります。本誌は誌上の全部を會員諸子に開放し諸子の共同機關を以て任じたいのです。雜誌毎月一回十日發行。入會希望者は誌代三箇月以上を添へて申込んで下さい。（郵券代用でよろしい）

定價送料共
一部十二錢
三部三十錢
六部五十錢

大阪東區玉生

クレナヰ會

催眠術

通信教授

誇言を掲げて法外の金員を貪り**無責任**なる單行本を送付する類に非ず會員には教授書全部**六冊**を交付するほか永久無料にて質問に解答し又斯學に關する各種學會講義錄書名圖書等を希望に應じ遠近を論ぜず無料發送す全學期**教授料**二圓八十錢三回分納隨意特に本月中入會金全免す

—詳細實驗錄付本會の規則書**無代進呈**—

大阪東區玉生

帝國神秘會通信部

女（巳の三）

黑田湖山君著

中澤弘光君
岡野榮君 挿畫

杉浦非水君裝幀

滑稽旅日記

洋裝四六判上製
紙數四百二十餘頁
三色版口繪二枚
及挿圖六枚入り
正價九拾錢
郵税八錢

胸中の欝を披くもの滑稽の興味に勝れるはなく、心氣の爽快を誘ふもの旅行の情趣に超えたるはなし滑稽作家として文壇に新旗幟を飜せる著者は玆に此の**滑稽の興味**と**旅行の情味**とを巧に鹽梅して本書を世に出す。錄するところの**新婚旅行、保養旅行、溫泉の旅、學生旅行、海水浴の旅、登山旅行**の六種、或は**艶味**のうちに**諷奇**を示すあり、或は**稗氣**を描いて**嘲世**の意を寓するあり、或は**詩境**の間に自然の**滑稽**を語るあり、各種各樣、何れも著者が**得意**の**才筆**を揮へるものにして、殊に其の**新婚旅行**に至りては、三々九度の盃に依つて結び合はされたる**花嫁花婿**の心境を容赦なく解剖し分析し展開して、**佳謔從横**如何なる澁面の**頑固老爺**といへども、之を讀んで覺えず**破顏一笑**せざるを得ざらしむるものあり。今や吾人の生活は彌よ慌忙を加へ來りて、天下斯かる種類の書籍に渴す。此の書の各方面に歡迎せらるゝもの、素より當然のことなり。

東京日本橋本町三丁目 **博文館** 振替口座東京二四〇

女(巳の四)



女學世界

第十二巻　第十四號

嫌はれる人と好かれる人

女子教育 側面の批評

渡邊千冬

△姑が世話を燒かない

學校出の女は世帶持ちが惡いとか、家事の切り廻しが下手だとかいろ〳〵の攻擊があるがこれは强がち學校出だとか學校出でないとか單にそれだけの理由ではあるまいと思ふ。然らば一體如何なる處に原因してゐるかと云ふと今日の娘達は丁度家庭に於て母親から家事を見習ふと云ふ暇りに學校に通うて居る。中には寄宿舍などへ入つて一年に一度か二度よりは家に歸らないと云ふのもあるので自然家に居る事が少ない爲に母親の仕事を見習ふ機會がない、又實地に家事を手傳ふと云ふ事もない、僅かに學校で形式だけを習うて直ちに家を持つのだからどうしても上手に出來る筈がない。

それにもう一つは若夫婦の別居と云ふ事にある、今迄は大抵嫁に行つても姑と一つ家に住んで何事も經驗ある姑の指揮を受け、姑に敎はつてやるのだから比較的に失敗は少ない處が今は舅姑は鄕里に居つて若夫婦だけ都會に出て居るとか、さもなくても別居が大分多くなつたので姑が世話を燒かない、これも一つの原因であらう。

△無學の女は壯健なり

それからもう一つは今の女學校ではあまり六ケ敷い事を敎へ過ぎて家を持つてから直接役に立つやうな事は敎へない、理科だの代數だの幾何だのと理窟ばかりを敎へて發育さかりの女の子をいぢめつけるが、こんなものは卒業してから何の役に立つだらう？恐らく家

を治めるにも、子供を育てるにも實際の役には立つまい、たゞ料理とか家事とか云ふものが少しは役に立つかどうか、これも隨分怪しいものだと思ふ。そしてこれは自分だけの考だから確かだとは云へないが近頃の女は子を產んでも乳の出ないものが多い、これは丁度乳腺などの發育する盛りをあんまり六ケ敷い事に頭を使はせるので乳などが發達しない爲ではなからうかと思ふ、その證據には田舍の何も知らない女は身體が壯健だ、今少し女學校でも實際の役に立つ樣なものを致へてほしい。



吹やみし裏山風や蚯蚓鳴く　作郎

△姫御前の高飛幅飛

先年英吉利のアームストロング會社の社長の息子夫妻が日本に漫遊した事があつたが、その折に一日華族女學校を參觀して體操の課業を見た所が生徒が盛んに幅飛びや高飛びをやつて居つたと云うて目を圓くして日本では實に亂暴な運動をやらせる、他の學校ならいざ知らず苟も貴族の令孃達にあんな幅飛びや高飛びをやらせて何の役に立つだらう、體育の爲ならばもつと上品な舞踏でも何でも外にいくらも相當な運動がありさうなものをと云つて驚いて居つた、それから家事の實習の方へ廻つて見たら今度は生徒が米を磨いだり、飯をたいたりする稽古であつた、それを見たので再び驚いて如何に一と通り心得る必要があるからとて、あ

んな事迄華族女學校で實習させるにも及ぶまいと思ふがと云つて居つた。國の事情も違ふから一概には云はれまいがしかし女學校とさへ云へば何處でも米を磨ぎ飯をたく事まで實地にやらなければならないと云ふわけはない、その境遇〳〵に應じて適當な敎育を施すと云ふのが最も必要であらうと思ふ。

△理想とは全く違ふ

西洋の學校でも貴族には他日交際社會に出て必要な事のみ敎へるので自然一般の女學校とは異つて居る露西亞あたりでは女學校は語學と音樂と舞踏とが重なる科目としてあるさうで、これは他日交際社會へ出てから直接役に立つ、音樂が出來るからピアノでも彈いて聽かせる事が出來るし、ダンスが出來るから舞踏をすると云ふ場合にはすぐ一所に踊れる、語學に巧みなので誰とでも自由に談話が交換される、所で日本の女學校を卒業したのはどうか音樂も出來ず、舞踏も滿足には出來ず、語學は英語一つすら自由には使へぬ、幾何や代數では家事の役にも立たないし、交際の道具にはなほならぬ。

それから日本の學校ではあまり男子と云ふものを敎へ過ぎる、男子はかくある可きもの、かくするのが正しい男子であるといろ〳〵云つて聞かせるので、生徒は皆各自勝手な理想の男子と云ふものを描いて居る、そしてその型に入れやうとする、處が一旦嫁いで夫を持つて見ると自分の夫は今迄敎師から聞いて居つたのとは大きに違ふ、自分の描いて居た理想とは全く異つて居る、するとかう云ふ筈ではなかつたと不平が起るそこでそろ〳〵と苦情が出る。

△婦人の理想と男子の理想

さて女の方では自分の理想と違ふので不平を云ひ出すが反對に男子の方から見るとどうであらうか、その妻は自分の理想に叶つたものであると云つて滿足して居るか、不平はないか、否、決してさうではない、男子は比較的婦人よりは高い敎育を受け、外國の文明に

も多く接して居るので見識も遙かに廣い、從つて婦人即ち妻に對する理想も婦人が男子に對して持つて居るそれよりは一層優つて居る、處が今日の日本にはその理想に適した婦人があるかと云ふと恐らく全國探しても見當るまい、婦人がこんな筈ではなかつたと云つて當が外れるより、より以上に今日の婦人は男子の理想としては足りないのである。しかるに女と云ふものは少し氣に入らないと直ぐに色々小言を並べるが、男子はさうでない、理想に合はないと云つても多くは默つて居る、どうせ喧ましい事を云つたとて理想通りになるわけでもないからいゝ加減の所で我慢して置く、若しも男子が理想通りの妻を得やうと云つて喧ましく云ひ出したら世間の女は片つ端から落第して仕舞ふわけさ。であるから女の方でもあまり我が儘をふりまはすのは宜しくない、婦人よりは男子の方が更に理想が高いと云ふ事を考へる事が必要であらう。



岨紅葉今や夕日の向ふ山　旨原

△隣りの花は紅いもの

大體に於て西洋の婦人にもよい所が澤山あるが、風俗習慣が異るのだからあれをその儘日本に持つて來るわけには行くまい、が、今日本の男子が日本の婦人に對してあきたらず思ふて居るのはあまりに思想のないと云ふ事であらう、試みに婦人に對して何か問を發して見るとその答へは萬人一様、殆んど版ですつたやうである、かう云つたらかう來るだらうと豫期して居ると必ずその通り、實に不思議な程一致する、比較的各種の人間に接して居る藝者の如きでさへも矢張りその通りなので相手にしても一向面白くない」そこへ行くと西洋の婦人は話をしても面白い、あんなにべら／＼絶えず喋くつて居るがそれが皆急所／＼をついた言葉で、同じ問を出してもその答は千差萬別。隨分奇抜な返答も出るので相手にして面白い、だから西洋では妻でも娘でも話相手に充分である。このやうに男子が日本の婦人に不足した點を西洋の婦人に羨ましがると同様、婦人は婦人で又西洋の男が女子に對して優しい、靴の紐迄結ぶと云ふやうな點を見てしきりに羨ましがつて居るらしい、又西洋の男子から見ると自分の國の女のやうに午後三時からは買物に出なければならぬとか、夜は劇場へ行かねば滿足が出來ないとか云ふのでなく、いつも家にばかり居つて男子の命令をすなほ



菊の香や書院に通ふ長廊下　高骨

に聞いて居る日本の婦人を羨ましがる、何でも人のものはよく見えるもので中に入つて見ると思ひの外であると云ふのは一般の事と見える。

△御同情に堪へません

西洋人は皆中々の見榮坊であるから、家庭でも外見だけは頗る美はしいが、中に入れば不足だらけなのである。以前に自分の知つて居る或る西洋人が結婚をしたと云ふのを聞いたので、今度會つたら何と云はうかと、一人の友人に話したらそれは最初は矢張りお目出度うと云ふがよい、そして一年經つたら今度は誠に御同情に堪へませんと云ふのさと答へたがこれは甚だ味はう可き言葉であらうと思ふ。樂しいのは當座だけで一年もたつとお互に缺點も見えて來るし、そろ〳〵苦情も出て來ると云ふのは、西洋でも矢張り同じなのである。勿論西洋 主婦と日本の主婦とは自ら仕事が違ふ 西洋では洗濯は洗濯屋がするし、裁縫は裁縫師がするし、料理はコックがする、日本ではそれらは殘らず主婦の仕事である、しかしたゞそれだけならば下女でも間に合ふが、下女の仕事をするのみでは婦人としての美點は認められぬ、どうしても婦人の價値は男子の伴侶となり、その事業を助け、その相談相手となるに及んで現はれる、こゝに於て女は結婚す可きものであると云ふ結論が出る、結婚して妻となり、母となつて初めて婦人の眞の力が現はれる、いかに才能ある婦人でも自分獨りでは女性の美點は發揮されぬ、男子に對してその働きは發揮されるものである。

△怪婦人スタインハイル

男子を相手にして充分にその腕を振ふと云ふ事は西洋の女子は遙かに日本の女子に優れて居る、かのスタインハイル夫人の如きは歐洲全部の社交界を震動せしめたと云ふ位で接する男子をば盡く掌中に弄し 大統領さへもその一婦人に國政の秘密迄打ち明けたと云ふが、かくの如く多くの男子がその夫人の爲にチャームされると云ふのは決して彼の女の美貌が然らしめたと

は云はれない、確かに美貌以上の手練を有したに相違ない。一體この夫人は生れは卑しい者であつたが、彼の女の父は彼の女のまだ十二三歳の頃に階子段の昇り下りを見て、上る時は中々美くしいスタイルであるが降る時のスタイルがどうも上品に行かないと云つて、毎日之を練習させたとか云ふ事であるが僅かに階段の昇降位の事にさへそれ程細密な注意を拂つて敎育した結果が、遂に他日彼の女をして、あれ程の手腕を持たしめたのであらう、西洋の婦人が、實にその一擧一動に深き注意を拂つてレファインされたる態度を造ることは、到底日本の役者以上である、故に西洋の婦人に接した後に日人婦人を見ると全で木偶の坊の如き觀があるさうかと云つて一二年西洋を見て來た婦人が、生半可に西洋の眞似をするのは如何にもわざとらしくつて氣障なものだ、もつと自然にやつてもらひたい。

要するに今日の女子が、學校へ通ふた割に社會に出て、役に立たないのは女子が惡るいのではない、社會の組織が惡いのであるから追々と改良して女學校あたりでももう少し實地に應用の出來るやうな風にして語學など盛にやらせたらいゝかと思ふ。



宵月や十夜戻りの人通り　吉野

儉約の仕方は、不自由を忍ぶにあり、人は此世に客に來たと思へば、世話も苦勞もなし、心に叶はぬ食に向ふとも、ホメて食はねばならず、夏の暑さ冬の寒さも客なれば堪へ嗜まねばならぬ、子孫兄弟皆なお客なれば、挨拶丁寧にして、心を殘さす暇乞ひ申すべし（伊達政宗）

變成男子の説

文學博士　前田慧雲

女の愚癡つぽいのは、決して今はじまつたのではありません。今から何千年前、お釋迦樣の生れた時からやはり女は愚癡つぽかつたのです。ですから三從の敎へといつて、幼にしては親に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老いては子に從ふと云ふ、頗る女に取つては屈辱のやうですが、又一方から見れば、弱い女に大層好都合な敎へが出來たのであります。

ところが近頃は、所謂る新しい女だとか、自覺した女だとかいつて、この三從の敎へを根本的に破壞しやうと企てる女があるんです。さういふ女の心は、果して何ういふ確信を有つてるのか、深い研究は未だ爲て見ないのですが、思ふのに『親に賴んで生んで貰つたのではない』『なにも夫に從はなければならない筈はない、女は女の勝手だ』『小兒は餘儀なく生れたものだ』と、まあ斯う云つた風な考へから割出されたものゝやうに思はれます。殊に『なにも夫に從はなければならない筈はない、女は女の勝手だ』と云ふのが烈しく刺戟してゐるやうであります。

これは一寸聞くと道理のやうですが、よく考へて見ると殆んどお話にならない暴論です。これではまるで社會の秩序を破壞するばかりか、人間同志の連鎖までも裁きつて仕舞ふ話ぢやありませんか。

併し斯ういつて難ずるのは、或はやはり敎育家などの眞面目な人の云ふことかも知れません。そこに行くと今の敎育家よりも、昔のお釋迦樣の方が遙かに穿つたことを仰有つてゐる――女人は男子が近寄ると大變な怒りやうであるが、内實非常な喜びである――と、うまいことを云はれたものぢやありませんか『女は女の

勝手だ』などゝいふのも、ナニも女から男へ送つた絕交狀では無くつて、內實は非常な喜びを求めやうとする手段に過ぎんのかも知れないぢやありませんか。それを眞正面に正直に解釋して、秩序紊亂だとか何とか云つて騷ぐものこそ、ホントにお人好と云はなければなりません。

ですから私は、所謂る新しい女の言ふことや爲ることを見たつて、『あゝ又始まつたナ』と思ふばかりであります。

これが昔の女なら、きはめて率直に、『あゝこんな事ならナゼ女なんかに生れたんだらう』『あゝ不幸な子供を有つた、なんの因果に女なんかに生れたんだらう』『あゝヤクザな亭主をもつた、なぜ女なんかに生れて來たんだらう』といふところなんですが、所謂る新しい女になると、そんな愚癡つぽい、智慧のない言ひまはしは爲ずに、もつと巧妙な手段を取るのであります。モウ少し砕いて申せば、同じ放蕩者の妻となつても、舊式の温順しい女は唯だメソ〳〵泣いて愚癡ばかり云ひ、現代式の新しい女は、左樣いふ場合だと、自分の方が先に立つて道樂して、亭主に呀と云はせるやうにするだけの違ひなんです。だから表面から見れば、一方は温順貞操の女のやうに見え　一方は言語道斷箸にも棒にもかゝらないアバズレモノのやうに見えるけれど、一歩退いて深く其心情を察すれば、いづれも內實非常な喜びを求めやうとする煩悶に過ぎないのであり



啼く鳥のありて淋しき紅葉かな　牛村

ます、ですから私は何時も　男のする道樂と女のする道樂とは、大に意味が違ふと思つて居ります。

しかしこれは私一個人の考へですから、社會の人すべてが斯う深く女の心情に立入つて考へて居るや否やは頗る覺束ないのであります。モウ一歩進めて云へば女自身すら、或は眞に己れの欲求　てゐることを意識せずに爲てゐるのかも知れません。



朱の橋の見えて紅葉の底明き　一樹

ですから私は、深く女の心情に立入つて考へて見ると、どうしても一般の人のやうに、頭ごなしに女を罵ることは能くないのであります。のみならず却つて、手を換へ品を變へ樣々な方法で煩悶を訴へるのを見ると、まことに氣の毒になつて堪りません。お釋迦樣も此聲を聞かれたと見えて、『泣くな〱極樂へやつて遣るそれほど女が嫌なら極樂へ行けば男になれる』と云はれたのであります。佛說では、女人は皆な地獄へ落ちるものとしてあります。若し極樂へ行つて男に成りたければ、それだけの善根を積まなければなりませんその善根を積んで極樂へ行くことを、變成男子の願を立てると申してあります。現代の若い女なども、强ひて男に反抗したり、非難攻擊の的になるやうな行動をするのを罷めて、早く變成男子の願ひでも立てゝもつと正しい、道を步む方が好いのであります。

○

ありそ海の波間かきわけてかづく蜑の
いきもつきあへず物をこそ思へ。

二條院讃岐

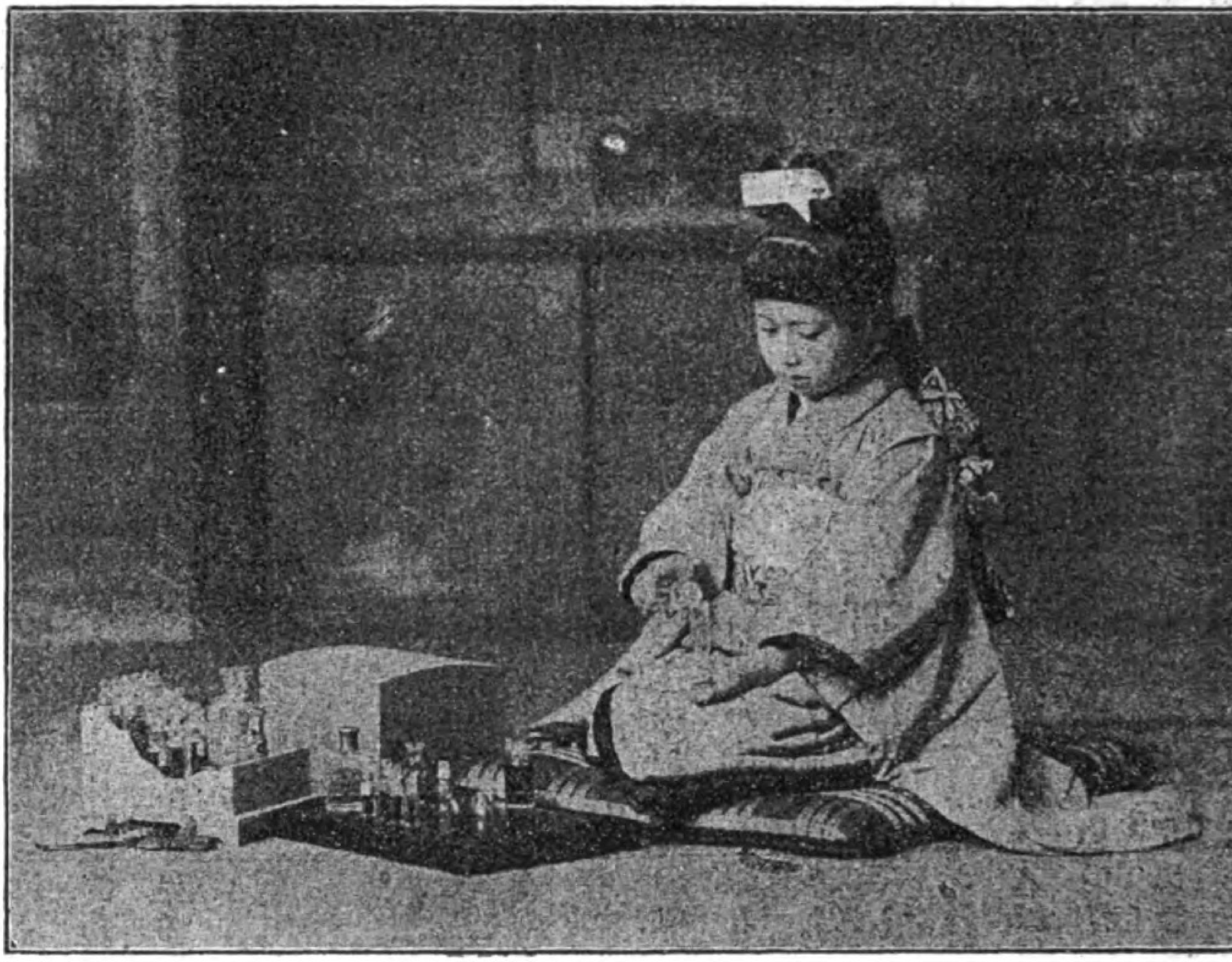
乃木流の教育法

木村貞子

△矛盾した衛生思想

今の青年男女は、衛生法の講釋を並べ立てゝ自分の身體のことばかり氣にして居ますけれど、實際昔者ほど丈夫でありません。これは頭腦の使ひ方が複雜になつた所爲ばかりではありますまい。つまり心が浮ついて、手足は不精になつたからだと思ひます。學科が忙しいと云つたところで、一定の時間に本氣になつてミッシリ復習して居ればさう後れる筈もなし、暇はいくらもあるのに、兎角身體を働かすのが億劫で、手數を省くことばかり考へ、骨の折れる仕事は成るたけ免れる工夫をして、體力心力を練る心掛が足りません。而して嗜滋養がどうだの刺戟が何だのと氣を揉み、徽菌々々と恐がつて一杯の水、一粒の米にも神經を鋭くして居るくせに、店屋物は平氣で食べるといふ風で、衛生の注意が全で矛盾して居るではありませんか。一體血氣な人が襟卷や外套にくるまつて、少し鼻風でも引くとピク／＼するやうでは困ると思ひます。私なぞは熱の出た場合でも自分で體溫器を挾んで見たところで神經過敏になつて却つて病に障ると思ひますから、醫者に診せるまでは熱を計つたことはありません、何にしても一般に平生もつと氣を確乎と持つて、身體を眞實に動かし、心身の力で病難なぞ追拂つて了ひ、丈夫な年寄に笑はれない工夫を爲たいものです。殊に女學生は學科が少し位出來たつて不精では第一女の道が盡せません。

△贅澤は肉體を腐らす基



私共の塾では、只今以てランプを用ひて居ります。世間からは餘り舊弊だと笑はれ、瓦斯、電氣の會社からうるさく勸められますけれども、決して動きません瓦斯や電氣も一つか二つの燈火で用が足りる家庭には適當でせうが各室へ點じて十以上も用ゐる私共のやうな家では、五分心や二分心のランプを使ふよりズツと經費がかゝります。

大した夜業でもするなら兎も角、塾生の自修位にはランプで澤山です。その家々の經濟を考へずに贅澤癖ばかりつくのは宜しくありませんから、こんな心得も生徒に敎へて置く必要があります。ランプは危險だと云つても注意さへすれば何事もありませんし、又子供ではなし其位の注意力は養つて置かなければなりません。第一ランプ掃除位を面倒臭がるやうでは困ります塾生は不平があるかも知れませんが、私が毎朝悉皆掃除して見せますので、厭な顏も出來ずに手傳つて居ます。尚臺所の方も一時瓦斯を引用して見ましたが、矢張り經費が薪炭より超過して鍋釜は損じ、銅壺に湯も

沸かず、第一廢物を焚物に利用することも敎へられませんから全廢して了いました。これも塾生には嬉れしくないことですが、樂な瓦斯焚より薪炭の面倒を見る方が手足を動かす修養に極適當でございます。

△芥溜箱の取締り

近頃郊外の埋立地の下積に市中の芥を運びこんで居るのを見かけますが、汚い芥で埋た土地へ家を建るのは心地の惡い感じがいたします。これも澤山な芥の捨場に困るからのことでせうが、家々の主婦が少芥の取締りに注意しましたら、御厄介のかけ方がずつと減るだらうと思ひます。あの炭俵なぞをドシ／＼捨てゝあるのを見ますと情なくなります。私共では野菜物でも魚類でも屑を出さぬやうに注意して、肴のアラはお汁の出しに、腸は肥料に使ひ、茄子の皮は糠味噌へ入れ枝豆の殼は乾して焚くと云ふやうに、悉皆始末をつけます。又炭俵は不殘こなして焚物とし、庭の落葉は風呂の下へいれて了ふので、芥箱へ入れるのは、ほんのふるひ上げたかす許り、極僅かなものですから芥屋も此家の芥は、他家のと違ふと云つて居ります。塾生も芥箱の點檢には閉口しませうが、それでも私と一緒に手まめに働いて芥を出さぬ注意を爲て居ります。

學科の勉強に取かゝつたら心身を靜かにして精力を集注し、立働らきにかゝつた時は小きびよく動くべきことを塾生に奬勵して居ます。ジヨビ／＼した體度で炊事や洗濯をするのを見つけますと、小言と一緒に自分が引取つてやつて見せます。私方では洗濯ソーダはあまり使はず、昔風に灰くづを空樽へ溜めて灰汁を拵へて置きますが、これなぞも不精して水ばかり殖しては效力がありませんから、時々灰くずを取かへて、新しい灰汁を作ることを八釜しく申し、そして古い灰くずは畑の肥料に用ひて捨てさせません。

△跣足で勞働

燻炭と稱へて未だ灰になり切らぬ焚物の屑へ尿水を注いだものは奇效のある肥料で池田謙三さんは、蒲田

附近の田畑にこれを用ひて試驗されたところ、從來の肥料を用ひたより約十層倍の收穫があつたさうで、若し日本全國にひろめたら、米麥は食べ餘つて外國へ輸出が出來ると云ふことです。このお話を伺つてから私も少しづゝ試みて居ますが、お芋なぞめつきり發育しました。私共では御覽の通り庭も畑もほんの僅かなものですが、夏冬とも未明に起きて庭掃除や畑いぢりを跣足でいたすので極身體に藥です。一般ではありませんが一二の塾生は私と一緒に跣足で勞働しますから夜分よく安眠が出來て宜しうございます。

△屑籠の整理



婆が菊赤菊勝ちに咲きにけり

暑中休暇だと申して終日ノラクラして居ますと、却つて暑さを感じますから、私共では衣服の洗ひ張りをセッセといたし、敷紙貼りや唐紙の下貼なぞもこの時にいたします。唐紙は、下地を少し大きい反古で張り、その上へ古狀袋のひらいたのを、幾重にも重ねかけて、簑のやうに貼りつけますが、極丈夫な下貼が出來ます。反古は、平生屑籠の中まで整理して少しでも形のある紙は、丁寧に貯へて置きますから、一年に可なり貼物の原料が溜ります。暑中休暇につまらぬ小説なぞを讀み耽つて暑い〳〵とこぼすより、一と働らきして後に清新な書物でも繙いた心地は何とも云へぬ快味を感ずるもので、若い女子も仕つけやうで自然この快味を覺えるやうになります。

△靜養は自墮落

暑中には塾生を連れて轉地することもありますが、其際には、洗張した縫物の材料を大風呂敷へ一ぱい持つて參り、一同で一所懸命に縫ひ、一通り仕上ると、又代りの材料を運び、勉強して縫ひますから、歸京の時はいつも仕立物を一としよい持つて歸ります

折角靜養に出掛けるのに、これでは何の效もないと思ふものもありませうが、靜養は一日の中一定の時間だけで充分です。朝から晩まで身體を樂にして居たところで、若い女子は兎角空想に耽るばかりで品性を損ふ基となりませう。

△鼠から敎はる智慧

女子が眞實に手足を働らかして、天與の時間と物質を大切にすることを勤めますと、克己心が養はれて誘惑に勝ち、妄想が失せて心鏡の曇りがとれて參ります或名士が、形而下の學問は當今殆んど極點まで進歩したが、形而上の學問はズッと昔より退歩したと云はれましたが、私共が大いに考ふべきところと思ひます。

有名な高島翁が嘗てかう云ふことを話されました。

『余が幼い頃　高輪から兩國橋まで燒けた大火事があつた、その二三日前、兩國橋の袂に床店を出して居る髮結の爺さんが、夜半小用に起き出ると、橋の欄干が小浪の寄する如く、又繩をよる如くウネ〳〵と動いて居るので、不思議に思つて近寄つて見ると、數萬疋の鼠が連續して橋を超えるのであつた、老爺は何か變事がなければいゝがと思つたさうだが、果して大火事があつた　鼠のやうな小動物でも災害を前知する力があるのに人間にこの力がないのは、畢竟我欲がはびこつて心鏡が曇つて居るためである』と話されましたが味はひのあるお話と存じます。

思ひかれ秋のゆくへを眺れば
まき立つ山も時雨ふるなり　　伊達千廣

女子と勤勞教育

中川謙二郎

△眞に消化せぬ權利思想

現今の婦人は教育に依りて相當に知識德操を具へ、自ら判斷する力を具へた結果、一家を經營するに當つては、進んで自ら其の事に任じやうと思ふやうになつて來た。

是れは或は傾向とは云はれまいが、一般に、教育ある婦人が斯くの如く女子たる責任を考へて來たのは誠に宜いことである。主婦と云ふ名ばかりで、飾物か人形のやうでは仕方がない、一家の妻女として其の家の經營が出來ないやうでは何にもならぬと云ふ自覺から生じたのである、而して又是れが爲めに、或一部の人人からは教育に對する非難攻擊を受くべき因由ともなつたが、これは過渡時代に於て必ず受くべき當然の聲で、餘義ない次第である。

斯の如き間に自然に權利思想が入つて來た。けれども未だ極めて薄弱で、各々思想を懷き乍らも未だ眞に消化してゐないで、多くは之を誤解してゐるやうである。併しこのまゝに放任して置くべきではあるまいと思ふ。

△家業に興味を持たせたい

近來中等教育以上の教育を受けた婦人が、嫁して行くべき家の職業に對する選擇に就て、誤りがあるやうに思はれる。

或は時代の風潮ではあらうが、一例を擧げれば、農家の女でありながら、高等女學校に入れた爲めに農業が嫌になるとか、商家に生れながら商家へ嫁入るのを好まぬとか、かう云ふ事實を數々聞く、學校は決して

斯の如く教育をしてはゐない筈で、寧ろ其の家業に興味を持たせたい、教育に依つて何事にも喜んで從事せしめるやうにしたいと苦心してゐるので　どうしても好きにならねばならない筈であるのに、却つて官吏とか、軍人とか、或は學者とか會社員とか、云はゞ非生産的の、遊んでゐて暮らせる穴を守らうとする傾向がある。

△遊んで暮さうとする陋習

これは獨り學校教育の力のみが勢ひを逞しふして、實際教育即ち其の家業　興味あるものなること、貴きこと、父祖が家業經營の苦心と云ふやうな　一種の精神的感化を與ふべき家庭教育に缺陷があるのではあるまいかと思ふ。世界何れの國にも共通せる都會生活を好む病的熱に罹つてゐるのではあるまいか、眞に自分の身體を愛し、自分の一身を以て社會に貢獻し國家の爲めに天分を盡さうとするには、都會生活は最も惡いのに、却つて都會生活を好むと云ふのは甚だ其の意を得ないことで、研究すべき問題であらうと思ふ。

而して現代の教育ある女子に進んで勤勞に服するやうな氣風があるかないかと云ふに　これは先づ無いやうである、勤勞に服するやうに赴かしめんとする傾向は　るけれども　男子は婦人を坐して食はしめ、婦人は遊んで暮すのを榮譽とし來つた歴史ある東洋の陋習で、未だ全く此弊風を芟除することの出來ないのは、遺憾である。斯くの如き惡い習慣は　一日も早く家庭教育の改善と學校教育とに依つて一掃し、進んで勤勞に服するやうに導きたいものである。

古への英雄は皆經濟の爲に苦心した織田信長は經濟上の着眼が周密であつたから六雄八將に頭となり得、武田信玄も甲州の砂金を密かに掘り出して、いろ〳〵の經濟制度を立てた、また南朝の正統も北朝の細川賴之の經濟の爲に倒れた、あの芭蕉の如きも　經濟家で、近江聖人は芭蕉の遺法に則つたものだ。（勝安房）






婦人一百題

△妻は一生お留守番。

△賢い女はあまり役に立たぬ。

△女から柔順の徳を引けば零だ－と百人の男の九十九人迄が思うて居る。

△女の一生は、竈のほとりと、鏡の前と、針箱の傍に終る。

△女は、花ありて、世にうつくしく花は、女ありて世にうつくし。

△細君は一年中忙しがつて居るものだ。

△女は子を生む事に由て不朽なり。

△お汁粉の嫌ひな女は厭な女である

△箱入娘の標本を保存して置き度い

△妻は日用品である。

△女の前で密語をすると一生憎まれる。

△女は美の王であると共に又美の奴隷である。

△まことに女の全身は、男の肋骨一本に値ひす。

△女は天國の優先者なり。

△女が交ると會話が華やかになるけれど實が無くなる。

△女は蟲眼鏡をかけていろ〳〵のものを見る。

△女の道徳觀は押せば潰れる。

△女の自覺は十三四の頃に始まる、男よりも遙かに早く人生に觸れる

△姙娠は、惡意ある神の諷刺か。

△其眼は『賣らん哉』と言ひ、其鼻は『斯くの如く高し』と澄したり。

△眼鏡を掛けると　女振が七割下がる。











△女の美は、愛情の波動である。

△眞の女の生活は夢の中に過ぎてしまふ。

△女の一等美しい年齢は十九と、四十一。

△女の性質を最も好く現はすものは裁縫の運針である。

△潰しの利く女といふ言葉は女を輕蔑した言葉である。

△一と度び口を開けば、總ての美の輪廓が崩れる。

△女の又の名は「衣紋掛け」といふ。

△女は煽動られて動き、冷評れて止まる。

△女の眼の底に人生の悲哀あり。

△女は概して近眼者なり。

△凡そ世に氣の毒といふも衣裝負けをする女ほど氣の毒なものはなし

△女と云ふものは、毎日々々朝に晩に鏡に寫して見て、一番好く知つて居る可き筈の自分の顔を、一番知つて居ないとはこれほど不思議な事はない。

△女に反物と、針道具とを充行うて置けば、終日温和しく遊んで居る。

△女は初めて見た時が、一番うつくしい。

△女は最後に別れた時が、一番戀しいものだ。

△女は泣いた時が、一番かあいらしいものだ。

△女は盛裝した時が一番冷たい。

△女は熟睡した時が一番醜い。

△女のおしやれは見せつけである。

△女のおしやべりは聞いて呉れろである。











△女の『いゝえ』には、無限の意味がある。

△女の中には、壓へられると、恰度バネの様に、夫れだけ持ち上げる者もある、抑へられた儘、何處迄も〳〵縮んで行く者もある。

△聲の美人！　文章の美人！　筆跡の美人！

△女は樂天家であると同時に厭世家である。

△『結婚』と『分娩』の二つの關門を潜つて來ると如何なる女も女らしくなる。

△女は一枚々々の葉を描く事は能くする、併し一本の樹を描く事は出來無い。

△秘密を持たぬ女は無味な女である。

△莊厳、雄大、悲愴の意味は本統に女の心に判らない。

△いざ行けと成ると、女は躊躇する。

△女の髪毛の觸つた時くらゐ、氣味の惡くぞつとするものは無い。

△女の秘密は世界の秘密である。

△女は生れながらの批評家なり。

△女として最も弱き者は、妻として最も強し。

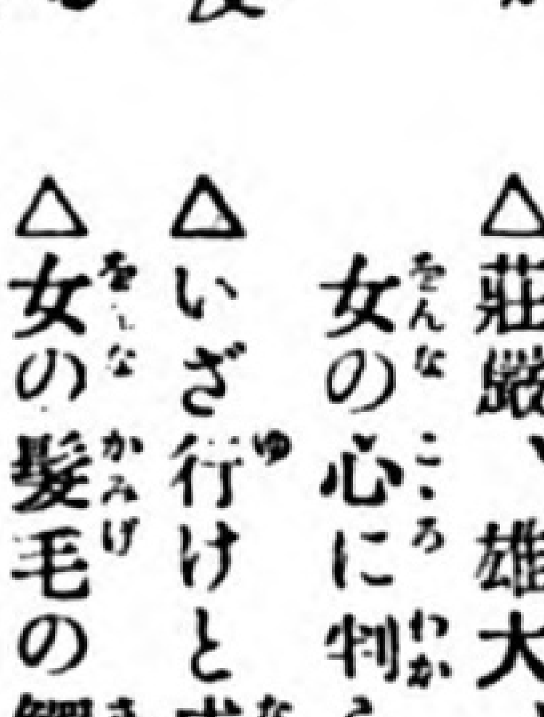
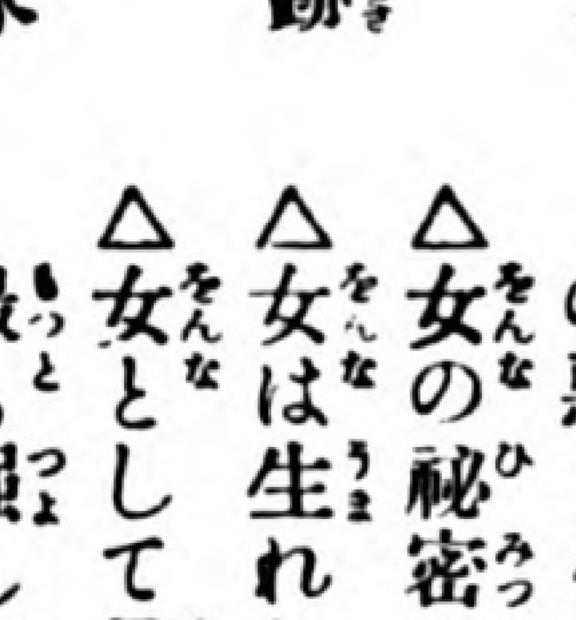
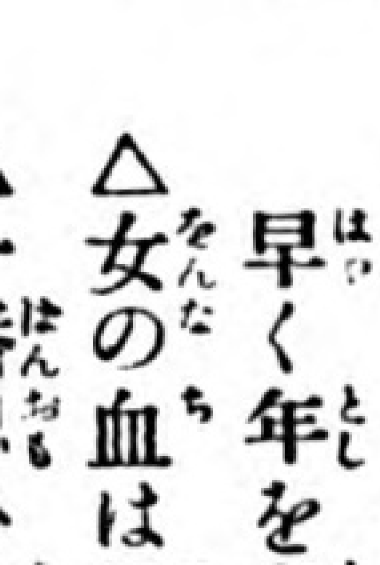
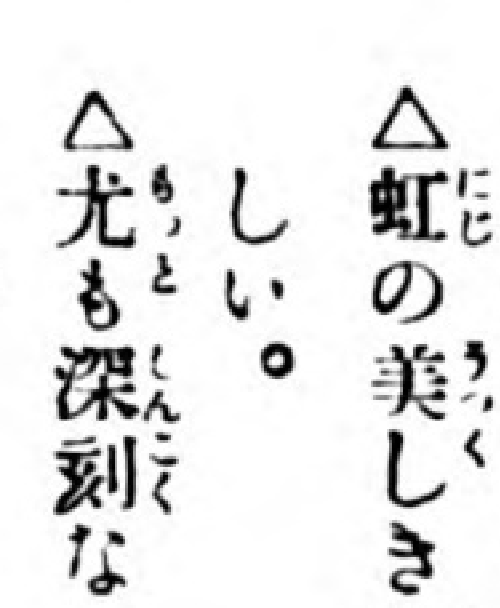
△美しい女を妻に持つた夫は、三割早く年を老る。

△女の血は濁つて居る。

△一番思ひ切つた事を遣て退けるのは極く氣の弱い女である。

△虹の美しきがごとく女はうつくしい。

△尤も深刻なものは醜女の戀である。



△目隱しをさせられて、陷し穽だらけの道を進むのが女の運命である。

△病氣の看護には女は絶大の天才を持つて居る。

△『可からず』づくめで育てられた女はひがみ根性である。

△美人の眸は、複雜なる結晶體、寶石の中の寶玉である。

△女の見る世界は色彩の世界。

△細君の造る世界は、圓くて縮つて居る。

△娼妓は時として良妻と成る事あり藝妓は然らず。但し節操の資格は兩者とも無し。

△女の細胞は粘着力に富む。

△女のみ女同士を知る、しかも、女は己れを知らず。

△女の涙を以て沾ほはざる物ありや！

△女の思案に餘る事の多くは男には馬鹿々々しい位のもの。

△髮一筋にも女の誇りは籠れり。

△待合の女將の方が婦人會の幹事よりは經營の手腕あり

△一家の主婦は帖面の上に置た文鎭の樣でありたいものだ、一冊に綴ぢられた何十枚の紙が風の間々煽られて居るのは、丁度面の異る如く氣質の違ふ家族が各々自分勝手な我儘をいふのと同樣である。此家族の自分勝手我儘は一家不和の基であるから、恩あり威ある主婦は、其文鎭となつて之をしづめる能力が必要である。





秋季忠告會

藤涙

殊更に舎をはなれた裁縫室で、級友二十八人一ッ燈火をかこんで秋季の忠告會なるものを開きました。

皆様どうぞ明るい方へと、幹事の方が被仰るけれど、誰もそれならと進みなさる方はない。獨りニコ〳〵者の山岸さんのみ平氣で明るいとこへ出られて、一同の顔を相變らず無邪氣な眸で見廻されて居る。私はなるべく隅の、なるべく暗いとこへ座つた。だつて公平な目から見ていたゞいても、缺點の多い、まして嫌はれ者の私ですもの。皮肉な忠告文をよまれた時の準備ですわ。一體と云ふものは、なぜ好嫌によつて人の價値まできめるのでせう。

忠告だつてさうですわ。

幹事の人が白紙を渡される。それに各自誰とも云はず忠告文を書くのです、やがて各人注視の下にそれが讀みあげられる。

吉永様のだ。

今少ししつかりしてじみになつて下さい。

着物の着方に氣をおつけなさい。

人にじやれつかぬやうに。

私らだつて級友の一人ですわ、そんなにさげすまないで下さい。

髮の結方に注意したら。

男子との文通はいかゞなものでせう。着物を無雜作なハイカラかだぶ／＼に着て、袴を腰につけて羽織の紐は思ひきり下に、そして眞赤のリボンで、髪は矢張り油なしのバラ／＼にして被居る。かまはぬたちかと思へばさうでもない。お話すれば風采の講釋などたつぷりなさる。憧れるやうな眸にシエクスピヤだの、ゲイテだのと叫んで、趣味を解せぬやうな人は友ともせぬ。やりつぱなしのお洗濯物などはためても、ピンポンに夢中になつて被居る。少しはなせると思はれると、男子の方から來た手紙などについてかうのあゝのと被仰る。普通の人は驚いて品行を疑ふ。まさかそんなことはありますまいが。

日暮まで日のさす寺の尾花かな　彦道



しまりのない、よく申せば大人ぶらな、理想派の情のつよいところは、級友仲間には嫌はれる基となつて、皆からこんな矢をはなたれたのです。けれどもこのよりつき易いところが、或る異性にはかへつて氣に入るものと見えまして、或先生には殊の外のお氣に入り、「吉永さんの羽織着たところは繪のやうにいゝ」と誰れやらの耳に入つて、恨のまととねらはれるも無理ならじ

秋月樣。

も少し女らしくして下さい、高慢ではありませぬか。

も少し控へ目にして下さい　殊に朝理髪室などで迷惑

します。吉永様と一緒に國漢のお得意ガル先生にじやれつく、さうかと思へば、テニスのチャンで着物などは引きさきをたやしたことのない。人を人とも思はず、グズ〳〵話しける。「何？」と高い調子で被仰るきり、相手にもしないお家の自慢やら、和歌のお得意話やらを夢中にあびせかける。用のない時は、人が居やうがかまはずどん〳〵前へ出て、すべての物を獨占しやうとなさる。理髪室などでの無作法さこそと思はれる。荒い性かと思へば、さうでもない。氣に入らねば人にかみ付く。毛蟲のやうにきらはれる秋月様。それでもテニスの技倆をめで、快活のところをよろこび給ふ人もたまにはあるよし。

撫子や尾花が袖に咲きのころ
家定



お世辭云ひで、一寸すると「イヤダッタライヨー」と、大きな體にも似ずやさしい聲を出してにこ〳〵して、誰にもうまく合せなさる上村様、ほんとにこの方に接すると、よくもこんなになだらかにお出來なさるかと感心する。他人との交際上何の苦痛もなかりさう。髪も念入りにあげて着物もスッカリして被居る。女らしいそれだのに、好かれると云ふより、むしろ嫌はれる全くお世辭の口が走りすぎてこの方の云つたと云ふ蔭ぐちがちよい〳〵洩れるからだ。髪の手入、着物の襟などの精細な注意はかへつて同性間に好かれない基と

なるらしい。

幹事の方は、これらの點をあげて忠告文をよまれて次は、

梅原様のだ。

美しい派手なお臺に包んだ體のお色は、透きとほるやうに白くはつきりした輪廓のお顔、艶のある髪をお上手にあげて、新ダイヤの櫛が一入光る。流行の魁は常にこの方からお一人ぎりの愛娘、善美をつくしたオックリ、頭のいゝ、數學や、理科の試驗のときには、全級擧つてこの方の敎へを仰ぐ。論理でも、心理でも、當つて解からない問題はない。皆がなやむ樂典でも、文典でも、滿點を取られる。さうかと思へば、級一の文章家で。むづかしい問題に皆閉口するとき、獨りほほゑみながらの活動ぶり、どの先生にも可愛がられるのは無理ではない。あまりきれいすぎる水には魚もすみにくいとか。この方のあまりにするどい明晰な頭の前には人がなつきにくいと見えて、畏敬するのみでくみしない。

別にいやみも被仰らぬけれども不合理な衆人間に立つて、圓滑に時に貴重な時間も空談にすごすやうな事は、この方には出來かねる。皆が笑ひさゞめく時はいつもだまつてきいて居られる。ラケット一度もつたことはなし。ダンス等も嫌ひのやう。頭の熱したとき、校庭に呆然と立たれるか、オルガンの練習をしなさる級の大事があれば、この方の判決を願ひながら皆の頭にはくみしにくい、底しれぬと云つたやうな感がしみ込んで居るらしい　そのくせ決してお心は惡くはない。尤も、善美をつくしたお服裝及びお美しいお顔が衆人の心にねたみを根ざさせはしまひか。

あまりにうれしからぬ忠告文、けれど、この方はうはの空ときゝ流してゐられる。

かまはずやの大將、月に一度衣替へなさるかなさらぬかの、不潔できらはれる中野樣。

いやしくてすかれぬが秋野樣。

音樂家ぶつて攻擊せられる山下樣。

ホームシックに泣いてばかり居られる小栗樣。

我まゝでダヽッ子のやうお腰掛けるにも氣に入らねば怒る鈴木樣。これらが餘りすかれぬ方々ですの。

謙遜で、何を云つても「さうですね」と頭を下げられる、勉强家で物がたい、容易にお自分の意見を發表せられぬじみな飯野樣。着實なほど成績の見事ならぬところは一入同情を引いて、だれにも好かれる。

すなほなところは服裝や髮にまで表れて、スラリとした出たち、あまりかざらぬところに趣があつて。え〻さうね、私もう何でもい〻わ」と競爭も何もなさらぬ。普通を標準としてあせらず、あだへず、人と共に散歩し、共に談笑なさる。それで圖畫の堪能でゐらつしやる、例の「どうでもい〻わ」と云ひながらお描きになる巧妙な畫に對しては賞しこそすれ、陰口一ッ云ふ人がないだれかの忠告に「皆樣この方をまねませう」とは無理ならじ。



薄見つ萩や無からんこのほとり　蕪村

級長の川井樣一學期は梅原樣と思ひきや、矢張り衆望はこの方をはなれない。誰にも好かれる、八方美人の證明は、忠告文がちやんとして居ます。

多辯の上村樣に調子を合せて、一寸すると同じ性質かと思はれるけれども細かく觀ずれば決して人の惡口なんか云はぬ。所謂井端會議に顏を出すけれども口は出さぬ。「サウ〳〵」ときいてのみ居られる。

少ないけれど、黑いお髪をつゝましやかに結んで、上村樣ほどわざとらしからぬたしなみ。

お口のかずは少いけれど、目から鼻へぬける如才。吉永樣、秋月樣に逢へば矢張「さう〳〵」とお自慢を惡い色もせずきいて被居る。圖畫のお得意な人ともお話し出來る。梅原樣の高尚な判斷もよろこんでいれる學科もどれが飛びぬけてるでもなく、誰とでもお相手が出來る。中にも音樂は決してあなどり難いけれどもぶらない。

何か出來ると、「どうしたらいゝでせう」と小心らしく被仰る。皆があれこれ云ふところを靜かにきいて梅原樣に相談した後ハツキリと解決を與へなさるところは、雄々しきもの。先生にも愛さるゝけれど、得意がらぬ。

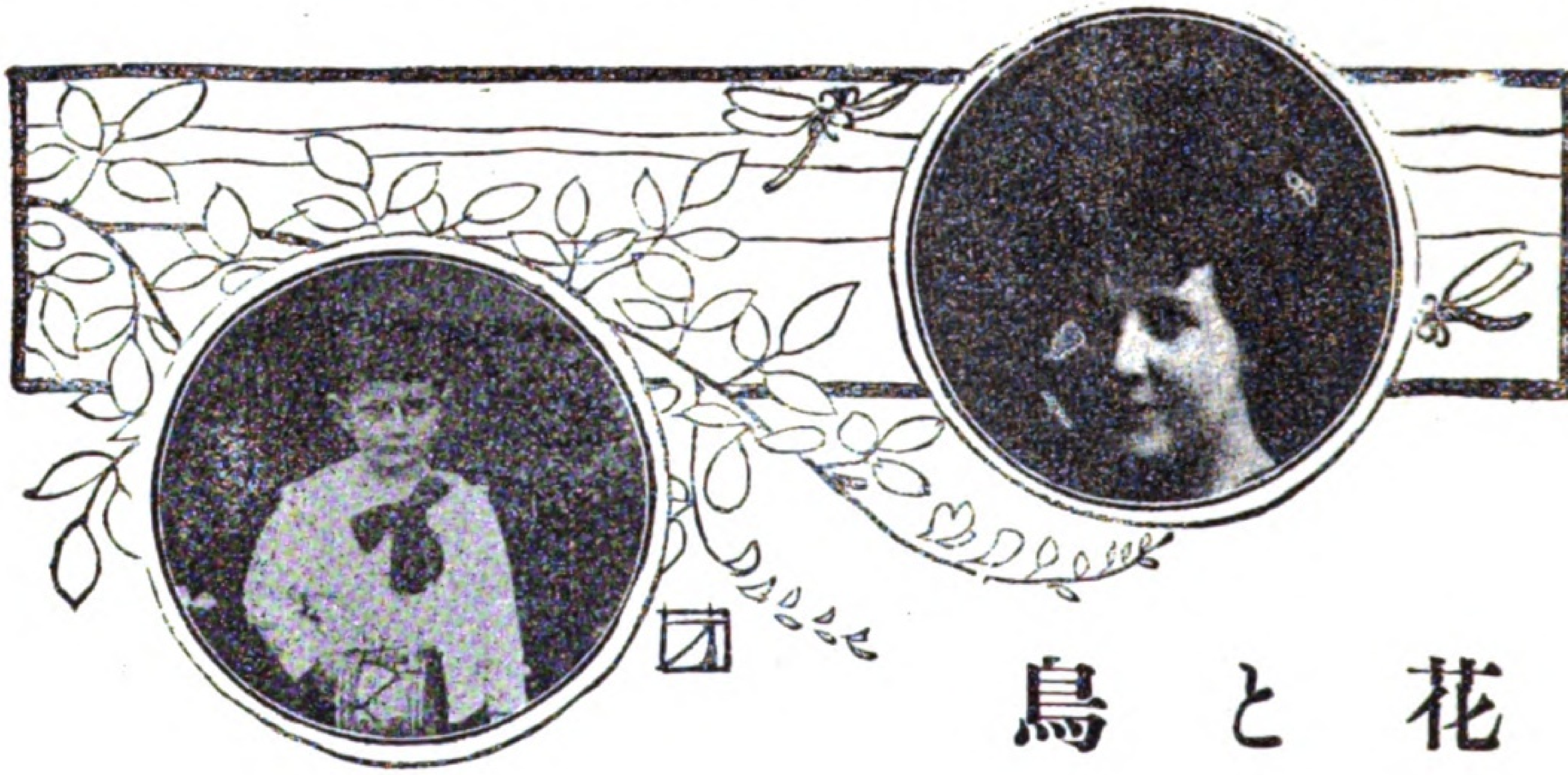
お靜かな性かと思へば、テニスもなさる。

沈んでいらつしやるけれど、誰にもやさしい笑を洩らされる。全く恨もうにも、恨みどころがなく、嫌はうにも、おかあいさうで、嫌はれないと云つたやうな方。さうかと取り立てゝ派手に目立つところも見えないのに、奥ゆかしいお心お身、幸おほく生れ給ひしものと、私はつく〴〵思ひますのよ。

無邪氣で、滑稽で、惡氣なしで、好かれる横山樣もほんとに仕合せですこと。

エ私ですと、先にも隅に少さくなつて居つたて申しましたでせう。常には大きくなつて、我まゝで、遠慮なしで、お世辭、下手で、そのくせむだ口利きで、出すぎもので、皆樣と調子を合せ得ない私ですもの。好かれる筈がありませんわ。

もつともねたまれる丈の美しい姿や、切れるやうに鋭い頭はもちませんから、まだ嫌はれ方が少いとしておいていたゞきませう。



花と鳥

小菊

多くの友達や知人の中にも、何處にか人に秀でた所の有る人は忘れられ無いもので御座います。既に世に知られた方、新聞や雑誌上で皆様の羨望の的となり噂の種になる方々で、私の頭に深い印象を殘して消え無い人が三人御座います。故博言博士の忘れ形見マリーイーストレーキ嬢と日向きん子夫人と柴田環女史で御座います。初と終の方は御交際願つた方、中の方は三四度御目に懸つたばかり。

紅薔薇

マリー嬢は、花ならば眞紅に燃え立つ薔薇、一部の人は此君を赤薔薇と呼んで居るとか聞きましたが、最も適評と思ひます。大きな愛敬のある瞳、黒い長い睫毛と、斯う申しますと美しい人の誰でも持つて居さうな目、然れども何處か人と異つた所が御座います。或は大陸の血が混じて居る爲めでせうか、考へて見ても解する事が出來ませんでしたが、漸く近頃に成つて其目の生々としたエクスプレツションが人と異つて居ると言ふ事を發見致しました薄紅の頰、肌理細やかな皮膚、すらりとした姿、好んで着られる純白の洋裝、同性の目にさへ美しいと映じますもの、異性の方々の大騒ぎ遊ばすのは無理では御座いません。音樂會などでは何時も人の注目が此方

に集ります。此君のためには失戀の淵深く沈み給ひし青年も三人や四人では無いとか聞き、御氣の毒に思つて居ます。文學には造詣深く、ブラウニングや、ロングヘエローや、キツプリングの詩集は、何時も愛讀して御出です。品行の正しい方、讀物でもデカタンのは目にも觸れるのも否と終言つて御出です。誰でも此君と御交際遊ばす方は、何時も晴々した表情で愉快さうに、御話しなさるのには魅せられてしまひます。夾竹桃の花夕ぐれにほの赤く浮き出し庭の青葉も風さやさやと渡り　蟬時雨はげしき夕べ、あの澄んだ聲で聖歌を歌つて御出になる姿が、不圖胸にうかぶ。

牡丹

日向夫人の美貌は世に定評あるのに、今更らしくかれこれ申すのは野暮の極、あの濃艶な姿は牡丹の花で御座いませう。綺麗な切の長い、眼癖の無い、スーとした鼻、意氣人柄な姿、何處に非のうち所の無い佳人御洋裝の時は御歳より五つ位若く御見えになります。

御美しい方はまたより以上に御美しく見える樣に苦心遊ばすとか。「美人に成つてもなか／＼安心の出來無いものですわね、結局世間並の方が氣樂よ。」と或る人は申ました。然しそれは負惜、生きたいと云ふ人間の本能の次ぎに望むのは美しく成りたいといふこと。持つて生れた以上は人力では及ばぬとは萬々承知して居ながら、少しも美しく成りたい見せたいと云ふのは、何時の世にも變らぬ女の情。其情から解脫するのは到底不可能でせう。また美しく見られ度く無くなつては、もう女の優しさも無くなりませう。殿方でさへポンピヤンクリームや何々チックなどゝ云ふ當世、經濟のゆるす限りは、牛乳風呂でも、美顏術でも、他人の文句は入りませんわ。盛に美の方面へ發展した方が宜しいでは御座いませんか。或る殿方は美人の拂底を嘆き、或人は又婦人の化粧品贅澤品の爲めに國債が積むと嘆きます。これがほんとの逆說。前者は乾度未婚の人、後者は失禮乍ら餘り御美しからぬ所謂裏小町の奥方を持たれる方、密かに美人に垂涎しながらも前世の因果

で美しい好配を得ず自暴半分な卑怯連。美を好むに何恥づる所がありませう。あの蝶々でさへ美しい花には幾度も接吻に來るでは御座いませんか美に憧がれ、美に酔ふのは、自然です。只々中毒しない様に注意が肝心。此夫人に付いては面白い事が御座います。或方の令息早や四十に垂として未だ獨身の生活をして御出です。或る時不圖麹町方面の電車内で稀に見る洋裝の美人に御會ひになりました。戀々の情堪へ難く、御苦勞様にも其美人の跡を汽車に迄乘つて、とうとう田端迄つけて入らつしやつたさうです。古風な芝居氣のある坊ちやん（四十の人に此名稱も變ですけれど）じや御座いませんか。其美人の入り給ひし門を不圖見れば、兼て噂に聞いた而も其坊ちやんの伯父様の家から程遠からぬ日向氏の邸。偖は噂に聞きし日向夫人にてありしよナアーと宜しく見え木の顏チヨンと幕。此方の顏が見たう御座いました。全く同性が見てさへ五人の御母様とは受取れませんもの殿方が令孃と間違へるのも無理とは思はれません。

カナリヤ



大風の紫苑見て居る垣根かな　乙二

リ、ーやこつちへ御出で。銀鈴を振る様な、友仙の蒲團に坐つて御出なさる環女史の膝の上へ可愛い鈴の背立てゝ走り上る白い猫。さも〳〵可愛い様に頭を撫で乍ら御話しなさる。一しきりは方々から迷兒や捨てられた可愛想な猫が六疋位も居ました。新聞紙上では色々な艶聞を幾度も書かれ、世間では皆女史の品性を疑つて居ます。然れども人の曲事は上げ度無い、たゞ其人の好い方面だけ見て満足して居たいと思つて居ましたが、此頃の様に又女史の品行に付いて姦しく三面の種になるのは、女史一人の上にばかりでなく、女流音樂界の爲めに口惜しいと思ひます。何と申しても、女史は聲學家としては當代一流です。鈴木のぶ子さんが色々女史が帝劇へ入る時に批難したと云ふ事は眞實だとか聞きましたが、鈴木さんは聲量に於ても、外見に於ても、到底女史の敵では御座いません。まるで比較が取れません。あの上野の原のぶ子さんも、第二の環女史を以て任じて居らつしやるさうですが、未だなか〳〵と申すだけ、女子は羨望の念の強いもの、あながら上野派の方々を如何かう申すわけでは御座いませんけれど、女史とザルコリー氏との噂なども新聞よりは二ヶ月も前に上野の人の口から聞きました。同性の贔屓と申されませうが、たとへ女史の品行は疑はしいとしても、何も一私人の秘密を發くにも當ら無いじや御座いませんか。勿論品性卑き人は到底尊敬は出來ませんが、考へても御覽遊ばせ、殿方にはより以上に貞操無い人が多いでは御座いませんか。道德教育の進んで來た當今では、貞操は女子の專有物では御座いますまい。女史を目すのに餘りに酷では無いでせうが。殿方は偏頗です。女史の無邪氣な態度、情にもろい性質、新聞紙上の噂と較べて信じられ無い位。然し是は未だ自分の目が若く、同性を信じて居る爲めでせう。有樂座で聞いた女史のセミラミスのアリ、何時迄も耳に殘つて居ます。今の儘に幽閉されて居ては、何時になつたら御得意のセレナードを開く事が出來ませう。女史の聲の爲めに惜みます。籠の中のカナリヤ！其籠を被ひしヴエールの取れし日、紺靑の空高く自由の羽に銀の鈴付けて唱へよ、舞へよ、カナリヤ！

醒めた女

清香花

△解決に苦しんだ問題

私は毎日此樣な心で居ります、何故自分は此樣に他人に嫌はれるのでせう、自分では出來るかぎり努めて居るつもりなのに、他人は皆自分を嫌つて遠ざけます私に親しく語つてくれる人は一人も有りません、大勢の方が面白く笑ひ興じて話しておいでの席へでも、私が一寸行けば直に話が改まつてしまひます。

私は小學校長の妻でやはり女教師で御座いますが、同僚の女教師など皆私を嫌つて居る樣です、何をするにも私には一言も相談もしなければ、話しても下さいません、いつも一人ぼつちで、身の儚なさに泣いて居ります、こんなですから家へ歸つてもやはりさうで近所の奥さん方など只ほんの世間なみの御交際の外は親しく御入來下さつて御話も下さらねば、又他所へ御一所に遊びに行た事も有りません。

あゝ何故でせう、やつぱり自分が馬鹿な爲でせうかけれ共私だとて學校は優等で卒業しましたから、馬鹿は馬鹿でもから馬鹿ではあるまいと信じて居りますが、それなら私が淺學な爲でせうか、けれ共文字一つ知らぬ田吾作の女房でも多くの人に好かれて居る人は澤山ある、では何故、自分が口數が少ないから他人が厭がるのでせうか、それにしては世間にむだ口一つきかぬ人でも充分尊敬され又慕はれて居る人は澤山あるのに、あゝ何故でせう、私はいつもいつも此問題の解決に苦しんで居ります。

△小さな聲で先生と呼ぶ

そして或る時は自分の顏が人の好かぬ型に出來て居

るのかとつく／＼鏡を見る時もあります、又或る時は自分の性質が人の好かぬ性質に生れついて居るのではないかとさへ思はれます。此樣に思ひつめると一層一思ひに死んだ方がよいと迄思ひます。あゝ此儘で行けば、私のこれからの運命は實に悲しいもので御座います、あゝけれど／＼私だとて小さい時分から此樣に他人に嫌はれたものではありませんでした、小學時代には親友も有つたし可愛がつてくれた人も兩親のみではありませんでした、あゝ少女時代が戀しいと常に思ひます。それが十八九歳頃からこうなつたのですもの、それには何か原因が無くてはならない事ですが、確に其原因は有りました。

私は花ならば咲き初めた十七歳の春四月から、最早小學校の教師となつて自分とは幾つも年のちがはぬ子供に敎へる身と成りました、あゝこれが私の今の悲しい運命を作る素でありました、私の奉職した小學校は町を一里ばかり離れた村で、町からは並木を二つこして毎日私は通ひました。此道は次の町へ通ずる縣道故、澤山な人や其他女學生なども、毎日此道を通つて町の女學校へ通ひました。そして是等の人達は皆私を見るのに、へんあんな子供があれでも教員かと云ふ顏をして、嘲りの目を持て見ます、私はこれがいやでいやでたまりませんでした。其うちの或女學生などは毎日逢ふ度に行き過ぎると、後から「先生」なんて小さい聲で云ふのでした、私はいやで／＼毎日道の端の方を小さくなつて通つて居りました。

△便所へ行つて泣く

此樣な厭な思ひをして毎日私の通ひました學校の校長樣と云ふ方は、二十年近くも此村に勤續して居る程の人で、村の信用は充分あつた人でした。其校長さんの奥樣と云ふ方が、其時分丁度三十七八位の方で、やはり同校へ勤めてお居でゞしたが、其奥樣がどういふ御心か私をいじめる事、また／＼私は世間の荒波にも逢つた事の無い子供故、其奥樣に對して御世辭など一度も云た事も無し、めつたに贈りものなど仕ませんで

した、其れかあらぬか年に於ては自分の子にも等しい私の有る事ない事、皆校長殿に告口をなさいます。其爲か校長殿が私にあたる事の恐しさ、然も校長が一學年の受持主任で、私がやはり一年の受持で有つた者ですから、毎日教授の事や訓練の事は云て下さるは有難いとしても、今から考へれば皆あら探し、私の着物の着方から、口のきゝ方まで、はては私の樣な役に立たぬ者が學校に居ると、此村の不經濟だとまで面と向つて云ひました。

あゝ私は自分の力では出來るだけやつて居るつもりですのに、もとより私は云ふ迄もなく經驗とてはなし足らぬ所は萬々あるのは自分でも充分承知して居ります、ですもの親切に御敎へ下さればどんなにか有難く思ひますのに、私一人の時には何も云て下さらず、生徒や同僚の大勢居る前では私に恥をかゝせるのですもの、私は辛く恐ろしく事務室では同僚の手前恥かしくて泣けず、敎室へ出ては生徒の無邪氣な顔を見ては泣く事などは、なほ出來ず、此時分の私は便所へ入つては泣きました。



便所で泣くのはお嫁樣ばかりと思つて居りましたのに、あゝ其れでも家に母親でも居りますれば、學校の

憂を家へ歸つて母に話して泣く事も出來ますが、母親のない私は只一人の父上に此樣な事云て御心配をかけ其上に私が至らぬ故と叱られるのは定つて居ります故私は一度も一言も學校の辛さをほのめかした事はありませんでした、只心一つで泣いてのみ居りました、あゝ今の私なら、と口惜しくてたまりません。

△胸にこたへるあさましさ

併し其儘辛さを忍んで居りましたならば、或は末にはさ程でもないやうになつたのかも知れませんが、心弱い私にはとても堪へきれずに、遂翌年の三月退職して仕舞ひましたが、僅一ヶ年の間の長かつた事、十年にも相當すると思ひました、あゝさうして退職後の私は、以前の樣な快活な乙女ではないやうになりました、ごく陰氣な、口をきくも物憂い、何事にも直に涙ぐむ、其れで居て他人を恨み他人を疑ふ心の却々に強い、所謂人の厭がる性質になつて仕舞ひました。

此樣なると人が二三人で話して居れば自分の惡口を云ふのではないかと思ひ、人が自分をふり返つて見れば自分を笑ふのかと邪推し、遂には世の人は皆自分の敵と思ふ樣になつては、人の泣くのを見れば心中嬉しく、人の笑ふのを見れば憎らしいと云ふ樣な淺間しい心となつて仕舞ひました。

こんな人間ですもの、今考へれば結婚などせぬ方がよかつたのですが、其時分の私は一にも二にも自分の味方、自分を愛してくれる人が欲しく、ましてや十八九歳の花盛りでしたもの、他人から世話されるまゝに嫁いだのが今の夫でした、其當座こそ只夢の樣に此世は二人の世界かとばかり、世間の人がどうあらうと、外に味方が一人もなからうと、自分には夫といふ百萬の味方があると、今考へれば淺墓な考でしたが、全く其時分は其んな考で居りました。

こんな有樣で夢の樣に一年經ち二年經ち、子供まで出來て甘い夢から醒めて見ると、此廣世界に夫一人位の味方では誠に悲しう御座います、外の皆樣のやうに親しい友達や、夫に話せぬやうな話でも語り逢ふ人が

欲しくて仕方がありません、自分には其れがない、其れは何故かとよく〳〵考へて見ると、あゝ今更ながら自分の心の淺間しさがひし〳〵と胸にこたへます。

△表情なども眞似て見る

人に好かれぬのも自分に疑ひ深い心があるからだ、人に遠ざけられるのも皆自分の心が曲つて居るからだと思ふと、實に實に心の清かつた少女時代が戀しくて、あゝ今一度あの樣なさつぱりした心になりたいと思ひました、それからは決して他人の言葉を氣に掛けたり他人の動作を疑つたりする心を打消して、つとめて平氣に凡ての事を皆善意に解する樣に努めましたが、やはり他人は私を愛してくれません、私は思ひました是はきつと私が他人の樣に元氣の無い故と、其れからは出來る限り元氣よくする樣に努めましたが、やはり何の效もありません、それでは私の口のきゝ方が惡いのかと、生來談話下手の私は隨分苦心して、話方に心を用ひましたが、急ごしらへは如何しても、云てよい事を云はなかつたり云はずともの事を物々しく話したり、あと



になつて、みるとあゝかう云へば好かつたのにと思ひますが、其時はどうも思ふやうに談話が出來ません。

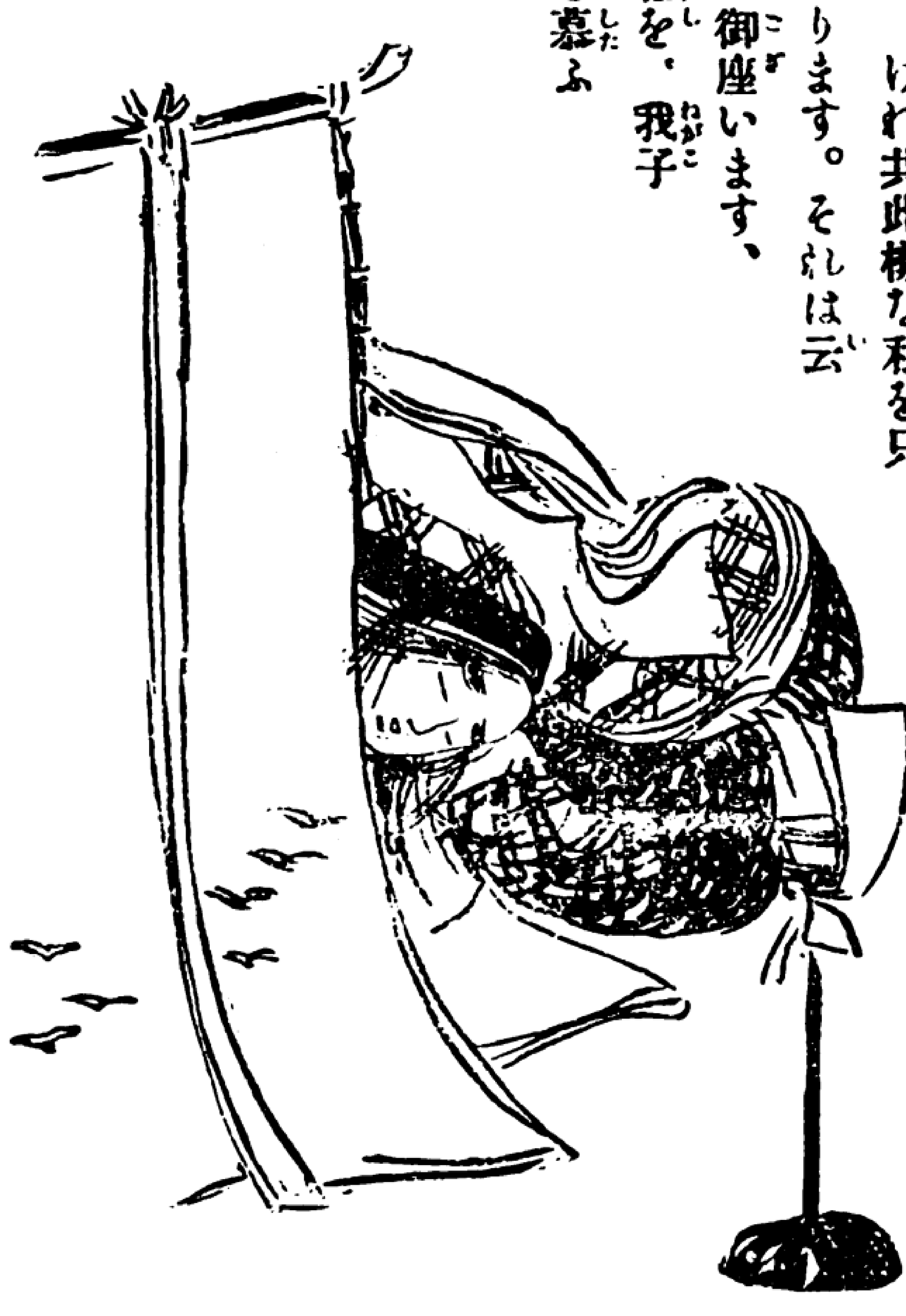
こんな風ですから、他人はやはり面白くないと見えて、話に花が咲きません、私は色々考へた末、今度は自分が他人に對して笑顔のむけ方が足りないからではないかと、其れからは何事にも先第一に笑顔を向ける樣に仕ました、あゝ然し私には此れが一番辛いのでした、小さい時から私は笑ふのを好まない質で、どんなに可笑しくも腹では笑ふても顔へ出ない質でしたから今になつて努めて笑顔を仕やうとすれば、丁度他人を嘲ける樣な顔になるのです、自分でさへさう思ふ位でましてや他人はどう思ふのか、私が笑顔で話しても向ふではさつぱり笑つてくれません、やつぱりだめなのです、あゝこれも皆自分の修養が足りないからと思ひ暇さへあれば交際術や談話術の本など見たり、又他人が談話をする所や、其表情など見ては眞似て居りますが、何故か遠ざけられてばかり居ります、夫の御友達などたまに御遊びに等見えると、私は嬉しくて此時こそと必死になつて饗應つもりですが、其方が御歸りになると、其後は度々は御見えになりません、私は悲しく如何したらよいのやら、實に〳〵迷つて居ります。

△今迄は眞心が無かつた

此儘ではとても堪へされぬ許りでは無く、世渡りを仕て行く事は出來ません。私如き妻を持た夫は、何よりも不幸であらうと、毎日思つて居ります、小學校教員であるからよい樣なものゝ、是がもし、軍人か官吏でゞもあれば、家内がこんなに交際下手では出世するのも遲い事と思へば、今更小學校教員が私には一番よいと思はれます。然しいくら教員だからと申て、交際下手でよいわけはありません。私の敎へて居る生徒等も、それは好く私の敎へる事も覺えてくれますし、私の命令もよく守りますが、未だ一度として私に親しい風に睦じく語る事などはありません、私が時々此方から笑談など云て見ても、友達同志で顔見合せて笑ふきりで、向ふへ行てしまひます、他の先生とは手を連り

背を打ち等して笑ひ興じて遊ぶ兒でも、私の傍へは寄りません、あゝ私は凡ての人に嫌はれて居るのです。無邪氣な兒童にさへ遠ざけられて居ります。世に是より辛い事が有りませうか、けれ共此樣な私を只一人好いてくれる者があります。それは云ふ迄もない我生める子で御座います、かくも世に捨てられた私を、我子許りは又なきものと私を慕ふのは何故でせう、眞心!!あゝ是こそ、私は此所に於て初めて長年の難問を解き得ました、世に我子に對する親の心程眞實なものはありません。

　母子の情は昔から歌なども、澤山歌はれて居る通り實に美しい物にちがひありません、ですもの世間の人の誰をでも皆我子に對する如き眞心で交際したなら私のやうに人好きのしない人間でも、いつかは〳〵必ず此心を汲んで下さる方もありませう、あゝ今迄は眞心がなかつたからと今更ながら恥しく思はれます。そして死んで方がよいとまで思つた以前が、實に恥かしう御座います、もう、私は、あれこれと迷はずに眞心の外は何も思はず世に處するつもりで御座います。



雜記帖

諦三世

×

花の巴里に月やながめ給ふ、シャンデルデーに紫濃染の袖やふらせ給ふらん、天才女詩人の君。伊勢參宮の途次、當驛のある旅館に泊らせ給へる事あり、御敎へ受くるもさらぬも競ひ立ちて尋ねまゐらせ、御揮毫乞ひまつる中に、まかり出でたるは旅館の主人也、丸々とふとりたる手を膝の邊にすりつゝ、へい〳〵伺ひますれば高名の歌人であらせられまするさうな、どうもむさい處に、へい有難う存じ上げまする、へい私も鯛の中の雜魚交一つお願致し度う御座ります、實は私と家内とは今年の暮で銀婚式になりまするんで、へいその祝の席に掛るつていふ樣な目出度いのを、どうぞ勝手申し上げますが、との注文也、山寄祝、寄水祝等舊派にて物すると等し並に心得顏なり、御出立の時間は迫れり人は立て込めたり、新しき御詩想も浮ばざりけらし、「古のこと云ひつゞけいつまでもかはらぬ樣の睦ごともしぬ」と書て與へ給ひけり、やがて出立遊ばすをお見送りして後の始末にもと再び旅館にひきとり來れば、主人は猶も例の半截眺め入りたり、好いぢやないか、君のはと一人の若き君聲かけ給へば、へい一向わけがわかりませんといふ「はゝゝ君これはお安くないんですぜ、君達二人が若い時苦勞して來た事を話合つ

ては何時迄も仲よくするといふのだよ、はゝゝ」「へえさうでがすかい成程えらい歌人だけ察しが好うがす。全くこんなけちな家でがすけどこゝまで漕ぎつけるまでは二人で散々苦勞しましたからなあ」、「そんならその歌は氣に入つたらう」「へえさう伺へばもう申分ありません、大入りでがす、早速いゝ表裝をはずみまさあと何處までも面白き主人なりけり、このお歌はたしか春泥集中に見たりと思ふ。

×

御母の病、日數經れどもはかばかしうも怠らず、家の內、よろづ悲しくも濕り勝なる頃、誰よりも一層心淋しう感ずるは二なき懷子の花子なりけりお姉ちやま母樣はいつよくなるのとお粥運ぶ袖にまつはり來るを、えゝ花ちやんはいゝ兒さんね、大人しくつて、直にお平癒りになりますからねと云ふぞ、いやあよ、私、昨日も今日も大人しくして居たの、結髮だつて着衣だつて媼やにしてもらつてるのに、私、自烈たいわ、母ちやま一寸もよくならないんだもの、私もう大人しくしないの、大人しくしたつて駄目だからと手放しに泣き出したるは哀にも困じ果てけり。

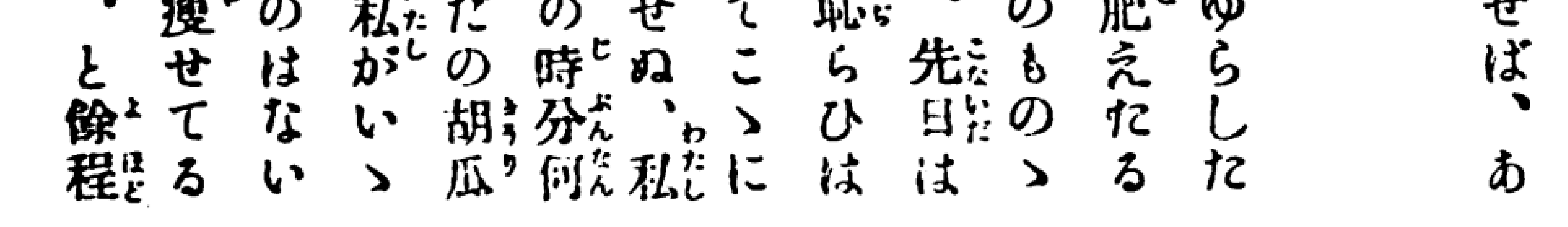
總じて女は弱き者、世を憚り人に思をかねて萬づ堪へしのび何事も胸一つに納むるもそれよ未來といふにかけたる願のふかければこそ也、さるからに待てど暮らせど思ひし樣のよき芽も出でず口惜しき事の重るまゝに、えゝ自烈たいもう私かまはない、世間がどう云はふが人が何と嘲らふが構ひはせぬ、私は私として私の道を行きまするど案外思ひきりたる離れ業も爲出しつ可し、近頃醒めたる女新しき女なんど、女の數の殖え行



けど女は何處までも女なり、雨や霰ももとは谷川の一つ流れ境遇と云ひ運命といふに支配されて成り出づるが多からん、自覺とやら四角とやら事むづかしきもとを正せば、あは私自烈たいと云ふヒステリックな一言に萠せるもありなんかし。

×

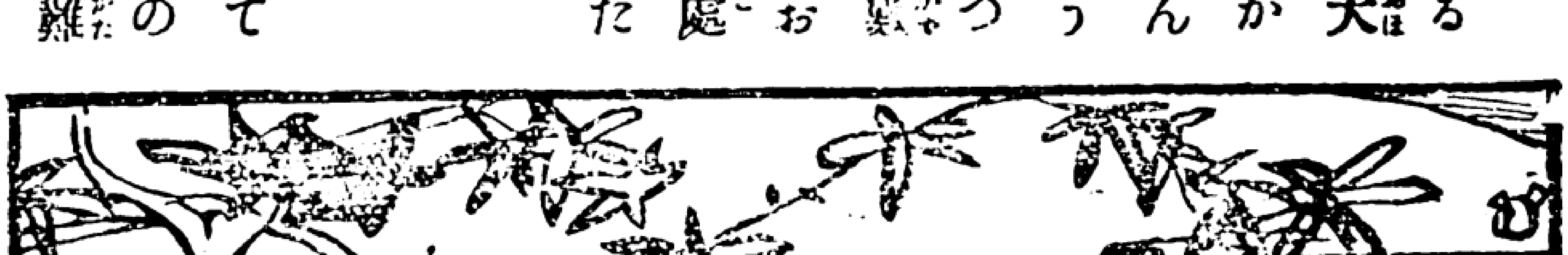
伊豫簾を通ふ夕風涼しく岐阜提灯に灯を入れて蚊遣りにくからぬほどに、くゆらしたる端近に晩酌快げなる主人、傍に侍りて風をやる娘のわかわかしくつぶらに肥えたる手付ながめつゝ「いゝなあよく肥えて、お前を見ると氣持がよくなるよ、妙齢のものゝ痩せてるのは、如何にも貧弱で厭だからなあ」といふ、娘はあら阿爺樣つてば、先日はお前を見ると餘計あつくなるなんて被仰たくせにと笑ひながらもさすが嬉しき恥らひは團扇のつまにもこぼるゝげなり、時しも行水や終えし、涼しげにとりつくろひてこゝに來しは四十路許り小柄なる痩形の夫人也、まあ貴郎の樣なお勝手な方はありませぬ、私の若い時分、さうさう丁度この娘位の時、私も隨分ふとつてましたでせう、その時分何と被仰いました。俺は何が嫌と云つても肥えた女ほど好かないものはない、豚だの胡瓜だのすゝけたお福面だのつて、さんざんおいじめなされましたのは何誰です。私がいゝ加減にやせてしまへば、ふとつてるがいゝなんて、殿方ほどあてにならないものはないと柳眉さか立て、御氣色すさまじきに、いゝやさうぢやないよ、年長つた女は痩せてるがいゝよ、若い女は肥えてるがいゝ、いゝや肥えてゝも痩せてゝもいゝんだよ。と餘程苦しげに見えたまひしこそ、狂言の性惡男は適り役にてなん在すめり。

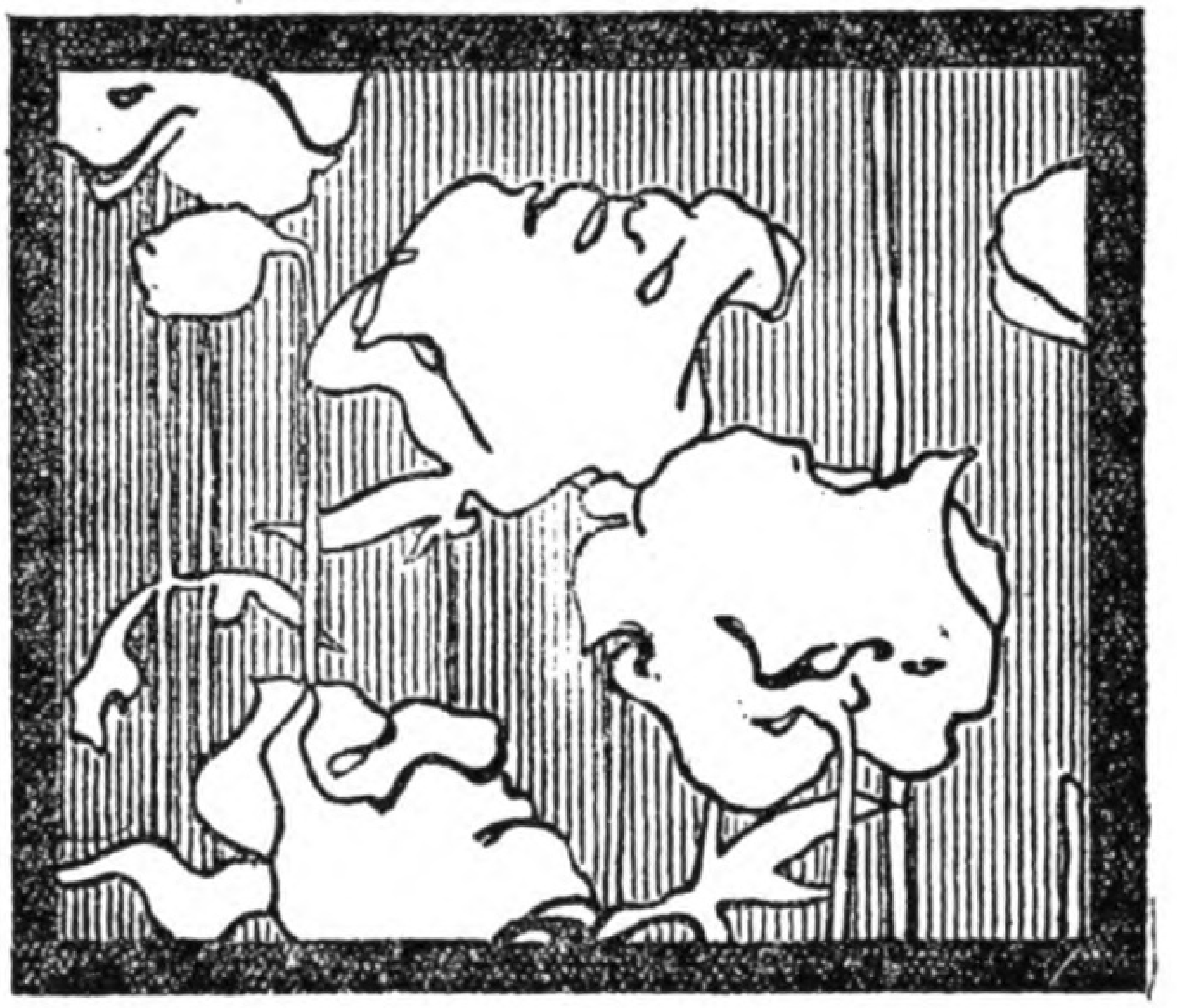




お姉ちやま當つたのよ嬉しいわと、靜ちやんは當月發行の少女世界片手に飛んで來るお靜ちやんどうしたの、何が當つて作文？「否え考へ物なのほら十題出てたでせう。大きい兄樣に五つ、小兄樣に三つ、姉ちやまに二つ解いて頂いたあれなのよ」おやさう宜かつたわねえ「えゝ今に御褒美の本が來るわ」「さう、でもお靜ちやん皆に考へて貰つたんだから御褒美だつても皆に分配けなくつてはいけないぢやないの」「あらほんとね、どうしませう、御本だからこわして上げることは出來ないし…………わかつてよわかつてよ、私いゝ事思ひついたの、御本の紙數を十に割つてね、その答を五倍した丈けの紙數を大兄樣に借してよんで頂くの、小兄樣は三倍だけよ、姉ちやんは二倍」「ほゝゝゝお靜ちやんは算術が甘いだけ、いゝ事考へついたわね、でもお靜ちやんはどうするの何處もよむ處がないぢやありませんか」「あら、私は皆讀むんですわ、皆さんに借して上げた後から。」

凡そ人の心に願ひ望むことも耽り樂むことも限なきものなれば、米穀貨財を出して費し用ることは何ほど使ひても是にて滿足しつと思ふことはなき者なり。然れば身の分限に應じて好ほどを量るべきこと勿論なり、されどもよきほどといふも其位を得難し、只入るを量りて出だす事をなすといふ、是第一の用心なり。





暗礁を避て通る女

こほろぎ

△不如歸の駒子様（男爵令嗣夫人）

落椿の、はかなく脆く、美しくて逝かれた浪子様に引かへて、今男爵令嗣夫人として、學德一世に高いお舅様と、それに年久しうまめやかに仕へられる、賢婦人のお姑様とのお口の端に、「嫁が」と云ふ詞を斷ち給はぬと聞く妹君の駒子様は、世にも幸福な月日のもとに、多くの人の敬愛を受けて居られます。駒子様とは小說の上の假の名。細川芙蓉子様が其お方でいらつしやいます。

姉上と共に、幼いから二度めの母君のお手に人と成られたが、其お育て柄も床しいばかり、圓麗珠の如き御性格を持つて居られます。其お心の珠玉こそは、如何なる寶石よりも、美しい光を放つて、人と自己とを輝かすもので御座いませう。御覽なさいまし、細川家のお玄關を一歩踏入れば、實に暖かい風が吹滿ちて、えも云はれぬ麗らかさに、萬事を忘れて陶然とするではいませんか。もとよりかうした家風を築き上げられたのは、御老體お二方のお力とは云へ、芙蓉子様の美しいお德と手腕を待つて、更に光輝を增された譯では御座いますまいか。

下様の者でさへ、非分の虛榮心に煽られて、美衣に包んだ胸の奥密かに、穢ない〳〵畫策も廻らす世の中に、靜と家庭の人として、輕佻な所謂貴婦人社會と斷

つて、一意家を治めるに餘念無い夫人は、まめやかな主婦として、やさしい嫁として、お姑樣のお差圖に從つて、御自身お臺處へもお出に成ります。召物のお仕立でも、女中に先立つてなさいます。大山元帥の令孃男爵家の若奥樣たる御身が、雪白の羽二重の樣な、しなやかなお手を進んで水にも湯にも浸け給ふのですもの、女中たちも身を粉に碎いても、盡さすには居られますまい。

小姑を鬼千疋と云ふなら、芙蓉子樣は萬に餘る程、お持ちに成るで御座いませう。しかしそれが決して決して角こそ見えね、密かに胸に針磨ぐ鬼では無くて悉くがお嫂樣の謳歌者でいらつしやいます。それぞれお嫁きになつた令孃がたも、お實家をお訪ねになるのを樂しみに、お出でになると云ふ事です。それ許ではありません、其方々のお子樣たちまでも、おやさしい叔母樣を慕つて、土曜日曜は大抵此處へお集りになります。其賑かさ。お祖父樣も祖母樣も除けて暴れさしてお置きに成りますから、お緣には縱橫に小さな足跡が蹦られ、お障子はお相撲に押倒され、床の置物は引くり返る騷ぎ。轉んだの泣いたの、稀にはいさかひの裁判から仲裁から、さも樂しさうにお相手なさり乍ら、御馳走の準備を手ばしこく調へて、食堂をお開きに成ります。お腹の減つた勇士たちは嬉び勇んでテーブルに就きます。上流の子供程、食物を毛嫌ひするものは御座いません。肉類が大好な人が有れば、お魚は匂も嫌やと云ふ者もある、鰻でなけりや、御飯の食べられ無い人や、三度三度お薩が付かなけりや、御馳走と思はない樣な、病的のもよくあります。夫人は能くそれを御存じで、好なお子に好な物をお上げに成り、悦んで召上るのを御覽になるのが、一つの大きなお樂しみだと仰有います。それにしても、多人數の嗜好をよく覺えられたものと、お姑樣がお尋ねになつた時、にこやかに袂からお出しな成つたノートに、悉く一人一人の好嫌が、記されて有つたと申ます。溫かいお心は此一事にも知られます。ですから稀のお出歩きにも「嫁が〳〵」と待迎へられる其人を思はれては、お姑

様のお腰は何處にも落付か無いと聞きました。細川家は實に樂園の幸福をお持ちになると、申してよろしいと存じます。

△上手の手から洩れる水

（中學教諭のマダム）

「お氣にお懸けなさいますなよ。どうせあの方の事ですもの。」

と一口に、女の針の様な神經に觸れた、厭な感じも、蔭ではお互の柔かい胸に、慰め合つても、表にはさりげなく敬遠主義を採られる、押田の奥様はなか〳〵のやり手です。

いくら地方でも、今はもう餘り巾のきか無い、中學教諭のマダムとして、三四人のお母さんで有つて見れば、世帶の齷齪に、息吐く暇も無いかと思へば、良人や學校へ通ふ子供等を、送り出すと間も無く、小ざつぱりした柔か物の、流行には遠い代物ながら、兎に角餘り見苦しく無い姿態を作つて、得意な交際術を振り廻す爲に外出するのです。若し此人を外交官夫人として、晴の舞臺に立たせたなら、必ずや適材を適處へ置いたものと云はれませう。巧みな長廣舌は轉々淀み無く、機に望み變に處して、少しも澁滯する事はありません。押田の奥様は確かにやり手です。唯惜しいのは此人に誠實の二字を缺く事です。

女子の目には、才子に對して其短處のみを見、癡男子に對して其長處のみを見るもの、駿馬癡漢を乘せて走るも、餘りひどう御座いますが、得てかうした働き者には、齒痒い様な良人が連添ふもの、押田教諭も御多分に洩れず、五十路に近い頭の冬枯は、年よりも寒げに、テッペンハーゲンと外國人見た様な名に呼ばれ新陳代謝の劇しい世の中にも、教育家と云ふ特殊な世界では、あだじけ無い地震もゆらず、老朽の、手腕が零のと、云はれ乍らも無事にお茶を濁して居られますですから、

「あれは奥様の外交が預かつて力ありだよ。」

なんで同僚たちは云はれるさうです、まさかとは申

しますが、それは何とも受合はれません。なせつて校長様敎頭様のお宅は、あの方の足の屢ゝ趣く處なんですもの。良人の爲に働くのも運動するのも、賢い女の心懸でせうが、押田夫人も矢張り弱點多い女です、此人の尤も好まないのは人と人との親善な交際です、何とか横槍が入れて見度い

或同僚の奥様との對話をお聞き遊ばせ。

「おなた校長様のお宅へいらつしやいましたか。」

之は押田の奥様の詞です。



「い〻へ。一度は伺はなけりやなら無いと存じますけれど、遂ひ未だ……」

「あゝさうで御座いますか。私は不思議な譯で、あの奥様を餘程以前から、お知り申て居りましたの、乾度あの方に違ひ無い〳〵と思つてお話して見ましたら、矢張りさうでした。え〻私が娘時代に加賀様へ御奉公……ほんの行儀見習に一年程上つて居りましたけれど……其時お世話に成つた或る老女の局に、あの方のお島田のお寫眞が懸けてありま

して自分の姪だつてよくお話が御座いました。一昔も前のお寫眞で、今は四人のお子持に成つて、偶然此處へいらしたんですけれど、何所と無く俤が殘つていらつしやるから、妙ですのねえ。ほんとうに氣の置け無い方ですの、お話が持てゝ〳〵一寸お玄關で歸らうと思つても、まあ〳〵上れ久々で叔母の話もせうからつて、遂ひ又引張り上られてしまひますのよ。」

「さうで御座いますか、良人からも上れつて云はれて居ますから、やう〳〵洗濯物もすみますし、之からそろ〳〵伺ひませう。」

「まあお手廻しですこと、私なんか未だ〳〵それ處ぢや有りませんの。ほんとに一度はいらして御覧なさいましよ、奥樣も方々樣へ上り度いが、何分にも御病身で……それにお弱いお子さんはお有りに成りますし、女中は一人不足して居りますから……一寸お拔けになる事も出來無いつて云つていらつしやいます。尤も宅へ丈は無據い用事で、何處樣へも御内々で、二三度お見えに成りましたけれど……根が餘り交際のお好で無い方ですから……。」

　相手の顏色が少し混亂して來るのを、仕すましたりと、舌鋒を磨ぐ事愈々急に、肉迫して來るのです。息も次がずに。

「前任地では婦人會なんかへ、盛んにお出になつたさうですが、其爲にお家の方が全然滅茶〳〵に成つたので、女はどうしても家庭本位でなけりやなら無いつて此地へいらしてからは、引込主義を取つていらつしやいます。餘りお客樣もお見えに成りませんし、結局其方が氣樂でいゝつて仰有つてゞす。一寸變つていらつしやいますよ。」

「あらまあ、それでは上つて反つて御迷惑でせうねえ。」

「そうですのねえ。此處からは隨分路もありますし……いつそ御年始にでもお顏をお出しなさいましな。何なら私からよく申上て置きますから……あなただつてお子持ではなか〳〵ねえ……。」

行つていゝのだか惡いのだか分ら無く成つて終ひま

した。心密かに凱歌を奏して居る事でせうが、併しそれは眞の勝利では無く、ふとした事から、殘らず校長の奥様の耳に入りました、以來嚴重な警戒線が張られて、それより内へは立入らせませんでしたが、鋭い感覺は何かしら探り出さう／＼とあせります。親類以上の懇ろな交際を人に吹聽するには、色々な内情めいた細かい事柄を知らなければなりませんもの……。

又一面はなか／＼の親切者です。女中の周旋職業の口入れなんぞにも、力を入れますが終まで仕遂げられ無いから、さまで恩に着る人もありません。病人とか留守宅は必ず見舞の品を携へて訪問します。老境に近付く良人の額の汗は、かうした交際費に惜しげ無く費やされるのです。風邪を引いても、鷄卵やお菓子の折が來るので、返禮の方法に困ると云ふ滑稽も、持上るといふ譯。そして博識な奥様は。

「私も醫者の家へ生れて、少しは看護法も心得て居りますから、お苦しい處を撫でゝお上申ませう。御遠慮等はなさら無い方がよう御座いますよ。誰だつて病氣には勝てませんからねえ……此所がお痛いのでしよう。腫れて居ますもの。耳下線ですね。」

「あゝ淋巴線……。」

と出さうに成つたのを、やつと呑込んだと云ふ、お話も傳はつて居ます。それから、

「宅では昨から皆が代る／＼病んでしまつて、ほんとに不得要領でした。」

と妙な處で要領を振廻はしたとも聞きました。之等は罪の無い笑話です。

賢明な押田夫人が、多辯や物識り振りを交際術の祕訣と信じ込み、自己の都合上、色々な術策を弄するのは、千慮の一失とも云はなければなりません。若し此人に誠實の美が備はつて居たなら、天分の才氣を充分に發揮して、人の敬愛を受るでせうに、惜しい哉、こんな性格が世間に知れ渡つてから、初めは親切な屆いた人と悦んだ者も、漸く其詞の眞僞を疑念する樣になり、眉に唾して其人に對する樣になりました。「どうせあの人」の尊稱は、多くの懲た人から、遂に捧呈さ

れました。

△一人の愛の乏しき故（級友畏敬の的）

何故か生みのお母樣の愛が薄かつた、お夏さんは、口數の少ない內氣な娘に、育上られました。居憎い樣な、落付か無い家庭に、靜として居るのは苦痛でした。家を離れて日每通ふ學校は、慰安の場處の只一つでしたが、併し物を學ぶと云ふ事が、自分にとつて、どれ丈良いのだか分りませんでした。時には一向につまら無い樣にも思はれました。兎に角家に居るよりはいゝ位にしか、考へ無かつた樣です。若し自分の思ふ儘に成るなら、松風音づれる緣の柱に身を寄せて、徐ろに去來する雲の姿でも、眺めて居たいのでせう。けれどもそれは許される事でも無く、又思ひ返せば奮ひ立たずには居られませんでした。一つ違ひの妹のお冬さんの成績は、群を拔いて勝れて居ましたから……。

「迂かり仕て得ると追越されますよ。」

と母さんのお顏には、冷笑がたゝへられました。むらむらと起る反抗心も、唇に出さず、ぢつと頸垂れて、涙を飮み〳〵しました。お夏さんは一生懸命です。嫌ひな幾何代數の、味の無い敎課書にも更ける夜な〳〵目を曝しました。瘠形の、色艶の白い、見るから蒲柳の人でしたが、一念凝つては、意地にも疲勞の色を見せませんでした。學校では一級下のお冬さんと共に、双美と稱へられました。中でも得意の文章には、級の內……いへ〳〵全校擧げて及ぶ者は無かつたでせう大塚さんの名は級友の畏敬の的でした。女の常の嫉妬心も、此人には抑へて、萬事を讓りました。成績の勝れたばかりでは無く、人物も亦級中の女王でした。淑やかに落付が有つて、露輕騷な振舞無く、些し陰鬱では有つたが、わるびれた氣色はありません。其上他人の爲に厚い同情を、惜しま無い一事は、美しい人格の表現であると師も蔭ながら、稱讃されました。友に對しては實にお夏さんは心やさしい姉であつたのです。

學窓に四度春が還つて、校庭に梅の葩が散敷く頃でした。試驗準備に周章て出す、學年の節季に入つて、

お夏さんの姿を見舞い様に成りました。お冬さんに聞けば肋膜を病んでと云ひましたが、から云ふ折から、病床を音づれる友も無い内に、湘南のさる病院へ、轉地療養の身となりました。病み痩れて力無き右左から、抱車夫と小間使に扶けられて、プラットホームを危く汽車に乘込みました。佗しい病室は想はれるではありませんか。淋しさに馴たとは云へ、世間知らずのお孃様です。兼て診察を乞ふて居た某博士が、一週二回出張されるのが心頼みであるばかり。濤の音松の嵐は、文字の上よりも哀切な響を、病める胸に投げ與へました。ましてうら若い處女の身です。其胸に餘つて訴ふるに處無き



恨み煩えをやる道は只筆でした。一管の筆に綿々縷々の想を寄せて、長い〳〵手紙を書きました。親しい友からの見舞状には、此手紙が悲しい明暮を答へました。友の胸はおのゝきました。此儘に打捨て置いたなら、想に先づ身を壊られるであらうと、やるせ無く親しい人々が、密かに語り合ひは合つたが、都を離れた病床を慰めるさへ、儘ならぬ處女の身はかひ無いものです。流人の境遇にも等しいお夏さんが待つ者とては、只一人のお父様のみでした。某省の顯官として令名あるお父様は、憫れに堪へ無い子の爲に、公務の暇々には自から來り訪ふのでした。力無くベットに倒れた姿の痛々しさ。口數少な

い人の、折々洩らす太息は、胸中に往來する萬感で偶偶發散したに過ぎません。母さんの強い心も此有樣を見たら、既往の感情は捨るでせう。併し只の一度も病める我子を見樣とは仕ませんでした。お父樣が足を運ばれゝば猶更、さう云ふ心は起りませんでした。

「夏子ばかりがお氣に入つてる。あんなしんねり無口が・・。」

とヒステリックの眉を動かして、憚からず、お冬さんや女中の前でもつぶやきます。それを默つて聞いて居るお冬さんの心が知れません。人一倍脆弱な生れ懸りのお夏さんが、誕生が近寄るのに、未だよく足の立た無かつた頃、懐かしいお母樣の懐を奪つたのは、お冬さんでした。產室に籠つた母樣を慕つては、泣き叫ぶのを宥めわびた女中の手から、抱取つたお父樣は、幾夜滿足な眠を結れ無かつたでせう。やう〳〵溫い乳房を思ひ諦めたお夏さんは、それからお父樣の抱寢の床に、小さい夢を結びました。父親に似た女の子は、幸福だと云ふのに、お父樣に愛されたお夏さんは、生さぬ子の樣に母のいつくしみが薄かつたのです。萬人に敬愛される人も、只一人の母樣に想はれ無い爲に不幸でした。學友たちが一つ心に祈つたしるしが現れてか半年ばかりして、再び學窓に親しむ身となりました。師の厚い同情によつて、もと〳〵よい頭腦の人でしたから、間も無く學課の遲れを輓回して成績はいつも上位を占めて居ました。けれども寂しい人は、遂に華やいだ處女さびし思出も無く、卒業の日友情濃かつた人々と袂を分ちました。其後のお夏さんは、どんな路を步んで居られるでせう。昔の友は心々に、我が大塚さんの爲に幸福を願つて居る事でせう。





女師出身と高女出身

槿の花

一つ學校の同じ教員室に親しく語り合つて居乍らもやつぱり師範出身と女學校出身とは自然に別れ〳〵になつて了ひますのねえ。

お互に遠慮し合つてこそ居れ、氣不味い思ひをしたでなし、言つたでなし。それでも顔にこそ出さね、胸の裡では一方は、「女學校出身だもの——」役に立つものかと云つた樣な調子で一種冷笑の眼と眼を交はせば又一方は、「パンの爲に學んだ四歳、千秋の思ひで出て來たんだもの——」後は言はずして輕蔑の意明か。一昔も前と異つて現在はもう、師範生皆が皆さうぢやないのだけれども、他校と異つて人も我もまだ、そんなに思ひ及ぶのは如何いふ理由せでう？

私などは女學校出でどういふ運命の巡り合せか、思ひもよらなかつた小學舍へ再び、梅干ぢやないが年齡は更けても幼な心地で舞ひ戻つて、言はゞお仲間に入れて頂いてる癖に、師範の君達の惡口三昧　而し此所でいふのは止しませう、手前味噌で相手の無い論になつて仕舞ふからとて又味方を卑下して言ふのは私の氣性として忍びない。おだてた舂には乘りたくないから人をおだて上げるのも大嫌ひ。

だが、實際師範出の方は彼方此方に折々催される講習會などに會つてもスタイルですぐ分る。氣持よく肥えた重々しい態度！　幅がきく筈だ。每年三月定まつて卒業する五十名は准と代用のまだ跡は絕たない市中、郡部から引張り凧の有樣ですもの、卒業間近になると、自ら新進女流敎育家を以て任じ給ふ君達、頗るお得意！　選りに選つて、さて四星霜、活生會と隔て

た寄宿舎の窓に描いて居らした理想を、來て見れば案外、附屬小學校程設備の調はない學校で實現しやうとなさるから、何事も心のまゝならぬ事だらけ、側で見て居てお氣の毒の樣な、可笑しい樣な、ですから始めの一年間は同窓生打ち寄ると各自の學校の不平やら、同僚の棚下ろしやらに花が咲くといふ。

我が黨の上田樣は被仰つた、此樣な事を「同じ樣に勤めて居ても師範出身は幅をきかしてえらさうにしてゐるから小面憎いわ。とはいふものゝ女學校出は實際駄目ですからね、氣位ばかり高くて――」全く左樣だと思つて私は苦笑した。

現在、私の學校には女教員が四名ゐる、師範出身が二人と、女學校出身が二人と、丁度二人宛で至極治まりはよく付きさうなものだけれど、案外さうでない。話の合ふべき第一出身の杉田さんが私は嫌ひで嫌ひで堪らない。第一趣味が違ふから話はまるつきり合はない。而して例の氣位を高く持してゐらつしやるのは又なく癪に觸る。だから電光石火の勢でなくても、ウイームシャストの發電機の實驗位の火花は始終散つてゐる。一體杉田さんは怒りつぽい、すぐつん〳〵して面にも態度にも現はして、物も被仰らなければ、答へもなさらぬ石地藏の樣だ。先日もほんとに可笑しい事がありましたの。一週間も言はず語らずなんてオホオホ、、常の私にも似合はない破天荒をやつたでせう。其れが又其の二三日前、校長先生が、此校の職員は男子も女子も始終圓滿に一家族の樣にしてゐるのでそれ丈は他校に誇つても良い、と被仰つたのを、螢案のペンを走らせ乍ら聞いてゐて、間もなくし出かしたものだから一層面白い。校風破り? 隨分輕くない罪ですわねえ――。

なに! 其のもとですか? 七八歳の兒童がおやつの多少を爭ふより馬鹿〳〵しい。恥かしくて云ふ事も出來ませんわ。けど常識を以て公平に判斷すれば、私、杉田さんが間違つてゐらつしやりやしないかと思ひますの、彼方でも亦た樣思つてゐらつしやるだらうつて? あら! それでは常識が幾通りもある理ね。大

岡様でもお頼みしなくちやならない事になつたわ。物も言はない位睨み合つたら、幾ら同じ方へ歸宅るのだつて、一寸一緒に歸り難いわね、私なら默つてさつさと歸つちまふわ。それを杉田さんは先にも後にもお歸りにならない。無言で待ち合して無言の行で卅丁の單調な路をてくてく重い足を運ぶ術なさ、矢張同じ方へ共に歸る師範出身の河村さんとさへ親しい口がきけませんの。

河村さんと杉田さん？　やつぱし、犬と猿!!!　河村様は此の四月新任の方ですけれど私と一寸氣が合ひますのよ。



「此れでも一緒に歸りたいんでせうか、妙な方ね――え――」呟いて二人はよく笑つて、興奮に妙な氣性の人ですわ。此れがお口癖の貴族式？なのかも知れませんわ。オホヽヽ、七十人の卒業生中、二番とは！　どちらから數へてだと思し召す？　振つてるわ。

うねりうねり大波打つたお髪は大きな毛髱を前から後へぐるりと入れてゐらつしやるから、宛然築いた石垣の様な格好、三ッ組に編んで巻いた束髪は、ころんでも崩れない岩丈さ、年百年中同じ

格好に載つかつてゐる。お顔色は至つてお黒い方！まあひどいつて？ だつてそれより外にいふ言葉を私知りませんもの、私の言ひ方がひどいと思し召すならちよつとまあ、あつて御覧あそばせ、百聞は一見に如かず、オホヽヽそりや豫想外よ。こて〳〵と朝な朝なのお化粧は無理からぬお事とお察しはすれど、大抵定まつた樣にお遲刻が重なるのでまだよく、學校馴れのしない一年の受持兒童はもとより、校長、主席さん等にも受けがお宜しい方ぢやないです。

朝のほどは一寸綺麗についてる白粉がお晝頃は雪の斑消となり、歸宅る時分は大方剝げつちやつて、瞼の邊、際だつて薄雲が棚引く。

「杉田さん、右のお眼のふちに墨が付いてゐますよ」つて何時だつたか云つて上げましたの、勿論何も知らずに言つたのですわ。

「あらさう、有りがたう」時色のハンカチの端に唾をつけて一生懸命にお拭きになつたけれども、如何しても落ちない。痛い程こすつて、

「おちましたか、おちましたか」

「はあ、もう少し、もう少し、見れば左の方も薄黑いんですから、よい加減のところで「もう落ちましたわ」といつて、此れこそ、いらぬ御注意申し上げたと後で獨り笑ひましたの。

五尺二寸五分に、十五貫六百匁の體格で兩手を二尺も後前に振つて、三尺も一またにお歩きになるのは振つたスタイルでもありません。

「私、どうかして貴女の樣に瘠せたいわ、瘠せたいわ」つて殆ど每日のやうに耳の痛い程被仰る。私と河村さんは又三度三度のご飯が何處に入るのか知ら…と思ふ位な瘠せつぽち。

「河村さん、貴女の樣な細い方がよく師範へ入れましたのねえ」口の惡い連中許り、敏さんなどは自分の事は棚へ上げて

「吹けば飛ぶやうだ〳〵」といふ、小面憎らしい。

糸の樣な雨が音もなく降りかゝる夕暮、三つの蛇の目が一杯になりさうな小路を急いで歸る途中、愛國婦

人會の話が出て、「私も此度入會しましたの、母が默つて私の名を書いてしまつたんですもの」といふと、河村さんが「私も學校を卒業する時――」と云ひさした言葉を遮ぎつて「それより赤十字の方がいゝわ、父が赤十字の方へ入會つた方がいいつて言つてましたから――婦人會なんて味噌も糞も一所だわ、藝者なんかまで入會つて居るんでせう――」新入愛國婦人會員を二人も前にして、つけ／＼と言ひも言ひたり、味噌も糞!!!



赤十字社だとて、婦人會だとて愛國の志を致す點に於て何の區別があらう。職業に何の關係があらう。如何に口に税は要らぬとはいへあんまりな御挨拶に呆れてしまつて、急に默つて了つたら云ひ過ごしたと思はれてか「私なぞ愛國心がゼロですから」ですつて、見え透いたてれ隱し、この方士族のお家柄が甚いご自慢、封建時代ならいざ知らず、華族のお姫樣が平民に嫁ぎ、竹の園生のやむ事なき御方々さへご降嫁あ

そばすといふ開けた時勢に、さりとは天保時代を夢見てゐる老耄爺のやうな。

一體、此の方は杉田家に幼い時養女にいらしたのださうです。お養父様は郵便局かなんかに永らくお勤めなすつたで様子で、一昨年の暮頃でしたか、お亡くなりになる前は〇〇會社の門衛を勤めていらしたとか承りました。

父が、父がと一にも二にも父がをお振り廻しになるのはこの養ひのお父様のこと。

金側の時計でも、寶石入りの指輪でも、ブローチでも、絲錦の丸帶でも、七八十圓もする練習用のオルガンでも、養父様が居らつしやれば買つて頂けたんですつて――

私が或るお正午、時計を午砲に合して、螺旋が强いのに止まつてるで、强く振つてゐると、其所へ出ていらして、

「損じましたの？」

「えゝ、あまり上等なものですから、云ふ事きかないのよ」つたら

「わたしも父が居た時分、可愛いゝ女持を買つてやらうつて、わざ／＼時計屋に持たして來さしたけれど、銀側位持つのなら持たない方がましだといつてよして了つたの、今思ふと口惜しいわ」

凡てかういふ風で一々受太刀してゐた日やに堪らない、又お株がと嘯いて聞き流しておく。

お養母様も宮仕へか何かなすつた事がおあんなさるのでせり。宮様方のお話でも出やうものなら忙がしいペンをおいても、伏見様が、山階様がなどゝお友達か、親類のやうな呼びぶりで、母が居た時分などが五月蠅ほど出て來る。上つ方のお事と京大の事は外に知る者は無い様な云ひ振りで――何の、彼の方の御親戚の方とかゞお一人、醫科大學の方に在らつしやるのでそれが天狗の鼻のもとなのですわ。家の者がとよく被仰る、その家のものも實はお養母様の事ではなくて醫科の方の事なのよ。はじめ私達はきつとその方は御養子にでも定まつてお在でになる方だらうと想像してゐ

ましたら、左樣でも無いのです。

一寸知つてる人でも十年の知己の樣に吹聽なさるのが此方の癖です。

虛榮心の強い事つたらそりやもう、小間物店の前、洋傘店の前、吳服店の前はどんな事があつても、洋傘たゝんでお立ちになる。手間暇に構はぬ品定めをした上句は何の彼のと難を付けてお買ひになつた試しなし何せ流行とハイカツたのとが大々のお好きなのだ。

お召物でもおみ帶でも何でも求めやうと思ふ物は必ず流行などには全然沒交涉な私らにわざとお尋ねになる。お仕立になる時だつて、袖丈幾らになさるの？上布につける襟裏は何がよいでせうの、大島御召のお羽織の肩裏はどんなのがよいでせうの――とほんとうに聞く氣ぢやない。一寸言つて見たいんですねえ。

「今年のコートはどんなのが流行りますの？」これは昨日兒童召集日の歸り、洋服店の前でコートの仕立を見ての御質問、

洋服屋の番頭におきゝなさい、私などがどうして知りませう――と云つてやりたかつた。

「貴女、お求めになるのでしたら、如何な色になさいます？」洋傘店山本屋の店先に立つてのご質問。

「此所に出てるのは何れも皆いゝ色許りですわ」見惚れてゐる私は此れと選る眼がない。

「二圓五十錢！安いのねえ、けどこんなのは直ぐ剝げて了ふでせうね、やつぱり五圓近く出さなくちや、常のにはさせないわ」問はず語りご苦勞さま、杉田さんの洋傘問題も隨分久しいもの、たしか四月頃からでせう？

「どんな櫛が一番よいのでせう」又はじまつた、はじまつた。幾ら始まつても構はないけど、三丁もない此の目拔きの通りが、三十分や四十分で通り越せないのですもの。

「この半襟ちよいと、色がハイカツてるわ。」「まあこの下駄の安い！疊表付きで十八錢！」「リボンや花簪かつても挿されないから、つまらないわ」饒舌つたり見たり、見たり饒舌つたり、雜沓した狹い通りを氣澤

山な。私はそれ所か見たい活動の繪看板もろく〳〵眺めず、昨日頂いた來月分の僅か許りの懷中を用心しながら、人に衝き當るまい、押し仆されまいと氣が氣ぢやないのに――。

此通りはすりがよく彷徨いてゐるといふ。

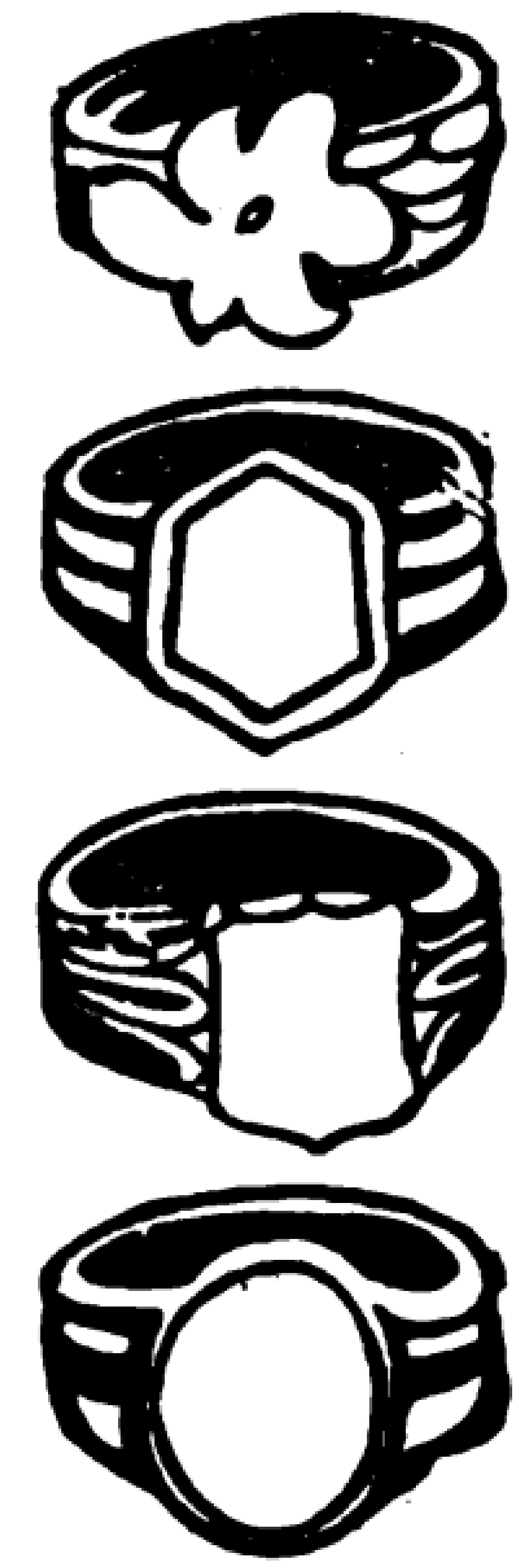
人の身なりを頭の上から爪先まで、じろ〳〵見るのがこの人のも一つの癖です。

「もう一重帶はうさりましたのねえ」



道往く人で此の方のお目にとまつたら最後きつと批評される。其癖、けちな事つたら又お話にならない。一寸近い例でいへば電車に乘らうつてもなか〳〵お乘りにならない。一人でもお歩きになる。回數切符は持つていらつしやるんですよ。

あら！　あんまり喋つて、もうお正午ですわ。杉田さん、續け樣の噂をしてゐらつしやるかも知れませんわねえ」。



兩面鏡

萩の下露

△井倉の奧樣

同僚の奧樣方は婦人會の何のつて已むを得ず出て居ますと、ずゐ分いろんな方面にお知合が出來まして、お心易く願ふこともござゐますが、譬にも申します通り十人十色、お美しい方、お賢い方、それは〳〵色々でござゐますよ、その筈だらふぢやありませんか、兩親揃ふた中の兄弟でさへも顏立から性質から僅かづゝでも違つて居ますものを、ましてや他人の寄合ですから無理はありませんわ。

多くの中にはほんとに勿體ない程よく氣をつけて下すつて、年が若いからつて同情して下さる方もありますけれども折がわるいとゝんでもない方に出合つて泣くにもなかれず、宅へ歸つてからもふさぎこんで、主人に笑はれるやうな事も度々ございます。

私なんか兄弟と云つては、大分年の違ふ兄が二人きりの末の子にうまれたものですから、兄弟喧嘩の味も知らず、時々學校でつまらない事から意地を出し合つて、白い目をして歸つて來ますと、よく母が『いけません、たとへお友達がどんなお顏をなすつても、どんなことを仰有つても、ヂッとして怺へるものです、すぐに怒つたり泣いたりすると、人は皆お前を堪忍のない人だ、と云つて笑らひますから』と申して居りましたが、此頃に至つてこの言葉が思ひ出されて母が戀しくてなりませぬ。

こんなに海山とほく兩親に離れて、覺束なくも重き任せの夫の內助となつて世渡りする身になりますと、御親切な方ほどおなつかしいものは有りませぬ、何事にもボンヤリの私はよく夫にも怒られますし、又よく失敗して自分ながら情けなくて泣くことも、一度や二

度ちやございません、こんな時にはいつもまづ母を思ひ出して叱られた後には、夫の見ぬ處で母の寫眞を出して泣きますが、思ひ餘つた時にはツイ御近所の井倉の奥樣にお話申して、お優しいお言葉を頂きますと、何だか母に會つた樣な心地が致します

△高い〳〵御人格

この井倉さんの夫は大隊長で、大變に御親切な方でござゐますが、この奥樣のやうに御親切でそしておやさしい方はあるまいと存じます、お年は三十三とお話になりますが、お年よりはずつと老けたおつくりでもお髮でもお召物でも、じみになすつていらつしやいますけれども、お生れつきの御容色が大變にお若く見せてその御質素なおつくりが、かへつて上品で、お人柄のほども伺はれます。

當地へ御赴任遊してから早や一年以上になりますがツイ先日初めてこの奥樣が同志社女學校の御出身だと知つておどろきました、最もお心易く遊す本田の奥さんさでも吃驚なすつてまう同志社なんか御卒業遊した方とは如何しても思へませんがねえつて仰有つていらつしやいましたが、ほんとにこの奥樣の平生をよく知るものは、誰だつて屹度驚くだらうと存知ますね。宗教學校特有のハイカラな妙に氣取つた所なんか一寸もなく、あくまでお優しい、おとなしい、そしてその中にどことなく凜々しいところが見えて、昔の武家の女はこんなものだつたらうかと思はれます。

こんな風ですから、前任地の小倉を御出立の時なんか、皆さんが大變にお力落しで、ステーションでお別れするのは餘り情けないと仰有つて、切りに御辭退遊すのにとう〳〵門司までいらしてお名殘りをお惜しみなすつた奥樣も有りましたつて……。

當地へおこし遊してからもその高い御人格は現はれて、あまり月日も立たない中に、皆樣の人望はすつかり集まりまして、申しちやすみませんけれど、古參の○少佐の奥樣なんかはとても……。お美しい許り

ちや人望は集まりませんからねえ。

『井倉の奥さんなんか、何もそんなにお偉い方とは思へませんわ、御覧なさいな今ぢや皆さんが切りに有難がつていらすけど、地金の出るのは直きですよ』なんか酷いこと云つてらした××中佐の奥様も、この頃ぢやすつかり感服なしたのか、さすがの雄辯家が何とも仰有らなくなりました。

△奥様の感化力

外でこんなにお優しい奥様は、お宅でも私共の龜鑑とすべき良妻で、優しい賢い奥様となつてお短氣



な旦那様にお仕へあそばし、慈愛ふかき母様となつて四人のお子様の御養育に御注意遊すので皆お丈夫で、今年九つとおなりあそばす大きい孃様は、學校でも成績がよほどいゝさうでございます。

只お氣の毒なのは旦那様のお姉様で、他家からお歸り遊したとか云ふそれはお氣のむづかしい方がいらせられます、何でもお年は四十四五頃で有りましたらう、お目元の凄い、ヒステリー的のおかほあそばした方です、さすがに御發明な奥様も、このお姉様の御機嫌ばか

りには、時々蔭でおなき遊しますつて、よくお守りが話します。このお守りは小倉からお伴して來たのですが奥樣から承れば、兩親のないために少さい時から叔父の手で育てられて、叔母のために散々にいぢめられたので、心がいぢけて憎らしい子だつたのを、可愛さうだと云つてその叔父とも御相談の上でお雇ひあそばし、何かと一と方ならぬ御世話の甲斐があつて、この頃ではお小遣金をチヨロマかしたり、お菓子とつまんだりすることはなくなつたさうです。人の情の力ほど有りがたいものはござゐませぬ。

こんなに可なり澤山のお人數でおあんなさるのに、お女中はお使ひあそばさないで、十三になるこのお守り一人で朝夕の事から、お洗濯までセツセと片づけていつもキチンとしてある所は、お羨ましくてなりませぬ、お人數はおほし、これまでの御身分でありながら何もかも奥樣のおあそばすのを見ては、尉官の而も夫婦きりの私には恥しうてなりませんので、とう／＼思ひ切つて下女は國へ歸しました、この頃では朝も早くから襷がけで働きますと、夫も庭をはいたり水の撒いたりしてくれますので、心地よく掃除もすませて御飯頂きますが、働いてから頂く御飯はほんとにお甘味くつて、當分の間下女なんか使ひますまいねツて夫に話しますと、お前さへ其の氣ならいゝことだ、若い内に働け／＼と申して贊成してくれますし、國の父はそれでこそ二十年の間教へた甲斐がある、子供があるまでは今のまゝでやつて行けつて、アチからもコチからもほめられてとんだ面目を施しましたホヽヽ。

△有益な會合

奥樣に感じて女中を出したのは私共ばかりではございません、富山さんでも、吉井さんでも皆お出しになりました、富山さんなんか少さい坊ちやまがおあんなさるんですよ。

よくお出しあそばしてねえと申しましたら、「坊の守は夫が歸宅さへしたら引受けるつて申ますから」と仰有いました。

表面の理由はともあれ、内々はいづこも下女一人出すと、月末はずつと樂になりますからねえ。その代りに夫も私も保險へ加入致しましたの、軍人ですもの、天命ならずとも何時いかなる變がないとも限りませんからその時の用意に。

エ私が糠味噌くさくなつたつて仰有るのホ、、、。

こんなに質素だとか儉約だとか云ふことが流行しますものですから、中にはその趣意をとり違へて、今まで出ていらした婦人會へもお出ましなさらず、時折の訪問もしないですましていらす方も出來ましたので、これでは困ると云つて、〇大隊の家族の親密を謀るために面白い會が出來ました、會場は井倉さんのお宅で、會の度に順番にお煎餅を少し持つて來て、それを頂きながら家事とか、育兒とか云ふやうなもの丶經驗談だの、珍らしいお料理法なんか話し合つてお互に利益を得るやうに、毎月一回皆さんの最も御都合のい丶日を伺つて開くことに致しました。この奧樣がお初め遊したことではあり、實際に有益なものですから、已むを得ぬ用事の出來た方はともかく其の他は大抵おこし遊していろ／＼な有益なお話をあそばします。お子樣のある方はみなお連れ遊すし、南さんにはお母樣までがお出席下すつて、お年の效だけに私共には耳の痛いことやためになるお話をなすつて下さいます

△お弱いがお氣の毒

今でこそこの南さんは、人もほめる位ゐに姑樣と嫁樣とのお折合がい丶のですけれど、去年の秋新嫁樣をお迎へ遊して間もなくお定まりの新舊思想の衝突、旦那樣が仲に立つていろ／＼と兩方をおなだめ遊しても如何もい丶工合に治まりませんで、とう／＼奧樣は一日用事に託してお實家へお歸り遊したきり、私にはとてもアノ姑樣の御機嫌はとれないから：：：：と仰有るさうですし、姑樣もあんな恐ろしい我まゝな嫁は早く返してしまつた方がい丶つて言ひ通して、始末がつかなくなりました。このことをお聞きあそばした井倉の奧樣は、或日南さんとよく御相談の上で、お嫁樣の

お實家へいらして御両親に御面會の上、御當人にもよくお言ひきかせなして、再び歸らぬと仰有つてらしたお嫁樣を連れて南さんへ行つて、とも〴〵に御姑樣にお詫びをなさつたのでさすがの姑さまも、その御親切を非常におよろこびあそばしたさうです、今では井倉さんのお隣にお移り遊して、御家庭も誠に圓滿に治まつてます、このお姑樣が、井倉の奥樣のやうに御親切でお優しくつて、そして恐ろしい方は、この年まで見たことがないと仰有るさうで……。

大隊長樣は所謂軍人肌の磊落な方で、よく部下をお勞り遊し、ことに青年士官が大好きで、いつの日曜にも若いお客樣が澤山で、臺所はそりや賑やかです。そんな所から自然と奥樣も青年士官の相談役におなり遊して、時々吹き出す程おかしいことがありますよつて仰有いますが、若い方達も大隊長の奥樣は御親切だけど何だか恐ろしい方だつて云つてお話なさいますが、ほんとに優しい中にも犯し難き威をもつていらして、決して狎れることは出來ません。

この奥樣のやうに、才もあり、智惠もあり、溢るゝばかりの愛もあれば、何となう犯し難き御品もありと云ふ方は、まづ廣い世の中にも尠ないだらうと存じます、只少しお弱いのがお氣の毒でなりませんけれど、これは何も奥樣の御品格にかゝはることではありませんから……。

△朝夕の御訓戒

こんな風に、この奥樣で一定の信念をお守り遊してお心は高潔にして、而もあくまでもお優しくて識らず知らずの中に人を感化おさせなさる御人格は、今までおうけ遊した教育を最も善く活用遊すからでも有りませうけれど、一つには深い御信仰の結果ではあるまいかと存じます。かつて同志社御在學中に、神と云ふものゝ存在を知つて深く御信じ遊してからは、最も深く最も忠實なる神の僕とならうと御覺悟あそばしたんださうですけれど、井倉樣がクリスチャンがおきらいなので只御自分のお心一つに深く收めて、これによつ

て喜怒ともによくおつゝしみ遊し、ますます御心の御修養をあそばすのだらうと存じます。

かゝる奥様の下にありて、朝夕に御訓戒をして頂く私共は、自身の幸ひをふかくよろこんで居りますのでござゐます。

△玉代さんの一人ぼつち

この方はまだミスでござゐます。お年は二十三で玉代さんと云つて、お父様は當地の開業醫の中では名のきこえたお醫者様でござゐます。御兩親樣お揃ひの中に玉代さまを頭に六人兄



弟で、まことに圓滿な他所目にもお羨ましい御家庭でございますが、こんな御家庭でお育ち遊した玉代樣が、何故あんな曲つたやうな皮肉なお性質やらと、よくお友達とも話して居りますの。私が初めてお目にかゝつたのは、女學校へ入學した日でした、七十何名の中でも、殊に目に立つて美しい友禪の衣裳にそれはおとなしい紫の袴を高くおはきなすつた目の大きな玉代さんを見た時には美しいと思つてあかず眺めました、その後は雨の日も風の日

もセッセと通學して居ましたが、いつか見知らなかつた方も親しいお友達となり、母校の事だの古里のことなど語り合つて夏休みをまつ頃になつては、誰だつてこの玉代さんのお友達になる人はありませんでした、いつもお口を固くしめてヂッと瞳をすゑて何か考へる樣な樣子をなすつて、たま〱話しかける人にもいゝ返辭をなすつたことは有りませんから、人も恐れて近よりませんのでいつまでも一人ぼつちでした。

△康熙字典で調べました

學科は何もみなよくお出來なさる中にも、英語と數學とが最もお得意で、ミード先生の時間に、青いおかほを幾らか赤くして會話なさる御樣子ばかりは、クラヌの者が皆羨ましがつて居ましたけれど、ギロリと光るお目と結んだお口と憎らしいほどに取濟ました御樣子とは、いつも人の惡口の的となつていらつしやいました、授業までの間を鬼ごつこだの、かくれんぼだのして餘念もなく遊んでる處へガラ〱と俥を引き込んで、玄關へ横づけにさした中から、ツンとすまして降りていらす時なんか、先生と間違へてお迎に出た生徒がボンヤリ立つてる前を、スッスッと通つて教室へおはいりなさる時なんかの樣子の憎らしさつたらありませんでした。

教室ではよく先生と爭つていらつしやいました、いつか國語の先生が商ひと云ふ字を商とかくと違ひますと仰有つたら玉代さんは『先生決して違ひしませんイヽエ本當です私は康熙字典で調たからたしかです』先生のお口のあたりはピリ〱とふるへましたので、私共はハラ〱しました、こんな事は度々でしたのでさすがに御親切な先生方も、餘り御同情はなかつたやうで、二年級におすゝみなさる時は、あれ程にお出來遊しても四番で、級長にも副級長にもおなんなさることは出來ませんでしたが、御自分には成績の發表を見て冷かにお笑ひ遊したり、例の通りに何とも仰有いませんし、他の友もお氣の毒だとも申しませんでした。

私がこの方の御身の上を詳しく知つたのは、三年級の頃でした、長らく勤めた下女が嫁入りすると云ふので、代りに來たのはハツと云ふ女でした、いろ〱な話する中にフト橋本さんに二年餘りもお勤め致しましたつて話ますのが耳に入りましたからもしやと思つてよくきゝて見ると果して玉代さんのお宅で、この女の口から玉代さんのことをくわしくきゝました。



△乳母は車中で頓死

玉代さんはお母様が十九の年にうまれて、すぐとかく乳母の手に育てられた方たさうです。そして玉代さんがまだ漸くアンヨが出來かけた頃に、早や妹の照子さんがうまれましたが、今度は母様のお乳でお育てになることに定まりました

その頃は玉代さんがとかくお弱かつたので、田舍の乳母の里へやつて、新らしい空氣で育てた方だと云ふので、二つの年の秋乳母に連れられて四里あまり田舍の乳母の家へやられました、春は青々とした、田の中で、雲雀のこゑをたづねあるき、秋は裏の山に連られて栗の實、椎の實を拾ふて育つた玉代さんは、果してお父様のお望みの通りに丈夫な色の黒い兒になりましたが、教育のない乳母は奥様が玉代様を憎んで、照子

樣ばかりを御可愛がり遊すと思ひ僻んで、まだ東西もよくわからぬ頃から「あなたのお母樣はそれは恐ろしい方ですよ」と云ひきかしたものですから、我兒の顏見るために時々おこしの父樣までもいやがつて「玉代大きくなつたな、お父樣と歸らんか」と仰有る度に、白い目をして逃げました、七つになつた春學校へ入れるからつてお迎にいらした母樣をいやがつて、乳母さへ驚くほどの駄々をこねてとう／＼田舍の學校へゆくことに致しましたが、冬休み夏休みの度にお迎へにいらす父樣、母樣のかほを見ると、御飯も食べないで泣きますので、母樣はいつも情けなさうに「いくら少さい時から放して育てたからつても、餘り情けないつてお泣きなさるのでしたけれど、玉代さんは如何しても歸りませんでした。

その中に尋常科を卒業して、高等二年もすませました、もし今度歸らんやうなら女學校へはやらぬと云ふ父樣のお言葉に、さすがに我慢も張り切れないで、十二年ぶりに我家に歸つて見ると、妹も弟も澤山にありますし、下女から車夫に至るまで澤山のお世話に忙しい母樣は、田舍の乳母まで親切ではない思はれますし、いかに我が家と思つても、慣れぬ妹等は傍へは來ないで、アチラの方で一所になつて面白さうに遊ぶのを見ると、何だか自分一人が邪魔にされるやうで、別れる時に云つた乳母の言葉が今さらに思ひ出されるのでした。その夏休みになつかしい乳母に遭ふのを指をりかぞへて待つた甲斐もなく、かねて丈夫な乳母は卒中で俄かに死ましたそのことをきいた玉代さんは二日あまり何も云はないで泣きましたが、それからは僻んだやうな性質がいよ／＼烈しうなつて、父樣のお言ひきかせも母樣のお情けも一寸も利かないで、とう／＼あんなお氣前になつておしまひなしたのですとハツは話しました。

△玉代さんのやるせない胸

お宅でも少さい坊ちやま方が皆、大姉樣はいやつて仰せ遊しますが、ほんとに笑顏一つお見せ遊さないで

照子様なんぞよくお泣きあそばします、あの子は弱かつた許りに手許を放したのが親がわるいから、照ちやんでも誰でも大姉様の仰有ることはよくきいておあげなさいよ、お母様がお願ひするから………つて母様も泣いていらしたさうです。

そのことをきいてから私は、今までほど玉代さんを惡くは思はなくなりました、寧ろお氣の毒で折があつたら慰めてあげて親友になりたいと思つて、いく度かその折を伺ひましたのですけれど、到頭卒業するまで親しくお[illegible]の言ふ機會がなく、間もなく山田の方へまゐりましたので、忘れはしませぬけれどそのまゝになつて居ります。



先日同窓會の時に聞きましたが、玉代さんはますます妙にひねくれて、今では御兩親様も手のつけやうがないと云ておなげきあそばすと云ふとでした。照子さんは四五日前に賑々しいお祝歌に送られて、御結婚遊しました。姉を措て先に嫁ぐアノ優しい照子さんの御心！殘された玉代さんの御心！まして父様母様は！。いくら強いとても固いとても女です、今日此頃の秋風は、一人悶ゆる玉代さんのやるせない胸を、いかに烈しう騒がせませう。

心得草

磯菜

來客の歸る時玄關迄送つて出て、左樣ならと挨拶がすんで門口を出るか出ぬかに、ぴつしやりと玄關の障子を閉切る人がある、何の氣もなくせられる事だが私は不快に感じる、まづ客を送つて出たならば、其人の門口を出て一間位は行くまで障子は閉めない方がいゝと思ふ、僅かの事で客の心持はどんなに違ふか、折角のおもてなしも終りになつて僅かな事でふいになつて仕舞樣な事があるから心すべき事である。

○

私は隣家の或る將校のお宅へ、朝早くに用事あつて參りましたお玄關から御免下さいつて申しますと內から奧樣、誰れつゝておつしやる、何々でといへばいゝ事をよく誰しもいふ事で、あの私で……といふと奧樣今度は大きなお聲で、誰れだらうつてバタ〳〵と出ていらしつて、いきなりがらつと障子をあけなすつたが私の顏を見るなり、あら、奧樣でしたの、まあ失禮を、私はまた八百屋かと思ひましてね、八百屋にしては早いが……と思ひましたらまあ……つて、私は驚きました、誰れかと云ふ事もたしかめないで誰れなんておつしやれたもんだ、まして八百屋にしては……？と云ふ疑問を抱き乍らよくあんな大聲が出せたものだと、其大膽に驚きましたよ、併し大同小異こんな間違ひはよくある事お互に氣を付けませうよ。

何でもかでも後すざりばかりなさる人がある、こないだの轉居の時手傳つて頂だいた奥樣、生憎の雨でびしよぬれになつたので、私はお氣の毒に思ひ、お召し物までぬらしましてどうもすみません、とおことわりすると、何のあなた、私などはあなた方のおねまきになさる樣なのをかうして平常着にしてるんですから、ぬれたつてあなた、こんなに云はれますと、何といつていゝか二の句が出ませんわ、世間話しゝましても、此節の樣にお米が高價くつては閉口ですねつていへば、まああなたがそんな事をおつしやつて、そんな事は私たちのいふ事ですわ、とおつしやる、先日も他家樣へお祝ひ物をあげますのに、組でしませうと云ふので此奥樣とも一人の方と御一所で呉服屋へまいりましたの、いろ／＼出して見せるのをあれこれと見て居りますのに例の奥樣ばかりは隅の方に腰かけて見やりもなさらないから、奥樣どんなのがよ御座んせうつて相談しますりや、私に何がわかりますものか、たゞお供して參りましただけで何にもわかりませんのよ、あなた方がいゝておつしやるのがいゝんですわ、私しなんかあなた……、一事が萬事此通りですから、時には腹の立つ樣な事があります、女は何事もひかへ目にするのもよろしいが程を過ぎるとかへつて他人の心持ちわるくしますから、ものは程々つて實際ですね。

○

他家からちらしずしを頂きますと大ていどこのでも上に紅しようがだの卵だのがのせてあつて美しくしありますが、それをがつさりとうつして仕舞いますと、上置が下にな

つて折角美しくしてあつたのもだいなしになりますから、少し手數ですが一つたんこつそりとさかさまにうつして、も一度其通りうつしますと元の通り上皮が上に出て見よくなります、どうせ食べるんだから見よからうが見惡しからうがいゝ樣なものですけれど、お膳にならべた時、折角頂いたものを、美しいすがたのまゝで頂だかれますからね、まして僅かなところでも主婦の美しい趣味があらはれて嬉しいじやありませんか。

一家の主婦たる者は出來得るかぎりの儉約をせねばなりませんが其儉約にも色々の仕方がありませう、人によつてはむやみと食物に儉約をする人がある、魚一疋求めるところを半分ですますとか、今日は牛肉にしやうと思つたが野菜ばかりですます何も儉約だなんて、こんなのも惡い事では有りませんが又いゝとも申されません，外に出てはたらいて勞れて歸つた主人に、これも儉約あれも儉約と、雜魚やなつぱばかりじやあんまり同情がないと云ふものじやありませんか、人間は意地きたないやうですが一日中食べる時が一番のたのしみですからね、成る程二十錢の鯛を求めるのを五錢のいわしですませば差引十五錢、殘つたといふものゝそれだけにまた滋養も少なけりや味もちがうしたがつて幾分かの樂しみをへらしたゞけですから、それよりか、食物はまあ身分に應じておいしいものも食べ滋養になる樣なものも食べ、それよりか儉約は炭薪なんかでしたらいゝでせう、むだにせぬよう、火を遊ばさぬ樣、氣をつければ毎日の事ですから幾らか違ひます、湯をわかすにも、鐵瓶の蓋が飛び上る程わかしたつて、たぎつたとこで直ぐおろしたつて、炭の入高にちがふのみで、どこへもあたりさはりないのですから、さういふところでの儉約が實際の儉約と思ひますよ。

寄合ばなし



落葉村

△鬼千疋

誰がきらひだと言ひましても、あなた私共の小姑ぐらゐ癪にさはる女はありやしませんわ、たとへに鬼千疋なんて申しますけれども宅のはたしかに一萬疋位の價値はあるんでございますからね。

えゝ、あんなローマになぞ結つて派手に装つてますけれど、あれでもう廿三なんでございますの、年をとつてゐるだけに口の先はそれは〳〵上手でございますからね、面と向つては御姉さま〳〵つて切口上なんかでいやに御丁寧ですけれど陰へまはれば意地の惡いこと御話になりません。どんなに勝手元がいそがしく私と下女とがクル〳〵眼をまはしさうな時だつて手傳ひませうかとも言つた事はなくそんな時に限つてわざと自分の居間には居ないで茶の間の火鉢の側にゾロリと坐つてキイツとやらハイネとやら外國の詩集なんぞひねくりまはしてゐるんでございますもの。

過日も私が一寸實家から文藝倶樂部のあいたのを借りて來て讀てましたらば

「御姉樣はそんな下等な人達のみる樣な本を御覽あそばしますですか」

なんて調子でさも〳〵さげすんだといふ樣な目付をするんでございますよ。

もう女學館を出まして丁度五年、卒業後もずつと双葉會へ通つてヴアキオリンと英語の稽古は續けてるんでございますもの、漸く女學校を出るや否や直ぐに結婚させられてしまつた私などとは比べ者にならないの

が當然ぢやありませんか、それに私に外國の小說本を持つて來てわざとすゝめてみたり、歐字新聞をつきつけて一寸讀んでくれなどゝ皮肉なことを申すのでございますもの、遂、私も腹が立ちますけれど、それでも悲しい嫁の身の、斯うしてがまんをして居るのでございますわ、

昨日も私がシユークリームを燒きましてね、夕食後に出しましたらばまあ斯うなんでございますよ

「大層結構なお菓子でございますこと。シユークリームに似て居る樣でございますねえ」

これですもの、……そりや風月から取りよせた樣に綺麗には出來て居りませんけれどもあんまりぢやございませんかねえ、それよりもあなた

「このシユークリームは皮が少し軟かすぎて恰好が惡いわね」と言つて笑つてくれる方がどんなに心持がよろしいか知れませんのですけれども……。

早く何處かへ緣付けたいと主人も私も心配いたして居りますし、また相應な處からの申込も澤山あるのですけれども何と申しても本人の理想が突飛に高すぎるものですからうまくまとまる樣にも參らず困つて居るのでございますよ。

第一へぼ學士なんかへは死んでもいやなんて申すんでございますからね、百や百五十圓の月給取り位は眼中に無い有樣、初婚の少壯博士で係累のない人かまたは敏腕の外交官、それも東洋詰ぢやあいけないなんて申すのですから何時まで待つたつて思ふ樣な處は見つかる筈はございませんのですわ。

それにあんな奥底の知れない人も珍らしうございますね。

好きな事でもきらひと言つて嫌ひを好きと言ふてみたり悲しい時にことさらに作り笑顏をしてみたり、あんな役者の眞似みたいなことは、私などには迚も出來ないことでございますわ。

世間の小姑さんの樣に、派手な長襦袢や丸帶位で買收出來る樣でしたらよほど罪がなくて可愛らしいのですけれども、あの人は何しろ一人娘で衣類などはくさ

る程持ち込んで居ますしねえ、そして何處の小姑にもある惡い癖ですが主人と私と話をするのが妬けてやけて、一寸の用談にさへも何かと邪魔をしたがるんでございますよ、こんなのが鬼千疋の好典型とでも申すのでございませう。

△むらさき樣

十六の年に初奉公に出まして丁度八年、只今は三度目の御主人樣でもう二年あまりも御厄介になつて居りますが御當家の奥樣位さつぱりとよく行屆いてやさしいお方はめつたに有るもんぢやアございません。



眞萩咲く岡への路に朝なく裳裾ぬらさん秋は來にけり（最樹）

旦那樣は〇〇省の參事官、元來があゝいふ穩やかなお方なのでございませうけれども奥樣にはもう一目も二目も置いて何事も美津子〳〵と奥樣でなければ御用が足りないといふ有樣、いいえ、よその鼻下長旦那樣なんかとはまるで具合がちがふんでございます。

奥樣の御年はまだやつと二十四、艶々しいおぐしを油氣なしのエレナに卷いて寶石の入らないたぼ櫛一枚、お年の割合にじみな位な刺繍模樣の半襟を白い胸元にゆつたりあはせてみるからにさつぱりと美しい奥樣ぶり、金歯の細く光るお口元はいつもニコ〳〵

とほんとうに氣持の好いかたでございますよ。

御當家には私と御飯炊女と若樣の御守りと三人女が居りますが誰へも一樣に目をかけて何事につけてもよくいたはつて下さいますから自然こちらでも一生懸命骨身惜しまず働く譯になるんでございますねえ。

めい／＼に極りの用事はキチン／＼と言ひ付けて、あとはあまりコセ／＼と干渉などなすつた事はなし、もし失策でもすれば靜かによく敎へて下さるし出來榮えの良い時にはほめて下さるし、上手に縫へたとかお掃除がよく屆いたとか私共の骨折りはちやんとそれだけに御覽下さいますからなまけたくてもなまける事は出來ない樣になるんでございますよ。

ほんとうに竹を割つた樣なさつぱりした御性質で御親類中でもそれは／＼御評判がよろしいんでございますつてね。

御隱居樣などはもういつでも
「私は美津子が嫁てくれてから一年でも長命したいと思ふ樣になりました」と口癖の樣におつしやる位でございます何事にも能く行屆いて御氣の付く奥樣ですけれど勝氣な御隱居樣に對しては何も知らぬ小娘の樣に
「お姑樣、これは如何いたしませう、あれはどうすれば宜しうございませう」
つて一々御相談遊ばしますしね、御好みの淨瑠璃本を讀んでさし上げたり御說敎きゝの御供も遊ばせば御隱居樣が御信心の毘沙門樣へ御代參までなさることがあります位、旦那樣よりも先づ家內中での王樣は御隱居樣として、御夫婦ともに御大事にお仕へ遊ばすんですものあれではたとへ鬼の樣なお姑さんだつてコロリと折れずには居られまいと存じますよ。

御役所の小使さんが御用で參りました時など奥へ御取次しますと歸りがけには屹度奥樣が內玄關まで御出になつて御苦勞さまでしたねつて御挨拶なさるもんですから小使さんも〇〇樣へは行くのは張合が有るつてよろこんでゐるさうでございますよ、別段面倒も手間も要らないことなのですが兎角御上品ぶりたがる當世式の奥樣がたには其の何でもないことが出來難いんで

ございますねえ、たつたそれだけの事でもこちらの氣持はどんなにが違ふんでございますのに……。昨年番町へ御輿入遊ばした旦那樣の御妹子樣などは御姉さま御姉さまそれはもうしんから賴りに思召してゐらつしやる御樣子、實際御當家の奧樣ぐらゐ誰へも一樣にお調子のよい、そして親切なよく行屆くかたといふものは滅多にあるもんぢやァございませんでせうよ。

△群青の袴

學校の先生がたの中での好き嫌ひを言へとおッしやるの？　そんな事しやべつて可いか……どうかきつと此の場限りにして頂戴ねえ。

　私達はあの地歷の△△先生みたいな依怙ひいきの强い意地惡が一番きらひですわ、あの先生は御自分がオールドミスでつまり精神上の不具者なんでせう、その横つちよに付いてる曲つた眼で生徒を御覽になるのですもの、公平にゆくはずがないんですわ、御付屆がよかつたりおべつかい使つたりする生徒ばかり可愛がつて……よくあれで修身の御講義なんかが出來たものだと思ひます位よ。

　前任地の××でも知事さんの御孃さんばかりひいきなすつたので生徒がストライキを起しかけたことが有るんですつてね、えゝ、現に私達のクラスでもそんなことがございますのよ、そして○○さんの御宅の貸家のね、十二圓の家賃なのを八圓にねぎつてすまアして住んでゐらつしやるよ。

　學年末になりますと級中でもしんがりの方の人達七八人を一人〳〵に自宅へ呼んで「あなたもあぶない〳〵」つて意味ありげに御注意下さるのですとさ、皆心配して居る矢先へおどし付けられるから靑くなつてしまつてお母樣なり自分なりがまた出直してそこは何とか御思召どほり計らふんでせうねえ、……すると靈驗忽ちあらたかに可なりな點數で進級出來るつていふ次第、これはもう校內で知らぬ人はない位公然の祕密なんですのよ、私なんぞ時折々の御機嫌伺にも伺候せず、おまけにこんな惡口はたゝくし、もう親の敵の樣

に憎まれてる一人なんでございますわホヽヽ」けれともねえまた何となくおなつかしい大好きな先生も澤山ゐらつしやいますわ、中でも英語の〇〇先生どことはなしに温味があつて、それで威厳もちやんと備はつてよくやさしく教へて下さいますから生徒の方でも自然とお慕ひする樣になりますのよ、御稽古時間中でも厭かない樣におもしろく、教授ぶりが御上手ですから私達は英語の時間が一番たのしみなんでございます。

前の△△先生の方は自分の知らないことでも何でも無理に知つた振りして通さうとなさるから却つて生徒も意地わるくむづかしい質問などして揚足をとつたりしますけれどこの先生はそんな場合には



世に繼母繼子の中とて十に七八はよからぬものより、是説あり、實の親はたとへ杖をとりて指附などすとても、思愛たがひに深きが故に、暫くありては互に如才なくなりゆき、他人も見咎めもせぬものなり、繼しきは持の習ひ、子はいや定めて繼母なれは心中に打とけいし給ふふしおもふもの、旣に胸中に横たはりてうせず、これ不和をなすの基なり、よりて假初にいふ事もむかへて附くゆゑにむれに違ふなり、ましてや其子に教訓などせんに左なきだに忠言耳に違ふならひなれは、わが過ちはおもはずして是も亦まゝしき故なり、誠の親ながらへておらばかゝる、憂目にあらじなど、世をうらみ述懷し互に隔多くて重り、果は怨敵のおもひをなすに至るなり、（三浦安貞）

「それは私も知りませんでした、早速調べて參りませう」つて潔くおつしやるからこちらも氣持が良いんですわ、同じ御叱言や御注意をうけるのでも、この先生ですと何だか胸にしみ込む樣に思へますの。

すが〳〵しい秋日和のお晝休みなどもくせい薫る校庭の芝生に陣取つて外國のお伽噺などしな頂くのがどんなに樂しみかしれません。此の將來萬一先生に御轉任でも遊ばす樣なことでもあれば、私達は何處迄でも御供して行きたいぐらゐにお慕ひ申上げて居る

んでございます。

△小町絲

斯うして永らく裁縫の師匠などして居る間には入り替り立ちかはりいろ〳〵な娘が參りますから澤山の中には性質の惡いのも有つて隨分手古摺るためしもございますのですよ。

家庭が面白くなかつたり、父親を失くしたりした樣なのは妙にひがみ根生で人間がすれて居ましてね、肝要の指先は御留守で口の方ばかりよく動いて、朋輩同志で喧嘩したり御互にアラを拾つてまはるなどそれはそれはもう手に負へない樣なのが有りますからねえ。

急ぎの仕立物でも頼まれて徹夜した翌日は私も遂コクリ〳〵やる樣なこともありますが、そんなところを見付けたら大變、御互に足で突付き合つてクス〳〵笑つたりものさしで何か合圖したり、憎らしいつたらお話になりませんもの、遂私も好い顏ばかりもして居られず小言の一つも申す樣な譯なんでございますよ。

またいやに虛榮心とやらの強いのもあれば怒りつぽいのもあり、ハイカラ風を吹かす娘も居りましてね、ひどいのになりますと私の前でも平氣で役者や男の學生さんの評判なんか始めるのですもの、今の若い娘さんたちの中には隨分大膽なのがございますねえ。

また別段人が惡いといふ程ではなくとも、いやに陰氣に考へ込んで、一人でブツ〳〵ぐちをこぼしたりする娘もありますがそんなのは朋輩にもきらはれて、自然除け者にされる樣ですし私も氣の毒なとは思つても矢張りあんまり可愛らしいとは思はれませんからねえ、そんな人に限つて妙に上目をつかつて他人の方をコツソリ見る癖がある樣ですね、あれはほんとにいやなものですよ。

いつも晴やかに元氣よく無邪氣で、たまには折角縫つたばかしのところをほどかすことも有りますが、それでも心持よくいそ〳〵と縫ひ直す樣な人なら大抵は心がけもやさしくおとなしい樣ですし、しごとも丁寧

にいたしますし、それに佛頂面をしてるのとはちがつて遂こちらでも可愛らしいと思へば先方でもなつきまして、同じ數へるにもどれ程張合があるかわかりませんよ。さういふ人達には遂たのまれなくとも何處か良い嫁入口はと私も心にかける樣になりましてね、今までにも私が世話をした人達で幸福に暮してるのも澤山ございますんですよ、ほんとに人に好かれるときらはれるなのとは一生涯の中にどれ程損得があるか知れませんねえ。



朝鮮人の鳥の傳說

朝鮮人は「自然」に對して一種の趣味を持つて居ります、たとへば渡り鳥の早いとか遅いとか、又は種々な鳥の鳴き聲なども大抵よく知つて居りまして其鳴きやうで吉凶の判斷などをします。此國では一般に鳩をピートルキー、鴉をカーマーキ、燕をチャツピーと云ふ樣に、其鳴き聲を取つて直に其鳥の名として居る位であります。それで朝鮮人は鳥についてどんな事を語つて居るか、夫れを大概書いて見たいと思ひます。

△官女の魂

日本名で何と云ひますか、或る鳥には次の樣な傳說があります。誰でも知つて居る樣に朝鮮の王宮には、多くの官女がおいてありましたが、或る時その官女の一人が金と云ふ官吏の一人となつかしい中になりました。然しいつの間にかそれが人の口に上る樣になつて、次第に王樣の耳にも入つたのでありました。すると王樣に非常に怒られまして、遂に嚴命を下して其官女の首を斬つたのであります。處が其官女の魂は鳥の體に宿つて宮廷に近い所に飛んで來てはキムプルサーゴー（金さんを呼んで下さい）キムボーゴーシプソ（金さんにあひたい）と悲しい聲で泣き續けるのであります。戀人をもとめて、しかも戀人を得ることの出來ない、官女の鳥は今だに鳴いて居りますが、今は誰も同情する者もありません。

郭公は京城あたりでも靜な初夏の夜を鳴き渡る事は珍らしくありませんが、內地の人と同じ樣に、一種の悲しみの聲として此鳥を餘り好まない樣であります。

人の餘り行かない樣な深山には、ペチユクールクと鳴く鳥が居るさうです。此鳥は人々に「盜賊がおまへをねら

つてるぞ」と告げるのだと云ひます。元來が深山の鳥ですから、時として町近くで鳴くことでもありますと、「今年は凶作だ」と云ふ報知をするのだと云つて居ります。

尾長鳥が鳴けばきつと雨が降るんださうです。

烏は死んだ犬を食うと云うのと、疫病の神を招きよせると云ふので、之は大に嫌はれる鳥になつて居ります。内地で烏が鳴けば人が死ぬと云ふ様な者でせう。

△鵲の聲と吉凶

鵲は苦しさうな聲をあげて厭な鳥ですけれど、朝鮮人は此いやな聲によつて其日一日の吉凶を卜すると云ひます。例へばもし朝の中に此鳥が來て鳴いたとすれば、其日の中にきつと何かよい知らせがあると云ふのです。まあ長い旅から歸つて來る人があるとか、或は又文官登用試験に及第すると云ふ様な事でせう。そして午後に鳴いた時には、きつと珍客が來ると云ふ意味だと云ふので、家内中一生懸命に其珍客なる者を待ち詫びるのです。然しもう暗くなつてから鳴いたと云ふ事になれば大變です。盗賊が入ると云つて大變に恐れて居ります。

内地で鵲は天の川に橋を渡すと云ひますが、此國でも殆んど同じ様な傳説があります。

それから又燕に取つては鵲は命の親だと云ふのです。それは此國にも例の青大將が多くつて燕の子供を一呑みにする事が多い者ですから、急を聞く毎に鵲が親分と云ふ態度で驅けつけては、全身の力を其足にこめて、餌に飽いて舌なめずりをやつて居る蛇の頭をはじきます。そして燕共の喝采聲裡に此大敵を打敗るのであります

屋敷を物騒するからと云ふので、鵞鳥は大に歡迎されます。風體の怪しい人物でも來やうものなら、ガヤガヤ喧しく騒ぎ立て、之を主人に告げるばかりでなく、時によると非常な勢で飛びかゝつてそれを追ひ出さうとするのは、内地でもよくあることで、誰でも知つてゐられる事と思ひます。

△目出度い雁尊い鶴

朝鮮で目出度い鳥と云つたら先づ雁が一番でせう。　先づ婚礼の式場には是非なくてはならぬものになつて居りまして、もし之がなければ、とても末永く添ひ遂げる事は出来まいと思ふ位です。雁がこんなに目出度がられると云ふ理由は昔し一羽の雁があつて、それがある時不幸にも妻を失ひましたが、それからと云ふ者は、毎年同じ場所に帰つて来ては悲しさうに泣いて居たと云ふのであります。で共白髪となる迄此雁の様に貞実であらうと云ふのが、朝鮮人の可憐な願ひであります。それで今では結婚用の雁を始終養つて置て、臨時貸てやる商人がある位です

鷺には色々の伝説があります。正直な一羽の鷺が寺の鐘を一生懸命に鳴らして、人の命を助けて、目的は遂したが、それがために大切な嘴を折つてしまつた云ふ話。卵から孵つた許りの鷺を、丁度蛇が呑まうとして居たのを、ある猟夫の矢で救はれ事があつた。其鷺が後に同じ猟夫が谷川の水を呑む時に誤つて一緒に蛇を一疋呑み込んだので、長い嘴で啄み出して恩を報ひたと云ふ話などであります。

内地と同じやうに燕は至る所に巣を構へて居りまして、そして朝早くから愉快な叫びをあげて眠つて居る人々の目を覚まさうとして居ります。これも蛇から呑まれかけて巣から落ちたために、足を折つた燕を救つて呉れた人に燕の王様が鄭重な報復をした興夫傳は、有名な傳説の一つであります。

何を云つても最も名誉ある鳥として尊敬を受けて居るのは鶴でありませう。で玉や黄金に彫刻せられたり、絹布に刺繍せられたりします。戦場の空高く翔つて朝鮮軍の勝利をうたつたと傳へられて居るのは此鳥であります。





△珍客來る

車夫の聲を聽つけて玄關へ人先に迎へに出て來た蝶々リボンの花子さん久し振りの挨拶に反りつ屈みつする母の後から額越しに眼も外さず

濡衣塚

紅花

むかし筑前冷泉の津に左近將監大友親世といふ人がありました。その奥方は非常な美人でありましたが、苟且の病ひからどつと床に就いて、もう癒るか〳〵と思つてゐる中に、遂々かへらぬ人となりました。其時の親世の歎きは云ふまでもありませんが、姫君の悲しみは又一入で、他で見るだに可憐しいほどでありました。併し日は經ちました。月は經ちました。姫君は何時までも亡き母を憶うて已みませんでしたけれど、親世はなほ新しきを求めて、やがて後妻を迎へました。

ところが此女は前妻のよりも立勝つて美しかつた代りに、殘忍の情も亦た非常に強く、どうかして姫君を亡きものにしやうと、日夜企んで居りました。

ある雨の降つてゐる夜のことであります。親世夫婦が寢てゐた部屋に一人の曲者が忍びこみました。黒裝束に水も滴るやうな匕首を拔いて、矢庭に後妻の胸元目がけて刺貫さうとする刹那、親世はフト眼を覺して、曲者つと叫びさま躍りあがり、黒裝束の利腕捕つて捻伏せ、折から此騒ぎに馳せよつた奴僕どもと共に高手小手に縛りあげました。

それからだん〳〵拷問に掛けて白狀させると、この曲者の云ふのに——

私は奥方に何の遺趣も遺恨もありません、たゞ人から賴まれて密かに奥方を殺害しやうとしたのです、賴んだ方は何を隱しませう、貴方の大事の〳〵姫君です、姫君は日頃から奥方を呪つて毎夜妙見堂へ丑の時參りをして居ます、噓と思ふなら姫君の伏戸に行つて御覽なさい、屹度衣裳が濡れてゐます。

これを聞いた親世は、餘りの意外さに、たゞ呆然としてゐると、奥方はわつとばかりに泣伏して、まあ何といふ淺猿しい心でせう、私は亡い方の忘れがたみだと思つて日頃心をつくして慈愛しんでゐたのを、なんの恨みがあつて、かう云ふ心になられたのでせうと、肩を顫はして泣きました。

親世は、驚きの眼を奥方と曲者とに注ぎながら、兎にも角にも姫君の伏戸へ行つて、着物が濡れてゐるか居ないかを調べることにしました。

ところが果して姫君の着物は濡れてゐました。親世は烈火の如く怒つて、突然姫君の枕を蹴返しました。姫君は夢うつゝに驚きながら起きあがると、親世は更に頓着なく、今宵の出來事から、妙見堂へ丑の時参りのことを、犇々と詰問しました。姫君は唯だ呆氣に取られて暫らくぼんやりしてゐましたが、やがて夫れと悟ると、俄かに悲しみの涙がハラ／＼と袖を濡らしました。

すると奥方は、ます／＼負けじと泣聲になりて姫が斯ういふ心でゐては、自分の命は何時か取られてしまふでせうと、親世に向つて泣きわめきました。親世もいよ／＼憤り、姫が濡れ衣の言ひわけの出來ないのを機會に、あはや脇差の拔く手も見せず打下しました。

さすがに殘忍の奥方も、あつと思つて止めやうとした時には、春まだ淺き花の命は散らされてしまつたのであります。

かくして幾日かは經ちました。ある夜、それは寢ぐるしい夜でありました。親世は獨り悶々として惱んでゐますと、ほのかに姫君の姿が枕頭にあらはれて、

着せられて干すよしもなき濡れ衣はながき冥路のさはりなりけり

といふかと思ふと、顔に袖を蔽ふてさめ／＼泣伏しました、親世は、其時は何とも思ひませんでしたが、後になつてよく／＼考へて見ると、或は例の奥方の企みではなからうかと思つて、だん／＼調べて見ますと、奥方も遂に包みきれず、實は曲者の忍びこんだのも、姫の着物の濡れてゐたのも、皆な自分の企んだことでありますと白狀しました。親世はこれを聞いて、足ずりして慟哭しました。奥方は次の間に入つて、美しい緑の黒髪スル／＼と剃り落しました。

この事のあつた冷泉の津は、今の博多であります。石堂川の水悠々と流れてゐる邊に、今もなほ濡衣塚の三字を刻んだ石碑が苔蒸しつゝ立つてゐます

覺え帳

◎

松平鏡子

私がまだずつと幼さかつた時の事でした。

あとから妹が生れたもんですから、私の世話をしたり夜なんぞ寢し付けてくれる乳母（？）が、雪の降る信濃といふ國から來ました。ばあやのお國には、おそばがどつさり出來るんだつて云ひました。そして桃太郎のお嫁さまの話だの、雨漏どんが一番怖いといつたのを聞いて、逃げ出した馬鹿な狼の話だの、いろんな話を毎晩代り番子にしてくれたりしました。

私は大變悪戯で利かん坊でしたから、そのたんびに乳母から叱られました。時々はなくほど怒つて

孃ちやまみたいに云ふ事をきゝにならないなら乳母がお灸にお連れしますよ

つて、嚴丈な脊に私を乘つけて、輕々と出てゆくのです。

私はお灸なんてちつとも好きぢやありませんから、乳母の驚ろくやうな出來るだけの大きな聲を張り上げて泣いて、ぐん／＼うしろに反り返るのです。けれどもそんな事位は、いくらしたつて矢張乳母には無效だつたのでした。

まだその時分は、裡の方に廣々した野原がありました。草一面に生えた木陰に、泣き疲れた私をおろして自分の膝に抱き上げると、ほろ／＼と泪をこぼして泣くんです。

孃ちやま、堪忍して下さいまし。乳母が怒つたりなんぞして濟みませんでしたね。ほんとうに堪忍して下さいましよ、さあもう溫順にお成なさいましたから、母さまのところへ歸りませうね

こんな優しい言を言はれると、幼い胸にも嬉しく響いて、私もしく／＼泣くのがならひでした。

乳母はきも可愛氣に私を抱き締めて、赤く熟れた胡頽子などを取つたりして呉れました。

◎年下の子には少し甘へられる方が可愛い。年上の人には縋りつけば抱き締めて呉れるやうな懐かしさが欲しいとおもひます

こんな事は私つきりおもふ事なのかもしれませんけれど、昔一緒に遊んだ子なんかに逢つた時、もう昔の懐かしみを忘れたやうに厭に遠慮振つた態度をしてゐられると手持無沙汰できまりが悪くなつて了ひますあんまり無遠慮な人はもとより嫌ひですけれどこんな人もつまらないと思ひます。



◎家の中に暮してゐるときほどにも目に付きませんが

學校へなんぞゆくと、好かれる人と嫌れる人が隨分よくわかります。

學科が級一番好く出來る癖に、人に嫌はれて敬遠主義を取られてゐる人がある。さうかと思ふと何にも出來ない癖に人から大事がられてゐる人もあります。

やつぱり出來る人は威張る…他の人が一歩をゆづつてゐるから、それで餘計なんでせう。よくこんな人には召使みたいに云ふことをきく馬鹿な生徒が從つてゐて、女王のやうな權利を振りまはされて、自分も好い氣に得意顏してゐるものです。さうすると級の人なんぞは盛に陰で棚下しをする。恰度昔の暴代官に對する村民といつたやうな立場だと可笑くおもひます。

さうかと思ふと、學科も出來ないし、柔なしくもない癖にして、可成な勢力を收めてゐる敏腕家がありますが、あんなのはどうしたものでせう。それでは出來る人に陰と云ふ惡口を、目前で云はれる時が多いから、やつぱり損ですね。

◎

まだ私が小學校に居た頃、誰方か一人が持つて來始めたものですから、級の中にゴムの風船玉が流行たことがありました。

先生が恕して下されたのでも何でもないのに、みなさんして紅だの紫だの玉をふいて、ふくらませつこをしたり、その上にすが絲を卷いて毬なんどになすつたりしてゐました。さうすると方々で買つた風船玉の中には、同じお價格でも好いのと惡いのとがあるのです。始めのうちは近所の方が頼まれては買つてゐらつしやいましたが、もの好きな方なんぞは、一人で皆さんのをいくつも受け負つて、わざ／＼遠くまで仕込みに行つたりなさいました。

井手さんと被仰る方が、そりやあ大の世話燒で、途中から入學つていらしたくせに、先にゐる方なんぞの事迄世話を燒く。こんな方ですから、矢張いくつも買ひに遠く迄いらしつて、その翌日學校まで持つて來て

下さつたのはよかつたのですけれど、どうもこの人の性質として、自分の貰つて來た風船玉には世話が燒きたくつて仕方がない。で持つてる人のところへ來て、それぢやふくらまし方が下手の、もつと大きくなるの何のつて云つた揚句きつと。

私がふくらませて上げませう

つて云つちや、人のを取つて吹いて歩く。

皆さんだつて、たゞふくらましたのを持つてゐるのは、決して嬉しいんではないのです。御自分でふくらましてみたり、息を出してすぼめてみたりなさるのが嬉しいんでしたのに、井手さんが世話を燒き



過ぎて困つて了つたのです。そのうちにあちこちの方のを撥さして苦情が出る。一人が井手さんの愚痴を零すと、みんなその話に調子付けるもんですから井手さんの隠れてゐた缺點まで掘り出されて、たつた風船玉のことの火の手が盛んになつて、井手さん一人除外者になつて了ひました。

◎

人とは初對面の感じが一番慥かで、そしてそれはいつ迄と變らない心持だと云ひますけれど、中には初めて會つたときさほどにも思はなかつた人が、後になつて好きになつたと云ふやうな事も少なくない

だらうと思ひます。今迄嫌ひだつた人が、不圖した動機で好きになつたり、好きだつた人が些の感興で嫌ひになつたりするやうな事も、まゝある樣に思はれます。

◎

いろ〳〵な都合から、入學手續だけ濟ませて、なみの人より一月半ばかり遅れて、私は女學校の門をくゞりました。

入ると左側が受付で、そこには男の事務員がゐました。暫くすると連れて來て呉れた叔父だけ應接室に通され、私はたゝきの玄關に立つて待つてゐました。田舍から始めて來て始めて入る學校、その入口で賴みにしてゐた叔父に引きはなされて了つたから、もう情けないやら悲しいやらで胸が一杯になつて、泪がほろ〳〵と零れてくるんです。

廊下を渡つて生徒が多勢往來する、そして見馴ぬ私の方を屹度振り返つてゆくのですもの、泣いた顏を隱すやうに暗い方を向いてうつむいた儘、所在なさにたゝきの上へ洋傘の先で圓だの三角だの書いてゐると、突然うしろから皺枯れた聲で

『これこれ、あなたは何をしてゐるのです』

つて云ふ人があります。

で、慌てゝ振り返ると、そこには切髮の老婦人がたつてゐました。黑い被布着て黑い袴つけて……これがこの學校の校長で、教育界に名高い某女史でありました私もそれと朧氣にも感付いたから、たゞ默つてお辭儀をすると、女史は

そこは石ではありません。たゝきです。たゝきを洋傘でなんぞ突付いたらぢきに破壞れて了ひます。あなたは何と思つてそんな事をしました、

まるつきり裁判官が罪人を調べるやうな口調です。

思へば私のしたことが、決して好いとは思つてゐぬのですけれど、自分で好いも惡いもわかつてしたのぢやありません。いはゞ照れがくしに、無意識にやつてゐたんでしたから、たゞさへ便なく心細い心が、これから敎を受けやうとする第一の人に、こんな事を云は

れたから、たゞ涙が零れました。

するとうしろから叔父が出て來て

どうか致しましたのですか

と、訊く。

これが新井良子です。これからいろ〳〵御厄介になります

と、云つたら

まあ左樣でございますか

なんぞと、私の方へ向けた佛頂面の裡を返して、にこやかに叔父に挨拶をされました。

私はそれから後も女史の美德を見聞しましたけれど、果にあの時の顏付を思ふと厭な氣持がします。女史の德を以てしたら、田舍出の少女に、もつと優しい感銘を與へて下されたらうと殘念に思ひます、(Yの談話より)

◎

田舍の人はよく親切にして呉れますね。一寸便所なんぞを借りる時だつてさうです。見ず知らずの家に通りすがりに賴んでも、ちつとも厭な顏せずに借して呉れるし、水なぞを貰ひに入つてもお客樣みたいに大事にして呉れます。お湯をさして來て呉れたり、まあ休んでおいでなさいなんて云はれると、本當に嬉しう御座います。私が十歲ばかりの時でした。途で咽喉が渴いて堪られなくなつて、連れ立つた乳母の子と二人、馴れない家に冷水を乞ふた事がありましたが、其時撥釣瓶を上げて呉れた若いお嫁さんの物越容形はいまでもよく覺えてゐて、嬉しいものだとおもつてゐます。但しその顏は鮮明とはわかりません。

これと同じ意味に於て、神田須田町のおせんべやの娘さんに謝す。

◎

誰も誰も自分から反いて了つて、自分を敵視してゐる樣な時、たつた一人庇つてさとして呉れる人の心はどんなに嬉しく尊く有難く思はれる事でありませう。

○

こちらで笑顔を以て接したきと、濟しこんで返事をされるのは至たく厭なもんです。

◎

通夜物語のお松は讀む人からは勝氣な胸のすつきりする氣持の好い女ですが、お澄の母親の心になつてみたら、ほんとに癪にさはるでせう。いつくら江戸式の女だつて、ちつと常識にはづれてゐるやうですね。

またそこが可愛い可愛のですけれども。



○處世の安樂　新古今集荒木田長延が歌に「つら／＼と思へはやすき世の中な心となげく我身なりけり」とよめり甚殊勝なる歌なり人名利の慾だになければ世界ほど安樂無碍なるものはなし滋味を食ふ事かなはねものは之が爲めに噌水あり絹きろと叶はねは是が爲に木綿あり宮殿なければ茅屋あり我勤むべき業を怠らずして今日の境界の外を願はず有所の父母を悦はしめ兄弟を中よくし朋友と睦くして茶を飲みたばこをのみ候て樂亦在於其中矣思へばやすき世の中ならずや（新井白石）



花賣女の日記

葎宿女

納屋で鳴く鷄の聲に眼が覺めた、障子はもう明うなつて居る、急いで衣服を着更へて裏へ出た、山や野は薄絹のやうな霧が一面に降つて居る、霧の底で緩やかに軋る水車の氣怠さうな音が聽える、夢の如な景色だ、流に下りて顏を洗ふて髮を梳く、心持が淸々して思はず深い呼吸をした。

納屋から鷄を出してやる、皆うれしさうにコヽコヽコヽと餌を搜りに畑の方へ行く、鋏刀と箕とを持つて鷄の後を追ふて畑に入る、なよやかな女郎花が露重げに頸垂て居る、箕を地面に置いて切り始める、鷄頭は今が盛りだ、菊も咲きかけたのは持つて行かう、七草はもう大方末になつて來た、此からは菊の天下だ、私は菊が大好だ、鋏刀の序に茄子の殘つてるのを四ツ五ツ取る、家に入るとお母樣が御飯の仕度をして御ざる、「これお汁の實に」と言つて茄子を出した、花を揃へてる內に御飯が出來たので、お先に一人で喰べる、茄子のお味噌汁の美味い事、自分のお茶碗を洗ふて脚袢手甲をつけ、草鞋をはく、お母樣が出して下さつたお茶を箕に入れ、女簑を掛けて其の上に花を盛る、襷を掛け手拭を被ぶつて、「お母樣行つてきます」と御挨拶して外に出た、箕を頭に載せると、霧で露の多かつた爲か、今朝は何日より重いやうに思はれる。お春樣

の家の前まで行くと、丁度出て見えた、「お早う」、「お早うさん」お互に挨拶して肩を並べて行く、毎朝一緒に行くので、近所の人にお神酒徳利だ と よと言はれる、私等と同じやうに京へ花賣に行く人が、三々五々未だ霽れやらぬ霧から出て霧へ隱れて行く、昨日のお裁縫所の話をしながら歩いてると、何時の間にか大學校の前に出た、左に折れて吉田町に入る、「花ア……いりませんか……」、「花や番茶いりまへんかァ……」とお春樣と代り合ふて呼びながら歩く、始めお母樣に連れられて歩いた時には何うしても此聲が出なかつた譯なしに恥かしうて、顏が火照つて、聲が咽喉に塞るうやであつたが、二日五日十日と日が經つにつれて、何とも無く成つて終つた、今では自分の聲の美いのが誇らしいやうに思はれる、彼方此方と賣りながら聖護院から丸太町へ出た、加茂川には未だ游い霧が漂ふて居る、歸りにはお春樣と橋で待ち合せる事にして別れた、お春樣は川端を南へ下つて行かれる、薄霧の掛つた柳の下を咲亂れた秋草を頂いて行く姿は、ほんに繪のやうな心持がする、紺飛白の引張の袖を友仙覆輪の丸絎の襷でキリヽと絞つて、紺飛白の三幅前垂を一寸端折た樣子は、眞箇に好い、私も他から見たら彼樣か知らんと思ひつゝ、振返りつゝ橋を渡る、河原町、竹屋町、御幸町など、彼方へ入り、此方へ入りして行く、もう何處でもねて居る家はない、門前を掃いたり水を撒たりして居る店も皆飾附けてある、四條近くに出た頃は花は皆賣れて終ふた、店に掛つてる時計を見ると八時を過ぎて居る、お春樣が待つてるか知らんと思ふと、急に氣が急いて來る、寺町を眞直に急ぎ足で丸太町に出た、橋に來て見ると、お春樣の姿は未だ見えぬ私の方が早かつたと見える、欄干に凭れて眺めると、紺青色に澄みきつた空に青い山々が分明と際立つて見える、比叡山の雄々しい姿に對してなだらかな優しい華頂山は、女のやうである、その間に挾まつた如意嶽の大文字が宜く見える、あれ清水の塔も見えて居る、思はず興に入つて居ると、足下で鳴啾る聲が聽えるので、下を見ると、男が二三人清い流れに下りて友禪を

洗つて居る、美しいこと、花や紅葉のやうである、竿から竿へ綱を張つて掛けわたしたのが、翩々と秋風に飜へつて、旗行列を見るやうだ、其中で一番眼に附くのが亂菊の模様、彼様なので長襦袢を作へたらと思ふと、欲しくてたまらぬ。しかし私は其様な身分ではない、聲を嗄らして呼び歩いて、よく賣れた處で高々三四十錢、噫何日に成つたら着られる事やら、橋の上は種々の人が絶えず



往來して居る。活動寫眞を見るやうだ、夫婦らしい外國人が通辯を連れてホテルの赤旗を立て俥に乘つて東の方から來た、私の傍を通る時に、通辯にベラベラと話かけた、通辯もベラ〳〵と返事した、何の事やら一寸も不解ぬけれど、大原といふのだけ聽えた、通辯は必私の事を大原女と説明したのであらう、何故に世間の人は、私の村（白川村）の者を大原や梅が畑の人との見分が出來ぬのであらう、繪にでもよく間違へて畵い

てある、京の北の方の田舍の女は、皆同じやうな風俗しはてるけれど、村々に依つて皆それ々々異つた處がある、大原の人は京へ物を賣りに出ない、薪や炭を持つて行くのも、定つたお得先けである、其れも車に積んで引いて來る姿は、一寸似て居るけれど、手拭や前垂に百人一首などの歌を草手書に搔取りしてる人が多い、襷は平絎で脚袢を前の方で合せて居る、それは昔建禮門院様のお附の阿波の內侍が間違へて穿いたのが習慣に成つたのださうな、「梯や鞍掛いらア……んかいなア……」と賣り歩くのや、駄菓子の箱を頂いて圓山公園や嵐山などで「待つてたがなア……買うておくれイなア……」と煩さく附纏ふのは畑の姥と言つて紅葉の名所の高雄へ行く途の梅が畑村の女だ、腰に長煙管を差して、言說が穢い、此村ではお嫁に行くのに皆裲襠を着て行く、婚家の玄關に着くと、お婿様が裃で迎へに出る、お嫁様は「來たぞへ」と挨拶をする、此は昔宮仕へした人が此村に嫁で來た事がある、其時の事が今に傳はつてるのださうな、或時若い娘様が御嫁に行つたが、恥しうて「來たぞへ」と言はれないのを側から喧しく催促されて、漸く口の中で「來ましたぞへ」と言ふた、お婿様は驚いて一間程も飛び下つて、平蜘蛛のやうに成つて「入らせられましよう」と言つたといふ話を聽いて、大笑ひした事がある、世間には隨分此樣な面白い話があらう、「お愛樣、」呼ばれて振返ると、お春様が西の方から歸つてお來だ、「お待遠うさん」、「いゝえ賣れましたか」、「へイ何やら斯やら」と莞爾、「あれ見とうみ」と友禪を指す、「マア美麗えなア」二人で彼れこれと品定めが始まつた、暫く見惚れて居たが遲く成てはと歩き出した、途々種々と話をしながら熟熟さう思つた、私等の事を琴歌などに作つて、大變好いやうに人様は仰しやるけれど、私等にしては一寸も面白くない、丁度林に歌つてる鳥や、池に泳いでる魚のやうなものであらう、野の雪や霜を拂つて摘んだ七草、山の荊棘に手足を切られながら刈つた穗長、引いた小松、さては春の蕨、秋の薄、花畑の種蒔やら、手入やら、一年三百六十五日、雨が降つても、日が照つ

ても、風が吹いても、雪が積つても、お正月とお祭とお盆との他は、一日とて休む暇はない、遊ぶ時もない

宅にお金が在つたなら、今頃は女學校にと愚痴も出れば、涙も出る、彼の古代紫の袴を穿いた姿が羨しうてならぬでもまた考へて見ると、お父様や兄様はコッコッコッと毎日石を刻んで御ざる、お母様はせつせつと畑うつたり機を織つたりして御ざる、私とした事が好な雜誌も買つて頂けば、お裁縫にもやつて頂くものを、話したり、考へたりしてる間に、



お春様の家の前に來た、「貴女お正午からお行きるか」、お春様は立止つてお尋ねた、「へゝ…行きます、彼のお羽織を早うせならんさかい」、「そんなら誘ひまつさ」、「何卒…さいなら」「さいなら「お別れして家へかへつた、コッコッ、、石を刻む音が、正午近い靜閑な村の空氣に幽かな震動を傳へて居る。



二ツの感情

蜑乙女

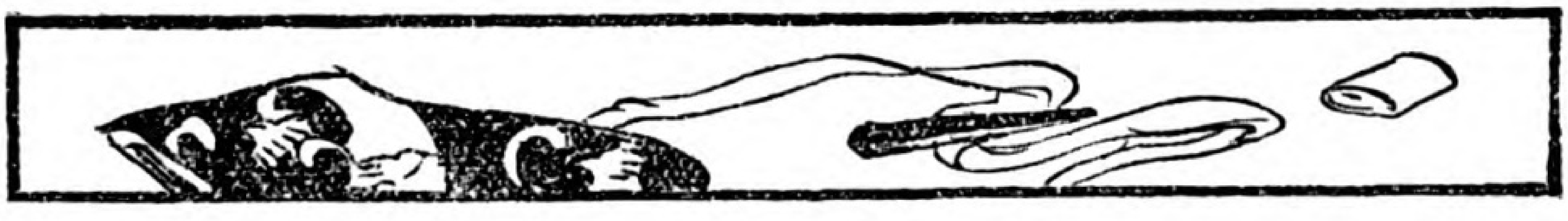
○

厭はしきは、威張る人、見識振る人、又強て卑下したがる人、我が方のみ喋々しく饒舌り立てる人、又宗教臭味の過ぎたる人もむつかし。打對ひたる人を事讃めたるも。人と談話し居たるに、受け張りて横鎗入るゝ人憎し。洒落の通せぬ人。輕く云ひ出でたるを、心に入らぬ樣して問ひ直されたるこそけうとけれ。又自慢云ひたがる人。せぬ人は床し。自ら云はずとも、善き事はよしと、直に人の心に映り來るものぞ。生中に自慢したらむは、却て心後れてこそ、見ゆべけれ。

○

初對面にいと〳〵、打畏まり給へる君、此方より心易く待遇參らするに、些馴れてよりは、忽ちかども無う亂れて、心の儘にあざれ給ふ。さりぬべき際こそ有れ、由ある人の、左ばかり振舞ひ給ふは、いと苦々し。

電話のお取次に出でたる婢の應對無作法なる、顔は見えねどもいと憎らし、主婦の君常々もよく敎へ置き給はゞとなむ、婢の方は先づ差し措かれて。





○

熟々と此頃は、巧妙なる辭令の必要を感じ來りぬ。風流かなる人のすら〳〵と、聞く心地もよくしとやかに續け給ふが、打對ふにもいと有らま欲しきに、心に無いこと申しません流の我も、些、心に無い事も申せる樣に成らばやと願ふ樣になりぬ。

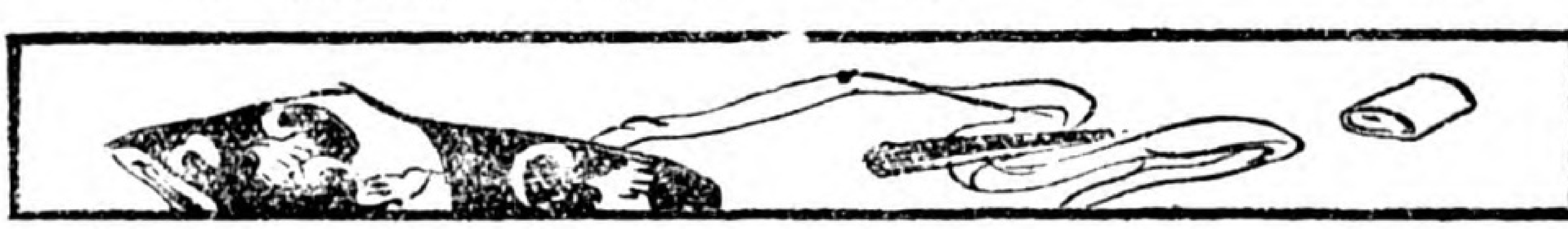
さるにても某の君の樣に、餘り踏外し過ぎては、云ふにも、聞くにも、笑ふにも、將た感むにさへも一々に表情し過ぎ給ふ、いと厭やらし。かくては却て無骨なる方や增さりたらむ。

良しと見置きし人の、思ひかけぬ缺點もたまへりと聞くは、いと〳〵佗しくも、又辛らし。悪しき友より善き處見出でたる、引替へて嬉し。

商人捕へて、よく物値切る奥樣。品を古るしと誹り、價を高しと罵る。御氣に召さずば買ひ給はずもあらむ、日頃は御閑雅にもて振舞ひ給ふ君の、愛無う御人柄ぞ見透さるゝよ。

蔭にて、商人の笑ひて云ふ、彼の夫人は、必ず何品にても幾許か負けさせねば求め給はず、我等仲間は皆心得果てゝ、始め何割かの掛値なし置き、偖、負けよとの仰を待ちてより、實價に迄減きて差上るなり。最初より値切給はずは、御互樣に何の世話も無くていとよきに、と。

負けさせつとて、得意に在すらん其奥樣よ、邪氣無くも見えさせ給ふ哉。





○

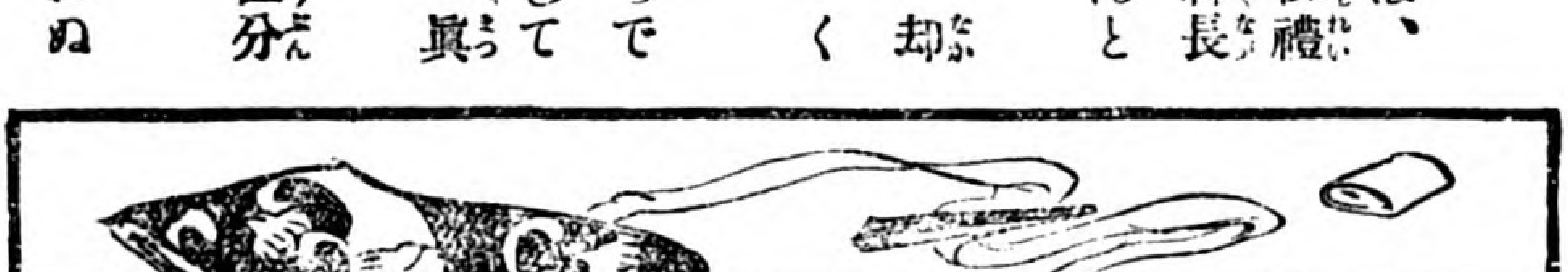
我、草花を好めばとて、さる君の。此度斯樣々々の良種、外國より贈られたれば、近き內に參らせんをと。由來何や彼や、鹿爪らしう御吹聽ある。いと難有き由、御禮聞え上げ置きて、偖、程經にける頃、いつぞやお話ありし種子に付き、再度御講釋長長と有りて、此度私共のと一所に蒔付け置きたれば、二葉にして分けて參らせんとの給ふ。恐入りぬ、何分宜くと御挨拶申上げつ。

又程經てより、苗の生育いと良くなり侍りぬ、蕾など出で來ば御屆け申させん、却却よき花の咲きぬ可きぞ、など仰するに、又詮方無くて御禮の二たび三度、云ふべく餘儀無くせられつ。

漸く頂戴して見れば事も無き花の、何の妙華園邊り迄探さずとも、其處らに幾らでもと云ふ樣な氣の起り來るは、一とつには餘り勿體らしう御講釋聞かされて、そして御禮云はさるゝ不快さの鬱氣したる爲にや有らむ、不意に此の一鉢賜はらんには、眞實嬉しからむを。

此君の遣口、總て如斯。惡氣にも在せねど何と無く自慢して、恩に着せたき御性分と知りては、却々に遣りて悅ばれぬ損な御氣性と隂ながらも。

かゝる事書い付けにて、あな、我をこそ先づ、我が厭はしき人の數の內には入れぬとて獨りこそほゝ笑まれける。





臈たけ花散里の君と、鬼才とて歌はれ給ふ千代子の君と、何れをか好み給ふとて、人惡るき君の、我が心根を量らんの御物指し、我が成るならば紫式部こそ、友にと持たんには、猶清女が舌こそ面白からぬ、好めるは何方をもと云ふ。事なの御答へやとて笑はれにけり。○

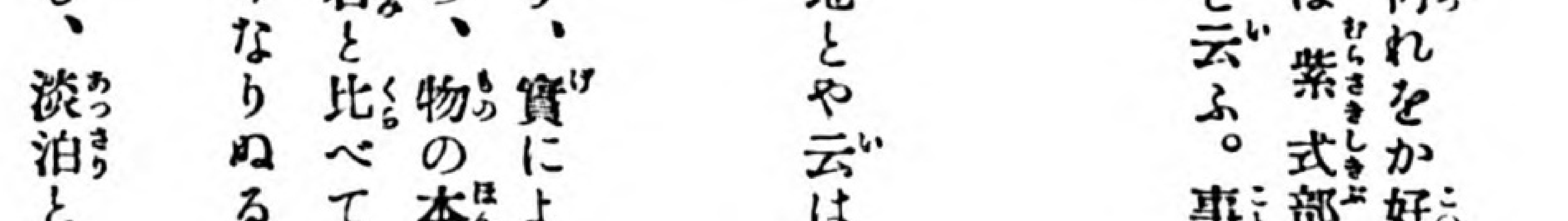
○

いとよき友の、筆不精に在しけるこそ、玉の巵底なき心地とや云はむ。隔てゝ住む日はいとゞたづき無しや。

嬉しきは屢〻手紙來るゝ人。

さはれ、此の願ひに叶ひし友の中に、一人異例の君在しけり、實によくぞ心に懸けて、度々文おこせ音信給へれど、いつも〳〵手紙の文か何ぞの、物の本より抜け出でたらん如き御文書、極り文句は讀むにも張合なかりき、他の君と比べては御志の深さ淺さには劣り給はねども、先づ讀むは後廻しにと、我知らずなりぬるこそ、いとほしとは思ひつゝも猶、然なりにけれ。

餘り心美くしき友よりも、時には惡戯も、厭味も、口論ひも、淡泊とした程度に於て爭はんこそ面白けれ。





良きは心合ひし友。と、誰もたれもの給はすらん。

心は合ひぬとも蛤の、はたと合はすれば合ひて間隙だも有らぬ樣なるは、無きもよし。

我が好く友は瀧川の、滾つ流れの岩に堰かれて、割れて碎けては、又一とつ、合して、末流に流れ行く底の人こそ望ましけれ。

心狹まくては、かゝる交りの末は遂げじ、半途に怒りて拗ねて、背向きにぞならんとすらむ。

拈くれたる友好みなりや。

○

父君、宮本武藏の流れを汲みて、兩刀を巧みに使ひ給ふ。御酒の膳引下げての後に栗饅頭結構、羊羹又妙と、當るを幸薙ぎ立て給ふ。我も又、甘刀の腕利きなり。されば到來の御菓子折など、見事に一夜を出でず忽ち空々箱々となり了りて、御客來の折、時に麻誤付く事も不尠。

をかしかりしは懷かしき友の、何日々々に伺はんと有るに、廿丁も隔てし菓子店より殊に君好み給ふ品調へ置きて、午後ともなれば今や來まさん、今や、と、待つにも猶來らぬ友、既に夕餉もはてゝの後に、菓子の戀しきぞ先刻の品出さずやと父の仰する、同じ心の立つ腰も輕し取出して、食ふ程にける程に、漸く盡きなんとする此時早





く、御免遊ばせよと覺え有る優しの御聲、飛び立つ許りに懐かしうも、又憎らしくも。

まあ、つい遲くなりまして、お待ち遊ばしまして?、と見上げ給ふ御眉付、崩るゝ例の御笑顔見ては、怨みも何も解けはてつ。

さはれ折角の心盡しは、既に消えて果無くなりにたれば、只その御談のみを御馳走しつるに、君打笑み給ふて、寔に御志の嬉しう、却々結構な味に頂戴致しました、との給ふよ。

其の美くしの御言葉故にこそ、忘れ敢へぬ懐かしの友にて在しけれ。

伊太利や佛蘭西の贅澤な料理法に費やす金高は、材料に金がかゝるのではなくて料理の手數に費やすのである。佛蘭西や伊太利が一般に料理法が進んで、その爲めに一般國民の味感が贅澤になり、食物に無駄な金をかくることの多いといふ現象は國家として目出度ひことゝは思はれない。國運が段々と疲弊して衰亡の運に陷りつゝある所以は、恁ういふ點が主なる原因ではないかと思はれる。此點からいつて、日本の如き新進の氣運にある國民は、矢張り茶づけに澤庵で通す位の意氣込みで進んだ方が却つて善く働けるではないかとも思はれる位だ。殊に近時味感が贅澤に慣れて、それに應じて料理法が進んで行く結果、段々と料理が食物の材料の滋養分を減損せしむる傾きがある。食物と身體の健康との關係に就いて注意する人は先づ此點に深く注意して貰はなくてはならぬ。





四十女の口前

登志子

兎角世間は義理で持ち……つて申ます位で、人に好かれるのも、又嫌はれるのも、畢竟僅か之丈の詞がよく味はれないから起る事だと存じます。生れた許りの赤兒が慈愛深い親や血族に好かれるのは、人情の然らしむる所。又長い病人が周圍の人に嫌はれるのは、それは嫌ふ人の方が間違つて居るのですから、それ等は別として。凡そ一人前の人間が、數多くの人と交際し、世の中に出てからの後。あゝいゝ人だ、なつかしい人だと同情されるのも、いやな奴だ嫌ひな人だといはれますのも。幾分か小さいからの習慣にもよりませうが、つまり其人の心掛次第だと思ひます。

御覽なさい。私あの人大嫌ひよといつてる人に、其先方の人が好きだといつてる例は、めつたに、ありませんもの。私の小さい時によく父樣に、出入の或る一人を嫌ひだと申しますと。お前が嫌ひだといへば、先方だつてきつとお前を嫌ひだといつてるし、お前が其人をこなせば、又其人もきつとお前をこなしてるに相違ない。だから決して人の事を嫌ひだのといつてはいけない。まだ子供の時はそれでもいゝが、成長つてお嫁にでもいつた時には、千人の味方よりも、一人の敵の方が恐ろしいものだから、今から假令どんな卑しい一人の人にでも、惡まれぬ樣に注意せねばならぬと教へられましたが、全く其通りで、情は人の爲めならずつて。

私、もうほと〳〵感心しましたの。人に親切を盡す時には、決して自分にも此厚意を返して貰ふなどゝは、夢にも思ひませんけれど。それが未來といはず、現在

に直ちに何かになつて返つて來て居るではありませんか。まあ一寸お友達の病氣の時にあゝお氣の毒だ、おいたはしいと心から同情して、時々御見舞して上げますと、今度自分が病氣した時に、第一番にかけつけて、親切にいたはつてくれるのはやはり、其友ですものね。蒔かぬ種は、はえぬとかつて、多くの人に好かれるのも、嫌はれるのも、皆自分の蒔いた種に外ならぬのです。

『人には好惡の望みといふものあれば、漫りに侵すべからず。』――之は幼時に敎はつた何かの書物にあつた樣に思ひますが。それはもう好きといひ、嫌ひといふのも、皆其人々の心理作用で、最初に其人の心にうつる觀念が基となつて、永久に離れないので御座いませうけれど。或る人には好きな事が、ある人にはひどく嫌ひな事があり、一人の方はさほどでもない事を一方の人は非常によろこぶ事もあります。そこで蓼食ふ蟲もすき〴〵つていふ詞が出來たのですわね。

人の感情には、昔も今も變りは御座いませんでせうけれど、未開の時式と文明の世と比べては、自然其範圍も違ひませうし、好惡の觀念も多少異つてるだらうと思ひます。未開でなくとも、つひ、五十年の昔。德川將軍の時代のやうに、交通の便もなく、智識の扉も開かれず只舊習を守つて、一國一村にへたばりついてる生活ならば、好きといつても、嫌ひといつても、其たづさはる處は、ほんのせまい小さなもので、父母や夫や、近村の僅かな人達丈に、嫌はれないやうにさへして居ればいゝので、敢て六ケしい事はありませんでしたらうけれど。四海同胞とまで開けゆく此大御代では、昨日奧州の方と交り、今日は九州の人と談す許りでなく。寒風はだえをさすてふ北海に育ちし人が、風俗人情異つた琉球人と結婚するもありませうし。緣なればこそ、妙齡花の如き令孃が、言葉も通せぬ外國人のマダムとなるも珍らしくは御座いません。

晨に新橋を發車すれば、いづく如何なる國の人、如何なる階級の人ともしれぬ、澤山な友達と中むつまじく、霞たなびく富士の高根の崇高なる樣も語り合ひ、

夕には、早や京都に着いてある世の中です。弦齋樣の小說、深山の美人でない限り。はた亦つひ近頃、千葉の病院にあつたと聞く天狗樣でない限り。今は一日も人の同情といふものなしに滿足に、生活はなし得られない時代になりました。強ち感情の動物といはるゝ女子でなくとも、此同情といふ寶をなくしては決して滿足な結果は得られません。つまり僅かな不注意からでも一朝人に惡まれ嫌はれては、もう容易に、取返しはつかないのです。人に好かれよろこばれてる人に比べて、假令それ程才あり學深くとも、決して、運命の寵兒となる事は出來ないもので、將來どれ丈の損失となるかもしれません。殊に初對面の時に於て、いやな奴だと見込まれては、もうどんなにあせつても、其人とは到底圓滿な交際は出來にくいものですから、其折には一層注意せねばなりません。尤も一旦の誤解がとけて、一層親密になるといふ事も、強ち、ないでは御座いませんが、それはまあ、ほんの例外中の例外で、普通の場合には、到底望む事の出來ないものです。


お洗たく

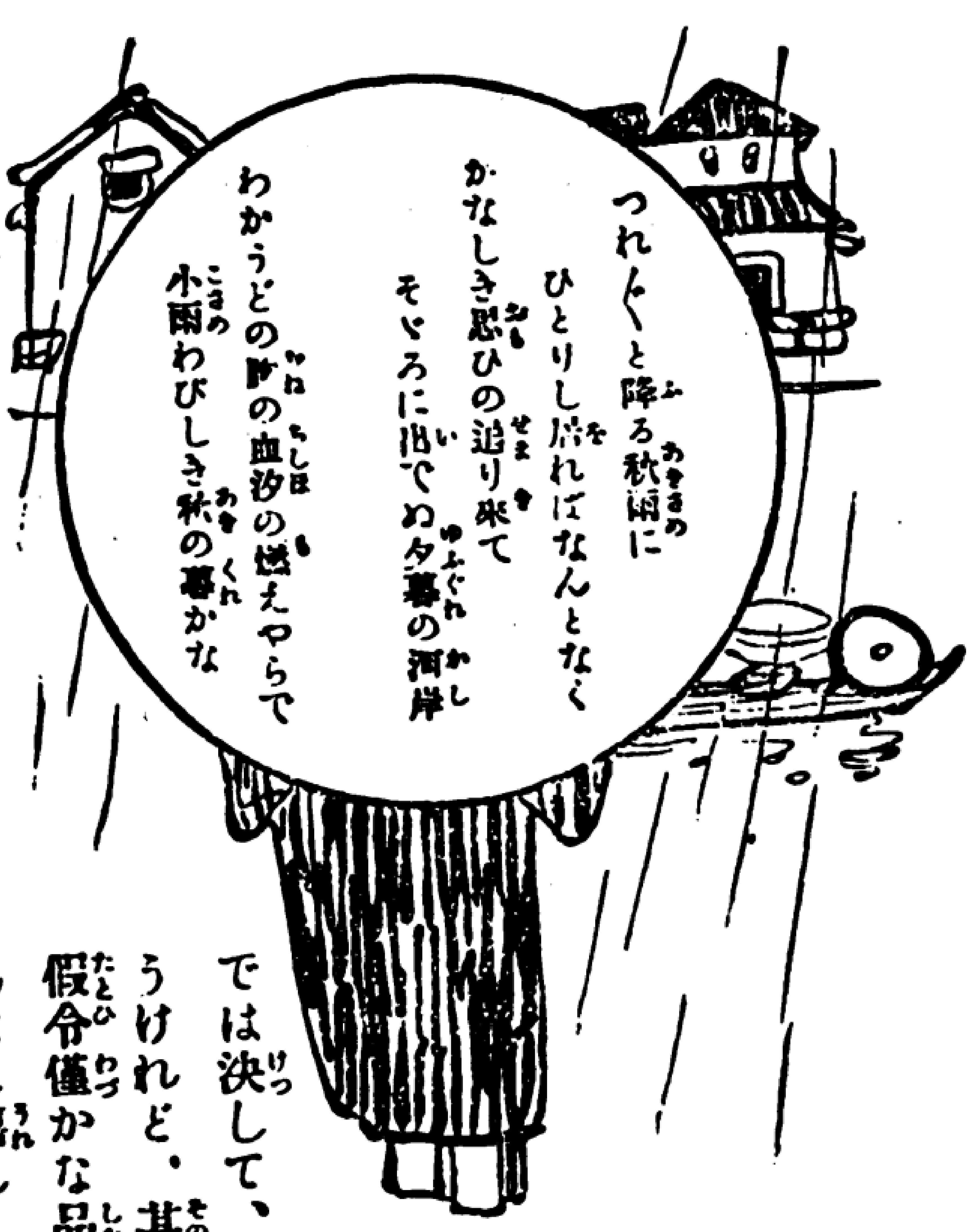
あの國と國との交際、即ち外交などでも、明治のある時代には、よく外國の新聞記者などに、少しの事から心にもない惡感を與へ、爲に思ひもよらぬ不結果をえたなどゝいふ事もあつたやうに聞きました。大きな事でさへも其通りですもの、況して感情の世界とい

はれてる女子の交際は　言葉にも行にも、よほど注意せねばならぬと思ひます。

　先達ても、宅を御訪問下さいましたある奥様。それはもう一通り教育もおありなさるし、今は立派な方の奥様です。いつもお心易くしますので、あれやこれやとへだてないお話をいたしてますと、お歸りもはや夜分になりましたので、道もわるく、又夜中の一人歩きもと存じ、聊か敬意を表する積りで電車迄女中に御見送りさせました。所が其奥様が、道々、女中にお宅の奥様はよくお氣がつくかの、お暮らしはどんなのか、旦那様はどうの、お給金はいくらの、お貰ひ物はあるかのとお尋ねになるのですつて、女中が歸つて、まあ、あの奥様は御身分に似合はないあんな事をお尋ねになりますつて呆れて居ます。私もそれを聞きまして、もう次の御訪問を受けました時からは、垣一重隔てた心持で、中々うつかりお話はいたしません。つまりそれ丈御自分の人格を落し、信用をも御自分で失はれたのですね。之等は人に、いやな感じを起させる許りでなく、やがて御自分が嫌はれる基となるのです。

　食事の時間をかまはずに、訪問する人も、御自分では何の氣もつかず、晝食位頂かなくともと思召してるでせうが。主人側ではさうはまゐりませんから、一二度はまあ宜しう御座いますが、度重なれば嫌はれますね。それから心にもないお世辭をいふ人も、いつかはお里が知れて卑まれます、奥様はちつともお出まし下さいませぬ、私がお邪魔に上るばかりで。どうぞむさくろしう御座いますが是非一度御出掛をなど丶仰しやるので、正直にお受して御伺をし、玄關で女中に名刺を渡してまつてると「あ丶うるさい此暑いのに」といふ聲が聞えます。やがて出て入らした奥様、今のお聲はどこをおせば出るのやら、それは〳〵もう〳〵手に入れて、丸める位のおもてなし、之位なれば、あんな事をいはずともと思はれますが、畢竟お心からでなく、ふつと、お口から出るので御座いませうが、損な御性分だと思ひました、あまり謹しみなしに、口數の多いのは、こんな損な場合が御座います。氣がつかぬとい

ふ事も、強ち嫌はれもしますまいが、好かれる事はありません。併し一家の主婦は、凡ての人に嫌はれぬやうに、而して經濟家にならうなどゝは、決してなし得られない事で。家の衰へぬ程度で人に嫌はれぬ樣に、心掛けねばなりません。恒産なきものは、恒心なしとかつて。自分に不時の災厄に打勝つ丈の準備もなく、何かといへば。忽ち人の厄介となり、人の財産などを目的にして暮らして居つては、いつも人に恐ろしがられ、嫌はれますから。假令、生活程度は低くとも、高くとも、身分相應に萬一にそなへる丈の餘裕を作り置かねばいけません。而して外の交際等では、上役の方に相當の禮儀を盡し、進物をもするのは、當時では當然



の事の樣ですけれど。もしも、それが下級の人から貰つた場合には、決して其まゝに打すて置かず、其物相當か、或はそれ以上にして返禮してお上げなさい。下級の人は、決してありあまつて持て來たのではなく、世間の手前義理といふ二字で、交際する以上、しかたなしにくれたのですから。生活難の烈しい此頃では、其中に血の涙が交つてるかもしれません。持てくる方では決して、返禮は豫期して居ないでせうけれど、其豫期しない所へ上の人から假令僅かな品でも、貰つたとすれば、どんなに嬉しく、どんなに德とするでせう。やがて其奥樣はいゝ人、よく氣のつくすきな人となるのです。それが即ち延いて、夫の信用ともなり、多數の人の同情ともなるのです。



又見聞がせまく、いつの時でも同じ千遍一律のお話、之まで幾度聞かされたか別らないのを、もう伺ひさしたともいはれず、聞いて居るのもよほどつらいものですから、一度いつた事は、再びいはぬ様に。いつも世態の事變に、心をくばり新らしい話題を拵へ。其人の境遇や身分によつて、それ相當の話を擇び。人の噂や衣服の話などは、成べくさけて、害にならず人の迷惑にならぬ談話をし。且相成べくは相手の人に談して貰ひ、自分は熱心な聞き役になるといふのも、人に好かれる近道の一つです。

而して人を訪問しても、あまり長坐せず、まあ殘り惜しいといふ位で切り上げて、其間の時はどうでもいいが、逢つた時と、別れぎわとは、殊に注意して、相手の人の心に、なつかしい人だ、頼もしい人だといふ感念を抱かせるやうに。當時の熟語で申ますならば、人をチャームするといふ事が大切です。何事もあつさりとして、くどく厚かましいといふ事は、あく迄も謹しまねばなりません。

世には詞上手にお世辭をいつて、却て惡まれ嫌はれてる人もあり。無口で挨拶も、ろくに出來ずに好かれてる人もあります。要するに人と交るには赤誠の二字を本とし、奢り驕ぶらず。心からの同情、即ち親切といふ事を忘れずに。好かれやうとして、心にもないお世辭を並べるよりは、僅か一人の敵をも作らないといふ程度に、何事にも注意して居つたならば、あまり處世上には損失しなからうかと存じます。



ノートブック

白芙蓉

○

年末、年始、さては暑中の御見舞をば、一片の葉書に二三行、さも〳〵義理でと云はぬ許りの音信、受けてはかゝるもの送さずともと誹らひながら、來ねば又何としつるなど、誰しも云ふ事ぞかし。

拙の長文とは昔よりの云ひ習はし乍ら、猶親しき邊りへは思へる儘を無駄言多く書い付けて、蔭にや笑はれてぞ有りぬらむ。

いと昔氣質の家にのみ、文の樣、常々心して書きける積り乍らに、いつか漢語の二ッ三ッや交りけん、女子の文は只昔ざまに、なよなよと和ぎたるぞ良きとて。打付けならねども御氣色惡しくと洩れ聞きてより、母の昔手習に爲給ひしと聞く奉書の折手本、美くしう散らし書いたるを、色々と讀み馴れて、偖其型に入れてぞ伯父君には參らせけれど、怪しう其折のみは我を欺きて書くらん心地のせられて、思ふ事も打出でず、心ならずも途絶え勝ちになりぬるこそ我が儘なりけれ。

練習の爲めとはの給へど、若き女の矢鱈英文の手紙ものさるゝは大人しからず、頂きてもすら〳〵と讀み得る我ならばこそあらめ、用無き事に幾度か字引ひき出だして、是に頼らんが心うく。

幼き人よりの片假名のみの手紙、兎もすれば讀み誤り爲易くてたど〳〵しきに、是にも增して煩はしきは羅馬字にぞありける。物數寄なる君の、折々此の字もて書き送らるゝ、心周章しき時は忌々しくて、讀みも敢へず打置きけれ。

葉書にはペンの方書きよきを、我のみと思へりしに、友も又多くは然のたまふ、さる間に多く洋風のレター

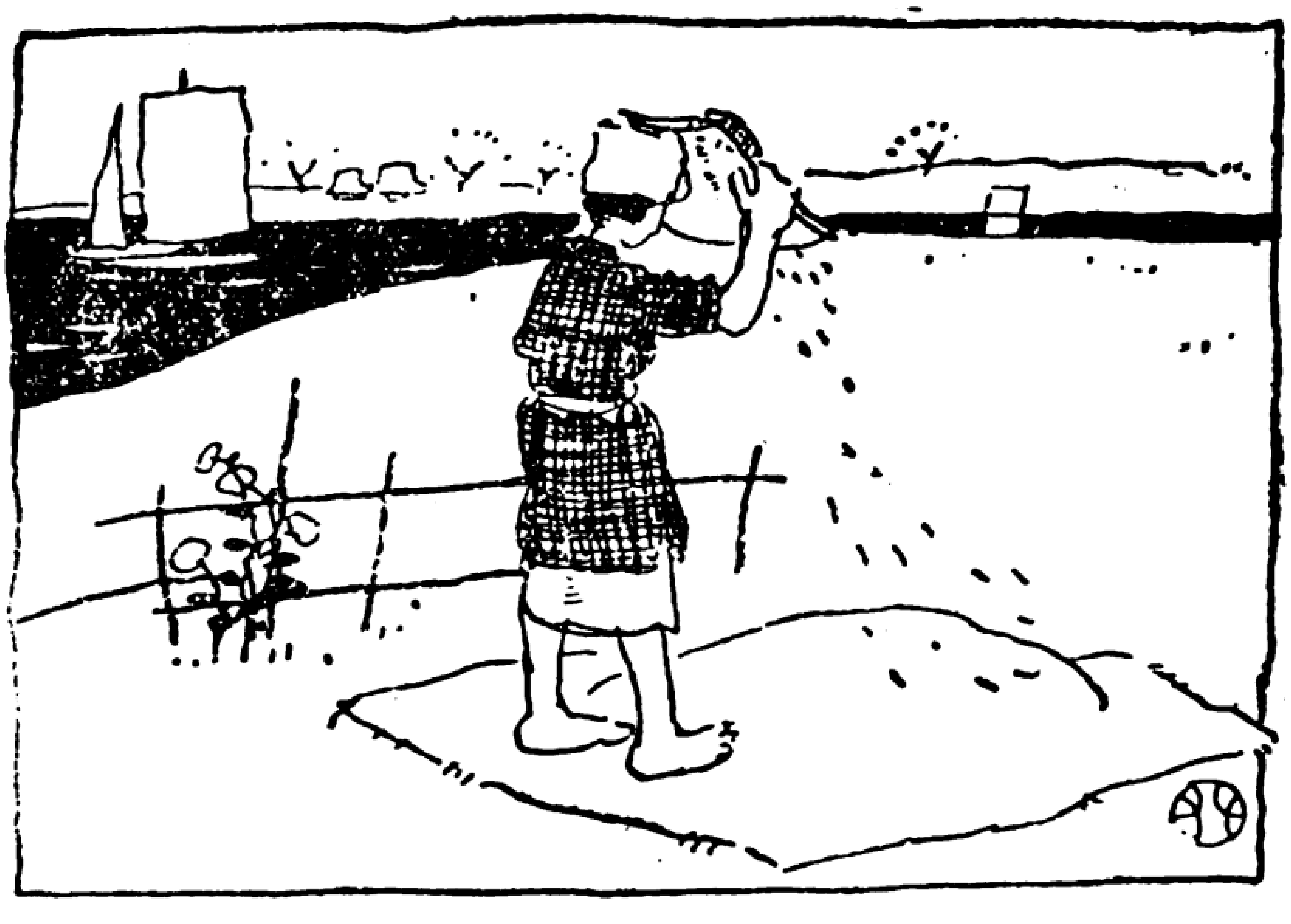
ペーパアは使はるゝものを、此紙の粗雑なるは江戸川紙よりも風情なく、さりとて親がゝりの身に舶來の上等使用ひ居たるは、又憎くこそ在れ。

惡筆は薄葉に書く可からず、見難さ一段と目立ちて見ゆ。

奉書は文字美くしう見するもの、此紙の繪半切には、大方の辿辿しき手蹟も紛れてきよげにこそ見られけれ。

みしん入りの卷紙使ふ人に、能筆少なきは如何なる故にや。或は我が處へ來るものゝみ然るにやあらむ。

文字美くしき君の、常も榛原のよき用箋に書き送られける。拙きも敢へず打返し〳〵、我もかゝる紙に書かばやと云ひては、字を能く書かむとは爲で、紙のみ撰み居たるよ、と、よく母の叱り給ひにき。何に書きても能く見ゆる字になれとのみの給ひけれど、今も猶紛らさん事を勉むる程の云ひ甲斐なさよ。



繪はがきは既に勢ひ劣ろへての今日、舶來の美くしきも今は嬉しからず。折につけたる記念繪葉書の殺風景なるは況しても。

拙にもあれ、只其人の肉筆もて、曲りなりにも畫かれしは興ぞ有りける。中に就ても旅行先きより風物のスケッチ贈られたる、土地の俗謠二ツ三ツ添へ有りしは、云ふ可くもあらず心利きたるよ。

コロタイプの名所繪はがき、安ぽきそれも時にとりての興作ら、心無き男のむざと繪の上に惡筆振るひ落されたる、有らずもがなと最こそいみじかりけれ。そ

の返り言は、我知らず惡さげにや書きにけんかし。さる折、文字有らば詩か、句か、將又は歌乎。さも非ずとも言葉少なく、餘情含められたる、在らまほし。

さる方へ用の事云ひ遣はさんとて、誤ちて切手張らずに手紙を投函しぬ。憚りも無き人なれば、ゆるし給へよとて追かけ後より不足額の切手封じ込め送りしに、御差遣はしの切手確かに落手、去り乍ら其の御手紙には、又切手貼りて御座なく、と笑ひ返されたる、我ながら一生の不覺なりける。

返事求めんとて、返信用の切手封じ込むる事、よく先方の身柄に心すべき事なり、ようせずば侮みしたるやうにもぞ。

よき墨は、薄墨にして書き流したるもなつかしう、濃き將句ひやかにして最めでたし。佳からぬ墨もて濃く書いたるは賤しげに、薄くしたるは又侘びしかるべし。

衣に譬はゞ、墨色は帶によそへ、用紙は着物に比すべうや。良からぬ紙にも、書きたる墨色美くしきは好もしう、是と反對なるは無下に見劣りぞせられけるよ。

○

某婦人雜誌を机上に置きて、何心なく打守り居たれば風の來てひら〳〵と頁を飜す。六號活字のみの處、一二行置きにレタアの三字のいと繁く散ばり居たるに、不圖眼を止めて何事ぞと見れば、皆是誌友よりの投書なりける。

此の欄は、何雜誌にもよく有り乍ら、いつも見逃しにき。是は餘りにレタアの文字の目に着く儘に、試に讀みて見れば。

天下の諸孃よ、何卒淋しき私に御レター頂戴な、と有る。天下の諸孃の仰山なるよ、又、皆樣、御レター下さいませんか、と。御の字使用て迄も、猶レターと書きたくてや在すといとをかし。此雜誌の讀者は、女學生、又は其れ以上の君達と聞きけるを。

親しき人の間だに書信の往復は、實に樂しきものゝ一つに我れも數へつれ。さり乍ら家も知らず、人も知

らず、氣性將た知られぬ多くの人に交り求め給ひて、何の興をか見出で給はんとすらん。物多く知る益よりも、害の方、より以上に伴なひては來らずやと推し量らるゝは。

心有らん父兄の、よも此の求めに應ずるをば許るさせ給はじ。

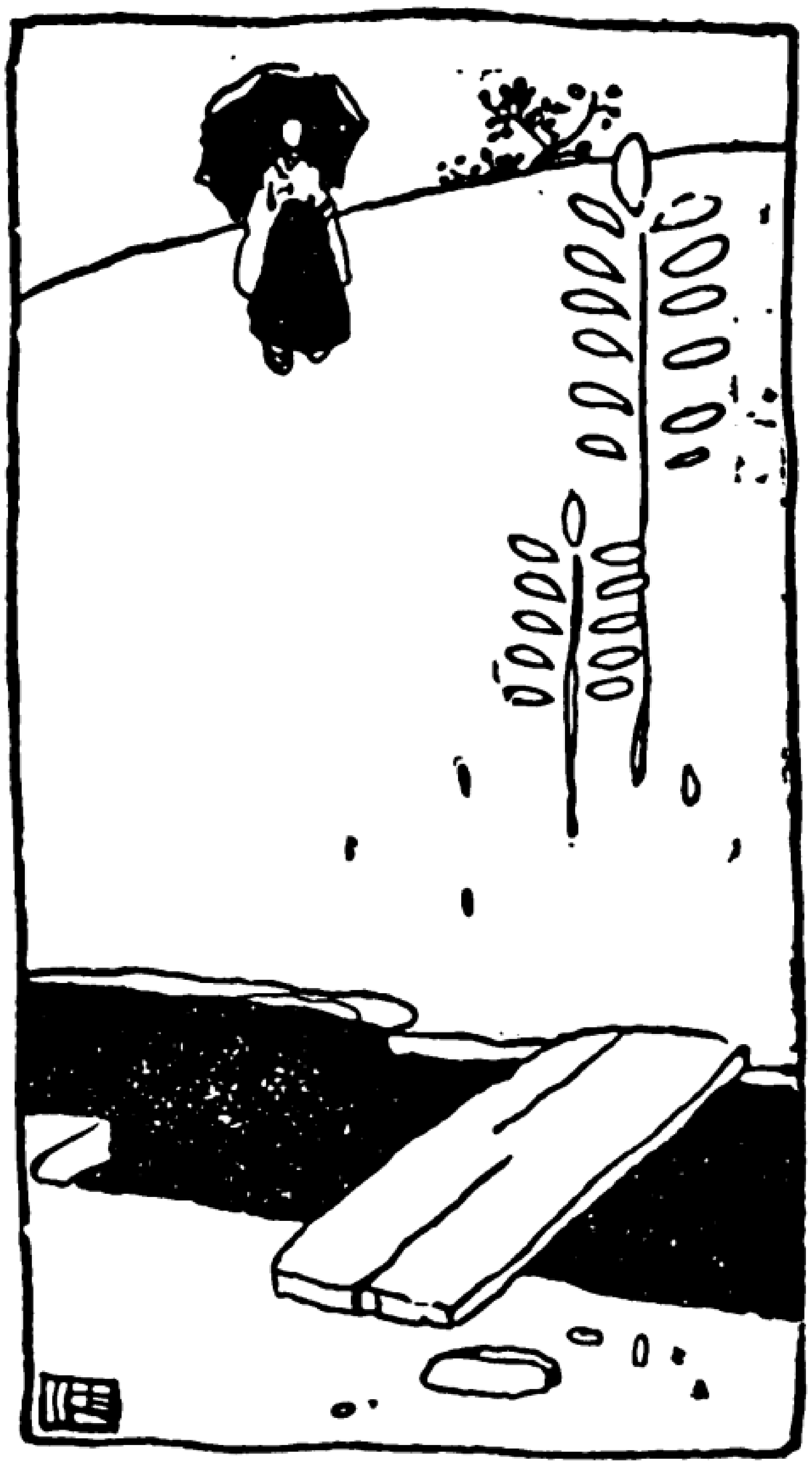
○

何事も今は算盤づくの世の中なる哉。彼の手を翻せば雲となり、手を接へば雨となるとかや。

彼の友にならば是位は奢つて置いても、差引損になるまじと、胸算用に友誼見せ給ふ紛々たる頼もし人はまだしもの事。心ぞ打込む戀路の沙汰にも、先づ是をば先に立てゝ、若き乙女の賢き事よとて、去る君樣の驚かれにき。

今は事古りにたれども、彼の老伯爵と若き君との御結婚沙汰、津々浦々迄訓へ草にも、將有らぬ方にも名に歌はれ給ひにし、それも終に破れぬと聞くこそ、さればよと人の我賢に云ひ陷すめる。

傷はしや命を若きに葬られて、世を狹ふや送り居給ふらん。嫁くとても、又破るとても、我一人の心のみには有らざりけめ。女は弱きもの、周圍の事情をもよく知らで、一方にな云ひくたし給ひて爭がふも、をかしや誰に賴まれての御擔人ぞと、云はれては我知らぬ心なりけり。



男は、事とし有れば皆女の慾に云ひ做すが憎くき。

さる開業醫の、妻選みの御注文には產婆か看護婦の中よりといひ給へる。理窟は付け樣にて何うとも付けど、家よく治むる女を高等下女とか云ふ類に思ひ做さ

れて。

又玄關前見よげに貼出だしたさに、富家の女を物色し給ふ新爵學士の君。

官途に入りたる人も、我こそ赤門出よと、名乘りは立派ながらに、猶出來得可くんば妻閥と云ふ勝手よき罪に當りて欲しく、誰樣某樣など、巧く縋り付きたるは時を得顏に南瓜の蔓の、隣家の垣まですると〳〵這ひかゝりたるよ。

さる家は女天下なるも、勘定づくにて旦那樣御不承遊ばし、陰に小さく跼まり給ひては、やる瀨なき日のみや紅燈の光り懷かしみ走り給ふらむ。

○

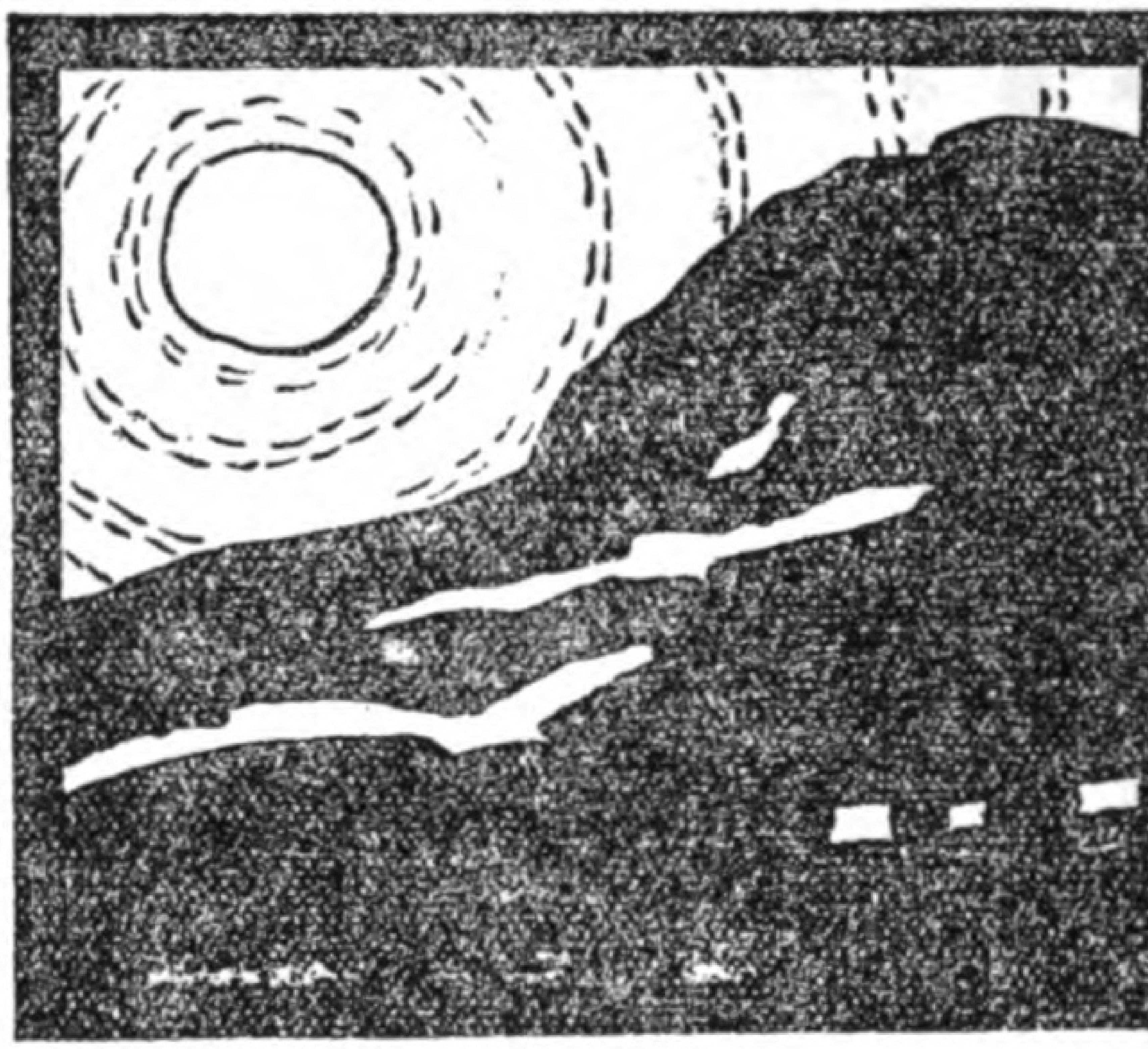
我が緣りの家、昔時はお大名として肩巾廣く、明治の少し以前西の京なるお公卿樣迎へ入れて御養子とせられける。

家督遊ばさるゝ折、受け繼ぎ給ふべき家寶や、軍用金として蓄はへらるゝ小判や、三寶幾箇にうづ高く積み上げて、是ぞ君が御物と家老より聞えける。

新殿樣、中にも小判を珍らしきものに取上げ給ひ、稚兒の玩具よろこぶ樣にして、小半日はもて遊び給ひきと、折に觸れたる語り草に聞き傳へたるを。

此君、世と共に世才も進み行き、既に老いての今日は、歲計の事何くれと無く、御自身お指圖下されて、公債の上値下落、さては何の株は七朱の配當なりなど、鹿爪らしく仰せらるゝを、聞くはをかしく、見れば猶更に、昔の邪氣無き御自らを思し出づる折も有りやと、口にこそ出さね、御顏の打まもらるゝ。

世に連れてはなべてに移り行く人の心中に移らで殘され給ひし我父はや。今は無益の贅澤は許す間敷き、小さき會計、預かる我に、折々膽冶やさする樣の事爲出で給ひては、支ふる我を吝の樣にも取なし給ふ。楯もつかれず横にも出來ず、とは云へいつも我れの負けになりて、無言の見得宜しく、兎も角も幕は引かれける。



月夜の品定め

朽葉

十六夜ですわ、エヽ、眞實に綺麗なお月樣ですこと、
アラまた笑つてゐらつしやるわ、口癖ですもの仕方がないじやありませんか、どうしても私には樣をつけなくつちや氣が濟まないのよ、お日樣お月樣お星樣で一生涯通しますわ。

昨夜はそこの芙蓉の根で蟋蟀が鳴いてゐましたの、エヽ今夜もきつと鳴きますわ、ま御緩りお話し遊ばせなねエ、ホヽ、事によると私一人でお喋舌して了ふかも知れませんけれど……

アラ露つぽい風が……もう可成冷えますこと……
今夜あたり綾さんがゐらつしやつたらそれからそれと詩的なお話ばかりどんなに面白く續くんでせう、私なんぞ俗中の俗ですもの、自分で愛想が盡きますわ……

綾さん

ですか、エヽ、私あの方好きなのよ、別にお世辭いつて他人の歡心を買はうとなさるんではなし、暇さへあれば何かしら藝術的の書籍讀んでゐらしつて、誰とお交際なさるにも、たゞもう裏表なしの穩に優しい氣分でゐらつしやるんですもの。

學校の運動場などでは、よく他人は他人の仕たいことをするがいゝ、自分は自分の考へたいことを考へるつていふ樣な見えで、白楊の樹に靠れながら、ぢつと

際限のない碧空を眺めてゐらつしやることなどがありますわ。

この前の遠足の時に××池の畔で休憩した事があつたでせう、初夏の木立が艶々しい緑の影を澄みきつた水にうつして、あたりに伸びた草の上には白い蝶々が幾つも〳〵輕く飛んでゐましたつけ。

その時ふと綾さんの影が見えないのに氣が付いて、何處へゐらしつたらうつて皆で心配してゐましたら、集合の笛が鳴る頃になつて、向ふの森の小暗い中から走り出てゐらつしやるではありませんか、お一人で奥の方までゐらしつたんですつて、そして何といふ草が可愛い、瑠璃色の花の露に濡れたのを大事さうに手巾に捲いて持つてゐらつしやるんですわ。

優しい趣味の方つていふんでせう、毒氣のない、しつッこくない、そして何處とはなしに濕味のある、——始終情の美しさの見える方なんですわ：：

エ、湯山さんですか、矢張りあの方のお隣にゐらつしやるのよ、けれどあれ程違つたお隣同志も珍らしいと思ひますわ、何故つて

湯山さん

位むら氣な嫌な方はありはしませぬ。

何ぞお氣に召してゐらつしやると、獨元氣で引き切りなしに撫でるやうな、くすぐるやうな、氣味の惡い程調子のいゝ事ばかり被仰つては相好崩してゐらつしやる癖に、不意つと面白くないことでもあらうものならよしやそれが針の尖で突いた程の事でしても、無闇にムキ〳〵なすつて、白い眼して二日も三日もお口をおきゝにならないんですわ、ハア何方に對してもさうなんですつて：：、私なんぞ途中でお目に掛つてもツンと脇を向ひてお了ひのことが珍しくはないんですもの：：此方では大抵もう承知してゐますから、今日もお天氣が：：位にしか思やしませぬけれど、でも滿更いい心持のする譯にはゆきませぬわ。

この間も丹羽さんにお氣の毒でならない事がありましたの、土曜の地理の時間ですわ、エ、さう片野先生

よ、前週にお習ひした處を一通りお聽きになつて「オリオン星座の事を話して御覧なさい・・・・湯山さん」つて被仰つたでせう。するとあの方がモヂ〳〵モヂ〳〵してゐらしつたものですから前の方の机で丹羽さんがすつと手を擧げなすつて、綺麗にお答してお了ひなさつたのよ、其時の湯山さんのお顔付、それはどうか知りませんでしたけれどもね、――勿論そんな事敎室では始終ある事なんですから誰もいゝとも惡いとも思つちやゐませぬのよ――處が驚くぢやありませんか、其次の休憩時間からは、丹羽さんが何をあの方に仰つても默つてゐらしつて、終にはずつと遠くの方へいつて三年の人達を相手に何かひそ〳〵云つては、時々丹羽さんの方を振り返つて、例の怖い目をなさるのですわ。「卑劣だわ。」「攻擊しておやんなさいよ」つて皆でいゝましたの。

でも丹羽さんは眞實に無邪氣な方ですわ、「ぢきに直るからいゝわ」つて被仰つて、その癖、目には淚を溜めてゐらつしやるのよ、お氣の毒でなりませんでしたわ。

それから其翌日は日曜して、月曜の朝、私が學校へ行きますと、井田さんが走つてゐらしつて突然「あなた私一人有卦に入つ



てよ」つて言つて笑つてゐらつしやるじやありませんか、何かと思つたらば日曜の朝△△園に遊びにゐらしつて、丁度湯山さんと逢ひなすつたんですつて、すると何といふ沒趣味なんでせう、あの美しい秋草の中でさんざ丹羽さんの棚卸しがあつて、其擧句には私共の事までアラといふアラの陳列なんでしたとさ、でも井田さんはお上手なんですわ、それをいゝ加減にあしらつてゐらしつて、段々と遊戲のお話になつたものですから、「私幾度生れ變つたらば貴孃のやうな綺麗なセットが出來るんでせう」とか何とか被仰つたんですつて……無論お世辭なんですわ……、すると可笑しいわ、それが全然お氣に召して了つて、無暗にチヤホヤなさつた上に、是非これから私の處へゐらつしやいつて仰るんですとさ、エ、井田さんもなか／＼お人が惡いんですよ、「遂に湯山式天候に乘じてお宅までお供しました」つて御自分で仰るのよ、さうしたらあなた大層なお待遇で、とうとうお晝の御馳走まであつたんですつて……、それでまア有卦の理由も解つたんですが、井田さんは皆にそのお話をなすつては、月曜一日獨りでクス／＼笑つてゐらつしやるんですもの、これも隨分な方ですわね。

何しろ湯山さんみたいな　御機嫌買な、むら氣な方には、誰だつて眞面目にお交際するものはありはしませぬわ。敬遠主義じやなくつて、輕遠主義よ、私なんぞ厭で／＼口もきゝたくないのですわ。

……アラ竹の葉がサラ／＼鳴る……、風の音にぞゝつ驚かれぬるつて……

澤よしかさん

ですか、あの方も大嫌ひなのよ。さもない事を恩に掛けてばかりゐらつしやるんですもの。

尤も私なんざまだ世話になつた事もありませんから怖いことはないんですけれど、やれあの方には何を差上げた事があるの、此方には何を敎へてあげて置いたのつて、こちらから伺ひもしないことを人毎に話しな

さつて、勿體ぶつてゐらつしやるのよ、次第に依れば御自分の御恩丈けぢや足りなくなつて、お家の事までも仰るんですわ、そら伊川さんのお兄様……、エ、美術學校出の方よ、あの方が去年展覽會へお出しになつた「山の女」の油繪を〇〇家でお買入れになつたでせう、あれに就ても澤さんはさう仰つてゐますわ、「いゝ鹽梅に私の父が御周旋申して上げたんだ」つていふ譯で澤さんのお父樣が御周旋なさつたのか知りませんけれど、もと〳〵作品が佳ければこそ〇〇家でも非常に御懇望遊したんだつて伺つて居りますわ、それを御自分のお父樣のお力のやうにばかり仰るんですもの蟲のいゝ事ぢやありませんか。



それからまた、××海岸のお別莊の事が大の御自慢ですわ、いゝえそんなにお羨しい程の物ぢやありませんけれど、獨で御自慢なすつて、一昨年の夏牧野さんをも暫く泊めて上げた事があるつて誰にでもお話しなさるんですわ、なに牧野さんに伺つて見ると、丁度あ

の方がお母様とお二人で避暑にゐらしつた時、宿屋が皆塞つてゐるので困つてゐらつしやると、澤さんの方から是非お出でを願ひますつて幾度も〱仰つたものですから、あまり御斷りするのも失禮かと思つて一方に明間の出來るまでほんの二夜御泊りになつたんですつて、「そして厭なお話しですけれど澤さんへは宿屋のお拂以上にお禮も申した積りですのに今以てよくよくの厄介者が無理に轉り込だ樣にばかり被仰る」つてお話なさるのよ、私なぞ御恩をお掛け申すこともあるまい代りには、塵一本でも御恩を着せていたゞく事があつたなら大變ですから、何處が何處まで一切出納なしで通さなくつちやなるまいと思いますの、エ、あのお別莊だつて色々な批評があるんですわ、お父樣があゝいふ方面の方ですから、いよ〱××海岸へ地面をお買入れになつたつて噂のあつた時、宅の父などは、「どうせ眉唾ものだぞ」つて申した位ですわ。

オヤ大分惡口が續きましたわね、少しは善い方へも舞臺を廻しませうか。

金澤照代さん

何といつてもクラスで一番お上品なのはこの方でせうよ、別にお家柄がよいつて譯でもないやうですけれど‥‥

お父樣は日露戰役後にちき陸軍少佐か何かで御退職遊ばした方なんださうでして‥‥、照代さんはそのお獨子ですわ、何時も端然として落着いてゐらしつて、私共見たいに騷しい處は塵程もありはしませぬわ、お服裝も華やかなのはお厭だつて寧ろ地味すぎる位ですけれど、それがまたあの方にはよく調和して何とも云へず高尚な氣分が見えますの。

お口數は一體に少い方ですけれど、でもすましてゐらつしやるつて氣振がある譯ではなし、時によると隨分よくお話なさる事もありますわ、それが大抵は當り障りのない綺麗な事ばかりで靜に〱仰つては優しい表情のある笑ひ方をなさるのよ、――人の蔭口など伺つたことはありませぬわ――「私は特別にこれが好き

つてものもありません」つて仰るんですけれども、よく新聞の劇評など讀んで獨りで樂しんでゐらつしやる處を見ると偶には〇〇座あたりへも御出掛けの事があるんでせうか。

　宅へお遊びにゐらしつてお茶やお菓子を召上る御様子を見て、母などがさう申しますの「お親しいお間柄だから、態々品を作つてゐらつしやる譯ではあるまいけれど、自然に型が整つて優雅に遊ばす處は、迚も眞似やうと思つても眞似られるものではない」つて……畢竟天禀なんですわ、もう好くの好かないのつて境は通り越して何だか尊いやうな心持がいたしますの。

遠藤きみ子さん

　お元氣がいゝんで、お家庭でも隨分活動なさるやうですから、お兄様などよく「お跳」だの「お俠」だの「女の道を脫線した女」だのつて揶揄つてゐらつしやいますけれど、さうした中に、いかにもゆかしい心池よい御氣性が見えるんですわ。

　多田さんなどに伺つて見てもさう仰るのです、「あの方が勝氣な物に惡びれない御氣質は小學校以來の事なんですつて。

　つい先頃の事でした。

　割烹の實習時間に、先生が何かの御用で一寸他所へいらしつた隙があつたものですから、皆でソイ〳〵騷いでダンス見たやうに足拍子を取つてゐらしつた方もありましたのよ。なに惡意でしたんじやありませぬけれど煮たり炙いたりが二時間と續いた擧句だつたものですから誰れもすこし飽氣味になつてゐたんですわ。

　丁度其處へ敎頭の山岡先生が巡視つてゐらしつたんです、――全く生憎なんですわ――ドアの前に立つて眤と睨め付けてゐらつしやるかと思ふと、それは〳〵激しいお聲で、「下級生の模範たるべきクラスでありながら何といふ擧動か、それが女子として當然の樣に考へてゐるならば此學校の敎育は受けずとよろしい、後で取り調べる事があるから其積りでおゐでなさい」つて仰つて去つてお了ひなさつたものですから、皆一時

に委れかへつて不安な顔ばかり見合せてゐましたわ。
すると豪いぢやありませんか、遠藤さんは實習が終るや否や、誰にもお話なさらずに獨で先生の處へゐらしつたのですわ、そしてさう仰つたんですつて、「只今の事は私が先立ちになつて喋いだのでございます、他の方はただ私に連れて高い聲をもお出しになつたのですから、何卒御免下さいまし」つて、

事實先立ちだつたには相違ありませんけれど、兎に角そのために非常に永いことお小言を聽いてゐらつしやいましたわ、級全體も歸りしなに十分間ばかり訓戒せられましたが、まづ〳〵別段の事もなくつて濟みましたので、ほつと胸を撫で下した人もありましたわ。

それからたしか六月でした、雨が三日も降り續いて妙に陰氣臭い朝なんでした、二年に吉野さんつて可愛い方があるんですわ、運動場へは出られず、控所の前の廊下で大勢してキヤツキヤいつて狂ひ廻つてゐらしつた處が、ちよつとした機で向ふから走つてゐらしつた大野さんと突き當つたんです、そして大野さんの櫛がからりつと板の間に落ちるが早いか二つに折れたぢやありませんか、吉野さんはすぐもう泣いてゐらつしやるのよ。

すると神經質の大野さんは、あの青白いお顔にけんのある眼尻をきりりつと釣り上げなさつたかと思ふとあれのこれのと色々な事仰つてはすゝり泣いてる可愛い方を責めるぢやありませんか。

遠藤さんが亦出ました。

そして「ねエ大野さん、下級の方に何仰つてゐるの、只今は私が吉野さんを追駈けましたのよ、追駈けられた吉野さんがつい突き當つてあなたのお櫛が折れたんですわ、けれどそれは私の罪なんですわ、追駈けた者が惡かつたんですからお詫いたします、でも御承知下さらないならば、どんなにも私をお責遊ばせ、吉野さんに彼是仰るのはお門が違ひますわ」つて仰つたのでせう、大野さんは迚も敵はないとお思ひなすつたのか、少し極り惡さうに向ふの方へゐつてお了ひなさいました、「痛快だ」つて皆でいゝましたわ。

自分の罪はきつと自分で明にせう、事由によつたなら他人の犧牲にもなつて見やうつていふのがあの方のお氣質なんですから豪い方だと思ひますの、エヽそれが決して名譽心なぞに駈られてなさるのではありませぬわ、さういふ方のなさり方とは全然、筋道が違ひますもの・・・

山路京さん

ですか、櫻が理想の花なんですつて、何とも云へず溫い中に、輕快な氣分が溢れきつてゐ



らしつて、見るからに人好きのする方なんですわ、別に人並はづれてお口數が多い譯でもないのですけれど、只もう何につけ樂しさうな嬉しさうな御樣子ばかりなさつて話したり笑つたり働いたりしてゐらつしやるものですから、御一緒にゐるものまでが、矢張り譯もなく陽氣になつて了ひますのよ、不平だの邪推だの、怨みだの悶へだのいふことは、てんでどんな事かお解りにならないつてい

つた樣な方ですわ。

他の人達もさう申しますの「京さんにばかりは如何しても眞面目に怒つて出ることが出來ない」つて、怒つて出たつて駄目ですわ、何時も人懷つこしい美しいお眼をなさつて、下膨なお顏を一寸かしげながら、罪のない言譯ばかりしてゐらつしやるんですもの、迚も論爭にも何もなりはしませぬわ。

この前の前の日曜の朝、拜借する物があつてお宅へ伺ひましたらば、丁度お琴をお復習してゐらつしやいましたの。

紫苑の花が露に濡れて、初秋のすが〳〵しい氣が、お庭からお座敷一ぱいに滿ち〳〵た中に、春の精見たやうな方がしとやかに座つてゐらつしやる處は、何とか形容して見たいやうな氣がいたしました。

京さんがかう仰るのです「お約束の八時が過ぎて了つてもゐらしつしやらない者ですから、お待ちしてお待ちして、でも千鳥を一度お復習する中にはお見えなさらうかと思つて始めましたの……、嬉しいわ」つて一寸かうした調子の方なんですわ。エヽ、千鳥は九分かゝるんですつて、

アラ貴君、鳴き出しましたわ……、昨宵と同じ處……、蟋蟀の音はどうして哀れなんでせう……、オヤさう、もう最前から鳴いてゐますの、お話に身が入つたものですから……、いゝわもう少しお饒舌さしていただきませうよ……、今度は嫌ひな方ですわ、エヽもう簡單に進めませう。

野口政子さん

學科の成績のいゝ割合に、あの位人望のない方も珍らしいではありませんか。

一體が御自分さへ利益すれば他人はどうでも構はないつて方なんですわ、敎場でも何か御自分の腑に落ちないことがあると何時までも〳〵質問してゐらしつて鐘がなつても容易にはお止めなさらないのよ、人の迷惑は何年でも辛抱するつて譯なんでせう、その癖私共が一寸何かに後れたが最後、早く〳〵つて獨りで急き

立てゝゐらつしやいますわ。

雜誌でも筆記帳でも参考書でも、交換して讀むやうな方は誰一人ないつて云ふんですが、借りるは借りても貸すのはお厭だつて方には、どうにも仕方がないではありませんか。

前の日缺席した處の事など伺つて見たつて、私なぞよくは解りませぬわ」つて逃げを張つてすましてゐらつしやるんですもの、何がさう面倒なんでせう、誰だつて「もう二度とは伺ひますまい」つて氣になりますわね。



一學期の試驗の頃でした、この方の洋傘の柄へ、落書の紙片を結び付けて置いた人がありましたの。

數學90　物理85　歷史80　作文50　唱歌30　圖畫15　利○己○主○義○100

つて、獨りで涙出してゐらしつた顏が可笑しかつたのよ。

相羽かめのさん

それは〱優しい優しい親切な方、涙の出る程有難いお人と思つたらば大變な間違ひですわ。

何にせよ、他人のことは細い處までよくお氣の付く

方で、少し沈んでゐらつしやる方でもあらうものなら色々なお上手いつては慰めてゐらしつて、知らない眼にはあれ程同情に富んだお人があらうかと思はれる位ですけれども、迂と信じて秘密でも明して了ふものなら、どんな辛い目見るか知れはしませぬ。

よく他の人に向つて學校の惡口などお言ひなさるんですわ、學校の惡口、先生の惡口。それは〳〵皮肉なことばかり續けさまに被仰つて、始めから他の學校へ入らなかつたことを後悔してゐますのよ」など被仰るものですから、つい其調子に乘せられて相槌の二つ三つも打たうものならもう最後です。

明日といはず先生の處へゐらしつて、あれのこれのと尾鰭まで付けて告口なさつては、御自分獨はいゝ顏して御機嫌取りばかりなさるんですわ、それが全くお上手なんですから、先生方は皆欺されてお了ひなさつて、相槌打つた方は思ひもよらぬ迷惑なさる事が幾度あるか知れはしませぬ、全く泣いて恨んでゐる方がありますのよ。

それでゐて校友會の幹事の選擧なんぞには、一生懸命運動なさるじやありませんか、お口でこそ謙遜したらしい事いつてゐらしつても、クラスの中で勢力のある方にはお宅へまで伺つては歡心を買ふことに勉めてゐらしつたり、下級の可愛い人達には誰れといふとなしに甘い〳〵嬉しがらせばかり被仰つて氣の見え透けた親切の押賣りなどなさりては、いざといふ時一人でも多くの味方を得やうとあせりなさる御樣子は、憎らしいやうな、感心なやうな、何だかみじめな樣な氣がいたしますの、その癖綾さんなどに向つては、御自分がさも藝術趣味に富んでゐらつしやる樣なことを被仰ることもあるんですつて、××展覽會や△△演奏會の批評などさも最もらしくなさつては、誰の畫は新しかつたの、何の曲は大きかつたのつで、呆れ返るじやありませんか、机の上の一輪挿に眞赤なダリヤと野菊とを一緒に挿してすましてゐらつしやる所を見れば、お里は疾に知れてますわ、誰が欺される人があるものですか。

陰險──虚榮──遠藤さんなどあのお氣性なんですか「幹事どころか、なるなら除名して了ひたい位だ」つて被仰つてゐらつしやるんですわ。

福井しげるさん

何といつても一級のお年頭なんですから、萬事に沈着いて、溫和な中にも何處にか人を壓し付ける樣な力の籠つた方なんですわ。

級の人達の中に何か惡い事のあつた時、ほんとに熱心に親切に忠告をなさるのもこの方ですし、不斷は先生に對して從順でゐらしつても、級全體の意向に依つては、隨分お一人責任を負つて、替つた意見をお述べになるのも此方です。



下級の人達を可愛がつて、陰日向なしに色々なお世話をなさる處などは迚も私共の眞似られる事ぢやありません。

皆、陰では、「お母ア樣。」「お母ア樣」つていふんですわ、美しい綽名じやありますまいか。

この方を級長としてゐるのは、まづ〳〵私共クラスの誇といつて　差支へないでせう。

まア色々なことだらしもなく申しましたつけ、他の方には一切祕密なんですよ、オヤ雲が出ましたのね、ホヽ、お月樣御迷惑でゐらつしやいませう……、お饒舌は是で止しますけれど、何卒まア御緩りと遊ばしてよ……。

描かれたる新型の婦人

樹の實

背戸の柿の實赤くなりて、風に散る芒の穂の、更けて行く秋の匂ひ、さすがに捨て難う覺え候。讀書によく靜思によき今日此の頃な都の學びやの御明けくれ、如何におはしてか？　何おぼしてか？　百里をへだてし山里に只、我が子の行末を生命に、おん堅日に白うなりまする母上をおぼしめさば、身をこゝろを、御修養專一にれんじ上候。

扨題烟ながく拜借いたし有がたく存じ候、誠に面白う引かれゆく樣にて、再讀、深き感銘を與へられ申候。仰せには候へど若輩の私が文藝的批評などとは思ひもつかぬ事にて候。只「描かれたる多くの女の中にて最われは朋子を好む」とのたまふ君に、一言の答へなくお返し申さんは餘りにあやなしと、かくは一筆、綴ひ參らす次第に候。

君朋子のいづこを好むと云ひ給ふか？　さなり、朋子は多く見ざる秀凡の女にて候。

喜ぶ可きか、悲しむ可きの、今の世のわかき女、稍もすれば絶えず動搖する思ひの底には、一流の寒潮冷かにながれて、見るもの、聞くもの、接するもの、一つも深く心底に響かず、燃えむとして熱の加はらざるが多く候。「驚異したい、誰れが心から私を驚かせて呉れないか」とは、醒めたる多くの女が歎らぬ叫びの聲と聞きては。さりとて所詮は女と生れし身の、やがては全我を提げて、一人の人の愛に生く可く運命られたる「汝の名よよわき女性」を忘れたるものには候はじか。

朋子！　秀凡の朋子！　今や醒めんとする新らしき女性のはじめの犠牲に、描かれし尊き不幸の女に候べし。作者の忠實なる筆になれる形しがたき朋子の俤は、お互に深き反省の強き光りを投げかけられたる樣におぼえ候はずや。

人の世の關係はいづれ藝術に過ぎざるべしとはいへ、朋子が「君は初めから翫弄する氣で居たまひしなれば、よも人の君を歎くなとがめ給はじ」と先んじて、男一匹わけなくも己れが勝利の死の犠牲に、引いてゆく強き覺力、恐ろしと覺え候。

「戀はたやすく彼れ等をして、死に迄導く」と南歐の詩人は戀愛の力をうたひしと聞き候へど、之れは又、醒めたる二人、「飽く迄打ち勝ちがたい女で、欺いて、迷はせて男の欲望を刺戟して、縄に縛って左右する事の出來るといふ女の力を見せるのならもう充分だ」と

自覺し、又朋子自らも自分の生命は我が手に握れりと自信したりし二人の戀は、彼等を死に導く可くあまり變則でありしを、第三者に驚かしめ候。

朋子が生餘と普通の女性ならざりし故に、自己以外多くの興味を持たず、從つて自意識の強かりしは當然の事にして、飽く迄自分の住家に生活し努力の力はいづこ迄人間の自然力に對卻して進み得べきか、の試練は實に朋子が唯一の慰安にて候ひしならむ。唯一の慰安將に破れんとし恐るべき自然力、遂に彼女の意志を砕かんとして、勝利の死—初めて朋子の胸に叫ばれしものに候。

人間何物よりも生を愛す。いまだ青春の二十年、故なうて惜しかる可き生命を、あまりに雄々しと君ののたまふ。されど原因おつて朋子こそざれば此の悲劇は演ぜられざりしもの、いたづらに其の勇をたゞへて近よらむは、朋子を曲解したる徒とこそ申す可きか。

朋子こそ世にも悲慘の女に候。男の前に血を吐く思ひして、「生れついて私は女ぢやない。」呼吸の絶えざりしがせめてもに候。肉は酒池肉林、歡樂に醉ふ扉の前に、飢ゑたる子が絶望の叫びと戰慄れ候哉。

霧ふる闇の夜、閃くナイフを男の手に握らせて「それで何處でも可いから私の肉を裂いて血を啜つて下さいまし、それより外に兩人が一つになる道はあるまい。」何等悲壯の語ぞ。斯る悲壯の語を未だかつて、花の少女の脣よりは聞かざりし、而も冷かなる生涯を費いて、氷の森に入らむとする朋子に對しては、限りなき同情を姉は傾けて候よ。

君朋子の何處を好むとのたまふか。多くの若き女、又なう朋子を好むときゝぬ。さりながら「イプセンのノラが家出する前には高い値を拂つて居る。値を拂ふ事を忘れてノラと成られては堪らない。」と要吉は朋子を評して申して候。否、否、朋子には既に尊き價の拂はれ居り候事を、人もわれも忘れてならぬ事と申す可く候。

人よりはやさしう生れ付きし御身を都の風はあらぬ方向へ心を漂くさそはずやと氣づかはれて候。例の取越の苦勞ならば、微笑みて山里に弟多き姉を思し出でたまへ。

栗一袋、例の竹籔に母上と竹して取りしにて候、御禮にまで御送り申上候。此のかり綴ぢの煤烟、机邊のそこらに取り散らして、燃監の君が燃ゆる御眸になあひ給ひそ。かしこ

大概は嫌はれる方

清水斐子

好かれるの嫌はれるのつて人樣のお噂どころぢやない。自分自身が果してどれ程人々に好かれて——とは申したいが、殘念ながら此の方は萬が一にも覺束なし——嫌はれて居るか知れないのに、恥かしげもなく出喋舌るのは甚だ鐵面の極みだとは思ひますが、併し『人の噂は女の通有性』と心得て、一寸御邪魔を。

▲權高ぶる婦人

自づから具はる氣品もないのに、わざとらしくいやに權大振る婦人が有るもんですね、私共が時たま御機嫌うかゞひに參上つたつて、なか〳〵さう心易うものなど御意遊ばさぬ、此方で、
『まあ酷いお暑さぢや御ざいませんか。』
と云ふに對して。
『左樣で御座います。』
これでは何だか物足りない、で、
『戸外のいきれます事、まるで大釜で茹られるやうで御ざいましたわ』
と申せば。
『左樣でせう、今日はなか〳〵きつう御ざいますからお歩行では……』
憐れむやうな、さげすむ樣なお目付で眤と玉なす汗を宿した私の額ぎわから小鼻の邊を見つめなさる、次には着物、是れには猶一層眼力を強めて、みすぼらしい袂の先から帶、帶留、襟はては頭の物に到るまで、ぢろ〳〵と二三度見上げ見下すうちには、もうちやんと總體で幾圓位の物、と價踏まで出來るんだと思へば堪らない、あゝ厭だ〳〵、擬明石に包んだ私の汗だらけの體は冬ならなくに貧乏震と云ふのでせう、ぶる〳〵震へましたわ。

そりや御自分樣こそ、女中の二人も使つて毎日お化粧にうき身をやつしてさへ被居ればすむ御身分だから

こんな日にだつてたんと苦しくも有るまいが、義理なればこそかうした炎天に、俥にも乘り得す、御機嫌伺ひにまゐつた私の身にも成つて見なさるがよい――とは思つてもお樂においでなさいとも云ふて下さらぬにまさか御免とばかり膝をくづす譯にもゆかねば、その窮屈さかげんお話にならない。

　でもまあ、やう／＼の思ひで痺れた足をこつそりつねつたり小さいハンケチを上品らしうそより／＼と動かしたりするうちに、ちつとは汗も納まつて、人心地がついて來ると、何か話さなくては手持不沙汰だ、と云つて兎も角もお客樣たる私から、やたらにベチャベチャ喋舌り出しもならず、無言つて謹んで居れば、先樣も御同樣チャンと澄し込んでのみ被居つて、朱脣なかく／＼に綻ぶべうも見えねば、いよ／＼座は白けて、てれて來る、詮方なさに此方から恐る／＼話し掛けても只ハイ……左樣で……ハア……なんて被仰るぎりで、ねつから面白くもなけりや張合も無い。

　こんな體たらくですもの、到底長く居られる譯がない、そこでぶしつけながら、早々にお暇と云ふ段になると、それでもお愛想のつもりか。

「まだお宜しいでは御ざいませんか。」

も何だか逐ひ立てる樣にきこえて、小走りにお玄關に出て了う。

「何卒旦那樣に宜しう」

と會釋したら

「ハッ、歸宅いたしますれば慥かにさう申しきけますで御座います」

　てもまあ、この虛飾々々しい切口上には思はず三寸庇の横顏が眺められますね、大急ぎで御門の外へ出ると思はず知らず、ほつと溜息が出る、なんだかやんごとなきあたりの姫君樣へお目見得にでも上つた樣な調子で、すつかり疲れてしまひました。

　あゝよしや番茶の出がらでも、笑顏で氣輕にもてなして下さつた方が、佛頂面して結構なお菓子を賜るより、遙かに客の身には愉快で御座いますものを。

　此の夫人のお考へでは、さう慣々しく振舞つては重

みが無いとでも思召してゝせうが、他から見れば却つて腹の中が見透かされるやうで、その御人格が疑はれます。

▲味のない女

食うと着ると寢ると芝居見物より外には總べての事物に對して、少しも趣味を感んせぬ女は、隨分殺風景極まるものです

この婦人文學美術は勿論、糸竹管絃一切に趣味なしといふ方、せめて天然の風景にでもいくらか趣味をお持ちなさるとか先年松島見物にいらしつたと云ふから、どんなにかいい景色でせうと申したつて、一向何とも感じ給はぬ御樣子。



「なあに貴女、只松の木が澤山〳〵生えてるぎり何でも有りませんわ、ほんとに馬鹿な目に逢ひました、あれだけの費用が有ればお芝居が幾度見られるか知れないのに」つてさも〳〵無念さう。

畑つゞきの裏庭に可憐な白萩の花が今を盛りと咲き亂れて居る。

「オ、萩が咲きましたねしほらしい花です事」と云へば。

「何の貴女、いけないんですよ、あんなに葉が繁つて來て畑の方へかぶさるもんですから大根が大きくならないでねえ、明日にも切

つちまうと思つてますの。』

いよ〳〵ひどい奥様だ。『これぢやさつぱり手がつけられない。』

恁んな女に限つて無暗やたらに着物や帶ばかり欲しがつて、精神的の愉快なんかは夢にも知らない、旦那様が盆栽をいびれば、『馬鹿らしいなんですね、薪木にもならない小つぽけな紅葉やなんか、水掛ける丈でも暇つぶしな』と罵るし、娘さんがバイオリンを鳴らせば『何だよキイ〳〵つて、うるさくて眠むれやしない』なんて怒鳴るんですね。

萬事この調子でやられるんだから御家内の方は云はずもがな、お交際申す者だつて堪りません『まああんな方にお話する程つまらない事は有りませんね』と皆さん恐れ入つて居ります。

▲ネチ〳〵した意地悪

一寸逢つたばかりでも、ネツチリ〳〵と毒氣の多い御性質が直に知れると云ふ程の奥様、近く交際して見るとさても〳〵底意地の悪い事や、嫌味たつぷりな事夥だしい。

さりながらお世帯持のお上手な事、萬事萬端行き屆いてなか〳〵の經濟家、何でも今の旦那様が十二圓の月給取りから今日の財産を作り上げたのも半ば奥様の力とさへ云はれてるんです、それ程苦勞したえらい方なら、私共の様な無經驗な者には、その當時の御苦心談でもして下さつたらどんなにか將來の爲めになるだらうにと思つたとて、そは糠に釘よ

『かう近頃のやうに物價が高く成つては到底もやつて行けませんわ。』

としみ〳〵愚癡を零せば、いやにお口をゆがめて。

『まあ、甘い事を仰つて、それは貴女私共のやうな貧乏人仲間の申す事で御座いますわ。』

ぐつと癇癪に障つて、もう口をきくのも厭になる、まさかそんな話に乘つて金の時借りにでも來られたらとの御氣づかいからでも有るまいが『私共の様な貧乏人』とは餘り馬鹿にしたそら〳〵しい云方、憚りなが

らかう見えても貴女に泣きつく程の鼻垂しでも御ざんせんよ。なんてつい此方でも意地の惡い考へが出て來まする。

こんな風だから謹み深いと云ふ意味を履き違へて無暗と尻込なさるのかと思へば、なか〳〵以て左樣では無い隨分出洒張つては人の迷惑になる事仰つたり、中傷したりもする。

『此の間嫁きなすつたお光さんのお仕度御覽なさいまして？　申しちや失禮ですが思つたよりもねえ…それにお襦袢ですがね、友禪ちりめん一反で二枚拵へなさると仰るんですヱ、胴拔にして、だから私見兼ねまてしね差し出がましいとは思ひましたけれど、それよりは一枚にして通してお置きになれば、もう誰に見せても立派なものだからつて御注意申したのを、でも數が無いからと仰つて、遂々二枚にしてお了ひなさいましたよ、ねえ貴女世が贅澤つて居りますから、通しの長襦袢一枚位有りませんではねえ。』



至極尤な事仰つたが、程經てお光さんの母樣が私につく〴〵切ながつてお話しなさいました。

『お恨み申す程の事ぢやないんですが、私もたんと仕度の出來ん代りに、せめて襦袢一枚でも恥かしくないものと思ひまして、まあ張り込んで買つてやりましたのに、一寸私の留守の間

にあの奥樣が入來しつて、いくら上等でも一枚ぢや仕方がないつて、お光がそれでも一應母に相談してからとたつて申しますのを、無理々々に御自分で鋏を入れてお了ひなさいましたさうで……』

と、承つて私はもう魂消てしまひました、さりとは餘りに罪の深い甚だ穩かで無いなされ方では有りませんか、何と此の奧樣、長襦袢の一枚や半分に事缺き給ふ御身分ではないのですけれど、只無暗と人の事がやけて〱成らないのですね、だからこんな淺猿しい了簡も起るのでせう。

　そんなひねくれた方なれば、參上つてもさつぱり面白くでもないどころか、何日も氣持を惡くするばかりなんで、まあ自然と人も行かない事になる、とさあ大變です。

『まあ貴女、さう私宅ばかり袖になさらないでも宜しいでは有りませんか、私宅のお茶にだつて別に毒も入れては有りませんわ、山田さんや久保野さんへいらしやる半分でも私共へお出で下さいましな、それとも何かお氣に障つた事でも……』

なんて、例のネチリ〱で小意地の宜しうない事を仰るお茶に變りもないが、貴女の腹に毒が有るからとも云はれず、さうかつて又繁々お話に上れば直に陰へ廻つて。

『今日もあの方は入來しやいましたよ、ほんとにお氣樂でお羨しう御ざんすわね、私共なんかもう〱遊びどころか毎日忙しくて〱。』

と暗に仕事の手間つぶしだつて樣な事仰るんだもの、どうしたらお氣に召すのか、誰方も御同樣に弱りきつていらつしやいます。

　まあ〱こんな人には何と毒づかれ樣と憎まれやうと、出來るだけ避けてるのが得策ですね。

▲理窟張る人

云ふ事爲す事、みな理窟や道理の一點張りで、ちつとも心に潤ひのない婦人とのお交際も頗る肩が凝りまする。此の樣に申しますと、何だか私が學問がないの

で、頭からそれを貶しつける樣で、甚だ恐れ入りますが一體現今時の女學校出の若い御婦人達には妙に理窟張る方が多う御座いますよ――尤もこれは私の知人にばかりかも知れませんが――そりや、同じ學者同志の交際なら、朝から晩までシヤチコ張つた堅苦しい事云ひ合つて居ても、退屈もなさるまいが、他から見る吾々の目には誠に面白くもない無味漠然たるものですね。

某のお孃さんに、今晩は二十三夜樣のお月待で、お豆やお團子が出來ますから入來しやいなと云ふたら、『廿三夜樣、樣ですつて、貴女あれは月の變形したものですよ、あんなものを誠心から手を合せて拜むなんて馬鹿氣た事が有るもんですか、愚にもつかぬ迷信はお止しなさい、只月をみながら團子を食べるなら聞えて居るけれど』

と、一本槍に極めつけられた。かと思へば又こんな事も有りました、いつか私の參上つた時に丁度、お帶のお手入れ中で。

『これは學校時代に作つたのですよ、私も隨分物持がいゝでせう、まだ恁うして仕立てなほせば結められますからねえ。』

と誇らかに仰るので私もつい何の氣なしい。

『エヽ〱是れなら上等です、まだしつかりした物ですわほんとに貴女の一代も有る位ですよ。』

と申したのがあはれ一期の不覺なりし。

『左樣でせうかね、ぢや此帶の終ると共に私の命も亡くなると云ふ譯ですね、貴女は豫言して下さつた。』

まさかに眞面目ではあるまいと、此方は笑ひかけつつお顔を仰げば、只ならぬ御目の色、私は思はず身がすくんだ、もう〱忘れても此の人にこそ冗談らしい口はきくまいと心に誓つて居ります。

これは餘り極端な例かも知れませんが、こんなに神經過敏なのもつまりは何事も理にばかり走つて少しも女らしい無邪氣な戲言――滑稽思想？――を解しないからぢやないでせうか。まあ損なお性質と私共はいつそお氣の毒な感も致しますわ、あれでは御自分もつま

らなからうし、又他人の『いつも左樣然らばでなけりやいけないんですね、ウツカリ戯言も云へないほんとにお氣むつかしい事』と眉をひそめるのも無理が御ざいません。

泉鏡花さんの湯島詣にある、何とやら云ふ若夫人には此の滑稽思想が少しも無かつた。でさこそは夢見るらんやうに暖かく甘かるべき新婚旅行の夕暮或る日大空高うすつとかすれ飛ぶ星を指差して、そら人魂人魂と騒ぐ脊の君をたしなめて、人魂では有りませんあれは流星と申すものです、と一言の下に遣り込めた、と何も是の一事が直接の因をなした譯でも有るまいが畢竟かゝる妻を持つ死灰の如き家庭の空氣に堪へ兼ねた夫は、學問のある美しい花妻を捨てゝ、紅燈の下に笑を賣る賤しい女に果敢ない慰安を貪る、哀れな身となり、妻自身も又同じく悲慘な境遇に陷ると云ふ事が有つたやうです。



兎に角、一寸の洒落や戯談にも、直に顏赤らめて目色を變へるやうな情味のない事で、所詮この世智辛いうき世がまるく渡つて行けるものでは無からうと思ひます。



天上に星あり下界に花あり、星の光を胸間の寳石に斂め、花の色を顔ばせに漲らし、天上下界の美を一身に恣まゝにせんとあこがるゝものに婦人あり、新時代の婦人あり





女石版畫工の日記

淑子

△親の無い女は新造だ

九月二十一日、三德粉末石鹼の看板をやつと終へた處、矢の樣な催促を電話で……吉野樣はどんな注文の取り方をするのか知ら、昨日今日だもの千手觀音の申し子では有るまいし、大きな繪に手をつけて、一日位で……かゝり切りなら知らぬ事、浮が出た鍍つて吳ろ、汚れが出た塗つて吳れ燒いて吳れ、一寸の間に稼いで小さい繪一つなぞ罐詰のレツテルや帽子の箱張り、使歩きも山程有るものを、他の石版畫工の皆樣も、こんなに朝から晩までのべつ幕なしに使用倒されて居らつしやるのか知ら。

〇〇美術會社から、筆意鑑の表紙が來た。「重松さん腕を振つて至急やつて下さい」先生はプイと投出してお出掛、又乾度例の件に付逃出すんだらう、見ると小坂芝田先生の墨繪の瀧、三度では無理だと思つたが、全部ヒルムをふせる事にして、コロムペーパーに寫し、吉田樣にオフセツト賴む、全體に、、ベタ潰しは好い、けれど、カスレの多い日本畫程、畫工泣かせは無いと思ふ。

將軍ニツコと打笑みて、許すとばかり只一聲、聲もさやかに宣へば、餘の事の嬉しさに、軍使は雲に入る思ひ、駒を飛ばして歸り行く、道の草葉に置添る……

乃木將軍の琵琶歌を、頻樣な聲で流して居た喜代さん(男の弟子)が「ねえ重松樣一遍見て下さい、今向ふの女を寫生したのですが、腰のまわりに帶が落付かないんです」薄暗い玄關際から怒鳴る、秋雨の中を傘さして、お米洗ふ仕立屋の娘を、覺束ない筆で寫して居る

「あら寫生はかう造つては駄目よ、形は惡くつて仕方が無い自然のまゝを寫して御覧なさいな、それを美化さすのは腕次第で、つまり想像畫の時よ」「まあ好いから試して下さいよ」坊主頭をツルリ撫でゝ美しい眉をへの字に寄る、二十一にも成つて眞實に〳〵子供らしい方、毒もなければ藥も無い、年季入れたのが馬鹿らしいつて二度も逃げ出して捕まつちまふんだもの、娘と云つたら、兩親揃つて居る人の事だと思つて、親の無い女は新造だと思つて居たつて平氣なんだから、小人島だの小塚ッ原だのつてあだながある譯を訊けば、石地藏に似て居るからだつて大笑ひ。

△三日位は病人の氣持

「先生の前では美人なぞ書か無い樣にして頂戴よ、淑子さんが來てから外の弟子達が花や風景を書かない樣に成つたの、浮世繪の勢力は大したものだの、胸の痛い樣な當てこすりばかり云はれるから困ります」と云つても、人物の方が面白いので間さへ有れば新粉細工に浮身をやつして居るから困つて了ふ、自分に人物が出來ないから弟子達に人物を發達させて！と被仰る考へは露程も無いので、大きな石鹸やサイダーの繪看板が來ても「どう仕樣」つて御心配「お請合遊ばせな私引受けますから」とやつと話が出來るつて情無い有樣、菊人形の看板の下畫棚から下ろして見ると、見覺がある樣な「重さん（男の弟子）誰が書かれましたの」つて聞くと「伊藤靜雨先生に頼みに行つたんです」繪師で御座いと大きな顏して居たつて、人物になるとこれだけの物でも此の騒ぎかと可笑くなる、萬屋から玩具の畫を頼みに來る、活動寫眞の繪だつて巾一寸三分に丈二尺位なワットマン五枚、小説琵琶歌、浦島太郎、猛獸狩、川中島、子供あそび、と下書つける、川中島の武者は初陣なので聊か閉口の氣味、原稿なぞ一寸見初めもしないので大骨折、人の書いた手本なんか見て畫にする樣な、そんな畫師は大嫌と大きく出たので、意地でも見られない、四日程後から繪の具が無いので催促しても知らぬ顏、仕方が無いのでパステルでお茶

を濁す、急ぎと云ふのでKK家庭用の下畫つけて居ると工場の方で「重松樣も、重さんも喜代ちやんも、金付手傳つて下さいがわめく、三人顏見合して海獸と名の有る舌の短かいの笑ふ、石版畫工とは金付をし臺所手傳、使歩るきするものなり、って當て付けを戸板に白墨で書つけた人が有つたそれでもまだ畫工を使ふ、他には見られぬ事だ、月の花石鹸の金付だらう、今朝結つたばかりの髮に手拭で後鉢卷に包み、ボロボロの單衣を羽織り、新しい綿に金粉をつけては、サラ〳〵撫でる仕事の中でもこんな嫌な事は二つと無い、秋向きだから



好いもの〻、夏の盛りは目も當られぬ、汗の爲めに緑靑が出て、金佛樣に錆が來た樣な風で、鼻に飛び込む金粉の爲め頭痛がする、クシヤミが出る、三日位は病人の樣な氣持、情無いより悲しくなる、やつとお了ひかとホッとすると、後もう千枚、うんざりして涙も出ぬ、石磨ぎの海獸さんに代つて貰つて上がる「未だ出來ません？」吉村さんKK石鹸の催促、腹が立つて〳〵先生のお歸りを幸に、聞えよがしに「私だつて神でも佛でも有りません金付したり使歩きしたり、畫工以外の事が半分です、一つ仕事にかゝり切では有りませんよ」って怒鳴り付る、人を何と思つ

てるのか知ら、氣に入らなければ止すが好い、これだけ外の會社で働けば二十や三十の月給は出して下さるだらう、澤山さうに使ひ廻してお小遣三圓ではねえ。

△豐かな頬に痣が出來

緑青で地色を潰し、金枠に胡粉の文字、私は日本畫のシックリしたのばかり習つて來たので、此の彩色には何時も困る、石版の下畫は毒々しい迄明るい色を使つて、墨汁を交せて草木の葉色を出す所でも、緑青に黄色を交てパッと冴えを出すのが嫌で〳〵、初めは隨分小言を貰つたものだ、川中島を見て居ると、電氣がつく、奥樣のお聲「御飯よ」、また三錢程のお多福豆が、丼に入れて突出て有るのかと嫌に成る、人數が多いのでまご〳〵して居ると、御飯も副食物もカラ〳〵で我勝にグイ〳〵食て了つて、後は野となれ山となれ「あら又食べる物が無いつて」云へば「早い者勝だ」つて來てから三月の間、滿足に三度三度頂いた事はたつた二度しか無い、さもしい話だが珍らしい家庭だからお知らせするので……。

九月二十三日、薄暗いのに頭痛がするので床の上に坐つて居ると、ガラ〳〵雨戸の音「オイ何時まで寢て居るんだよ」たま〳〵一日位早起したからつて先生の勢、ソッと脱け出して亂髮のまゝ顔を洗はず、机に坐つてトキ墨とく、御飯迄に一仕事、〇〇會社の英語自修法、色版塗る、好い加減にして上て了ふ、朝に揃つて御飯頂く、チラリ顔出した吉田さんが、家庭の華の表紙が出來たつて校正を見せに來る「あーら濃い地色は中藍に薄草に、もつとずつと薄く肉私が合はせませう」便利な人で製版から、ロール使ひ、紙差まで出來る人だけれど、自分一人の考へで色を出されるので、全く困つて了ふ「いくら小さいものでもね、書く人は矢張り色の苦心して居るんですから、御面倒でも一々見せて下さいよ」とは三十遍位云つた筈を、未だ見せに來ないつて、隨分腹も立つが職人にと思つては無言つて了ふ紙差の方で何か悶着が起つたらしい、年中云ふ事ばかり多い家で、二タ言目には金さへ出せばお前

より上手な職人が幾人も來る、と水臭い事を口にしては馴た職人を出してばかり居る、其癖月に二度の支拂が滿足に渡つた事なし、キハツ油二合買ふお錢を「重松さん一寸お正午まで」と云ふ仕末、有りさへすれば眼鏡の緣を金にする、奥樣の指輪にするつて、十ケ月も滯つた家賃の二つもお上げになればと、餘計な事を考へるのも、借金の言ひ譯も隨分辛いもの、玉川下駄店の包紙が定つたと、井上樣が來られる〇代〇館の寫眞番組の注文、赤熊しの二度刷、又脊から伏かぶさつての催促かと情なくなる「重さん何ですの今?」「扇子の地紙の題字」何時までかゝるのか知ら、四字の潰に三日かゝり「喜代ちやんは?」「琵琶會の切符ですが寫生ばかりに夢中に成つて、仕事は眞の附たり、夜は時間の來るのを待兼て、ハーモニカや月琴に現を拔かす、迚も女の手には合ません」と云つたつて平氣なもの「汝の双肩にかゝれり奮起せよ」なぞ無駄口ばかりにゴマかして、先生で御座いとすましたもの、催促受ければ電話口でペコ〳〵して濟みませんの一點張り、男子の價値が何所に有るのか知ら?急かれた日本青年の表紙の墨版かけて置いて、昨日定つて來たノーブルサイダーの繪看板をコロムに取る、一所懸命下繪を付けても、方々でいぢりまはして、私の手許に來る時分には時代がついて、豊かな頰には痣が出來、髷の形まで爪の跡で狂つて居るんだもの、腹が立つやら可笑しいやら、畫を見るのに何故大切な顏や手を汚すんだらう、こんな密畫を「十版で上げて了へ」つて、地色にでも三版かゝるのを、それも砂目にでもする事か、髮なぞ五遍位かゝつても、皆舊式の星をコツ〳〵ペン先でついて、跡はヒルムの御厄介、三間の出來に比べると側にも寄らぬ、など云ひたい儘の放だい、砂目で二十遍かけたり、一枚について定價が幾ら違ふと思つてるのか分らずやの多いのには閉口して了ふ、これが出來る迄他の仕事には手つけませんと先生に斷わつて置く。

△勝手な癖に意氣地無し

お晝休みの時に母樣と宮川春汀先生に手紙を書く、御無沙汰が重なると氣まりが惡い、脫落者の群に投じて、重松淑は石版畫工の仲間入りして居りますと書く、お二階の畫室の窓でお讀下さる樣が目に見えて一人笑ふ「重松さんトキ墨と太筆持て來て下さい」、昨日殘りの金付で、モヤ〳〵金粉の立迷ふ渦の中を仕事服の裾卷て、手引きの前に立と、職人の仕事を見るとて窓の外は黑山の人だかり「オ、嫌た」つて口走ると、柴田さんピタリと閉めて呉れ、る「何を塗るんです」削り針磨で居た製版師の小沼さんは、眼鏡越にジロリ見て「それ」相變ら



す高麗屋式とかの聲色で指さす、見ると盛りかへつたばかりの石に吉川小善次と浪花節の辻ビラ、こんなもの誰がと「急ぎの物が澤山有るんですよ、重さんも喜代ちやんも遊んでるんですよ」ツン〳〵して歸つて了ふ、食卓の前に向ひ合つて、先生と秋子の方ホカ〳〵上がるオムレツに舌鼓打ち乍らのお睦まじさ何所が好いのか知らないが、下女の上りなんかを奧樣て私は口が腐つても云へない、お秋さん〳〵つて呼んで居る、御機嫌のお惡いのは先生ばかり、だつて子供達までお秋つて呼び捨てだもの、素性を知つて居る私を退ものにしたいんだが、後釜に困る所から、

ジリ〳〵置いて有るのだとやら、聞いたら矢も楯もたまらず「御都合ならばお暇を頂きますから」と逃支度すると、助けると思つて居て呉よと拜まれた時の可笑しさ、思ひ出のまゝを畫にして喜代ちゃんと二人で大笑ひした、それはねえ給金を出さないで、一から十までして來る畫工は私より以外には有りませんからね、男程勝手な癖に意氣地無しは又あるまいと大平樂を並べて一人威張る、夜は冬物の支度する、追はれる樣で氣になる事、前の家でお琴が鳴る、秋の曲だ、もう何時か知ら……

九月二十五日、筆意かゝみ表紙の見返しを書く、三度四遍「水に魚が好い」つてやつとお氣に召した樣子、一遍で此の濃淡が出せるか知ら、四種郵便で〇〇美術會社に送つて光榮社の寫眞枠の下畫かく、サイダーの看板も版待ちになるだらうけれど、氣がもめる事一通りで無い、菊と桐に國旗をあしらつて、横物が出來た「宜し上等」と云はれた時の得意さ、厚紙に包んで送る、散つて居たアイボレの四枚を折つたので大目玉、「一枚十六錢だよ」つてもう〳〵持前の負ぎらひが突ッ張つて、局よりの歸路三つ目通りの紙屋で二枚買つて來て投げ出した、あの紙だつて注文の中をグイ〳〵五枚十枚引ぬくんだもの一枚や二枚使つたとてと口惜しがつた、今日雨、小杉未醒先生の原稿、〇〇會社から番茶一杯と書た滑稽な表紙が來る、三度位なのは重さんに渡して置く、又硝子紙切るのに一骨だらう、看板の赤版二版書いて其間に髮を結ふ、梳いても〳〵金粉が殘るので困る、長いと嫌味が出るので無雜作にグル〳〵束ねて置く、「淑子さん〳〵」の火の付く樣な聲で、中澤さん「何ですの」「先生のお召し」虛飾で埋つた座敷の眞中に、對座した美髯の紳士の前に私を呼んで、

△先生と大議論

何事かと恐る〳〵伺ふと、〇〇美術會社の社長樣がねえ、君に賴みたいつて、あゝ仕なしたり、逢ふのでは無かつた、どうせ色魔の標本、ろくな話の有るべき筈なく、家庭の亂れたのもよく〳〵知つて居る、餘りな

先生と憎らしかつた、ネルの着物に大なき時計の鎖からまして、ニッと笑つた社長其の人の顔、私はゾッとした「ハイ何で」ッンとすます、女は第一に愛嬌だとは承知して居るが、それは此所では無い「仕事の事に就いて、少し大物をやつて貰ひたいが手本を持ち出す事が出來ないので、夜分でも宅に來て呉れないか」處女に對して吐く言葉か「ハ晝間でも宜敷いのでせう先生」「晝は多忙しいから夜分が好い」「先生も御一所に願ひます？」「子供ぢやあ無し君一人で好いよ」「どんな仕事でせう一體」「美人畫を禮受けに書いて貰ひたいのだが、大きいから通つてほしいので」「禮受なら大きか有りますまい小僧さんにでも届けて頂きませう」プイと立つて了ふ。そんな手に乘私と思つて居るのか、先生も先生だ、内々話がして有たのかと、口惜しくつて〳〵イラ〳〵する机の前でボンヤリ先の事を考へ込んで了ふとお晝になる、看板の黄版が眞中から割れたと云ふ騷ぎがロールの方で起つた樣子、云つて來る迄知らぬ顔で居る、仕事がもう嫌になる、此所に居るのが大變な罪を犯して居る樣な氣がして、不意に飛び込んで來た猛虎をどうし樣なぞ考へる迄は無い、死力を盡して私は虎と戰つて見せる「重松さん藤本さんが來てますよ」何用が出來たのかと行つて見ると、博文館印刷所に入りましたつて少し面倒を見て上げた自稱ハイカラの職人、淑女畫報の口繪の本刷二枚貰つた、好きな恒富先生のお筆、おなつかしい先生、大阪新報の繪を書いて居らしたが此の御上達、線書が鉛筆か筆かと先生と大議論をした、腕つこきの畫家のお揃ひだらうけれど、實に他の印刷所の品は見事に出來ると染々見惚れて了ふ、夜は内職の新年端書の下畫つけて見る筍皮包の樣な島田が出來たつて喜代ちやん大喜び、可愛さうだと丁寧に彩入れて見るとへーと見て居る、庭の小萩原の風が渡つて、雨は歇んだ樣子、投節を唄ふ湯歸りの職人の後を犬が吠く、雨戸を明けると好い月夜、明日はどんな風が吹くか知ら……。



泥棒の用心

△勝手口と雨戸の用心

新米の泥棒でも、古參の泥棒でも、大抵一番侵入し易い勝手口を狙ふもので、玄關から大手を振つて這入る泥棒は滅多にありませんから勝手口には最も注意をしなければ可けません。

泥棒は大道の眞中を通るやうなことはありません。何でも人の軒下などをコツ〳〵歩いて、何處かに不用心な家はあるまいかと、蚤取り眼で搜して居ります。多くの家庭では玄關は主人や主婦が氣を附けますれど、勝手口となりますと、下女任せの家が多いので、そこが泥棒の附込み處となるのであります。泥棒の方では勝手口が用心堅固で、乘ずべき隙がないと、コソ〳〵雨戸の方に廻ります。併し彼の雨戸と云ふものが亦誠に不完全極まるもので、鴨居の溝を深かくして、敷居の溝を淺く、戸は上から先へ、嵌めてないて下を嵌めるのですから、敷居に鑿のやうなものを突き込んでグイと摺りますと、容易に外す事が出來るいです。

△追ひ逃すが得策

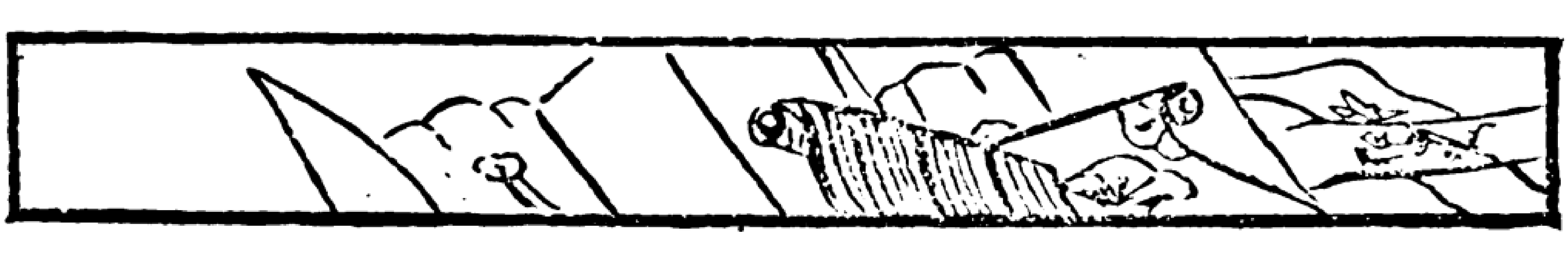
愈々泥棒が這入つた時は、夫れ相應の用意が入ります。私共の樣な職務を執つてをる者は假令危險が眼前に迫つて居りましても、正面から立ち向はなければなりませんが、一般の家庭の人々なれば、決して泥棒に手向ふものではありません、必ず追ひ逃がすやうにするのが一番得策であります。

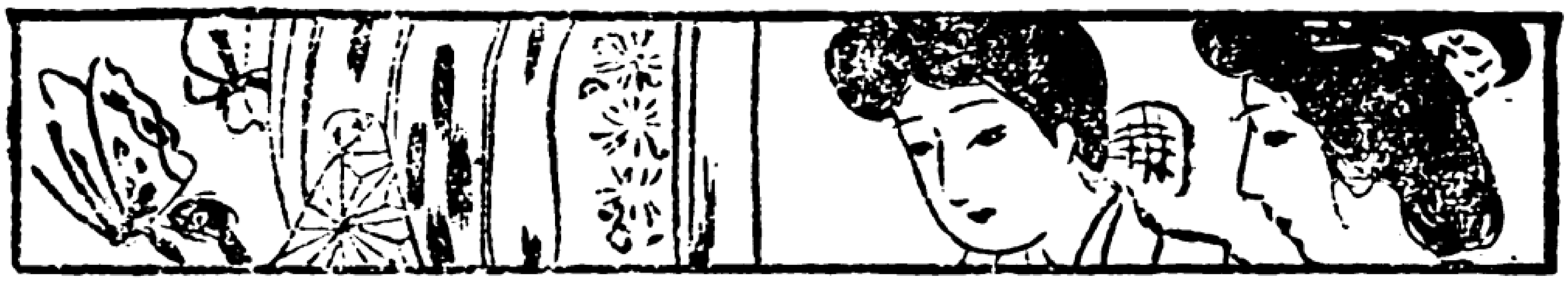
△巧く欺すが宜しい

大膽な泥棒は家人に發見されると俄かに居直り強盜となるのがあります、斯んなのは巧く欺して遣るのです、雇人に警察へ訴へさせる風を裝はせるとか、出鱈目に人の名を呼んで恫喝するです、夫れでも逃げないのは致方がありませんから泥棒の爲すが儘に任せて置き、よくその人相と風體を見て置くのです、泥棒と云ふものは、這入るまでが割合に小膽で、愈々這入ると、非常に大膽になつて、逃げ出す時に又極く意氣地のなくなるものですからその邊を呑み込んで臨機の處置を取るのです。

△金錢よりも衣類を狙ふ

泥棒が忍び込んで、何に目をつけるかと申しますと、金錢や財物のある所でありまして、此の家は何れの邊に





金庫があるか、簞笥は何所に飾つてあるなどと云ふ事は忍び込まない前にチヤンと知つて居る位であります、而して金錢よりは財物、財物中でも衣類を狙ふのでありますと云ふのは、衣類は金錢よりも粗末に仕舞つてある許りか、衣類は簞笥とか支那鞄とか大きな入物に仕舞つてありますから所在が、直ぐ分るからであります

△簞笥を寢所に置くな

如何なる勇者でも、此方の氣の付いた時に、旣に賊が眼前に迫つて居つては迚も勝てるものではありません、で私が此の點に就て注意したいと思ひますのは、簞笥を寢所に置くなと云ふ事です、賊が家内に闖入して四邊を物色して見ると、簞笥が寢所にあるソロ〳〵と仕事に掛らうとすると、用心深い方は簞笥の方を枕頭にしたり或は之と反對に兩足を遣つたりして居りますから、賊が明けやうとすると頭や兩足が邪魔になつて之れを取除けなければ仕事が出來ないのであります、財物よりは命が大事と思ふならば、取るものは取れと云つたやうに、簞笥などは寢所の次の間か、一間隔てた次の間位に置くのがよからうと思ひます、若し幸にして、賊の入つた物音で眼を覺ますやうな事があれば、追ひ散らす事も出來るし捕へる場合にも充分に用意をしてかゝる事が出來ますから、命を棄つるやうな事はなからうと思ひます。

（山本刑事談）

晩秋の衞生

柿の出盛る頃から秋の終りへかけては胃腸病が一番多い。健康な人が食後に少し果實を食ふのは差支ないが空腹の時食するのは大變惡い殊に柿は不消化である。胃腸の少し惡い人が空腹の時に柿などを食ふと胃痙攣や烈しい腸加答兒を起す。寢しなに食することは殊に害がある又よく子供が澁柿を食ふが澁柿の中には澁酸といふものを含んでゐるからこれが爲めに非常な便秘を起すことがある。總じて柿は子供には害がある。

これから寒くなると體が冷えて腹痛や下痢を起すことが多い殊に慢性の胃腸の弱い人は冷えるのが大變惡いから腹卷は是非用ふることにするが好い。然し梅雨期の頃とは違つてものが腐敗して黴菌を生ずることはないから其の方の害は少く從て急性の腸胃加答兒などは少くなつてゆくがたゞ腹を冷さぬことが肝要である。（野田醫學士談）





平凡な小石

野菊女

旦那も隨分物好きな人だ。あんな立派な御新造樣がありながら……、どこがよくつてねえ。其當座、西山家の、店員は勿論のこと、下女下男、洗濯婆やから、丁稚の長松まで、よるとさはると、松代さんの噂で……さらでも短い秋の日は釣瓶落しとやら、とつぷりと暗くなつたに驚いて、御飯焚のお寅どんが、五升焚の釜を、井戸側の御影石にぶつつけて、美事に割つてのけたのも其時でした。

此問題の中心點となつた、松代さんとは抑何者？なんていふ程堅苦しい側の人ではない、一口にいへばそれは旦那のお妾さんに過ぎません。

百萬以上と註されてゐる西山さんですもの、寵愛の女の一人や半分、お邸に置いたからつて、別に何でもなささうですが、ことし四十といふ年まで、かつて此旦那の不品行とか、女好きなんていふ噂は、影ほどもなかつた堅藏樣で……、其又御新造樣と申す方が、今小町と名をとつた位の美人、しかも東京は小石川、某女學校出の才媛で畫の名人……、徒然にのべさせる繪絹の上には、忽ち匂ふ五彩の花鳥……、雅號は花香女史といつて、舊師御自慢の祕藏弟子とやら……、ですから、店で賣物の吳服類にも、此御新造の意匠になつた、優美な品が多いといふので、お店の繁昌つて、それはすばらしいものなんです。隨て御主人は申すまでもなく氣六ケしやのお姑樣でも、分店分家店員の末々に至るまで、御新造樣てば、一も二もなく、其崇敬？する樣子といつたら、まるで女皇の國にいつた樣でした。

此女皇の國に、忽然として現はれた謎の女……、お

部屋樣と据つたのだから、みんなが器量一ぱいの眼を瞻つたのです。

如何なる動機で、こんな現象を呈出したのか、それは存じませんが、とにかく、御新造、對、松代さんの、周圍の雲は徐々に動きだしました。

松代さんは、當世向丸ぽちやの色白で脊も低くどこも丸々とした美人でした。しかし御新造樣と並べては、月とすつぽん……、櫻の木陰の、たんぽゝの花ほども、人目をひく力はありません。

それに、ことし廿五歳までの、前半世に於ける松代さんは、どんな空氣の中に生ひ立つたのやら、あけてくやしき玉手箱の、愚を繰返すなといふ、御新造の仰せで、誰も探つて見た者もないが、何でも親許は淺草邊の裏長屋……、西山さんへくる前迄は、由井ヶ濱邊の茶店の姐さんだつたといふのは眞實らしいのです。



事は或夏、西山さんが、鎌倉の別莊に避暑された時より展開されます旦那樣より一足お先に、御新造樣がお引上になつた後の事なんでせう。

武藏野の秋はいたづらにふけて、うら枯の尾花が袖

に霜が置くやうになつても、御主人は神經衰弱といふ御病症で、御本宅へのお歸りがない、たま〱いらしつたと思つても、三日と經ないのにすぐ鎌倉…、この初秋までの一年餘、四分の三は別莊籠りといふのが一門の不審の的となつて、とう〱御新造の御意見通り、愛妾乘込みの一段となつたのです。

あんな立派な方がありながら…と、誰も彼も御新造に同情しました。どこがよくつてあんな女を…と、誰も彼も松代さんを誹りました。かうした中へ盲進してきた女は、無智なのでせうか大膽なのでせうか。いつも凛とした賢女の態度、一絲亂れぬ御新造樣には、正室といふ恐い力でうんと壓へつけられ、御隱居樣などは、朝夕の御挨拶を申上ても、つい傍を向て、知らぬ顔をなさるといふ風でしたから、況んや於てをや、下女婢は、皆白い眼を剝いてゐました。

これが此社會の、世界を股にかける莫連者なら、へん、此處許りに日は照らぬ、女に廢りはありませんよシト馬鹿にしやがるなの調子で、さつさと自分から身を退くか、さらずば海千河千の正體を現はして魔術妖腕縱横無盡、あはれ西山の根柢を覆すといふ、お家騷動の一幕も演せられたでせうに、松代さんは何たる女でせう、いつも萎れたやうな笑顏をして、これと定つた用とてもない手持不沙汰の身を、つくねんと、茶の間の隅に小さく坐つて、折々、お小間使の手傳ひなどしてゐました。

澄みきつた水面に、投込んだ泥塗れの小石によつてさゝ濁りの波動を起したやうに、一時動搖した人々の心々も、秋の深くなるにつれて、追々ともとの靜かな態に返つて、夜毎〱の月が、すつきりと水面を照らすと、底に沈んだ小石も、はつきりと見えてきました。小砂利に交つて、おつとすわつた小さな石塊…、何の奇もない平凡な小石！ 底を壓する威力もなく、泥波を起す雄もない…。御新造樣にとつては、寧ろあつけない位、平凡な敵、正妻の威嚴を墜すまにと構へた氣も張もぬけて、いさゝか力まけの姿でした。

お家第一の忠臣として、殊に松代さんを目敵にして

ゐた、女中頭のお兼さんの眼に、この萎れた姿が、邪魔にもならないやうに見慣れられた頃には隱居所からさへ『松代、手がすいてゐたら、こゝへきてお花をいれておくれ』なんて、お名ざしの御用が出るやうになつて、氣の置ける嫁よりは、この方が氣輕で、調法で、大好きだといはれる樣に成てきました。

出入の者でもさうです。かういつたら笑はれはすまいか、あゝしたら叱られはせぬかと、絶えず心配しなくてはならぬ御新造樣の前へ出るよりは、松代樣から取次で頂くのが氣樂でよい、松代樣はいゝ方だ、ほんとに好い人だといつ



て、日一日と松代さんの評判はよくなります。

平凡な松代さんは、平凡な人に好かれてきたのです。松代さんの評判がいゝといつても。御新造樣より偉いとか賢いとか、いふのとは異ひます。御新造は矢張、町内第一の美人で、そして學者で、西山家の家政全權を殆どお一人の肩で擔つてゐらつしやる賢夫人であると、誰も皆、賞讃して居ります。お間違へ遊してはいけません、好かれる人が、きつと、賢くて正しい方とばかりは申されませんもの……。蓼くふ蟲もすき〳〵とか、あの、私などは、大嫌ひだつた小學校の先生が、この頃はもう大の大好きになり

ましたもの……おほゝゝゝ。

つまり平凡な人は、平凡な人に好かれませう、美しい人は美しい人に好かれるでせう。それは、醜い女の眼にも、美しい姿は矢張美しく映りませうが、その美しさを愛するより前に、嫉ましいといふ念の起るのが、自然の人情ぢやあムいますまいか。

強い男は弱々しい女をすき、女らしい男は男らしい女がすきだと申します。萬人に好かれさうな顔はきつと平凡なものです。人に好いてもらはうの野心ある方は、這般の消息を御會得なされませ。え、私なんか嫌はれて幸ひ、そんなに皆様から好かれては、それこそ頭ばかり重くなつて、足下が危なう御座いますもの……、さうもう〱ひとりにさへ嫌はれなければねえ……おほゝゝゝ。

肉食本位の國民

朝鮮の京城では毎日牛を屠殺する數は東西兩官營屠獸場で約六十頭、民營屠獸場で約二十頭で、平均八十頭内外ぢや相で、一頭に付官の手數料が二圓五十錢だからなか〱良い收入だ、當地では牛肉は膳に上らざる日とてはなき位で、上王侯より下乞丐に至るまで必需品になつて居る、而て唐胡椒は料理にはつきもので、馴れない人間には食事は一大苦痛で、毎日三度づゝホロ〱と涙をこぼして居る次第じや。冬期は生魚が少いから、主に干物を常食にして居るが、稀には明太魚や、大口魚を食ふ。前述の通りの次第じやから牛肉は店と云ふ店には大抵賣つて居る、小さな片に切つて店に竝べてある、此樣な肉は下流社會の人物に供給するので、到底吾聟等の口に上すべきものじやない、專門の肉屋では上等の肉を賣つて居る、價格も馬鹿に安い、從つて牛の頭や骨も相應に巾をきかして居て、サンロンタン(牛液)となつた後は骨髓も骨も車に滿載されて燒場に送くられて骨粉と云ふ肥料になつて、二度の勤めをするのじや、しかし馬の脚や骨は當地では此樣に歡迎されて居るか如何か、僕はまだ其處までは研究せんよ。



朝飯前の仕事

黄葉

△奥床しき主婦

家庭の日々の仕事の中、何一ツとして不必要のことは無い筈ですが、中にも掃除が一番大切で、掃除が行届いて居ると、主婦の奥床しさがしのばれます。

掃除は一體朝飯前の方がよいのですが手の少ないところでは、思ふやうに届かないものですから、強ち朝飯前と限らずともです。

△長い箒と布切れの采配

箒は、短かいのは身體を屈めなければならないから衛生によろしくありません、長い箒で立つて使つた方がよろしい。

采配は、紙のよりに布きれを裂いて拵へた方が、洗ひが利いて經濟です。貴重のものゝ塵を拂ふのは羽采配がよろしい。

△采配をかけられないもの

一寸持運び難いものは、彫像とか造花のやうなものは、風呂敷にか大きなシーツなどを覆せて置いて、掃除をし、塵が靜まつてから靜かに覆ひを取りなさい。

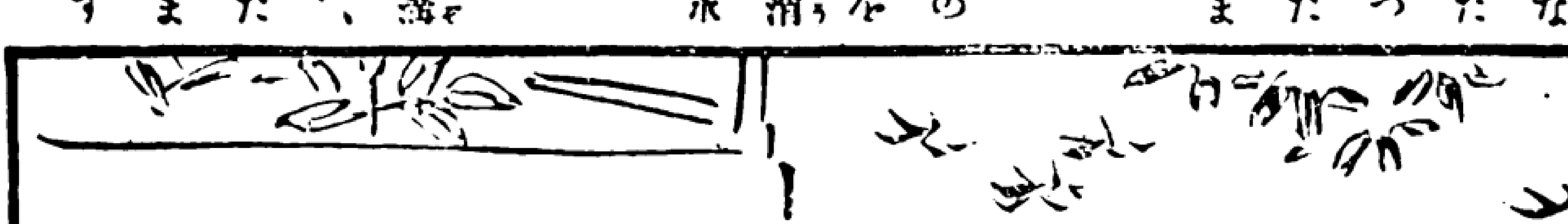
或る家庭では、掃除に采配や箒を用ゐません、大きなタヲルで塵を拭き拂ふことにして居ります、采配ではたいたり、箒で掃いたりしては、輕い塵は空中に舞ひ揚つて、掃除した跡へそろ〳〵と落て來るから、折角掃いたのが何にもならないと、成程是も一理あることゝ思ひます。

△消毒には千倍の昇汞水

大掃除の時には消毒が必要です。疊、建具の取外しの利くものは、日に曝して日光消毒を行ひ、床下には風を通し、濕氣のないところは、石灰乳、昇汞水を撒布して消毒をします。不潔な場所などの消毒には千倍位の昇汞水が一番利きます。

△唐紙や障子の注意

唐紙や障子が溝と食合ひが惡くがタピシするのには溝に油を引いて滑りをよくして置くのです、入梅時などに、戸障子が澁くなつて開閉が不自由だからとて上を削つたりすると冬になればゆるんで外れるやうなことになります。濕氣の多い時には、水分を含んで木質が膨脹しますから澁くなるのは當然です。



衣裳を欲しがる人と惜む人（衣服整理の新工夫）

玉蟲女史

△衣裳の藏ひ方

衣裳は婦人に取つては命から二番目の大事なものですが、三越や白木と散々あさつた揚句に、折角新調した衣裳も、其しまひ方がよくないと、損んで見ッとも無くなります。

同じく衣裳と申しましても單衣や袷は左程でもありませんが綿の入つたものは、疊みやうから藏ひやうにも、十分注意をしなければ形が損じます。綿の入つたものは、裾や袖口が、何時でもふッくりと膨らんで居ないと見ッ共ないものです。又背や袖附けの縫目にしましても、「ミシン」で縫つたやうにぴッたりしたのでは、面白くも何もありません。羽二重物や縮緬物などは、取分ですが、日本裁縫の味は針目がミシンのやうに細過ぎず、甚だしく締り過ぎないで、それで口があかないところにあるので、又折目も紙を折つたやうにかッきりとならず多少のふくらみを持つて居るところに如何にも仕立卸しといつたやうな趣があるのです。

處が、藏ひやうがよくないと、裾や袖口のふくらみから、縫目の味ひが丸で代なしになつて了ひます。底で衣裳を藏つて置くには、其ふくらみを潰さないやうにするのが肝要ですから、疊む時には、裾や袖口が外へはみ出るやうに疊んで、成るべくは二枚以上重ねないやうにしたいものです。と云つて抽出し一つに着物一枚といふ譯にも行きませんから、底の方には單衣、袷、襦袢、又は袷のやうなものを入れて、一番上へ綿入れを載せるやうにしたいのもでのです。

△理想に近い簞笥

私が或ところで見ました簞笥は、是ならば如何にも理想に近いものだと思ひましたが、それには、抽出し

といふのは一番下の方に雑品を入れて置くやうに二ッ並んであるだけで、其上部は、觀音開きの扉が附いて、それを開けると、大抵四寸置き位に、棚のやうに幾枚も板を差込んであるので、それの衣裳を入れる時には、其板を抽出しては疊んだ衣裳を載せ、それをすーッと差込んで置くのですから、一ッの抽出しに四枚ら五枚も入れて置くのと違ッて押潰されるやうな憂ひが少しも無いのですから、誠に安全ではありますけれども、少々贅澤過ぎて、二ッの簞笥で濟むものが、此式では其倍も無ければならないことになります。

けれども、單物や何かのやうに何枚重ねて置いても差支ひのないものは、普通の簞笥へ入れて置くことにして、綿入を入れるのだけでも棚式の簞笥へ入れて置くやうにしたら何んなものかと思ふのです。

△衣裳の疊み直し

衣裳は少々位面倒でも、一ケ月に二三度は、簞笥から出して疊み直して置くと宜しいのです。それには二樣の利益があるので、一ッは簞笥の中に欝積した空氣を發散させて、地質のふけるのを防ぐ利益と、今一ッは疊み直して折目を變へて置けば、折目の癖がつかない利益があるのです。一ッところを長く折つた儘にして置けばそこへ癖が附いて、終いには折目切れがするやうになります。但し此疊み直しは、成るべく晴天の日を撰んでする方が宜しく、曇天や雨天の日にしますと、却つて衣裳に濕氣を與へるやうなことになります。織物には濕氣が一番害をなします。それが爲めに黴が出たり、蟲が湧いたりします。又衣裳の折目のところには、綿を挾んで置けば、折目の癖が容易につきませんで誠に都合がよろしいものです。

△蟲除けと蟲干し

衣裳には蟲除けの爲めに、よく樟腦などを入れて置きますが、是はあまり澤山に入れて置いては却つて、絹物の地質を弱はめる憂ひがありますから、寧ろ、麝香か、丁子を用ひた方がよいのです。尤も毛織物や毛

皮の類は樟腦をいくら強く用ひても、害になりません。

梅雨中は、衣裳をいくら嚴重に藏つて置いても、兎角濕氣に犯され、それが段々暑氣に向へば黴になりますから、暑中には一般に天氣のよい日を擇んで土用干をしますが、本來ならば寒中にした方が、蟲干の主意に叶つて居るのであります。暑中には水蒸氣が多いのでありますから、いくら風廻しのよいところへ掛けて干しても、幾らかの濕氣を含むことは到底免かれません。それに蟲なども風を通した位では却々死にませんが、寒中にしますと、空氣も乾燥して居りますし、蟲なども皆死んで了ひます。

土用干しは、何うせ梅雨期の濕氣拂ひに是非することにして、更に寒干しをするのが衣裳の爲めに、大層よいことですから面倒でも是非することにしたいものです。其やうに度々出入れをするのは面倒でもあり、又そんなことをする暇が第一ないと云はれる方もありますが、金目をかけて調へた大切な衣裳ですもの、それ位の面倒を見るのは當然です。

器物の虐待は天理に背く

齋藤稻子

△俄分限に珍らしい奥さん

人の身體でも養生をすると自然健康を増すことになりますが、家具の類でも、取扱ひを丁寧にすれば、自然長く保たれる譯です。

或富豪の奥さんですが、俄分限の謂はゆる成金と云はれて居る方ですから、虚榮心滿々で歯の浮くやうなおめかしでもしさうな筈ですのに、此奥さんは又至つて質素な方で、着物などでも新しく瀟洒りとして居れば、それで澤山だといふ立前で、お孃さんが二人、大きい方は實踐女學校に通つて居られますが、分限不相應なる粗末な服裝で、夏などは何時でも洗ひ晒しの單衣で、餘迄目にもお氣の毒な程ですけれども、奥さん

は素より、御當人も一向平氣で、餘所の孃さんのやうにリボンが何うの袴がかうのと物欲しがりなどは微塵もなさらないのは、今時の成金の家庭としては、殆んど奇蹟と云ひたい程です。

お宅は西の窪邊ですから、わざ〳〵澁谷くんだりまで、お孃さんを電車に乘せて通はさなくとも、近くに虎の門の女學館もあるのですが、あすこでは校風が校風だからといふので、實踐の方にしたと云ふのを見ましても、旁々平常の家風が想像されます。

△茶から來た物の取扱ひ

此家庭で取分け珍らしいと思ふのは、家具類です。同じ家具類と申しましても、簞笥や何かなれば、何十年經つてもそんなに損ずる程のこともありませんが、此家庭で日常手近く使つて居ります諸道具は、皆相應に古い、而もお粗末なもの許りですのに、少しも損じたところもなく、綺麗になつて居りますのは、是も亦た珍らしいことだと思ひます。

此奥さんのお里は、お茶人ださうで、小さい時分から、お父樣のお仕込みで、お茶の方は餘程お出來なさるさうですから、道具類の取扱ひでも何でも自然丁寧になさるものでせうと思はれますが、或時何かお話しの中に、こんなことを言はれたことがありましたので、私はツク〴〵其奥樣の綿密な御注意に感服致しました。それは斯うなのです。

私の父の常に申されましたことに、壽命といふものは人間や畜類や草木にばかりあるものでない、總て形のあるものには皆命數といふものがある。それで其命數といふものは、矢張り人間の壽命と同じことで、平生の養生のよいと惡いとで、早くも損ずれば又長くも持たれるものだから、些細な道具でも、無理な遣ひやうをしては可けない、何そんなもの毀れたら、又別に買ふまでの事だといふやうでは天理に背く。些細のものだからとて注意さへして居れば十年なり十五年なり使はれるものを、ぞんざいにして四五年に廢けなくして了ふのは勿體ないことだ。

△ぞんざいは惡德の一つ

一體物をぞんざいにするといふことは、全く人の惡德の一に數ふべきことで、人に對して失禮になること、仕事をやり損ふこと、病氣を招くこと、人に嫌はるゝこと、其外大抵の失敗は、みなぞんざいから起ることだと云はれたと、口癖のやうに申して居りましたと。

それで此奥さまの常々のなさること、殊に道具類の扱ひ方を伺いますと、たとへば硯箱でも片手で縁を持つて引寄せたりなどしては可けない。其時はそれでも別に異狀が無いにしても、それを長く續ける中には、自然と緣と底の附け目が離れ始めるやうになつて、遂には損して了ふことになりますが、始めから丁寧に兩手で作法通りに扱ふことにすれば、外から見ても如何にも嗜みのないやうに見えて、そして硯箱に限らず器物を損せぬといふ得があるので、こんなことも、父からやかましく申されつけたのです。人によりましては、毎日のことを一々小笠原でやるなどといふことは、口では何でもないことでも、實際に行はれる譯のもので無いなどと申されますが、一旦行りつけて習慣にして了へば、側で思ふほど面倒なものではありません。と斯う云つて居られます。此奥さんのお話につけても思ひ出されるのは、私が小供の時、字を書くのに何時でも母から、お前はそんなに早筆で字を書いては可けないと、始終小言を云はれたものですが、どうしても直らず、今でも思ふことを一氣に書いて了ひたいやうな氣がして相變らず早筆を使ふ爲めに字畫が明瞭を缺き讀む人を苦しめるのですが是なぞも畢竟ぞんざいだからであらうと思つて居るのです。

禮式などといふものは、今の繁雜な世の中には無用のものゝやうにも一寸思はれますが、社會の秩序などといふことも個人の禮儀の綜合したものとも云へば云はれるのみでなく、起居動作の作法は身體を不合理に動かさぬやうにと出來てあるのを見ると又衞生的でもあり、器具の取扱ひなどにぞんざいな無法なことを戒めるのは器具を經濟に使用することにもなります。

臺處の造り方

△東南の方がよい

臺所の位置は成るべく日當りと風通しの良い處を撰ばなければなりません、家相家に云はせましても乾臺處とか巽臺處とか云つて、乾卽ち其家の中央から西北の方角か或は巽卽ち東南の隅に臺所を設けるのが良いとか申しますが、成程巽の方角に臺處を設けますのは、至極賛成であります、其理由は日當りも風通しも良いからであります。

けれども又一概に然うとも云へません場合もあります、何故なれば若しも其の方角に他の建物などがありまして、夫れが爲めに日光を遮られたり風通しを妨げられることがあるからです、それから乾に向いた臺處は成るべく避けた方が宜しいかと思ひます、何故ならば臺處は常に多く水使をする場所でありますから、冬期は西北の風が吹き込み殆んど日の當る時がありませんから、冷たい寒いと云ふ處から、知らず識らずの間に洗ひ物、拭掃除なども粗末になりますから、兎角不潔になり易いので衞生上から見て餘り感心すべき方角ではありません。殊に夏向きになりますと色々な昆蟲なども發生します。兎に角臺處は成るべく日光の良く射す風通しの良い處に設けると云ふ事が第一に肝要な條件であります。

△流しの構造

田舍では小流などで飮食物や器具などを洗ふ事にして居る許りか、漬物や浸し物や茹でた饂飩などを洗ふ事にも、川の水を使つて居りますが、此樣事から傳染病の大流行を來たす事が間々あります。

愛知縣の愛知郡の邊へ行きますと、吹井戸がありまして、其傍に三和土で二段位に水溜が出來て居てから下の段へ順次に水が流れ落ちるやうにしてあり、其中に飮食器具の汚たのなどが浸けてありますが、これは井戸から吹出す水でありますから、小流や川の水な

どで洗ふ程の危險はありませんけれど、其溜りは常に清潔にして置かなければ危險です。

普通の家庭の下流しは、成るべく三和土にして、俗に雁首と稱へる煙管の雁首の形をして土管で、土臺下から表下水へ汚水の流れるやうにして、其土管の穴には鼠を防ぐ爲めに金網を用ゐるのですが金網位は鼠が持上げて入つて來ますから其穴相當な石蓋に水通しの目を開けて差し込んで置くのが一番可いのです、又三和土が億劫ならば亞鉛板を張つて置いても可いのです

△臺處の床下

臺處を完全に建て樣と思ひましたならば、少し贅澤のやうに思はれますが、他の座敷などの造作などは省いても、出來得るだけ金をかけたいものです、その構造は先づ床下の周圍に煉瓦積みとして、一區劃をつけその煉瓦積みの上へ土臺を据ゑて臺處を建てるのです然し夫れは普通の普請では少し贅澤に過ぎるかも知れませんから、其れ程でなくとも普通の臺處の床下內部の周圍だけなりとも煉瓦を積みますと、手輕く出來樣かと思ひます。

其の煉瓦は燒き過ぎ煉瓦を用ゐたいのです、而して流し元の境も煉瓦を使つて其の底になる土間も煉瓦を敷詰めるとか、三和土にするとかして、上板の下は糠味噌桶や炭入などを入れる處に利用しても鼠の入る恐がありません、又流し元の周圍が煉瓦積みでありますと、何時迄も腐朽する憂がありませんから、充分清潔を保つ事が出來ます、然し煉瓦積みは、中々億劫ですから、今少し手輕にしますのには、亞鉛板で周圍を圍つただけでもよいのです、此場合には、土臺下一尺位亞鉛板を埋めて置きませんと、鼠を防ぐ事が出來ません、又流し元の周圍も亞鉛板で圍へば、手輕でもあり且つ板の樣に腐朽する憂もありません。臺處の壁は、鴨居下一間だけ位は、板張にすると方が拭掃除が出來て宜く、又引窓や櫺子窓なども、從來の構造は不完全で鼠の出入も盜賊の忍び込むのも自在でありますから、それ等を防ぐ爲めに、金網を張る必要があります。

田舍先生

山家少女

何々令夫人、何がしの若君などゝみなやむごとなき、お方々のみ御紹介遊ばさるゝところへ、途方途轍もない山家教師の品評併しこんなのも又一寸息ぬきに面白からうと、村の小學教員の君達を少々お引合せ致します。

△青木先生

校長さんで、立派な道學先生です。お年は四十五六。天保式で、女生徒を敎へるに、まるで女大學流ですの。可愛想じや有りませんか。折角この文明の世に生れて何事も活々と花やかに振舞ひたいと願ふ少女達を、舊弊の繩で縛りかためやうとなさるんですもの。派手な姿するなりボンはならぬ、袖は一尺五寸以内に限るなんて、まさか八寸の袖を三寸縮めたつて、村の産物の殖えた話もきゝませんのに、ホヽヽ、白粉は墮落の初歩、男生とは物を云ふな、笑ふな近づくなつて、取越苦勞もいゝ加減にして止して頂かなけりや、反へつて無邪氣な子供心を損ひますわ。一體女と云ふものを何う見ていらつしやるのでせう、お豆腐じや有るまいし、さうさうたやすく揉みつぶされて堪まるもんですか。餘り馬鹿にしていらつしやる。全くこんな方にこそあの内藤さんのやうな目醒藥でも少々來りたうございますわ。

△緑川先生

體操の先生。中學卒業の一年志願兵で、昨年聯隊地から歸られたばかり。色の黒い、體格の立派な、眞に軍人らしい方です。お年も二十六の血氣盛りだから、もう無暗と元氣を出して見たいと云ふ形で、折々禮にはづれた粗暴な擧動が有るものですから、校長の眉がピク〳〵する事が少なくありませぬ。

けれど極子供らしい無邪氣なところから、生徒にやすかれます。ベースボールがお得意で、休みの時間には生徒と一緒になつて猿つ子の樣にとびまはつて被居る。學生時代には選手でした。

お家は近頃上り身代で長男で被居る。外の方の樣に俸給取つて妻子を養ふ體ではなし、遊び半分に敎師をなさるんですもの、お金の不自由なんかお存じありません。先日も、二ケ月分の俸給をみんな投り出して、學校中の先生に奢つたんです。それを又我子自慢のお袋樣は、毎日店にひかへ込んで居て、來る人毎に得々として吹聽なさるんで、何處へ行つても其お話でもちきりです。

△中川先生

學校一の滑稽家。もう五十に手のとゞくお年なのにまるで七八ツの子供見たいにわい〳〵騷いで被居る。尤も尋常二年の受持では、あの位でなけりやいけないけれど、其の又お顏が滑稽に出來てます。生徒に遊戲敎へる時なんか「是れは寢すぎたしくじつた、ヒヨン〳〵〳〵」なんて變手古な足つきしてとび廻る姿なんてつたら、とても見て居られませんのよ。

△芳雄先生

一番お若くつて十九です。昨春中學を出たばかりのお坊ちやん。親ゆづりの土ほじりが厭さに出ていらつしやるのです。なか〳〵のハイカラさんで、髮を綺麗に分けて、袖口なんかにいつもリボンのオリーブがちらついてます。けどもお年がお年ですもの、まだ子供氣が抜けません。一寸からかつても直に赤くなるあたりは、初心で可愛いの。其教授ぶりの振つてる事、何せ今が生意氣盛りの時ですから、無性と氣障な事云つて見度いんでせうよ。無理も有りません先日私、一寸立聞してたら、「いけないなあ、どうも皆アクセントがわるくつて――」「皆さん絶對的にわからんのですか?」なんて云つて被居いました。そつと戸のすき間から覗いて見たら尋常三年の生徒達は餘りむづかしい事仰るもんだから、呆れ反つて目ばかりパチクリ〳〵させて居るのに、先生そんな事には一向お關ひなしで、ペラ〳〵と勝手な事ル喋口つて氣取つてる圖は、まるでパックのポンチ繪でしたわ。あれじや子供が可愛想だなんて氣を揉む連中もあるけれどよくしたもので、どうかかうか覺えて行くから妙ですよ。

小學の代用なんか厭だ〳〵つて口癖の樣に云つてらつしやる。でどうやら近日に上京なさる樣子で、明治大學へおはいりになるとか。前途多望の好青年、何卒自重して何ものにも囚はれず、道心堅固にやつて下さいよ。君が御成業を神かけて祈ります。

△春子先生

去年の師範出。二十一二でせう。色白の長顏で、背のスラリと高い美しい方。唯一の女子と全校の唱歌を受持つて被居る。よく通るいゝお聲です。お休みの日なんか、下宿の窓に凭つてあの「――月の光は隈なくて、秋風のみぞ身にはしむ――」つて今樣をよく唱つて被居るのでじつと聞いてると、もう〳〵しんみりして泣き度い程です。木曾のお生れですつて、言葉が一寸變に聞えます。女でこそあれ立派な訓導ですから、……まあ其の爲と云ふ譯でもあるまいが、外の男の代用先生達を下目に見ると云ふ風がちよい〳〵表はれます。それに學生時代には、ごくの勤儉質素主義で、先生方にも譽められる位だつたさうですのに、近頃は大分派手やかになられて、校長先生に眉ひそめらるゝ事が度々あります。そりや今迄師範式に束縛された反動もいくらかあるでせうし、でなくつても今がむしやれ盛りの年頃ですもの、ちつとやそつとおめかしなすつて決して惡いんじやない、否むしろ垢じみた野蠻人見た樣な女よりは、どれ程好しいか知れませんけれど。何と申しましてもお職務がお職務ですからね。兎角世間の口はやかましいもの、何卒お氣をつけ遊ばせよ。

△まり子先生

某技藝學校の出身で、高等女生の裁縫受持。小學時代の私の友達で、よく喧嘩したものですラケットでなぐり合つたりなんかして、「あの時分はまるで鬼の樣だつたのね」つて時々云ひ出しては笑ひますの。尤も鬼見たいのは私で、まり子さんは決してお轉婆じや無かつたが――。

否、自分の友達だから褒めるのではないが、全く氣質の柔しいよい方よ。小氣味よくぽちやぽちや肥つて髮はいつも根上りの桃割れ、それでやさしい人が一層柔しく見えます。羽織の脇明へ手を入れて歩くのが癖ですの。

始終にこ〳〵して被居つて、生徒を教へるにも心切ですから、みんなになつかれます。此の人の怒つた顏なんか、つい見た事が有りません

何時でしたか、あの中川の滑稽先生圓い形の錢を持つて來て、「是れはよく肥えてるからまり子さんだ」なんて仰るんでせう。傍の者はほんとうに冷汗でしたけれど、御當人は色も變へずに相變らずニコ〳〵してなさるんですもの。何ぼなんでも餘り意氣地がないじやないか、うんと手強くやり込んで上げればよいに、と思ひましたけれど、女のくせに現實なんか云ふのは見ともないもの、矢つ張あのはうがおだやかでよいのでせう。近日に某陸軍中尉と結婚されます。其時は私も友人の一人として招待されるはず、待ち遠しくつて〳〵〳〵。

まだ〳〵御引合せしたい女先生が三四人は有りますが、お差障りになつても惡るう御座いますから、是れで止めませう。

●獨逸婦人の壽命

「女は家の柱なり」と謳はるゝ獨逸に於て、婦人の壽命が著るしく長くなりしことは、何よりの結構のことにて、婦人萬歳と唱ふべき事である。

試みに一二の統計を擧げて見ると、千八百七十年から千八百八十年までの間の、獨逸婦人壽命の平均は、四十二歳半であつたが、千八百九十年から千九百年間の、婦人平均壽命は五十五歳である。實に驚くべき好成績である。

これに對し男子の生命持續は、どの位であるかと云ふに、千八百七十年乃至千八百八十年間の平均は三十八歳、千八百九十年乃至千九百年間の平均は、四十八歳半になつて居る。即ち十年間に平均十歳以上の生命を延長し得たわけで、國民衛生上大に喜ぶべき現象である。

右の成績によると、男子より女子の方が、平均六年以上長生するわけである。

これはどう云ふやうに說明せらるべきかと云ふに、男子は生活上殊に經濟の點に、多くの力を須ひればならぬ、女よりの早く力を費し盡すものと見ればならぬ。

殊に興味あることは、右の事實によつて、適當の仕業と云ふものが、健康を害せぬと云ふことが明白となつた。即ち獨逸に於ける婦人の職業と云ふものは、以前よりは餘程增して來た。精神的にも、また身體的にも。然るに生命の持續は右の如く增して來た。神經質のものや、ヒステリーと云ふやうな婦人好愛のものも、減じて居る。尤も衛生上の設備が進歩したことは忘るべからざる條件の一つである。

兎に角、適度の仕事は、健康に害を及ぼすものでない。却て飽食暖衣の人が身を害ふのである。

英國の如きは、婦人の職業と云ふものは、獨逸よりも、尚烈しい。併し婦人の平均壽命は、五十六歳にまで達して居るのである。

尤も壽命の長短によりて、人間の價値を上下することは出來ぬ。要は價値ある人生を送るにある。然らば身を護り、體を養ひ、價値ある人生を長く持續して、己と人とを益するやうに努めることが大切である。

湘南名勝記

保科柳子

昔時の大磯といへば、直通ひ廓の假粧坂を思ひ起させ、鎌倉といへば先づ幕府の古を聯想させる。年々巨船の運び來る觀光團の途中も、必ず鎌倉の停車場へ下車る事を忘れないのは、日光と並んでそれ丈け見る價値が有るからなのだらう。

先づ鶴岡八幡宮は措き奉りて、最も外來の客に多くの印象を殘さしめる、彼の獅子孔山大佛樣をば、些申さう。明治に傑出した閨秀、晶子女史の讃歌に逢ふた建長時代の傑作、如何にも柔和の御相で端然と御手を膝に。

美男に在はすと賞められても、別に己惚の御癖一ツ殖さうではなしいつゝ四海平等と御光の碧眼蓮にも同じく大慈悲の眦を垂れて在はす、春風和かに金銅の御顔を撫でゝ境内の櫻花爛熳たる頃、佛身の體内に入つて御脊にあけた風穴からすつと花の梢を見下した時、理窟はぬきにして面白い、先づ鎌倉に來たら第一に是を見るべしと、然いふ。

鎌倉はもとより歴史に富める地、其心をもつて來る遊子の感慨を深からしめる處、蓋し僅少くはない。けれども夫等に就て一ツ〱訪ねるよりも、昔時の若宮小路たる八幡前通りの松並木に佇いて、其幾星霜を經來つた老幹の梢参差海風に呼ばふ聲を聞けといひたい。

是は賴朝公の御墓所、此處は何々の由緒の地、是は何、と見て回るよりも、必ずや遙に多く懷古の情を味はしめる事が能よう。

夏の鎌倉はとらない、何故となれば餘りに多く都會化し過ぎてるは河童の眞似の出來ない人なら、寧ろ上野か芝の公園地でも散歩した方が餘程氣が利いてる。若し又海邊の空氣を吸つて體を養ふとなら、もつと避地へ御出なさいだ、由井ケ濱海岸の景はコン〱並で、大磯國府津の方が少し以上だと思ふ。

逗子！　不動の浪子か、浪子の不動かと迄不如歸で有名になつた不動堂の所在地、逗子海岸の實景を御存じ無い方でも、本郷座邊りの書割では隨分御承知の事と思ふ。

浪切不動…近頃は浪子不動とさへ呼ばれて、主客轉倒の形である、その堂祠は逗子と鎌倉とを區切つた山の中腹に在る、山と云つても無論海に突出た處で、眼下はそれ不如歸の口繪に有る浪子の腰掛けてる岩、その岩に今でも當時を偲ばせる波が寄せて砕けてゐる堂の内部はもう隨喜の涙を溢した連中の、海鼠の樣な、海月の樣な、落書計に滿されて居には不少閉口する。海岸の風景は鎌倉よりも箱庭的の美を持つて居る、箱根足柄の連山を從へて玲瓏たる八朶の芙蓉を正面として、恰度其下に江の島がふんわりと浮いてる處、私が番だつたら江の島山から富士山迄、一寸ひと飛びにとんで見せる平時は大抵波も無くてお池の樣、其入江の春の長閑さ！

三浦半島も三崎に近づく程、東西兩海岸とも景色が勝れて來る。歴史上の三崎邊は今更源平盛衰記を引出す迄も無い。城ケ島の巖頭星の色に煌く燈臺の灯、それから出入る船の舷燈の赤き青き、私の眼には懷かしく映つた。

半島の附根は西が逗子で東傍が横須賀、其處には造船所や工廠やを除いて仕舞へば、書く程の事は零となる、否浦賀にペルリの紀念碑がある、それからまだ帝劇で稍世人の耳に馴れた安針の塚が逸見に在る。

横須賀から北へ約二里浦傳ひにして、文庫と八景とで有名な金澤がある、景色に至ては逗子以上箱庭的で、寧盆景といひたい、實際その可愛らしい春景色を見ると、お床の間へ硝石の蓋でもして飾つて置きたいよう。

金澤の海岸から見える本牧の鼻を回つて仕舞へば、もう書く事はない、有つても厭や、但し品海の御臺場丈けは何となく好い、或は昔氣質の親の自然感化かも知れない、それから向ふ河岸、河岸も穩當でないけれど兎に角向ふの房總は知らない、好いと人が云ふ一度行つて見たい。

大磯から國府津小田原へかけて平凡、眞鶴ヶ崎は海上から眺めて一寸よい、沼津興津と又優しい景色に成つて來る、淸見潟…私の行つたのは極く幼時で有つたので、もう景色も何も頭から拔けて仕舞つてる、けれど名丈け聞いても何と無く詩的の感興をおこさしめる、も一度行きたい興津へ、興津つて龍華寺の有る處ぢや無いか、

龍華寺の…。

曾て魚見が崎の頂上で、持つて行つた「我が袖の記」



を讀んで、見下す絶壁の下淵深く波の白雪が紺碧の深海に文を流したそれを見た時、云ひ知らぬ感慨が胸一ぱいに湧いた、這那心地の時、不圖行末遠い體を惜氣も無く身でも投げたくなるのぢや無いか知らんと。彼の「我袖の記」は、我が住む里で書かれたもの、噫、今も聞え來る逗子海岸の波の音、十餘年の昔君の耳に如何に響いた事だらう。行きたいな興津へも一度、而して龍華寺のお墓へお詣りしよう。

羽衣で有名に成つても三保の松原、それは幾分私の

記憶に止まつて居る、たけれどそれ程には思はれない、一體私は天の邪鬼の方で人が好いと云ふと一寸けなして見たい。

若し私が富士を抱へて何處かへ姿を隱したらあの邊の景色は何うなるだらう。眞く何處から見ても我富士なる哉である、彼の多感な眉山が湘南に遊んで、酔ふた眼にも猶富士から放れず、我富士なる哉を幾度絶叫したか。羽衣といへば以前中央公論かに面白い事が書いて有つた。あの變り者の先生の説として

天女と稱せられて居るのは、彼は何うかして漂流して來た西洋婦人では有るまいか、故如何となれば、其羽衣の斷片を寶物として何處とかに保存してあるのを一見した。誰でも羽衣と云へば白色を思はしめる、然るにそれは黑色のレース樣の物で有つた金髮碧眼白面の美人に始めて會遇した白良が、只もう其の美に打れて是や天女と云ふ者かと見惚れては、スカートの片々たるが胡蝶の羽とも見えたのだらう、香水の薫の紛々たるのを靈香四方に薫ずと感心したり虚空に聞えた音樂とやらは或はクラッチの音でゝも有つたかもしれない。

と、隨分奇拔の御説と感服仕つて、今に概略記憶に止むる事、かくの如しである。

一體私は海でも餘り優しい、可愛らしい景色は好まない、鯨吠ゆる玄海灘を過ぎ行けば、と云つた樣な雄大なのが好い、但し加留多の空讀みで承知してる丈けで、井の中の蛙先生未だ一度として左樣なけしきを見た事がない小父樣に、鯨吠ゆるつて何んな聲でせうかつて伺つた、げーいつて云ふさ、と、それなら大鯨だつたら、ちようーげーいつて吠えるのだらう、虎の鳴聲がとらあ位なら知つてます。

玆に一ッ至つて夢の樣な、馬鹿らしい事と思ひながら何うしても心から拔けない事がある九ッ位の時母上に伴はれて久能山へ上つた時高い石階の上に立つて、すうとこう海を見下した、と、波が塀の樣に立つてゝ其の上に雀が四五羽止まつて居た、今自分で考へても始終動いて止まない波が、そんな靜止の狀態に有る可

き譯のものでないと打消しても、何故かそれを否認し切れない、今でも久能山といへば直ぐ其の樣が眼前に浮ぶ、單に波が塀の樣に見えたと丈けならまだしもの事、雀がおかしいでは無いかと、よく母にも笑はれた或はその久能山から歸つた晩にでもそんな夢を見たのだらう、それが潛在精神に殘つて居て成長してから、不圖思ひ出して、眞實とする樣になつたとでも、理窟つけれは附けられる、けれどもやつぱり私は波の塀に雀が止まつて居たと、眞面目に獨で思つて居る。



諸木の中に名なき一木の云ふやう、杉よりは檜がましなりと、餘の木ども其方は何ぞと問へば、我は檜にあすならうと云ひけり。己は一書の著述もなくて人の著述を見ては誹りあざける人あり若し傍らより、足下にも斯やうの書を著はしたまへりしかと問へば、我は實學を嗜みて、斯樣の雜著を好まざる故、あたら暇を潰さすとまぎらす、是もあすならうの類なるべし。

△二ッの感情	（五等）	五圓	蛩乙女
△秋季忠告會	（五等）	五圓	藤波
△醒めた女	（五等）	五圓	清香花
△ノートブック	（五等）	五圓	白芙蓉
△兩面かゞみ	（四等）	拾圓	萩の下露
△暗礁を避て通る女	（二等）	參拾圓	こほろぎ
△月下の品定め	（一等）	五拾圓	朽葉
△寄合ばなし	（三等）	貳拾圓	落葉村
△大概は嫌はれる方	（四等）	拾圓	清水妻子
△平凡な小石	（四等）	拾圓	野菊女
△四十女の口前	（五等）	五圓	登志子
△花と小鳥	（五等）	五圓	小蘭
△女師出身と高女出身	（五等）	五圓	槿の花

嗜好食物と滋養

食物の習慣と云ふのは、それが滋養物で有ると無いとに拘らず、どの樣な人にもあるもので、常習の食と云ふものは、それが滋養分に富んだものならば、尙ほのこと、若し滋養分の無いものでありましても、それを一概に排斥することは出來ません。

此頃の病人は皆「どうも何にも食べられませぬ、滋養物が少しも取れないで困ります」と云ふことを申します、この滋養物が取れないと云ふのは、何う云ふことかと問ふて見ますと、牛乳も、スープも玉子も厭だと云ふことなのですそこで貴方は一體何が好きですかと聞きますとお鮨が好きですとか、鰻飯が好きですとか申します、斯う云ふ場合に私は、それでは貴方がたの一番好きなものを澤山食べて御覽なさいと私は言つて遣ります、するとその病人は、其次に逢つたとき「先日先生の御許しが出ましたので、早速鰻飯を食べましたら、お蔭でそれから食氣が付き、今では何でも食べられるやうになりましたと云ふやうになつて來るものです。

斯樣な譯ですから人々の習慣食物と云ふものは、假令それが滋養分を含んで居ないものでも、決して棄てるものではありません、斯う云ふことは其人が生れ出るとからの習慣になつて居るのですから、彼は滋養があるから宜いとか、是れは滋養がないから惡いとか、一にも二にも理窟でキチンと極めて仕舞うと云ふことは、生理學上にも背いて居ることであります、然るに病人の望むものは皆禁じて仕舞ふと云ふのは決して活きた治療ではありません、醫師の勸める物は病人が口にするにも嫌がる、そして病人の望むものは醫師が絕對に禁めると云ふのでは、トゝの詰り癒るべき病人も却て惡くして仕舞ふやうなものです、又どの樣に滋養に富んだ結構なものでも、病人の嫌ひなものは食べても飲んでも何の効もありません、夫故に滋養品と云ふものは、適宜に用ゐない以上は、如何なる滋養品でも効を奏するものではありません、同時に又常習の食はどんなつまらぬものでも、一概に排斥してはならぬと云ふことを知つて居るのも、家庭の人には極めて必要のことであらうと思ひます、勿論斯う申したからと云つて、病人は何を食べても宜いと云ふやうに誤解しては甚だ迷惑であります、要は滋養物並に常習の食と云ふことに就て、一般の心得を申したに過ぎぬのであります（北里醫學博士談）

松茸飯の炊き方

松茸飯の炊き方を述べますと、割合は白米一升に、柔かに短冊に切つた松茸三百匁と、鷄肉の柔い所を百匁細かに切つたのとを準備し先づ釜に水一升五合を入れ、沸騰した處へ白砂糖五匁、醬油一合を加へ、再び沸騰せしめ、前に準備して置きました松茸と鷄肉とを混ぜて入れ煮えたゝせ、最後に米を入れ、中を能く交ぜ合せ、釜の中を凹字形に均し、釜蓋をして米を加へた時から五分間を過ごして後火を全部引いてしまひ、其儘にして二十分間蒸します、若瓦斯の場合は米を入れてから同じく五分を經過した處で火を止めれば夫れで出來上ります、鷄肉はお好みに依つて必ずしも加へるには及びません、松茸飯にはやはり豆腐や春菊の汁を添へますと、品もよろしく、味も亦格別です。

冬生れの子供は強い

△強くて育てよい

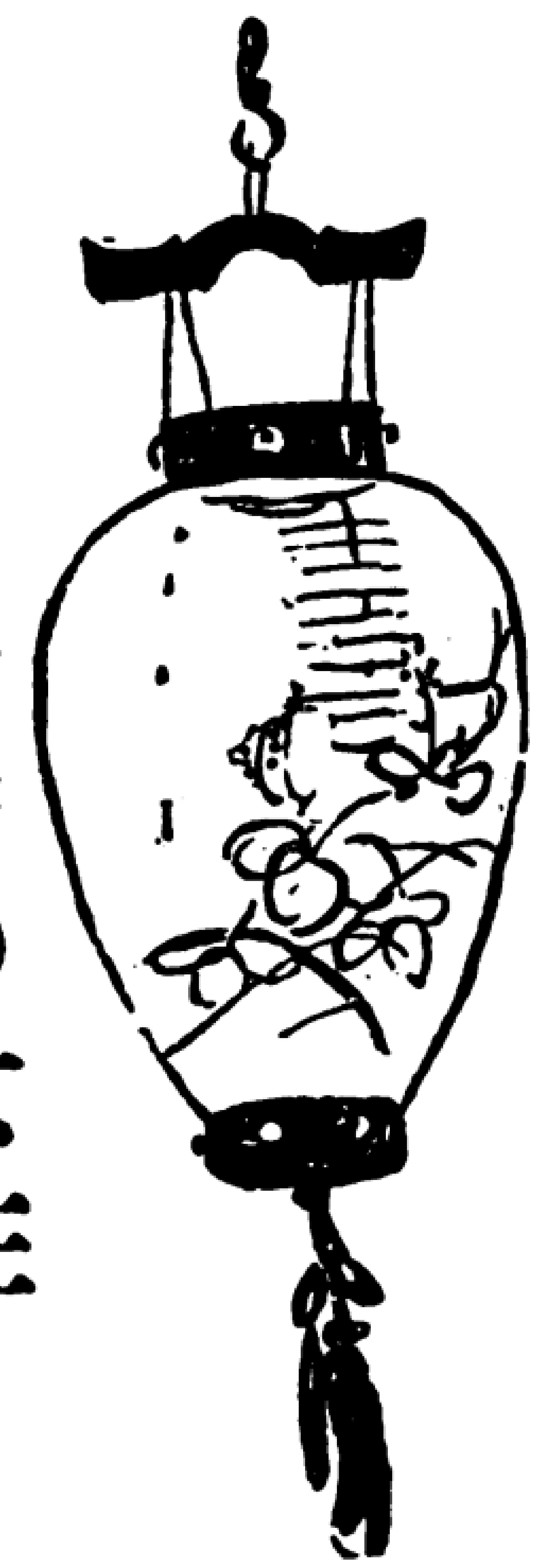
夏生れた犬ツころや猫の兒は弱くツて育ちが悪いが、春秋生れや冬生れは強壯で丈夫に育つと云ふ、人間の兒も矢張動物の如く果して夏兒よりも春秋生れ又は冬生れの兒が丈夫であるか何うかと申しますと、是は未だ完全な統計があるのでは無いから具體的には云ふ事が出來ぬけれど、冬分は母親の身體が既に冷い寒氣の裡に生活して居つて、自から強壯になつて居るから生れた子供も從つて丈夫のは當然で、夏生れの赤兒よりは感冒などに冒される事も比較的少い但之夏季には發汗や體内水分の蒸發が多く夫な不潔にして置くと能く腋窩、頸筋、鼠蹊部（腿の付際）生殖器等の附近が糜爛て來る、又生れ立ての赤兒の前頭部――醫者の方では大顖門と云ふ、少し凹んで居てピク／＼脈の搏つ處――に鱗狀又は結痂狀の苔が附いて、何時までも殘つて居るのがある之は皮脂や上皮剝離不潔、な垢等から出來るものでオレーフ油を附て洗ふと能く取れるのであるが、兎角其れを怠る爲に夏季には往々脂漏性濕疹を生じて、頭部一杯蔓つて終には顏面にまで及ぼす事がある、又皮膚に粟粒性濕疹を生ずる事もあるが、冬季は發汗や蒸發が少いから、從つて是等の皮膚病に罹る事も少く、總じて冬生れの赤兒は概して強壯で且餘程育ち易い。

△石鹼と冷水摩擦

生兒は毎日お湯を使つてやる事になつて居るが東京邊りでは三週間位で止めてしまふのが多い樣に思はれる、之は矢張田舍の樣に百日位までは面倒でも毎日使つてやるのが宜しい汽車汽船等の旅行も百日以内は斷じて見合せればならぬ、戸外に連て出る事も西洋では健康な兒は生れた日からでも構はないと云つて居るけれど、日本の子供は弱いから餘程用心し無ければならぬ、又西洋では子供用として別に刺戟の無い軟かい石鹼が出來て居るが、日本では婦人の樣に米の糠（田舍出來の物）を使ふと誠に重寶である、又獨逸の醫者などは幼兒の身體強固法として、生後滿一年頃から冷水摩擦法を行れと云つて居るけれど、日本の子供は西洋の子供に比べると、體質身長共に著るしく劣つて居るから、此儘日本の子供に應用することは到底六づかしい、日本の子供ならば、體質に依て一樣には云へ無いが、先づ滿三年位數へ年の五歲頃から始めるのがよからうと思ふ。

△石鹼と冷水摩擦

我國では夜間母親が赤兒に添寢をして遣る事になつて居るけれど、之は餘り感心し無い習慣で、赤兒の身體を溫める爲には大して效能が無い、保溫器としては通常湯タンポを蒲團の中に一個入れてやれば大概十分である、懷爐は餘り宜しく無い、何うかすると能く蒲團を二枚も三枚も掛けて其上に湯タンポ懷爐を二ツも三ツも入れて感冒を引かせて居る家がある、是は隨分亂暴な遣り方である、又寢まる爲に子供が汗を搔いても其儘にして置たり、又衣服を着換さす時によく感冒を引かすのである、子供の感冒は先づ初めに輕い鼻加答兒を起して夫から咽頭、喉頭、氣管、大氣管支、中氣管支、毛細管と云ふ順序に徐々と進行して最後に肺尖加答兒となる大人の如く突然肺尖を冒すと云ふ樣な事は極めて稀であるから、初めて鼻のつまつた時に用心しなければならぬ。（瀬科松伯氏談）



希臘神話中の女性

磯千鳥

△最初の女パンドラの話

白銀の様な雲の上に秀でゝ、下界の者には未知の境であるオリムパスの峰には、黄金で鏤めた世にも壯麗な、神々の殿堂があると申傳へられてをります。此殿堂には天地の主宰であるヂユピタアを初め、女神のヂユノオ、ミネルバ。さては戀愛の神ヴイナス、その他諸々の神樣が寄合つて、芳醇な神酒に酔ひ音樂の守護神アポロの奏でる立琴の音に聞惚れ、或は額を鳩めて下界の事に就て相談をするのを常としました。

下界にはその以前から多くの人間が棲んで居ましたが、それが悉く男ばかりでありました。女なしにどうして人間が續いたか、それは分りませんが然も是等の人達が初は、天上の樂園にも劣らぬ幸福な日を送つて居ました。

彼等は實に織る事も、耕す事もなく暮す事が出來ました。地上は常世の春に包まれて、野には香の高い花が咲き亂れ、柔い日影はいつもそれを照してゐました。爭もない、罪もない、人々は只枝に實つた木實をとり、河の流に鮮しい乳をのみ、樫の幹から滴る黄金色の蜜に飽くほか、何一つ爲る事は無い。若し此儘で續いたら人はどんなに幸福であつたであらうと思はれました。

而し變化は先『人』の心の中に萠しました、段々と日が經つて、人々は此歡樂に馴れるに從て、漸く神々に對する敬虔の念も薄ぎ、今迄の柔順は傲慢と變り、其上物を識るにつれて色々正しからぬ事をも企む樣になりました。

此有樣をぢつと天上から觀て居た神樣は、尠からず

人間の態度に憤つて今迄授けてあつた特權を凡に奪つて終ひました。

其後の下界には最早常世の春は消失せて、その代り肌をこがす樣な夏と、身を刺す樣な冬が來ました。家は作らねばならぬ、畑は耕さねばならぬ、其上人々にとつて耐え難い苦痛は今迄持つて居た火を奪はれた事でした。人間は今や、頸を垂れて野獸の樣な生活をするより外はありません。

處が茲に只一人、人間の味方として、此不幸を救はうとした神がありました。プロメシアスと云つてこれはオリムパスの神ではありません。寧ろ其仇に當る一族の一人でしたが、單身天へ昇つて、太陽の火を葦の穗に移して歸り、再び下界に火と言ふ物を與へました。

さあこの侮蔑を悟つた天上では默つてゐられません、激し安い、そして執着の強いジユピタアの怒は今は人間を去つて、其救主プロメシアス一族に向ひました。此一族を破滅に導かねば、如何して恨が晴れませう。而もジユピタアは其復讐の方法として極て、婉曲な、極て執拗な、そして人間とプロメシアス一族には永久の煩となる樣な手段を講じました。

でヂユピタアは其全能の力を利用して、一人の世にも美しい、女性を造りました。睡蓮の花の樣な肌ふつくりと膨れて乳の邊迄波をなして流れてゐる髮の毛――それに加へて、他の神々も各自に一つ宛の贈物を致しました。

或神は美しい聲音を、或神は音樂の才を。かうして出來上つた女の美しさは、その長い睫毛の下から上眼に覗つめられた男は、實に命をも投出し兼ねまじう思はれました。

……此最初の女こそパンドラなんです、三重吉の小說『女』の中に出て來るパンドラなんです――

軈てパンドラは美しい裝をして、下界に居るエピメシアス(プロメシアスの同胞)の許に贈られましたが、正直なエピメシアスは、此美はしい姿が、世にも怖ろしい禍を藏してゐやうとは夢にも心附きません、同胞の諫には耳をもかさず立處に自分の妻としました。

初は至極無事な日が續いたが、茲にパンドラは下界へ降りる時神々から餞として授けられた一つの筐を持つてゐて、而しそれを開ける事は堅く堅く禁せられてゐました、パンドラは初の內こそ、しほらしく其言葉を守つてゐましたが、狎れるに從つて、如何しても其中が見たくて仕方がない。開けてはならぬと言はれてゐる丈に猶の事開けて見たい。只の一目でいい中を覗いて見たい。それからと云ふ物は寢ても起きても此筐の事許り考へてゐましたが、到頭堪へられなくなつて、或日そつと筐を取出すと、わなわなと顫へる手で其蓋をほんの尠し開けて覗ました。



處がもう後悔は遲かつた。其尠しの隙間からは數知れぬ世の害毒――老衰、病氣、嫉妬、憎厭、復讐心と云つた樣な物の影が煙の樣に立つて行くではありませんか　パンドラははつと愕いて其隙を閉ぢたがもう遲い。然も唯一の其筐の中に殘つたのは、それは『希望』でありました――

かうしてヂュピタアは女の疑深い淺墓な好奇心を利用して、復讐を遂げたのですが、其以來世には代々禍の種は絕えません

そして人の心には、――女の心には、――どんな場合

も一縷の望と云ふ物も消えません

それはパンドラの筐の内に此『希望』が唯一つ殘つて居るからだ、と言傳へられてゐます。

△ヂュノオの嫉妬アイオの物語

ヂュノオは天地の主宰ヂュピタアの妻なる女神でした、平生は落付いた、優しい牝牛の樣な眼をした女神として天上でも下界でも敬はれ且慕はれてゐましたが、唯一の此ヂュノオの缺點としては、我儘な、爭好な、嫉妬深い女性の通性を極度迄發揮してゐた事で時々は黃金の玉座にある身をも忘れてはしたない振舞を敢てしました。それは夫の神ヂュピタアが既に多情な性質で、その愛した女の事に就て、二人の間に紛紜の起つたのも決して一度や二度ではありません、而も其内で最も執拗なヂュノオの迫害を受けた哀れな女はアイオ(イオとも云ふ)でありました。

＊　＊　＊　＊　＊

アイオは或河の神樣の娘でした。

或日今迄澄み渡つて居た空が急に掻曇りましたが、女神のヂュノオは思當る事があるので、直樣其雲をばかき除けて見ると、遙か下界、銀の帶の樣に流れてゐる河のほとりに一匹の綺麗な牝牛が立つてゐましたそして其直傍に居るのは擬ふ方なき夫ヂュピタアなのです。

ヂュノオは直に黃金の翼のついた沓を履いて、河の邊に天降ると、さりげない足どりで夫の神の傍に近寄りました。

男神は暫く前迄美しい水の乙女アイオと、河の堤に腰かけて、甘い戀を囁いてゐましたが妻の眼に觸れたと思ふ刹那、其乙女をば、牝牛の形にして其場の面倒を掩はうとしたのです。然し妻の女神は既に其事を知つてゐました。で傍に寄ると何時になく莞爾として、氣味の惡い迄其牝牛を賞め、どうしてまあこんな綺麗な牝牛が生れたのでせうと訊ねました。

ヂュピタアは不意に脅かされた愕きから未だ覺ませ

ん、放心と『それは新しく造へたんだもの』と云つて終ひました。すると女神は、『ではそれを妾に下さいな』と云ひました。

此言葉には知慧の權化とも言ふべきチユピタアもはたと當惑しました我愛人を妬深い妻の手に與へるのは固より耐え難い處ですが、と言つて、こんな些細な願をばどうして拒む事が出來ませう。男神は澁々承知致しました。



妻の女神は態と手荒く其牛を牽いて行つてアルガスに嚴重に番をする樣に命じました。

此番を命せられたアルガスは眼が百もあつてどんな眠むい時も二つ以上眼を閉ぢませんからして哀れな水の乙女は晝は野に出て草と食べ、夜には首の廻を繩で縛られました。或時は悲しさの餘り手を合してアルガスに頼まうと思つても手は醜い蹄になつてゐます、聲をあげて泣かうにも、口を漏れるのは恨めしい牛の鳴聲です。毎日々々大きい眼に涙をためて、只管父なる河の神様に知らせる便もがなと思つてゐましたが、或日アイオが沙原に自分の名を蹄で記しておいたのが計らず父の眼に觸れました。

然し番人のアルガスは間もなくそれを見附けて、それからは一層見張を嚴重にして、自分は堤の上に座り

百の眼で四方を睨んでをりました。
一方アイオをこんな悲しい境遇に導いた、チユピタアは遉が心が咎めて仕方がなく、天の使マアキユリイに吩咐けて女を救ふ樣に命じました。風の樣に素早いマアキユリイは黄金に蛇の卷附いた、あの魔法の杖を携へ、羊の群を追ふ羊飼に身を扮して、アルガスの見張をして居る堤の上に現はれました。アルガスは此美しい少年を見ると呼止めて、傍の石に、腰をかけて話をする樣に言ひました。

　マアキユリイは其隣に腰を掛けると、種々の面白い話をしたり、又笛を取出して樣々の曲を吹き、如何かして此男を眠らさうと企てましたそんな事とは夢にも知らぬアルガスは話上手の羊飼の話にうつとりと聞恍れて、百の眼を大方閉ぢて了ひましたが、未だ其內の幾つかは重い瞼を見開いてゐます。

　マアキユリイは自分の吹いてゐるしりんくす、と呼ぶ笛の由來に就て猶もこんな話を續けました……

……むかし水の精にシリンクスと呼ぶ美しい乙女があつたんです、それは〳〵、美しい乙女なんで其處等の神々や木の精から慕はれてゐましたが、乙女は甘い戀の囁には耳も貸しません。處が此シリンクスの優しい姿を見て優い愛着を感じた一人はあの森の神のパンでした。然しあの角のある醜い顏、蹄の附いた兩の脚が此乙女の歡心をどうして惹く事が出來ませう或日女を待受けて此思の程を明さうとするとシリンクスは其言葉をもきかずに逃げて行くのです。パンは其後を追ひました。其後を追つて河の岸迄參りましたが、今しも女を捕へやうとする時女は聲を限りに救を求めたんです。其聲を聞くと河の神は直に女を救ひました。で森の神が此處ぞと手を擴げて女の姿を抱かうとしますと、女の姿は幻の樣に消え失せて手には只幾本かの蘆の葉が殘つた許です。

　可愛相なパンはあの醜い顏の雙の眼に涙を溜めて何時迄も何時迄も佇んでゐました。そして氣拔の樣に深い深い嘆息をつくと、其息が握つてゐる蘆の葉に觸れて微妙な音を立てるのです。

そこで森の神は儚い自分の戀を嘆き乍らせめて乙女の形見にもと、其蘆の葉を集めて造へた笛、それが此シリンクスなんです……

……此處迄話すと今迄聞怳れてゐたアクガスはほつと息をつきました、そしてうと／＼と總ての眼を閉ぢて寢て了ひました。

羊飼の姿をしたマアキユリイはいざと許り劍を拔いてアルガスを殺し、同時に牝牛のアイオを自由な身に致しました。

此計略を後で知つた女神のチユノオは番人の腑甲斐なさに腹を立てた餘り、死んだアルガスの百の眼を取つて、孔雀の尾の飾にしました。それが今日迄此鳥に殘つてゐるのだと言傳へられて居ります。



話變つて、チユノオの燃える樣な嫉妬の念は此上も哀なアイオを迫害せねば止みません一匹の虻を遣つて夜となく晝となく苦しめましたが、アイオは其苦痛に堪へ兼ねて、牛の姿の儘海を渡つて、樣々の國を徘徊つた揚句、埃及はナイル河の岸邊迄落延びて參りました。(此時渡つた海は今日でもイオニア海の名がついて居ります)

其後チユピタアはシユノオと仲直をして、最早アイオとは口も利かぬとの約束の上、牝牛の

アイオを元の水の乙女の姿に返してやりました。

△ミネルヴアと悲しき蜘蛛の物語

ミネルヴアは處女の神樣でした。天地の主宰チユピタアの額より生れたと言傳へられてる丈に、知慧とか技術とかを司る女神で、絲を紡いだり機を織つたりする事は皆ミネルヴアの領分に屬してゐました。上に云つたチユノオの樣に妬深くはありませんでしたが、此處女神に關係して、儚い誇に身を亡した慘しい乙女の物語が殘されてゐるのでした。

アラックニイは織物や刺繡の技に秀れた娘でありました。其技に巧な事は、態々森や泉に棲む神の娘達が見物に參る位で、出來上つた織物が美しい許りでなく、其織る手際が如何にも鮮であつたと申します。人々は皆其技を賞めて、これはきつとあの織物の女神から習つたのに違ないと、かう噂をし合ひましたが、當人のアラックニイには此言葉が既に氣に入らぬのでした。

『此道にかけては妾が一番偉ひのだ。ミネルヴア、ミネルヴアと、ミネルヴアにどれ丈の事が出來る物か。それが嘘ならば機を並べて織競をして見るがいゝ……』

思上つた娘は、かうした事を臆面もなく口外致しました。

此言葉を聞傳へた女神ミネルヴアは内心快よくはありません、或日見窄らしい老婆に身を扮してアラックニイの前に顯れて、人間同志ならば何と云つても良いが、神に對しての傲つた言葉は愼しむがよからうと穩に諭ました。他人の苦い言葉を聞くと直ぐ氣色ばむ癖のアラックニイは聲を顫はせて答へました――

『妾はミネルヴア位怖かないんです。其處へ來やうと思ふなら何時でも出て來るが良い……』

此暴慢な言葉が終るか終らぬに、眞實の女神はその假面を脫ぎました。傍に見て居た人々は恐れ戰いて其處に跪づきましたが、只一人アラックニイは突立つてゐました。ミネルヴアと知れた刹那には遉に頰に血の上るのが見られましたが、瞬く内に脣の色迄蒼ざめて了

ひました、それは怖ではありません、一時の驚から退引ならぬ決心に移る迄の突嗟の變化でした。

聽て二臺の機は並られました

アラックニイは噛みしめた唇に健氣な決心を表し乍ら自分の機に着くと絹絲を巻いた梭は經絲の間を蜥蜴の樣に動きました、そして尠し宛尠し宛手元に出來る織物は恰度夕立の空に浮んだ虹の樣に見方に依つて色々に、彩が異つて見える世にも美しい



物でした。

一方のミネルヴアの機はと見るとこれは只不思議と云ふの外はありません。人眼を眩す樣な精巧さは、眞中には天上の神々の圖を眞に迫る樣に織出して其周圍には一面に橄欖の葉を散らしてありました、橄欖の葉の間には、樣々の蝴蝶が羽を擴げて飛んでゐる圖でした。一寸隣の機を覘くや否やアラックニイは、我と我眼を疑ふ樣に呆然とそれを凝視てゐましたが、執拗な彼女は未だ敗れたとは申しません。



シネルヴァが其織物の四角へ、神に對して挑みかゝつた人間を諷する樣な模樣を織込むと、アラックニイも負けずに、態と神々の失策を表す樣な繪の刺繡を施しました。

ミネルヴァは流石にアラックニイの技を賞めずには居られません。而し神に對する此嘲弄は許しておけません。突然自分の梭をあげて片意地な乙女の織物を寸々に引裂きました。・・・・

アラックニイは一時の行掛りで此處迄は來た物の己が技が迚も及ばぬと悟ると、只惜しさの餘り首を縊つて死なうとしました。

『死んではいけない』ミネルヴァは申しました。『世の見せしめとして、何時迄も何時迄も生きておいで』

かう云つて女神は、鳥頭草の汁を振りかけると、淺墓な自負心の犧牲となつた乙女は、見る見る内に一匹の蜘蛛となつてしまひました。

此が今日に至る迄、自分の吊された絲で絶えず〳〵機を織らねばならぬ、可哀相な蜘蛛の身の上でした。

＊　＊　＊　＊　＊

次號には日の御神アポロの逸話、戀愛の女神ヴキナスのキユウピッドの更にあはれな話を致しませう。

四季會席附（一）

一月の部

一、汁（うど、から摺流し）
一、向（鮟鱇すつぽん煮、黒皮とりまぜ煮、ちぎり牛蒡）
一、椀（白魚、氷どうふ、八ッ頭芋）
一、焼物（甘鯛）
一、吸物、鱈こんぶ）
一、猪口（鹽ぶり酢づけ、生酢仕立）
一、香の物（新澤庵）
一、菓子（千歳餅）

二月の部

一、汁（五分切うど、干海苔）
一、向（引さき鱈、花がつを、わさび醬油）
一、焼物（柔か煮大鮑一切、同わた一つ）
一、椀（丸しんぢよ、わか芽、木の芽）
一、取肴（からすみ、ゆり）
一、吸物（うしほ、白魚、蕗のとう）
一、香の物（新澤庵）
一、菓子（蒸羊羹）

三月の部

一、汁（松露、からし）
一、向（鮎、みぞれ蓮根、たで）
一、椀（薄たいらぎ、孟宗筍小口、壑立菜、木の芽）
一、やき物（小鯛骨抜焼）
一、吸物（海膽せん、二葉紫蘇）
一、取肴（照りがつを、九年母）
一、香の物（奈良漬）
一、菓子（金團）

四月の部

一、汁（わらび、からし）
一、向（ひらめ餡かけ、すり新生姜）
一、椀盛（合せ蒸さより、こぐち松露、蕗）
一、猪口（平目つくり身、葉わさび）
一、香の物（古菜漬こまぐ〱）
一、菓子（白赤つまみ羊かん）

五月の部

一、汁（根芋、紫蘇）
一、向（茄子、算木こんにやく、敷酢たで）
一、椀（大煮ぬき豆腐、竹紙こんぶ、花菜）
一、引肴（たけの子、新牛蒡竹煮）
一、吸物（さらし芋、もづく、わり胡椒）
一、取肴（煮〆松茸、いたゞき百合根、鹽煮いげん）
一、猪口（蓴菜、すりわさび、みしほす、氷卸）
一、香物（糠漬胡瓜、味噌つけ蕗）
一、菓子（白あん腰高饅頭、練羊かん）
一、惣菓子（まつば、おぼろ月）

六月の部

一、汁（茄子小口）
一、向（皮引鮎、大短冊たで）
一、焼物（鯛かまぼこ、煮立）
一、椀盛（鷭つくり身、片身大鰺、さき茄子、柚子）
一、吸物（じゆんさい、葉ばかり）
一、取煮（新百合根、細いんげん、ほいろうす）
一、猪口（〆鯖、胡瓜小口、酢みそあへ、輪唐
がらし）
一、香の物（鹽おし瓜）

七月の部

一、汁（むかご、みぢん豆腐）
一、向（はぜ四半、木耳せん、〆瓜、ふくみ酢）

四季會席附(二)

一、椀盛（ふわ／＼しんぢよ、太煮串子、かけゆば、はじきまめ）
一、焼物（煮小鯛、小がれひ。芝煮）
一、吸物（よせうに、まつ菜）
一、肴（焼ゆり根、ほいろ、氷ごんにやく）
一、香の物（味噌漬大根、めうが）
一、菓子（青菜まき）

八月の部

一、汁（もみ大根、花ぶし）
一、向（刺鯖、潮作り、たで）
一、焼物（小鯛塩やき）
一、椀盛（ずいき芋乱ぎり、うづらそぼろ）
一、吸物（むかご）
一、香の物（胡瓜かくや）
一、菓子（八重成、水やうかん）

九月の部

一、汁（常陸干ずいき、ときがらし）
一、向（鰈つくり身、せん生姜、あま酢）
一、焼物（煮びたし小持あゆ、花がつを）
一、椀（もみあわび、初茸、頭の芋漉くず引、わさび）
一、吸物（しめぢ茸）
一、香の物（みそ大根、しその穂）
一、菓子（栗やうかん）

十月の部

一、汁（小茄子一つ付、花がつを）
一、向（大粒貝の柱、大根輪切、きく味、合せ酢）
一、椀（ひざ折鰈、そぼろ小鴨、引さき松茸、ずいき芋、茎菜）
一、焼物（鹽焼かます、ひらきて）
一、取肴（いなだ筋、漬しその實）
一、吸物（芝海老）
一、香物（淺漬大根）
一、菓子（三色牡丹餅砂糖かけ）

十一月の部

一、汁（繊大根、花がつを）
一、向（かき鯛、こま／＼防風、甘酢）
一、椀（細作鴨、焼豆腐、廣干瓢、牛蒡、くき菜）
一、焼物（大鰯鹽焼）
一、吸物（貝の柱、生海苔）
一、取肴（いなだすじ黒くわゐ）
一、香の物（鹽押茄子）
一、菓子（赤米饅頭）

十二月の部

一、汁（せん大根、里芋、粉山椒）
一、向（鯛つくり身、生海苔こま／＼防風）
一、焼物（合せさより）
一、椀（鴨たゝき、鍋焼豆腐、榎だけ）
一、吸物（酢入さきひしこ、こま／＼柚子）
一、取肴（鹽引、銀杏）
一、香物（淺漬）
一、菓子（蕎おぼろまんぢう、煮〆椎茸、

勤王女傑津崎村岡

川村文芽

子守群より拾はれたるお梅

嵯峨大覺寺宮の諸太夫野路井近江守の伯母にして近衞家に仕ふる老女(役名)小牧が寛政五年の春大覺寺へ參殿の歸途、門前に蓮華草や蒲公英を摘でお子守をそつちのけにして、澤山の子守女が遊び戯れて居る、イヤモウ無邪氣な者ぢや可愛い女兒達だと思はず歩を止めて、下人と共に眺めて居る、其處へ通かゝつた花見歸の若者が、『春先だけに虱の放生會を遣つて居る。』と嘲笑した、夫を聽いた子守の一人、ツカ〳〵と進んで若者の袖を引き、『虱が這うて居ても心が潔いのが肝心やらう』と言てのけた、この有様を見た小牧は進で『お前さんはどこの家かい、宮仕する氣がないか』と尋ねると、『宮樣の諸太夫津崎筑前守左京の娘うめと申ます、宮仕は父母の御許がないと否さうせぬ。』と答へた。言語も明晰なのに愈々感心して其足で筑前守を訪ひ、懇望して近衞家に伴ひ歸つた、其時お梅年は僅に八歳で、近江守の娘で十歳になるお岸も一處に參つた。

膝より石が出て初て怪我せるを知る

或日左大臣忠煕公が物見から往來を御覽の時に、何か珍らしい者を賣る商人が通つた、公はあれをと言はれたので、お梅は走り出で之を求めて公にさし出さう

と跪いた時フト膝が痛かつたので部屋に歸つて見ると膝頭へ小豆程の石が喰入て一面に血だらけだ、全く公の仰を畏まつて御門外へ行た途中躓いて顚んだ怪我で、主命を早く果したいが一心で聊も其に氣がつかなかつたのだ、物見から玄關迄は凡そ二町もあつたらう夫から御門を出て、往來に出て商人の跡を追ふのだから、容易の事ではなかつたらう。

公の爲めに新邸を造る

村岡其後老女に進で名を矩子の命せられた、或日つくづく思ふに、世は追々物騒になる、左大臣の御健康が案じられるやうでは、皇室の爲め御國の爲にならぬ。夫には何でも御保養が肝心だ、然し左大臣は輕々しう物見遊山に出る事はならぬ、そこで大覺寺前の景勝の地を選んで新宅を作り、公が老女の宅へお成りといふ事にして、絶えず郊外の運動を勸めた、この宅は其後跡形もなくなつて、今は大森京都府知事の別莊が建てある。

篤姫の父は近衞忠熙公母は老女村岡

安政元年十三代將軍家定公の御臺所として薩州侯島津宰相の息女篤姫が御輿入の約が調ふた、然も舊例によつて島津家から直ちに迎へる事は出來ぬので、島津家と親族の間柄の近衞家を假親として手續をすませた、そこで父は近衞忠熙母は老女村岡となつた、篤姫は即ち天璋院樣で、其大婚の饗應の席には、村岡は勿論生母の資格で、綺羅星の如き德川一門と共に列した、其時村岡は七十歳に近い老婆の身で七汁二十一菜に悉く箸をつけたので、並居る面々其大膽にして不作法に近いのに舌を捲いた、然し村岡の心では折角の御馳走箸をつけぬのは却つて失禮といふのであつた事が後に分つた。

到來の馳走を他に轉贈する老女が志

其後村岡は折々江戸へ行て御臺所の御機嫌を伺つた其度に別段に日記を作つて置いたのが今其下書と淸書と揃うて殘つて居るのは僅に一回分だ、下書の方は事綿密に記してあるが、表紙が破れてないので何時の江戸行の時のか遺憾ながら分らぬ、其初には斯う書いてある。

二月十七日晴



一道中無滞日つもりの通り今日巳の刻前品川へするすると着、坂戸新右衛門殿待受出迎に參り居られ久々にて面會致し萬事話致しくれられ候吸物御酒御料理等めで度出る。

一大御臺樣ゟ今日着に付めで度御數多の御重組御せんうきうき御にしめ御かし戴き候、右花町樣御文にて御返事直に出す

といふ風で此日の最後の一節には

一此御屋敷誠に結こうにて海もよく見はらし萬事御手厚き御事有難き御事なり、何もする〳〵と濟亥の剋前小の島殿初御歸り被成候一統ゆる〳〵お休候事也。(末尾の寫眞版參照)

此時代の書振も略窺はれる、文中うき〳〵とは浮數の事で、この御屋敷とは濱御殿即ち今の濱離宮だ、さうしてこの逗留中他よりの到來品は直に別の人に贈つて義理をすませて居た、その儉約の程も窺はれて床しい、例へば、三月八日の日記中に

一溪山樣より御使平瀨殿、園田殿・御くわし戴、重の内二人より到來
一杉重一折關何殿より
右を溪山樣へ上る
一重の内せき河殿へ送る

こんな事が毎日書いてある、樣や殿も夫々身分に從つて使ひわけがしてある。

土產には旗本か御家人の中を戴きたい

或年に江戸へ參ての歸りがけ將軍家には、『時に村岡愈々京都へ歸については土產には望のものを執らせる程に遠慮なく申されよ。』とあつた、すると村岡は『イヤモウ年が寄たこの婆何も戴きたいものはムりませぬ唯近衛家に一人良い家來が欲しうムりまするゆゑ、旗下か御家人の中で誰か御眼鏡に叶つたものを戴きたうムり升』と答へた、將軍家には村岡がこの放膽な擧動に驚かれたが、扨別に人を遣はしては近衛家の圓滿を缺く事もあつてはと、笑にまぎらして、早速澤山遣さうと返辭して其儘に打すごされた。

志士と近衛家との連絡は村岡の力

左大臣近衛忠熙公は勤王の志篤く、幕府の專橫を押へやうとの志ある事は、夙くも志士の間に傳はつた、西鄕吉之助や、梅田源次郎、賴三樹三郎の徒、如何にしても近衛公に近きたいと思ふたが、身分の懸隔甚しく、どうも近よる便宜がない、そこで淸水寺は

公が御信心深く、住職忍向（月照の事）も御覺が目出度いので屢々近衛家に出入をする。だから忍向をたよつて老女村岡に近けば、公にも自ら紹介もされ面談も出來やうと考へ付いて先づ最初に忍向に依賴した。忍向も元來勤王の志オサ〳〵彼等に讓らぬ僧だから、快く之を承引して忽ち、村岡‥‥左大臣との連絡がついた、時恰も安政五戊午歳左大臣は孝明天皇の密勅を水戸中納言に傳達した、其意は此夏の外國の要求は容易ならざる大事だから關東には諸事勅諚を受けて裁斷すべきに井伊直弼大老となつてより、幕政を専らにし米國と條約を結びたるは不屆の至、朝廷には宸襟をなやませらるゝとの意で、つまり幕府膺懲の事然るべく賴むとの事だ、此相談に預つたのは京都側では梅田源次郎、賴三樹三郎、水戸方では鵜飼吉左衛門、其子幸吉の人々だ。



安政戊午の獄起て村岡江戸に護送さる

事忽ち幕府に聞えて志士の一網打盡が劃せられ、村岡も勿論免れる事は出來ぬ、然し何せよ五攝家の第一近衛家に勤むる老女、町奉行とて直に

近衛家へ捕手を向ける事は相成らぬ、そこで傳奏廣橋殿を經て村岡に尋ねたき義あれば町奉行所へ出頭するやうに御計ありたしと請願に及んだ。村岡も素より此覺悟、もし近衛家から繩付を出しては御家の面目に拘はるからと強て御暇を戴いて嵯峨に歸て用意を整へ町奉行所へ出やうとして、

すさまじくあるゝ東の戸をさして
　ゆくさきいかにならんとすらん
うすひさす都をいでゝいかばかり
　つらき旅路に日をおくるらん

村岡は志士と共に江戸に護送される事となつた、無位であるが天璋院樣の生母だから特に網乘物に乘せ、他は藤丸駕であつた、警護は町奉行所の同心が白股引に白足袋、梅田源次郎、賴三樹三郎、鵜飼父子、三國大學、橋本左內、小林民部、其他幾十人の同志の藤丸駕が打つゞいて東海道五十三驛を下る狀は悲壯言ふべからざるものであつた、此時村岡年は七十二、彼の隆盛が忍向と薩摩に落ちたのは全く忍向に此縲絏の恥を受けさせまいとしての事だ、村岡途中での詠、

月々にかはるたびぢにかはらぬは
　人のこゝろのまことなりけり

白洲に引出されて判官を罵る大膽

江戸の白洲に初めて呼出された、裁判長といふべきは寺社奉行松平伯耆守、調役大目附久貝因幡守、町奉行池田播磨守、石谷因幡守で、威儀嚴然と列んでゐる。其時久貝因幡守先づ口を開いて、

『この不淨なる白洲に、見れば其方は御紋付の裲襠を着て居る、天下に對して相濟まぬ。』

と一喝した、村岡は、

『御尋でも厶るが、この裲襠は御臺樣よりの拜領、其身の大事な場合に着用せよとの仰せ、今日お白洲に呼出されたのは妾が身の大事ゆゑ着用致升た、但し松平伯耆守樣が其白洲に御紋散の長上下を用ゐらるゝは天下に相濟ぬ次第にはあらずや。』

怯めず臆せず、反問した、そこで松平伯耆守は、

『其方は女ながら近衛家に在つて、梅田、頼抔の不屆の面々を左大臣に取次いだ、さて其用向は何、相談は何、又斯る輩を取次いだのは不屆至極ぢや。』

と矢箆返しをやると、

『妾は近衛家の老女、老女は萬事の取次役いはゞ襖の引手のやうなもの襖の引手は相手を選んで居ては其役が勤まりませぬ、又何分引手の事目も耳もムらぬので、御用向の程は一向存じ申さぬ。』



伯耆守は、更に、

『近衛家は平生何をしてムつた、御政事向にたづさはるやうな事はあるまい。』

當時幕府は天下の政を行ひ、關白家は天皇の侍從として政事に遠ざかつて居ねばならぬ、又近衛家が政事にたづさはらないと答へたら、頼以下の罪も少しは輕くなる譯なのだ。

『近衛家は氏の長者官は左大臣、朝廷の御政治に干與するは勿論の事。』

とやつてのけた、村岡が勤王の志は包んでも包みきれなかつた、幕府の專横を怒る心は押へやうとしても押へられなかつた。

何分御臺所の御生母、どうする事もならぬので松平丹波守へ其儘御預けとなつた。

裁判の言渡を聞いて自殺の覺悟をなす

一通の調も却々手間取て、梅田源次郎は遂に牢死をした、或日一同裁判言渡とあつて評定所へ呼出された、村岡は獨り次の間に屏風を圍ふてこゝに控へさせられた、これは勿論村岡の身分を重じての事だ、屏風越にきけば鵜飼吉左衞門は死罪、同じく幸吉は獄門、頼三樹三郎は死罪等夫々極刑を言渡された、されば自分も同斷なるべし、もしさうなれば劊手の刃に汚れんよりは自ら死すべしと、笄に仕込だ小刀で自害を覺悟してゐると、豈計らんや不屆に付押込申付との微刑に驚いて居ると伯耆守は改めて開き直り、

『扨是までは御役目の表、村岡殿長々の御調嘸御疲れであらう、此上は丹波守邸へ御歸り緩々御休みなされよ。』

とのいよ〳〵案外な待遇に呆れて玄關へ出ると、丹波守の家來十數人は長棒の乘物に供人美はしく着かざつて出迎へてゐた、其時、

おぼろ夜と思ひの外にくもはれて
　つきに一聲なくほとゝぎす

嵯峨に歸り直指庵に餘命を送る

夫から二ヶ月程經つた、安政六年十一月赦免の沙汰を蒙つて、御臺所の御生母の資格で行列花々しく京都に歸る途中、

うれしさを何にたとへん駿河なる
　ふじの高根をちかく見つれば

草津迄一家親族が賑はしく出迎へたるを見て却て心なき人々よと怨みつゝ、京都に歸り近衞家よりは一旦諸大夫が勝手の計ひで里方で謹愼を申付られたが、其後隨意勤となつて、嵯峨に隱元禪師の黄檗入山以前に開基した直指庵を再興し姪の壽仙を子として餘生を送

る事とした。

化粧を怠らぬ有髪の庵主

村岡は近衛家に奉公して將軍家御臺所の生母となる人だけに、身だしなみのよい事亦格別で戊午の秋に松平丹波守へ御預け中化粧道具は遠慮して居ながら、いつも髪を綺麗になでつけて居るので、白洲で御調の序にどうしてさう髪を美くしくするのちやとの尋に女は身だしなみが肝心、毎朝御膳に戴く薯汁を鬢附にかへてこの通と答へた、だから直指庵に入てからでも、主を持つ身だからとて髪を薙さぬは勿論、殿上眉も日々美くしくつけて怠つた事は



ない、勿論薄化粧もして居るから、どうしても八十のお婆さんとは見られなかつた、序にいふが、直指庵に傳はつて居る村岡の肖像は忠熙公の讃もあるが、實際とは餘程相違してゐるので、今の庵主や村の人は如何にもして眞正の像がほしいと祈てゐるが、貧乏寺で適當の畫家を得る事が出來ぬのは亦維新史料の大缺點である。

然し飲食衣服には決して贅をつくさぬ、殊に麥飯を嗜好して、菜は村の誰彼が贈る野菜ばかり、夫に味噌汁は常に用意して、客があつて時刻になると必ず麥飯味噌汁を饗應し、衣服もさう新らしいもの許を用ゐず却て人には良いものを〳〵と與へた、或日旅僧が訪れて衣を乞ふたので、壽仙尼が古い足袋を與へやうとしたら、村岡は繼のある足袋は妾が穿けばよい、古い足袋を貰へば洗濯もせねばならぬ、繼も當てねばならぬ旅のお僧にそんな暇はないと叱つた。

人は一生涯心配をしてこそよいのぢや

一日村岡が野路井近江守の病氣を見舞ふた時、近江守は、自分は不幸にしてこんな長い病（胃癌）に罹て何時死ぬとも知れぬ、全く若い比から種々心配をしたからだといふと、村岡は人間は一生涯心配をして居るべきもの、心配がなくなれば人間も駄目ぢや、心配して死ねば人間の本分を盡したのぢやと言たのは迚も安逸を〳〵と希ふ今の貴婦人の口からは出かねる名言だ。

短册に署名するは村岡一人

短册には婦人は裏面か、又は表なら片隅に小さく書くのが法則となつて居るが、村岡のばかりは、堂々と男子同樣に矩子と書いた、これは孝明天皇が、其方は歌は堪能で男子も及ばぬ處がある、今後は男子同樣名を書けよとの難有い御言があつたからだ、今日の婦人の短册には誰から許されたのかしらぬが、村岡式のが大分ある、恐らく自ら許したのであらう、さても村岡は歌が好きで又堪能で、村のものが大根でも持て來る

と直ぐに御禮に短冊を書いてやつた、こんな風だから嵯峨の村には澤山短冊があつたが今は殆ど見當らぬ。

あめあられ烈しくふれど
軒ふかき
　わが家はそれときこ
　えざりけり

世事を忘れたる靜に清き當時の狀が偲ばれる。

生前小さい石塔を作つて妾か死だらこゝへ埋めて吳れよと、庵の墓地に据ゑた夫からこゝにあつては一家親族が一門の墓へ參つて又別に是迄來るのが氣毒だからとて、宿坊の稱念寺へ移した、さうして二年程經て



津崎村岡の筆蹟

稱念寺にあつては庵へ來た人がもし參詣してやらうと思ふた時に態〻あちらへ足を運ばねばならぬ、夫も氣毒だと、更に庵の墓地に移した、今の墓が即ちこれで明治六年八月二十三日此奥城へ納まつた、時に年八十八、明治二十三年生前勤王の志を嘉せられ從四位を贈られた。

墓は其遺言によつて小さい儘だが、大澤池畔には近衞忠熙公隸額、重野安繹先生撰並書の碑が建つて、とこしなへに村岡の畏敬すべき歷史を語つてゐる。

蒸物料理

何にても小魚を三枚に下ろし、腹骨をすき、小骨を抜き去り、直ちに表裏に鹽を散布し、十分間も經てから水洗ひをし、よく水氣を拭ひ去り味醂の中に浸し、暫時して引上げ、布巾にて拭ひ、竹の皮に並べ蒸籠に入れて蒸上げる。

△小魚の鹽蒸

これも前同樣に小魚を三枚におろし、腹骨と小骨とを抜き去り、直ちに摺鉢に入れ、少量の鹽を加へ、よく擂り毛篩で裏濾にかけ、板の上に濡れ布巾を敷いて、その上に二分ほどの厚さにして方形に伸し、そのまま蒸籠に入れて、釜の湯の沸きたる後これを載せ、蓋をして二三分間ほど蒸し、蒸し上らば取り出して適宜の大いさに截り、直ちに椀に入れ、おろし生姜の汁を滴して食す。

△魚肉の菊の葉蒸

これに用ふる魚類は鯛の如き白肉のものを撰び、三枚に下ろして腹骨と小骨とを抜き、直ちに表裏に鹽を散布し、十分間も經てから水洗ひをし、布巾で十分に水氣を拭ひ、味醂の中に浸し、一時間ほど經て引き上げ、亦水氣を拭ひそれより、菊の葉を摘みて、一枚づゝ水にて洗ひ、よく水氣を斷りて蒸籠の中へ敷き、その上へ右の魚肉を載せ、釜の湯の沸騰するを俟ちて蒸籠を載せ、三分間程蒸し上ぐ。

△魚肉の柏葉蒸

鯡の如きものを撰びて三枚に下ろし、皮を剝ぎ毛拔で小骨を抜き去り、直ちに横に置き、刺身庖丁で斜に薄くへぎ、强き鹽水で洗ひ、直ちに布巾にて水氣を拭ひ、別に生乾しの椎茸を二三十分間程水に浸し、堅く水氣を搾りて小さく方形に截り、少量の水と共に鍋に入れて、ざつと茹であげ、再び水氣を搾りて鰹節煮出汁と砂糖とを程よく入れ、火に架け、二三回も沸騰したる時少量の醬油を加へて、味の加減を試み、少し甘加減に煮付け、鍋のおろし際に、おろし生姜の搾り汁を灑ぎ、手早く皿に移して團扇で煽いで冷却し、これを前の肉で包み、恰も柏餅の如くして更に、柏の葉にて包み、蒸籠の中に列べ、五分間程にて蒸し上ぐ。

△魚肉の淡雪蒸

白い肉の魚類を三枚に下ろし、腹骨と小骨とを去りて、適宜の大いさに切り、表裏に鹽をふりて、三十分間ほど置き、直ちに水洗して竹の皮を蒸籠の中に敷きて、魚をその上に列べ、湯の沸きたるとき蒸籠を載せ蓋をして、七八分間ほど蒸し、それより蒸籠を下ろし別に鶏卵の白身をよく箸にてかき立て、十分に泡を立てゝ、右の魚肉の上部に載せ、再度蒸籠を釜に載せて、一二分間ほど蒸し、鰹節の煮出汁と醬油とを加へた

る注汁を添へて出す。

△魚肉の蕎麥蒸

これも白肉の魚類を三枚に下ろし、腹骨と小骨とを抜きて柏子木形に切り、醤油に浸し、竹の皮を蒸籠に敷きてその上に魚を列べ、七分間も蒸して、一個の盛蕎麥を三分して魚肉の上に載せ、更に三分程蒸して皿に取り、鰹節煮出汁と醤油とを加へたる汁と、細かに揉みたる淺草海苔とをかけて出す。

△魚肉の黄身蒸

白肉の魚類を三枚に下ろし、腹骨と小骨とを去り、それより前條の手順にて蒸し置き、鷄卵の黄身に砂糖少量と鹽とを加へて、味の加減を試み、火に架けて箸にて攪拌しながら、ほどよく炒りつけ、皿に毛篩を被せて飯杓子にて裏漉にかけ、それより右の魚肉の上に載せ、蒸籠に竹の皮を敷きてその上に列べ、釜の湯の沸騰するを俟ちてこれを載せ二分間程蒸して皿に盛り、前條の如き注汁を添へる。

△蝦の更紗蒸

蝦は何程にても頭部を去り皮を剝ぎて水洗し、よく水氣を去りて爼上に載せ庖丁の刃の方にてよく叩き、更に背部の方にてそろ〳〵と叩きあげ、別に凡そ其の量の二倍程の鰹節煮出汁と少量の鹽とを混じて味の加減を試み、それより椎蕈或は木耳、又は松蕈などを細かく刻み、右の煮出汁と、少量の醤油とにて淡味を附け、ほどよく右の蝦肉と混ぜ、直ちに茶椀蒸用の茶椀に八分目ほども入れ、蒸籠の中に列べ、釜の湯の沸騰したる時其の上に載せ、蓋を少し細めに開けて、二十五分間ほど蒸し上げてから、鰹節煮出汁に醤油少々を加へ、味の加減を試みて火に架け、沸騰したる時水にて淡く融さたる葛粉を加へ手早く箸にて攪拌して、葛粉に火の透りたるとき鍋を下ろし、右の蝦の上にかけおろし、山葵を添へて出す。

△緒田巻蒸

煠でた饂飩の一玉を三分して、三人前の分量と定め、茶椀蒸用の茶椀に入れ、別に鳥肉を細かに切り、鰹節煮出汁と醤油少々とを加へて、淡味に煮附け鳥肉と共に饂飩の上部にほどよく載せ、また丼に鷄卵を破り、箸にて攪拌して、その量の三倍程の鰹節煮出汁を加へ、少しの醤油を入れて味の加減を試み（また煮詰めたる味醂を少々加ふとも差支なし）十分に攪拌したる後、右の饂飩の上より注ぎ入れ、直ちに蒸籠の中に列べ、釜の湯の沸騰するを俟ちて、これを載せ、蓋を少し細目に開けて、烈火で蒸し二十五分間程にて下ろし、柚子を吸口として出す。

△玉子豆腐の蒸方

五個の鶏卵を一個づゝ丼に割り直ちに數本の箸にて手早く攪拌し、その量に三倍程の鰹節煮出汁を加へ、醬油少々混ぜて、更によく攪拌し味の加減を試み、淺き丼に入れて蒸籠の中に列べ、釜の湯の沸騰するを俟ちて、これに載せ、火加減を中火にして、十五六分間程蒸す、その蒸し加減は、箸にて上部を刺して試みるに、破目より水の出づる時は猶ほ早きものなれば更に五分間程蒸して蒸籠より取り出し、手早く團扇にて煽ぎ冷却し、金杓子にて椀に程よく盛り、前より作り置きたる清汁を注ぎ入れ、そぎ柚子を吸口として出す。

△二色玉子

これは蒸物料理中にも至つて著名なもので、先づ鍋に熱湯を沸かして十個の鶏卵を投じ、十五六分間程煮て、直ちに水中に投れ手早く取り出して皮を剝ぎ去り、黄身と白身とを分け、先づ白身の方を指先にて細かに潰して器に移し、白砂糖十匁と鹽を加へて味の加減を試み、それより皿に毛篩をかけ飯杓子にて裏漉にかけ置き、また黄身も指頭にて細かに碎き、煮詰めた味淋少量と白砂糖十五匁と鹽少量を加へて味の加減を試み、これも別の皿にに裏漉にかけ、さて經折或は杉折の底を脱ぎ、その底部に板をあてゝ、その中に美濃紙を敷き、白身の方を平かに納れ亦その上に黄身の方をも手にて均し込み、上部に一枚の美濃紙を輕く被せ、そのまゝ蒸籠の中に入れ、釜の湯の沸騰するを俟ちてこれを載せ、蓋を少し細目に開け、火加減を中火にして十分間程蒸し、蒸し揚らば折のまゝ取り出し、折を脱がしてよく冷却し、固まりたる後適宜の大いさに切りて口取物の材料に供す。

△鯖の櫻葉蒸

鯖を三枚におろし、腹骨と小骨とを抜き去り、二分程の厚さにそぎ、表裏によく葛粉を塗り乾きたる板上に載せ、手早く庖丁の平にて打ち延し、それより茶椀にて押脱き前より作り置きたる炒鶏卵並に細截の椎茸を鰹節の煮出汁と醬油とにて淡味に煮附けたるを、右の魚肉にて包み別に鹽漬の櫻葉を水洗して水氣を拭ひ、更にこの葉にて包みて、前條の手順にて蒸し上げ、また青葉あらば、蒸し上げて後ち包み、皿に盛るなり。

△魚肉の紫蘇蒸

白肉の魚類を前條の如く三枚におろし、腹骨と小骨を抜き去り、適宜の大いさに截り、直ちに表裏に鹽を撒布し、三十分間ほど經て、水にて洗ひ、布巾にてよく水氣を拭ひ去り、竹の皮を蒸籠に敷きて、その上に列べ、別に青紫蘇の葉をよく水にて洗ひ、堅く水氣を去りて硬き筋を除き、なるべく細かに庖刀にて刻み、叩きて小鍋に移し、箸にて攪拌しながら、少し鹽を加へて炒り付け、手早く右の魚肉の上部に撒布して二分間程蒸すなり。

懸賞惡文募集

締切　十一月十日

今や滿天下の人艶麗花の如く嬌飾玉の如き美文に醉ふこと久し本誌は敢て期するところあり、今こゝに眞實なる**惡文**を募集す。文の內容は敢て問はず毒舌可なり、皮肉可なり、人身攻擊又尤も可なり、この如くして他の惡感情を買ふ亦更に可なり、願くは滿天下の惡文家よ、其蘊蓄せる**毒筆**を揮ひ、毒惡辛辣の語を縱まゝにして以て醜惡を天下に流すの文を寄せたまへ、蓋し**惡婦人**の惡行を攻擊し、**惡紳士**の惡德を筆誅して以て濁流社會に**血清療法**を施すの實を得は蓋し又惡文家の存在を價するや大なるべし。

賞金

一等	金參拾圓	一名
二等	金貳拾圓	一名
三等	金拾圓	三名
四等	金五圓	五名

◎原稿は十枚以上の事。
◎原稿には必ず宿所姓名を明記する事。
◎封書には惡文と朱書ありたき事。



誌友倶樂部

▲八月號で、薫子樣には佛敎を御信仰の由承りましたが、妾も貴女樣と同意で御座いますのよそれで御座いますから、何卒永久に御交際の程を希望致します、扨て佛敎の書籍でも種々澤山有りますれば、當欄で一々列擧致しますのは到底不可能の事と存じます、且又數多の中には、平易難解のも有りますから、一つは讀者の敎育程度如何に依るのです、甚だ失禮で御座いますが、貴女の敎育程度及び御住所を次號でお知らせ下されば佛敎書籍目錄を差し上げ申します（一處女）

▲千代樣近頃如何遊して毎號あなたの御作が無いので淋しう御座います。失禮で御座いますが以後の御作に一高、角ボー等をあまり入れないで下さい、女學世界は女子ばかりの讀物じやありません幾多の男子が見て居りますのよ私し男子に女の心を見られる樣でなんだか恥しう御座います。小枝子樣の三ツの文から面白く拜見致しました中にも病める友よりを拜見して女子がつく〴〵嫌やになりました、私同情いたします綾子、磯千鳥、明子樣此後も御ふるひ遊せ……東京の野田いち子樣久しく御無沙汰を致しました職務多忙の爲め御許し下さい大分縣高田村の仲摩より子樣只今は何所に御暮ですか私しは前の通り小學校に居ります。野ばらの露樣と同じ身の上の者です。御交際を乞ふ、三十七年頃東京神田小川町小學校に御出遊ばした菅井先生（てい子樣）の御住所御存じの方誌上で御知らせ下さいませ、記者樣私し英朋樣の畵がすきです女學世界にも出して下さい夢二樣のもね……（西濃谷間の白百合子）

▲磯千鳥樣の新夫婦の冒險私讀で居るうちにいく度身ぶるひしたかしれませんのよそれから内藤千代子樣の御寫眞は實に私意外でなりませんよ次に皆樣の中に本鄕の習字速成學會に入會してゐらつしやる方はとくに御交際を願ひます（横濱のうめの）

▲喬子さんあなたは、香川の丸龜市のお方ではありませんか、きつとさうでせうね、もし違つてたらお許し下さいね、でも私はさうだと思ひますのよ、あの月宮殿を手にした時と云ひあなたのお繪のおすきと云ひ皆あなたに似てゐらつしやるわあなたの姓にはSがつきますのねいゝえきつとですわあなたは歌もお上手ですし繪もお上手ですからドシ〳〵投書遊ばせほんとに私お上手には感心をせずにゐられまんわチヤームせられてしまふのですもの……（香川のK子）

▲誌上の諸姉樣御機嫌よう、私は水淸き玉川のほとりに住むもので御座います、今後何卒御交際を願ひます、私は京都に出て是非裁縫を學びたいので御座います、誌上に度々かゝげられます女子共立會は大層實用的な相で御座いますがどなた樣か共立會の事ども御存じの方は是非くはしく御伺ひ致したいので御座います、又芝の戸板學校が實用に適すさうで御座いますが如何で御座いますか御存じの方は誌上で御敎へ下さいませ（しぐれ）

▲九月號みんな心にとめて拜見致しましたが何故三郞樣の繪物語がなかつたんでせう。若い女は胸をどらして待つてゐましたのに……磯千鳥樣の新夫婦の冒險、面白ふ御座いました、絲秋樣の暗愁、つや樣や、姉樣が何だか御なつかしいわ、柳樣は、どう遊ばしたでせうね、可愛いゝ我が子をおなくしになつて此の世に於ける私のすべての弱點がきえたつておつしやる御心が御いたましいわ、糸秋樣、鏡子樣、千代子樣ます〳〵御ふるひ遊ばせ（勿忘草）

▲喧しく鳴く蟬の聲もいつしか去つて今にこほろぎの淋しい聲も變りましたのね御なつかしき記者樣や諸姉上樣よ御變りはございませんの九月號に載つてゐました秋香樣のお姿私思つて居た方にはまるでちがつてゐました何か磯千鳥樣鏡子樣にも出して下さいませねお姿を拜見しないでお作を見ても何だか物たりないのですものエスキモー乙女物語面白く拜見いたしました。（山口、白露）

▲成田の白梅幸子樣いつもあなたのお歌には敬服して居ります見ぬ君ながらはるかにお慕ひ申しております此の後とも不束な私しを御導き下さいまして永久に御交際ねがひます誌友の皆樣にも御機嫌よう末ながら記者樣の御健康を祈ります（下總市川町高野道子）

▲長崎市の諸姉樣立山方面に御住ひになる淺井滿喜樣の住所御存じの方は何卒本欄まで御知らせ下さいませ（下關すみれ）

▲吉野の美邪子様毎度御便りを下されまして有がとうござります。金龜城下の秋月様私は城下の松原に居る者でありますの、又御ひまの時に御遊びに御出で下され（松原、花月）

▲皆様いよ／＼秋になりましたのね燈火相親むの今日此頃吹き亂る秋草のそれよりも毎月の皆様のお作はどんなにかまちどうしうございますもの、皆様の内に今年の增刊の悲劇十番をおもちの方はありませんでせうか不用の方がありましたら何卒お送り下さいませお禮は必ず相當に致します（金剛千年町二、高垣保子）

▲新潟の靜子様に御通知申ます御問合せの「軍神廣瀨中佐」は所持して居ますが送らうと思ひましたが片田舎の事故控へまして倶樂部欄にて屆けまするお差支無くば下名迄御通知下さい直ぐ送りまする（岐阜縣吉城郡小鷹利村字從ヶ洞山腰志津子）

▲第十一號に御見えになりました栃木の今井いゝ子様ほんとにお氣の毒ですれ私大いに同情いたしましたよ今井さんどうしてくはしくお打ち明け遊さないの私し直接と思ひましたけれどもこれでは何とも致し方がありませんでした今後は親しく致しませう、私栃木ときゝまして一層よ（埼玉の操月子）

▲初秋の風吹き初めて月下の虫の音なつかしき頃となりました、私が此地に思ひ暮す身となつてより早二年の日は過ぎました浪速のなでしこ様大阪の浪江様御地が戀しう御ざいます神戸の白露様何卒お交り下さいませ（淋しき秋の野にて、忍ぶ枯草）

▲奥耳だとお笑ひ下さいますな、田舍へは東風は仲々吹いて來ませんのですもの、潮風様はもうとつくに此の世の人でないんですつてね!! 内藤千代子様潮風様の死を聞いた時如何に感じまして？ 文壇に手びきしたのは潮風様でせう？ スキートホームの成功も潮風様の御蔭でせう？ 貴女の杖とも柱ともたのむ人はすでになくなられましたのね千代子様!!!自立してます／＼勵むべき時は來ましたのね!!!自重して反省して猶一層振つて下さいまし!!!妾もまだ十七歳ですけれど すいも甘いもかみ別けて來ましたの。そして男子の薄情をつく／＼とさとりました、同時に一生を獨身で暮さうと存じて居りますの。（春子）

▲皆つて本誌のために絢爛の才筆お揮ひ下さつた上原あや子の君、並に内藤様の御うつし繪、嬉しう拜見しました、千代様私は貴女のお作を拜見する度毎に其調のなだらかなると艶やかなる輕いチャームを有して居るとには感歎して居りますが、さりとて讀後に、何等の印象も殘らない徹底した思想なく深刻なく衒ひと半可通とに満つた小作に過ぎなかつた。然しながらあの「箱から出た女」あれには前號にも申し上げたが少からず感心しました、よほど力が入つて來たやうです、願くは本誌のため才筆御自重の上お揮ひ下さい（齋藤掬子）

▲九月號に、上原さんと内藤さんの、御寫眞が出ましたのね、まつたく内藤さんは夢二式でゐらつしやる、皆様思ひ／＼に狂喜遊ばした事でせう、こゝは風光めいびな瀨戸内海の一部です虫のねゆかしい野の秋も特別ですが、空高く海おだやかな磯邊の秋は又趣があります。記者様今は可い時候ですからちとここの方へいらつしやいませんか、何もありませんけれどお魚だけは新らしいのをさし上ますよ、宿毛町の野村きく子さん、私を誰と思召す？ あてゝごらんなさい、伊豫の小京都の：：れ、判つたでせう？ ホ、、、皆様御交際を願ひます（伊豫出海にて、篠島百合香）

▲朝顔を御愛用なすつていらつしやる皆様今年種子を御取りになりましたなら大輪物でも變り咲のものでもよろしございますから何卒下名まで御送り下さいまし御禮致します（越後柏崎下町楢本とふ）

▲誌友の姉に様と繪葉書及び外國雜誌交換を致します。右のもの御送り下さつたならば返禮は必ず致しますよ又佛、西、露、伊にある同胞で女學世界愛讀者を御紹介致します殊に外國繪葉書は蒐集しますわ。（佐賀縣佐賀郡東川副村字大堂、末次方にて中山ちよ子）

▲誌友の御姉様方に神戸相生町の首藤ひな子様御存じの御方が御ざいましたなら近頃の御消息御知らせ下さいませ（東京、白菊）

▲影乍ら御慕ひ申す花散里のおんうつしゑほのかに聞けばお仲よしとかの萩香様と御一緒に本誌にかゝげられましたのを拜見してどんなに胸をなどらした事でせう千代子様の粋なお姿にハイカラできりーツとした、どこまでもしとやかなあや子様のお二人がどんなになつかしかつたか：：あの名古屋の粕谷なみ子さん京都の堀つる子さんお交際下さいなどうか誌友の皆々さま末長くお榮え遊ばせ（陸奥、千代子）

▲誌友の皆さん暑さの御障りもないやうですれ

——當地はもはや朝夕冷風が身にしむ樣になりました私は生れて始じめて此の不便不自由なる地に參りました全く魚は絶體になく野菜も誠に少なくしかも汽車も車も通はぬ只馬のみにて日本人の參らぬ以前はいかゞなりしやと昔をしのばれます、これも經驗の一ツと永久に記憶して居りますわ然しいかなる山間無趣味の地なりとて月にも花にもかへがたき千寶のあるを只一の樂みと思ひて守の折々には此の女學世界が何よりの私の慰藉です皆樣折角御自愛遊ばせ（朝鮮江原道春川、石川直千代）

▲記者樣私本年廿年で去年五月に大阪產婆免許を取りまして只今は家事に從事して居りますがどうぞ英語を習ひたいと存じますがとても大金で習ふ樣な事が出來ませんので橫濱に西洋人の病院が御座いますれば御知らせ下され度又それにでも入れば自然おぼえませうか御願ですが其婦人科の方か產科の方に看護婦缺乏で御座いますれば早速御知らせ願ひます御問合せ申ます。（大阪、田舍娘）

▲記者樣及び愛讀者諸姉樣に御願ひ致します。私は當地の女學校を卒業して本年十九歳になります者ですが。かれてから風俗畫を習ひたいと思つて居ますけれど、畫家にお近づきがありませんし、宅も貧しいので初念をつらぬく事が出來ませんでしたのよ、けどどうしても初一念をとほしたいと思ひますので、どこかの女中がはりに使つていたゞいて、餘暇に少しでも敎へて下さる方は御座いませんでせうか、御心あたりがございましたらどこか御周旋下さいませ、なるべく東京の御方に願ひたうございますのよどうぞ（伊豫松山、水上菊子）

▲五月號でしたか、馬場胡蝶先生によつて樋口一葉先生の御文を本誌で拜見致しました、私ほんとに、うれしくなつかしく幾度もくり返し讀み返ししましたわ、私は一葉先生が何となくお慕しくてたまりませんの、あの桐の一葉も其中に先生の御性質が自らどことなく現れて居る樣でなりませんわ、皆樣先生についてくはしき事御存じなれば御知らせ下さいませ（秋女）

▲十月號の一人一話面白く讀みました御久振りで花散里樣の御作拜見して、胸がおどりましたどうぞあや樣益々御振ひ遊ばして……あの九月號と十月號に御出し遊ばした菊香樣若しやあなたは澁谷の石川樣ぢやなくつて!? ホヽ違ひましたら御許し遊ばせ……（勿忘草）

▲前號に看護婦を御出し遊ばしたくれないの君よ、失禮ながら私はまだ見ぬ君のなつかしさやるせなくて……私も三ケ年の前に生徒として入學し、卒業三ケ年後の今も尙ほみとりのわざに餘念なき一女です。君の（馴れて見れば何でもない事をいやに喉どつたり意地惡き人に笑はれたり叱られたり）讀んでる內に三年まへの我身の上がありありと心に浮びました。君の一言一句一寸も私と違つた思ではありません、失禮ですが御差支なくば次號で御住所及ど御年齡等御もらし下さいませんか、同じ職務にある身は一々うなづかるゝ事ばかりですの、御差支へなくば御たよりを頂きたく君の身に差支なくば何とぞ何とぞ御作所を……（五番町かほる）

▲京都の君子樣。このさびしい秋の日にわたしは病ひをえて、南のあたゝかい水國へ參りましたの。ひとりぼつち月影の冴えてゆく渚ぎしをさ迷ふてゐますとお互の若かつた昔が霧のやうにぽつと浮いてくるのですもの。あの學校の高い二階であなたが「千鳥の曲」をお彈きなさるとわたしはいつも聽き手だつたわれえ。そして日が暮れると、赤い塔が黑くなつた森の中にかなしさうに佇んでゐましたつけ。お所をぜひ知らせて下さいましな（サフランの花より）

▲逗子なるM樣、とうとう今日貴女樣を見つけました十日程前兄が女學世界出の封書をちらと郵便屋の手から見ましたで御姓の一字だけ分りましたけれど、今日貴女樣が途中で端書をおとしになつてお拾ひなさる時、御手の封書に女學世界の字が一寸見えました時、私の胸は躍る思が致しました、不思議で御座いますれ私の居ります所の家主が、以前御宅に居た御女中の親類なので、聞けばきく程御多藝なのに驚きました、私は貴女樣と一ツ違ひの妹で御座いますが、ほんとにお恥しい樣、病氣後の養生の爲め此冬中當地で送るつもりの哀れな者で御座いますお差支無くば御交際願へませんでせうか、あんないゝお庭を眺めながらお書き遊ばしてかと思ふと羨しいわ白い博多の御帯と眞黑いローマとクリーム色のレースのパラソルとが目について、ほんとに夏のスケッチと端書だよりのやうで御座います事、おふるひ遊ばせ（御近所にて、すみれ女）

▲五月號の誌友倶樂部欄に見えて居りました「澁谷の頼え女」樣御渡米御志願其後如何なされましたか、島貫先生に御尋ねになりました結果は如何でありましたか、（宮崎の同望女）

募集（十一月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲短　文（一人一種）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△短文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△短　文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

每月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
（定刊數十二册内增刊四回一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一册　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
廿四字詰一行	……	……	……	七十錢
四半頁	……	……	……	十一圓
半頁（卅二行）	……	廿八圓五十錢	廿三圓五十錢	二十圓
一頁（六十四行）	六十五圓	五十五圓	四十五圓	三十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

㊟本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
㊖御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

大正元年十月八日印刷納本　第拾貳卷
大正元年十月十五日發行　第拾四號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　市川七作
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番
千十八番
本局　二千六百二十番
三千二百二十九番

●萬世不朽の紀念至寶!!!

人格と技術とに於て斯界の巨人たる帝室技藝員東京美術學校勅任教授正五位高村光雲先生が、身後の光榮として一切の世務を抛ち　先帝陛下御在世の砌り屢々咫尺に進み拜謁を仰ぎ、深く腦裡に感銘せる　御英姿と、嘗て拜領せる　御眞影とに基づき齋戒沐浴一刀三籟謹刻し奉れる　大元帥御正裝御胸像にして朝野の貴顯紳士より其の龍顔の崇高なるに覺えず頭を垂れしむ眞に天下無二の傑作なりとの賛辭を辱せる名實兼備せる　御尊像なり

先帝御銅像

御像既成

頒布元

博文館代理部

博通社

東京日本橋區本町一丁目
電話本局六百四十番
振替口座東京五十番

實費頒布

▲御寸法（總御丈は寶算に因みて玉座共六寸一分 龍顔は一尺八寸の御立像同樣の大きさ）

●青銅色合成金御像 金五圓
●青銅御像 金廿五圓
●純銀御像 金二百圓
（御筐共）

（送料）内地は五十錢臺灣樺太朝鮮清國は各八十錢

御筐の樣式 ― 御製及御事歷を謹揭せる、八咫の御神鏡形に刳抜き御幕を垂れ二重扉勾玉形金具付の神々しき桐材白木造

頒布趣意書 ― 先帝御銅像御寫眞光澤紙刷挿繪入美本御申込次第贈呈す

便宜申込所 ― 全國有名書店及各新聞雜誌社代理部

●注意

坊間散見の粗製品とは全然其趣きを異にす百聞一見に而ず兎に角現御像御拜觀あれよ

名家小

洋裝菊判總洋布特製函入美本
紙質精良印刷鮮明各冊千頁以上

第一版以下數版を重ぬ

新文學の勃興以來、僅に未だ三十餘星霜を閲すに過ぎずと雖も、其間思想の起伏文運の變遷一にして足らず、大家相踵きで出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に、或は崇高に、或は平淡に或は怪奇に、皆な競うて其特色を發揮し、春花の爛漫、秋草の淵雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡し粋を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時ありて散逸の恐あり。本館此處に思ふところあり、名家小說文庫を發刊し、毎卷千頁の大冊子となし、諸大家の集中苟も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

露伴叢書　全二冊

前編目次

▼自傳　▼縁の糸　▼新學士　▼大珍話　▼醉郷記　▼まき筆日記　▼將棊雜話
▼二日物語　▼休暇傳　▼迷霧　▼縁外縁　▼珍饌會　▼客舍雜筆　▼元祿時代の雜劇
▼夜の雪　▼靄朱昏　▼和合樂　▼夢がたり　▼獅子庵　▼地獄谷日記
▼僥倖　▼ひげ男　▼川舟　▼是は〳〵　▼伊能忠敬　▼將棊雜考　▼折々草

後編目次

▼椀久物語　▼封じ文　▼冷干水　▼ひとよ草　▼二宮尊德　▼春の一日　▼遊行雜記
▼春の山　▼鐵三鍛　▼箱根草　▼新浦島　▼突貫紀行　▼文明の庫　▼旅の心得
▼當世外道の面　▼自縄自縛　▼銃獵孝行　▼鄭成功　▼醉興記　▼うつしゑ日記　▼知々夫紀行
▼蹄鐵　▼夢日記　▼日蓮上人　▼易心後語

秋聲叢書　全一冊

澁柿叢書　全一冊

目次

▼釜煮　▼聚樂殿　▼新挺法　▼五月女坂　▼大石内藏の助　▼脫走兵
▼妻の心　▼鳥勘左衞門　▼夢と夢　▼三千石　▼碧玉盌　▼振武軍
▼猿冠者　▼是非もなき　▼眞の武士　▼男の面　▼人風乾之介　▼密告
▼鐵火　▼不老術　▼親の面　▼油井正雪　▼他流試合　▼此の戀

柳浪叢書　全二冊

前編目次

▼おもかげ橋　▼今戸心中　▼都の夢　▼貯金玉
▼昇降場　▼隅田の夜路　▼狂言娘　▼花ぐるひ
▼骨ぬすみ　▼罪の闇　▼畜生腹　▼幼時
▼妾　▼變目傳　▼重づま

後編目次

▼非國民　▼兄の嫁闘　▼女夫心中　▼座敷牢
▼松原饅頭　▼七騎落　▼八幡の狂女　▼中川心中
▼歌歌留多　▼紫袱布　▼親ごゝろ　▼淺瀨の波
▼濡蝙蝠　▼二人やもめ　▼そまる糸

各冊正價 金貳圓 小包料各二十錢

説文庫

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇

目次
●氣まぐれもの
●濁らぬ水
●里の女
●老骨
●學士の戀
●花圃
●みち芝
●藪かうし
●はぬ罪
●狂學士
●部海寺の五日
●盛物
●春の月
●お靜
●通譯官
●一念
●ひとり棲
●みだれ心
●見え坊
●古巣
●肖像畫
●危機

鏡花叢書

全一冊

目次
▼外科室
▼勝手口
▼外國軍事通信員
▼脚本深沙大王
▼鷲の灯
▼海城發電
▼鷲花徑
▼そら解
▼化銀杏
▼梟物語
▼月夜遊女
▼靈象
▼星女郎
▼慈善會
▼やどり木
▼少年行
▼頼白
▼紫手綱

花袋叢書

全一冊

目次
▼名張少女
▼新築の家
ンスドオアエ）
▼寫生の花
クス、メーテルリンク）
ソウ、コツペエ）
▼思ふどち
▼みやま鶯
▼女教師
▼春の別墅
▼一家の妻
▼二人
▼澤山窮谷
▼悲劇
▼島の心中
▼畫家の日記、アルフォ
▼冷妹
▼浪花節の名手
▼初戀の人
▼無事（モ
▼不慮の出來事（フランン
▼山小屋
▼老僧
▼孤島
▼老夫婦
▼憶梅記
▼小桃源

小波叢書

全一冊

目次
▼あゝ京都
▼男の心
▼血
▼かつら川
▼軍國女氣質

水蔭叢書

全一冊

目次
▼女房殺し
▼湖心の響
▼髭
▼つぎ紙子
▼惡道路
▼新潮來曲
▼紫海苔
▼水棲記
▼石地藏
▼花井お梅
▼旅役者
▼地底の人
▼別莊守
▼濁流
▼林間の高塔
▼崖下の家
▼紙子くらべ
▼海上の鐵渦

美妙叢書

全一冊

目次
▼阿千代
▼里見勝元
▼のゝみうり
▼迷邪悟平
▼帝國海軍
▼たかせ川
▼勢至丸
▼殿且那
▼若白髮
▼惡の善
▼磯千鳥
▼決闘
▼怪空上人
▼太郎定綱
▼峰の殘月
▼古根
▼孫右衛門
▼妻琴
▼死刑
▼犬博士
▼二郎經高
▼後の殘月
▼いのり首
▼馬丁仙吉
▼若葉の露
▼囚の懺悔
▼破壞主義

篁村叢書

全一冊

新刊

目次
●紅雀●果報者●三鱗●火雨洞●よしやあしや●まかぬたね●當世金の草鞋●武玉川●つり的●十年一昔●油蟬●福神揃●滿地黄金●御蔭參り

新潟耳鼻咽喉科院長

鍋谷傳次郎君著

家庭寶典 通俗臨牀醫學

全壹冊

洋裝菊判上製

紙數約一千百頁

▲近刊▼

■本書の特色■

晩近通俗醫學書の刊行は汗牛充棟も啻ならざるが如しと雖も往々にして世人を誤らしむる者なきにあらず著者玆に見る所あり先づ**總論**に於て**健康**の**根本**を單に**物質的醫學**にのみ求むる者の**誤想**を**喝破**して**其眞理**を論じ、**各論**に於て有ゆる**各專門科**の**病患**を**細大洩**らすなく最も便利なる**系統**を以て**排列**し其特徴原因注意經過療法等に就ては平易に忠實に記載せり殊に其療法に至ては知らしむべくして而も行はしむるべからざる者多きを以て毫も秘することなく記載すれ共而も其間の區別を明瞭に注意せり吾人は本書を以て**通俗醫學書**の**完璧**として世に紹介す

東京日本橋本町三丁目　**博文館**　振替口座東京二四〇番

女（後付の四）

創刊七十叢書の一

文學博士 本居豊穎先生
文學博士 井上頼圀先生
文學博士 萩野由之先生
文學博士 關根正直先生
文學博士 池邊義象先生
校訂及註解

藤島武二畫伯
橋口五葉畫伯
意匠装幀

校註 國文叢書

空押及金
模様摺込
天金縁製
本頗現麗

菊判總クロース上製
口繪及密畫挿入
本文―新鑄十ポイント組
註解―六號活字組

第一期刊行（凡隔月一冊發行）
十二冊 毎巻（七百五十頁乃至千餘頁）
總紙數約壹萬頁

■正價一冊金壹圓（小包料内地十二錢）　□特價十二冊金拾圓―（外に小包料を要す）

一國の富强、文明は國民の自信力に原因す。自信力無き國民は富强の民たる能はず、文明の俗たる能はず。自信力は己を知りて彼を知るに起る、己を知るは我が歴史に通曉するに在り。我が文學を精究するに在り。此の如くにして、初めて我が國情明かに、その長所は愈々之に培ひ、その短所は速に之を補ひ、以て己を完うせむとするに至るべきなり。これ實に國民の本分たらむ。弊館創業以來、夙に心血を此に濺ぎ、この種の事業に向つて、世に貢獻せしこと鮮少ならずと信ず。就中曩に一般に紹介せし『日本文學全書二十四編』の如きは、蓋し久しく棄られたりし我が歴史的文學の復興普及に先鞭を著けしものにして國文復興、國文獨立の聲はこれによりて喚び起されたることは世人も均しく認めらるゝ所ならむ。

東京博文館

女（後付の六）

創刊七大叢書の一

今や世界の大勢、益々富强文明の競爭の急激なるものあり、此の時に當りて一層自己の信念を厚うし、自己の歷史文學を研究し以て「我」あるを知らしむるは急務の業たらざらむや。故に弊館は更に現代知名の國文學の泰斗諸博士と謀り、往年の『日本文學全書』を更に擴張し、更に精選したる『校註國文叢書』を出版し以て大に學界に貢獻し前條の主旨を貫徹せむことを務めむとす。

國文叢書書目

- 源氏物語 附 蓬草 上卷
- 源氏物語 附 紫家七論 下卷
- 太平記 上卷
- 太平記・曾我物語 下卷
- 源平盛衰記 上卷
- 源平盛衰記・義經記 下卷
- 水鏡。大鏡・増鏡。今鏡 一卷
- 平家物語。保元物語・平治物語。承久物語 一卷
- 榮花物語 一卷
- 竹取物語。伊勢物語。落窪物語。土佐日記、枕草子。徒然草。紫式部日記。 一卷
- 宇治拾遺物語。月のゆくへ、池の藻屑。松蔭日記。 一卷
- 蜻蛉日記。とりかへばや物語。濱松中納言物語。方丈記。更科日記。大和物語。海道記、東關紀行。 一卷

大好評 第三版

源氏物語

附 蓬草

上卷

國文叢書第一として出版せる源氏物語は桐壺より藤裏葉まで三十三帖なり。本文は『頭書源氏』を底本として諸本と參考し句讀段落を明にし漢字を挿入しながら國語を失はざるやうに注意し頭註は『湖月抄』『玉小櫛』其他古今の說を折衷して宜きに從ひ且帖每に繪畫を挿入し卷首には有名なる藤原隆能筆源氏繪の彩色版を收めたり且『すみれ草』全部を採て源氏全部の人物の系圖及帖每の梗概を一讀の下に解得せしむるやうにせり、今や源氏の縮册多しと雖も此の如く校註挿畫相須て完備せるものは甚稀なり其裝幀及印刷紙面の鮮明製本の善美を盡せるは本館の最も得意とする所、今更に贅せざるなり。

東京博文館

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界第拾貳卷(增刊 遊ばれる人 好かれる人)第拾四號(毎月一回廿三日印刷納本)
(大正元年十月八日印刷納本)
明治卅[illegible]年十一月廿五日第三種郵便物認可

定價貳拾錢 郵稅貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版95
大正元年10月（第12巻第13号、第12巻第14号）

2011年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　富士リプロ株式会社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-4008-4　C3321